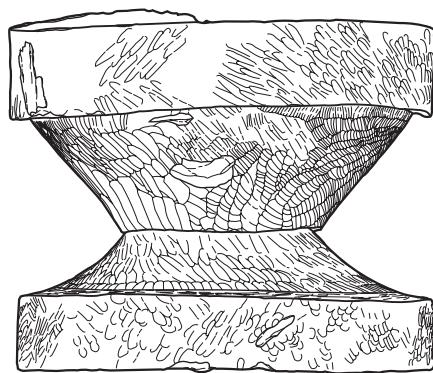


# 大道遺跡群 3

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6



2010

大分市教育委員会



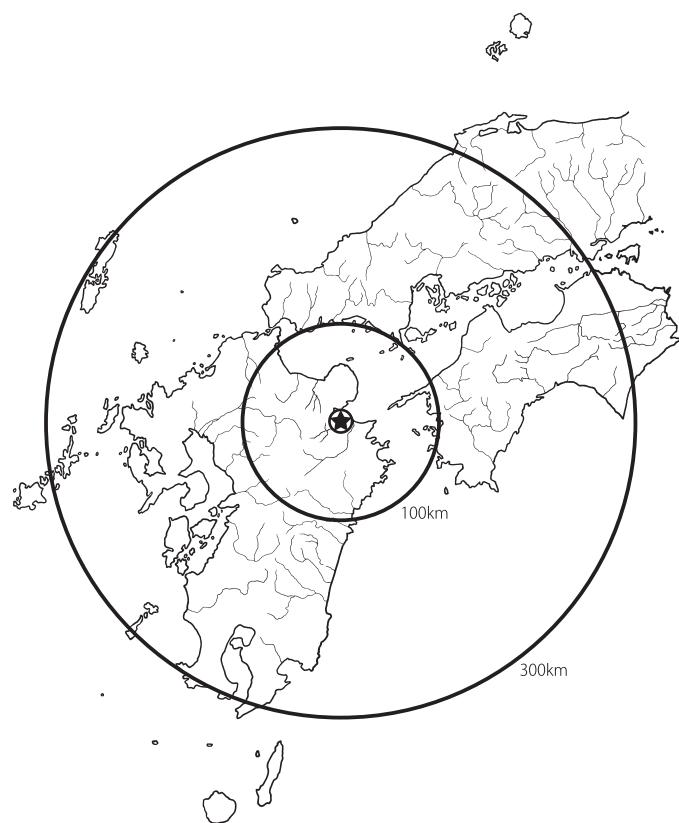




# 大道遺跡群 3

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6

第9次 第10次 第11次  
第14次 第15次 第16次  
第17次 第18次 第19次  
第22次 第24次 第25次



2010

大分市教育委員会





上野台地を望む（北方向より　撮影：平成 20 年 7 月 17 日）



上野台地より別府湾を望む（南東方向より　撮影：平成 20 年 10 月 8 日）

卷頭図版 2



大道遺跡第 24 次調査調査区全景（南方向より）



大道遺跡第 24 次調査調査区全景（東方向より）



大道遺跡第 24 次調査 24SE008 遺物出土状況（南方向より）



大道遺跡第 24 次調査 24SE008 白・蓋出土状況（南方向より）

卷頭図版 4



大道遺跡第 24 次調査 24SE008 出土 白レプリカ



上面



底面



樹皮残存部分



出土時の地上側部分（保存状態悪い）

## 序文

大分駅南地区では、平成 8 年度より大分駅周辺総合整備事業が進められており、中心市街地活性化に向けて新しい大分のまちづくりが進められています。

大道遺跡群は、こうした事業の柱のひとつである大分駅南土地区画整理事業に伴い、大分市教育委員会が平成 12 年度より年次計画に基づいて発掘調査を実施しているところであります。

これまでの発掘調査の結果、この地区には、縄文時代に人びとが住み始め、古墳時代初め頃には大規模な環濠に囲まれたムラが形成され、奈良時代から平安時代にかけては上野台地に推定されている豊後国府との関連が想定される施設の存在が明らかになりました。

本書に収録いたしました第 24 次調査では、古墳時代初め頃につくられたクスノキ製の臼がほぼ完全な形で発見され、全国的にも数少ない貴重な資料として注目されました。国立歴史民俗博物館による年代測定では、西暦 290 年頃に伐採されたクスノキを使用していることが明らかになりましたが、ヤリガンナで丁寧に仕上げられ、デザイン性さえ感じさせるその造形からは、古墳時代の人びとの高い技術と豊かな感性を感じることができます。

このように、貴重な発見が相次いでおりますことから、今後とも適切かつ慎重な調査を進めて参りたいと考えております。

本書が、市民の皆さんとともに多くの方々の文化財保護へのご理解を深める一助となり、歴史研究や学術の振興に幅広く活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまでご指導いただきました諸先生方、ご協力いただいた諸機関各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成 22 年 3 月 31 日

大分市教育委員会

教育長 足立一馬

## 例　言

1. 本書は、大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、平成 17 年度に実施した大道遺跡群第 9・10・11 次調査、平成 18 年度に実施した同第 14・15・16・17・18・19 次調査、平成 19 年度に実施した同第 22・24 次調査、平成 20 年度に実施した同第 25 次調査分を収録する。
2. 発掘調査は、大分市教育委員会が調査主体となり、平成 17 年 6 月から平成 20 年 3 月までの間に実施したものである。このうち、平成 19 年 6 月以降に実施した第 22・24・25 次調査については平成 19 年度から導入された掘削・埋戻業務委託によっており、第 22・24 次調査は岡三リビック株式会社に、第 25 次調査は明大工業株式会社に委託した。資料整理作業については、平成 19 年 4 月 1 日から平成 22 年 1 月 29 日まで行った。
3. 遺跡の調査担当は、調査組織に記す。報告書作成は、高畠豊、佐藤道文（大分市教育委員会）、井口あけみ、木村藍子、倉増美智代、佐藤孝則、山下朋紀（大分市教育委員会嘱託）が行った。
4. 本書の執筆分担は、遺構は第 22 次・第 24 次を高畠が行い、それ以外を山下、佐藤（孝）がおこなった。遺物の版組・執筆については井口が行った。
5. 本書に掲載した遺構実測図トレースは、木村、倉増、佐藤（孝）、山下が行った。遺物実測・トレース作業については、平成 20 年度は有限会社九州文化財リサーチに委託し、平成 21 年度は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。また、作業の一部を木村が行った。
6. 遺物の選別は高畠、井口、佐藤（道）が行い、遺物の洗い・注記・接合・復元、一部の実測・トレース、各表作成については、平成 19 年度は井口が行い、平成 20 年度は井口、加藤真優美、倉増美智代、佐藤久美、橋本千代美（大分市教育委員会臨時職員）が行った。平成 21 年度は井口、木村、倉増、小島愛、佐藤良子、山下（大分市教育委員会嘱託）が行った。
7. 遺構の写真撮影は、航空写真を九州航空株式会社に委託した。個別の遺構写真は、第 9・10・11 次調査を羽田野裕之、森岡晃司（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行い、第 14・15 次調査を永松正大（大分市教育委員会文化財課）が行い、第 16・17・18・19 次調査を有限会社九州文化財リサーチに委託し、第 22・24 次調査は高畠豊（大分市教育委員会文化財課）、上原翔平（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行った。第 25 次調査は中西武尚（大分市教育委員会文化財課）が行っている。また、遺物の写真撮影については、平成 21 年度に株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
8. 出土遺物、記録資料は大分市文化財課に収蔵・保管している。
9. 本書の編集・構成は佐藤孝則が行った。

## 凡　例

1. 本調査の座標は、世界測地系（日本測地系 2000）の平面直角座標 2 系（北緯 33° 0' 東経 131° 0'）を X・Y 座標の基点として調査を行った。図中に記載される方位は座標北（G.N）を指している。
2. 本書に掲載されている遺構番号は、以下の要領で理解される。  
「9SD002」　　9（調査次数） SD（遺構種別） 002（遺構番号）
3. 本書で用いた遺構略号は原則として、  
SB：掘立柱建物、SE：井戸跡、SD：溝状遺構・用水路、SK：土坑、SX：性格不明遺構、SP：ピットを表している。
4. 遺構の規模はメートル（m）を、遺物の法量はセンチメートル（cm）をそれぞれ用いる。

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	2
第2章 遺跡の立地と環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 大道遺跡群第9次・15次調査	9
第2節 大道遺跡群第10次・14次・17次・18次調査	31
第3節 大道遺跡群第16次・19次・22次・25次調査	67
第4節 大道遺跡群第11次・24次調査	114
遺物観察表	151
第4章 自然科学分析	175
第1節 大分市大道遺跡群第15次調査出土土器の年代学的調査 歴博年代研究グループ 藤尾慎一郎・坂本稔	175
第2節 大分市大道遺跡群第24次調査出土臼と土器の年代学的調査 歴博年代研究グループ 藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔	179
第3節 大道遺跡群第24次調査における樹種同定 株式会社 古環境研究所	188
第5章 まとめ	192
第1節 大道遺跡群における土地状況および利用について（山下）	192
第2節 大道遺跡群第24次調査 24SE008 に廃棄された出土遺物の検討（井口）	193
第3節 白と堅杵の周辺遺跡からの出土例（井口）	196

## 図版目次

第 1 図 調査地周辺地形分類図	4	第 39 図 大道 14 次調査区土層実測図	43
第 2 図 周辺遺跡位置図	5	第 40 図 大道 14 次調査区平面実測図	43
第 3 図 調査地配置図	8	第 41 図 14SE005 平面・断面・土層断面実測図	44
第 4 図 第 1 節 調査区配置図	9	第 42 図 14SE005 出土遺物実測図	45
第 5 図 大道 9 次調査区西壁土層断面実測図	10	第 43 図 14SD001 土層断面実測図	46
第 6 図 大道 9 次調査遺構平面図	11	第 44 図 14SD002 土層断面実測図	46
第 7 図 9SD010 平面・断面・土層実測図	11	第 45 図 14SK010 土層断面実測図	46
第 8 図 9SD010 出土遺物実測図①	12	第 46 図 14SD010 出土遺物実測図	46
第 9 図 9SD010 出土遺物実測図②	13	第 47 図 14SX006 出土遺物実測図①	48
第 10 図 9SK006・007 出土遺物実測図	14	第 48 図 14SX006 出土遺物実測図②	49
第 11 図 9SP009・011 出土遺物実測図	15	第 49 図 14SX006 出土遺物実測図③	50
第 12 図 9SK008 平面・断面・土層実測図	15	第 50 図 14SX006 出土遺物実測図④	51
第 13 図 9SX005 出土遺物実測図	16	第 51 図 大道 14 次出土縄文土器実測図①	53
第 14 図 15SE003 土層断面実測図	18	第 52 図 大道 14 次出土縄文土器実測図②	54
第 15 図 15SE003 出土遺物実測図	18	第 53 図 大道 14 次出土縄文土器実測図③	55
第 16 図 大道 15 次調査遺構平面図	19	第 54 図 大道 14 次出土縄文土器実測図④	56
第 17 図 15SE004 出土遺物実測図①	21	第 55 図 大道 14 次出土縄文土器実測図⑤	57
第 18 図 15SE004 出土遺物実測図②	22	第 56 図 大道 17 次調査遺構平面図	58
第 19 図 15SE005 土層断面実測図	23	第 57 図 17SE010 平面・断面・土層断面実測図	59
第 20 図 15SE005・008・015・018 出土遺物実測図	23	第 58 図 17SE010 出土遺物実測図	60
第 21 図 15SE020 出土遺物実測図	25	第 59 図 17SD009 土層断面実測図	61
第 22 図 15SD012・013・028 出土遺物実測図	26	第 60 図 17SD003・009 出土遺物実測図	61
第 23 図 15SX036 出土遺物実測図	27	第 61 図 17SK002 平面・断面実測図	62
第 24 図 15SX037・表土出土遺物実測図	28	第 62 図 17SD002 出土遺物実測図	62
第 25 図 大道 15 次出土縄文土器実測図	29	第 63 図 17SK007・014 出土遺物実測図	62
第 26 図 第 2 節 調査区配置図	32	第 64 図 大道 18 次調査区土層断面実測図	64
第 27 図 大道 10 次調査区北壁土層断面実測図	33	第 65 図 大道 18 次調査遺構配置図・平面図	65
第 28 図 10SD002・SD006 出土遺物実測図	33	第 66 図 18SX001 出土遺物実測図	66
第 29 図 A 調査区遺構配置図	33	第 67 図 第 3 節 調査区配置図	68
第 30 図 B 調査区遺構配置図	34	第 68 図 大道 16 次調査区土層断面図	69
第 31 図 10SD010 土層断面実測図	35	第 69 図 大道 16 次調査遺構平面図	70
第 32 図 10SD010 出土遺物実測図①	36	第 70 図 16SD029 土層断面実測図	70
第 33 図 10SD010 出土遺物実測図②	37	第 71 図 16SD030 土層断面実測図	71
第 34 図 10SD026 土層断面実測図	38	第 72 図 16SD001・002・029・030 出土遺物実測図	72
第 35 図 10SD026・SD036 出土遺物実測図	38	第 73 図 16SK028 平面・断面実測図	73
第 36 図 10SK005・042 出土遺物実測図	39	第 74 図 16SK035 土層断面実測図	74
第 37 図 大道 10 次出土縄文土器実測図①	40	第 75 図 16SK045 平面・断面実測図	74
第 38 図 大道 10 次出土縄文土器実測図②	41	第 76 図 16SK005・015・022・028 出土遺物実測図	75

第 77 図 16SK028・035・045出土遺物実測図	76	第 115 図 大道 25 次遺構切り合い図	109
第 78 図 16SK050平面・断面・土層断面実測図	77	第 116 図 大道 25 次全体平面図	109
第 79 図 16SK058平面・断面・土層断面実測図	77	第 117 図 25SD001 出土遺物実測図	110
第 80 図 16SK050 出土遺物実測図	78	第 118 図 25SX010 出土遺物実測図	110
第 81 図 16SK050・058 出土遺物実測図	79	第 119 図 25SX005・010遺構・断面・土層断面実測図	111
第 82 図 16SX007 土層断面実測図	81	第 120 図 25SD010 出土遺物実測図	112
第 83 図 16SX007 出土遺物実測図	82	第 121 図 大道 25 次表採出土遺物実測図	113
第 84 図 16SX007・SP024・056出土遺物実測	83	第 122 図 第 4 節 調査地配置図	114
第 85 図 大道19次調査区南壁土層断面実測図	84	第 123 図 大道 11 次調査区西壁土層断面実測図	115
第 86 図 大道 19 次調査遺構平面図	84	第 124 図 大道 11 次調査区遺構平面図	116
第 87 図 19SB005平面・断面・土層断面実測図	85	第 125 図 11SD010 出土遺物実測図	116
第 88 図 19SB005 出土遺物実測図	86	第 126 図 11SK040 平面・断面・土層断面実測図	117
第 89 図 19SD002 土層断面実測図	86	第 127 図 11SK040 出土遺物実測図	118
第 90 図 19SD020 土層断面実測図	87	第 128 図 11SK045 出土遺物実測図	118
第 91 図 19SD002・018・020出土遺物実測図	88	第 129 図 11SK045 平面・断面・土層断面実測図	119
第 92 図 19SD020 出土遺物実測図	89	第 130 図 大道 11 次表土出土遺物実測図①	120
第 93 図 19SK001遺構・断面・土層断面実測図	90	第 131 図 大道 11 次表土出土遺物実測図②	121
第 94 図 19SK023遺構・断面・土層断面実測図	91	第 132 図 大道 24 次調査区遺構平面図	122
第 95 図 19SK025遺構・断面・土層断面実測図	91	第 133 図 大道 24 次調査区土層断面実測図	122
第 96 図 19SK001・004・011・015・023出土遺物実測図	92	第 134 図 大道 24 次調査区土層模式図	123
第 97 図 19SK023・025 出土遺物実測図	93	第 135 図 24SE006・007平面・断面・土層断面実測図	124
第 98 図 大道 19 次表採出土遺物実測図	94	第 136 図 24SE006 出土遺物実測図	124
第 99 図 大道 22 次調査区遺構平面図	96	第 137 図 24SE007 出土遺物実測図	125
第 100 図 22SE010 平面・土層断面実測図	97	第 138 図 24SE008 上層遺物出土状態図	126
第 101 図 22SE010 出土遺物実測図①	98	第 139 図 24SE008 最下層遺物出土状態図	127
第 102 図 22SE010 出土遺物実測図②	99	第 140 図 24SE008 調査過程及び出土白整理課程	128
第 103 図 22SE010 出土遺物実測図③	100	第 141 図 24SE008 出土遺物実測図①	130
第 104 図 22SE011 平面・土層断面実測図	100	第 142 図 24SE008 出土遺物実測図②	132
第 105 図 22SE016 平面・断面実測図	101	第 143 図 24SE008 出土遺物実測図③	133
第 106 図 22SE016 出土遺物実測図①	101	第 144 図 24SE008 出土遺物実測図④	134
第 107 図 22SE016 出土遺物実測図②	102	第 145 図 24SE008 出土遺物実測図⑤	135
第 108 図 22SD002・004 土層断面実測図	103	第 146 図 24SE008 最下層出土遺物実測図	136
第 109 図 22SD002 出土遺物実測図	104	第 147 図 24SE008 出土 白蓋実測図	138
第 110 図 22SK003平面・断面・土層断面実測図	105	第 148 図 24SE008 出土 白実測図	139
第 111 図 22SK003出土遺物実測図	105	第 149 図 24SE008 出土 木器・石器実測図	140
第 112 図 22SX005 平面・断面・土層断面実測	106	第 150 図 24SE009 平面・断面・土層断面実測図	141
第 113 図 22SX001・005 出土遺物実測図	107	第 151 図 24SE009 出土遺物実測図	142
第 114 図 大道 25 次調査区土層断面実測図	108	第 152 図 24SE010平面・断面・遺物出土状態図	143

第 153 図 24SE010 出土遺物実測図①	144	第 162 図 下郡遺跡群第 90 次調査	
第 154 図 24SE010 出土遺物実測図②	145	90SX464 出土土器資料	194
第 155 図 24SE012 平面・断面・遺物出土状態図	146	第 163 図 大道遺跡群第 7 次調査	
第 156 図 24SE012 出土遺物実測図	147	7SK002 出土土器資料	194
第 157 図 24SD015 出土遺物実測図	148	第 164 図 大道遺跡群第 24 次調査	
第 158 図 24SD003・015・016 土層断面実測図	148	24SE008 出土土器資料	195
第 159 図 24SK024・025 平面・断面実測図	149	第 165 図 白計測図・杵形態分類図	196
第 160 図 遺構年代別色分け図	192	第 166 図 白集成図	197
第 161 図 守岡遺跡 19 号住居跡出土土器資料	193	第 167 図 竪杵集成図	199

## 表図版

第 1 表 調査地点一覧表	1	第 7 表 大道遺跡群第 18 次調査 出土遺物観察表	159
第 2 表 大道遺跡群第 9 次調査 出土遺物観察表	153	第 8 表 大道遺跡群第 16 次調査 出土遺物観察表	160
第 3 表 大道遺跡群第 15 次調査 出土遺物観察表	154	第 9 表 大道遺跡群第 19 次調査 出土遺物観察表	162
第 4 表 大道遺跡群第 10 次調査 出土遺物観察表	156	第 10 表 大道遺跡群第 22 次調査 出土遺物観察表	164
第 5 表 大道遺跡群第 14 次調査 出土遺物観察表	157	第 11 表 大道遺跡群第 25 次調査 出土遺物観察表	166
第 6 表 大道遺跡群第 17 次調査 出土遺物観察表	158	第 12 表 大道遺跡群第 11 次調査 出土遺物観察表	167
		第 13 表 大道遺跡群第 24 次調査 出土遺物観察表	168

## 写真図版目次

### 写真図版 1

大道 9 次調査区全景（南方向から）	
9SD010 遺物出土状況（南方向から）	
9SD010 完掘状況（南方向から）	
9SD010 土層断面状況（南方向から）	
9SK007 遺物出土状況（東方向から）	
9SK009 遺物出土状況（東方向から）	
9SD001・002 完掘状況（東方向から）	
大道 9 次調査区西壁土層断面状況（東方向から）	

### 写真図版 2

大道 15 次調査区全景（東方向から）	
15SE003 土層断面状況（西方向から）	
15SE003 完掘状況（北西方向から）	
15SE004 遺物出土状況（北方向から）	
15SE004 完掘状況（北方向から）	
15SE008 完掘状況（西方向から）	
15SD012 土層断面状況（西方向から）	
15SD020 遺物出土状況（東方向から）	

### 写真図版 3

大道 10 次調査区全景（南方向から）	
大道 10 次調査区東壁土層断面状況（西方向から）	
10SD006 土層断面状況（南方向から）	
10SD010 土層断面状況（北方向から）	
10SD010 完掘状況（南方向から）	
10SD015 土層断面状況（南西方向から）	
10SD015 完掘状況（南西方向から）	
10SD020 土層断面状況（南方向から）	

### 写真図版 4

大道 14 次調査区全景（南方向から）	
大道 14 次南壁土層断面状況（北東方向から）	
14SE005 土層断面状況（北西方向から）	
14SE005 井戸杵・井筒検出状況（北西方向から）	
14SE005 井戸杵検出作業状況（北西方向から）	
14SE005 完掘状況（北方向から）	
14SD001 完掘状況（南西方向から）	
14SK010 完掘状況（西方向から）	

#### 写真図版 5

大道 17 次調査区全景（西方向から）  
大道 17 次調査区東壁土層断面状況（西方向から）  
17SE010 土層断面状況（南東方向から）  
17SE010 井戸枠検出状況（南東方向から）  
17SE010 完掘状況（南東方向から）  
17SD009 土層断面状況（北東方向から）  
17SD009 完掘状況（北東方向から）  
17SK002 完掘状況（西方向から）

#### 写真図版 9

大道 22 次表土剥ぎ状況（北東方向から）  
22SX005 完掘状況（北方向から）  
22SD002 完掘状況（南西方向から）  
22SK003 遺物出土状況（南方向から）  
22SE010 土層断面状況（南東方向から）  
22SE011 土層断面状況（南東方向から）  
22SE016 完掘状況（南方向から）  
大道 22 次完掘状況全景（北西方向から）

#### 写真図版 6

大道 18 次調査区全景（西方向から）  
大道 18 次調査区東壁土層断面状況（西方向から）  
大道 16 次調査区全景（南方向から）  
大道 16 次調査区西壁土層断面状況（東方向から）  
16SD026・SD029 完掘状況（西方向から）  
16SD030 土層断面状況（北方向から）  
16SK028 土層断面状況（西方向から）  
16SK035 完掘状況（東方向から）

#### 写真図版 10

大道 25 次調査区全景（東方向から）  
25SD001 土層断面状況（北方向から）  
25SD001 検出状況（北方向から）  
25SD001 完掘状況（北方向から）  
25SX005 土層断面状況（東方向から）  
25SX005 完掘状況（東方向から）  
25SX010 完掘状況（南方向から）  
25SX010 完掘状況（北方向から）

#### 写真図版 7

16SK045 遺物出土状況（東方向から）  
16SK050 遺物出土状況（西方向から）  
16SK058 遺物出土状況（西方向から）  
16SX007 完掘状況（東方向から）  
大道 19 次調査区全景（上が北東方向）  
大道 19 次調査区南壁土層断面状況（北方向から）  
19SB005・SD002・SD003 位置状況（西方向から）

#### 写真図版 11

大道 25 次調査区南壁土層遠景（北方向から）  
大道 25 次発掘作業風景（南方向から）  
大道 11 次調査区全景（北西方向から）  
大道 11 次調査区西壁土層断面状況（東方向から）  
11SK040 検出状況（北方向から）  
11SK040 土層断面状況（東方向から）  
11SK040 完掘状況（北方向から）  
11SK040 完掘状況（南東方向から）

#### 写真図版 8

19SB005-e 磐石・柱材出土状況（西方向から）  
19SB005 検出状況（西方向から）  
19SB005 完掘状況（西方向から）  
19SD002 完掘状況（西方向から）  
19SD020 完掘状況（北方向から）  
19SD020 土層断面状況（北方向から）  
19SD025 完掘状況（南方向から）  
大道 19 次発掘作業風景（北方向から）

#### 写真図版 12

11SK045 完掘状況（南方向から）  
11SK045 十字ベルト設置状況（南方向から）  
大道 24 次表土剥ぎ状況（南方向から）  
大道 24 次遺構検出状況（南東方向から）  
24SE006・SE007 検出状況（東方向から）  
24SE007 土層断面状況（東方向から）  
24SE006 完掘状況（東方向から）  
24SE008・24SK018 検出状況（南方向から）

写真図版 13

- 24SK018 土層断面状況（北方向から）  
24SK018 完掘状況（北方向から）  
24SE009 木製品出土状況（北方向から）  
24SE010 有機物出土状況（西方向から）  
24SE012 遺物出土状況（東方向から）  
24SK025 土層断面状況（北方向から）  
大道 24 次溝状遺構完掘状況（南西方向から）  
大道 24 次調査区全景空中写真（北方向から）

写真図版 18

- 77-14・80-23・91-10・92-26  
96-1・19SD002・19SD002  
96-7・96-15・96-16・96-18  
97-21・97-23・97-24・97-28  
101-2（正面から）・101-2（上から）  
101-3

写真図版 14

- 8-8・8-10・9-12・9-13・13-30・10-17  
11-25・17-6・17-7・17-8・17-9  
18-15・17-10・17-12・18-18・18-17  
18-16・20-21・20-22・21-32・25-2  
25-1（内面）・25-1（上から）25-4

写真図版 19

- 101-4・101-6・102-11・102-10  
103-16・106-1・106-2・106-3  
106-5・107-8・107-9・111-1  
117-4・120-17・127-8・127-9  
127-10・128-1・131-16・137-6

写真図版 15

- 25-3（外面から）・25-3（内面から）  
25-5・25-8・25-11・25-12・25-13（表）  
25-13（裏）・28-2（正面から）・28-2（上から）  
10SD026・10SD028・32-3・32-4・32-5・32-6

写真図版 20

- 141-1・141-4・141-5  
141-9（正面から）・141-9（上から）  
142-18・142-19・143-28・144-29  
144-30・144-31・144-32・145-35  
145-36・146-37・146-38・146-39  
153-2

写真図版 16

- 32-7・33-19・35-4・35-6・35-7・36-2  
37-2・37-6・37-3・37-10・37-15・37-17  
37-18・14SD001・37-12・38-30・42-4  
42-6・42-8・47-5・14SX006・47-9  
48-20・48-28

写真図版 21

- 153-3・153-7・153-8・153-9  
154-11・154-12・157-2（外面）  
157-2（内面）・156-1  
24SE008 出土遺物集合写真

写真図版 17

- 49-41（表）・49-41（裏）・51-1・51-2  
51-6・51-8・52-28・52-16・54-47  
54-49・54-51・55-59・55-63  
76-6（正面から）・76-6（上から）  
76-7・76-8・76-9・76-10  
77-12（正面から）・77-12（上から）

写真図版 22

- 17SE010 井戸枠（外側）・17SE010 井戸枠（内側）  
17SE010 井戸枠（枠穴近景）  
149-43（表）・149-43（裏）  
149-44（表）・149-44（裏）  
149-45（表）・149-45（裏）  
149-46（表）・149-46（裏）  
141-7（表）・141-7（裏）  
156-5（表）・156-5（裏）  
147-41（表）・147-41（裏）

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経過

大分市は、平成8年度より、大分駅の高架化・都市街路整備・大分駅南土地区画整理を一体とする大分駅周辺総合整備事業を推進している。このうち、大分駅南土地区画整理事業は、長年の懸案であった大分駅及び駅近傍JR線の高架化実施にあわせて、南北市街地の一体化をはかるとともに、商業・業務用地と都市型住宅地の両面を整備することで地方中核市としての大分市の中心としてふさわしい都市拠点の形成を目指したものである。この事業は平成8年3月15日に都市計画決定され、平成9年度から本格的に事業が着手されて、現在は平成26年度の完成予定で事業実施中である。なお、平成18年度後半から工事が開始された大分駅の高架化については、平成20年9月に久大線・豊肥線ホームが完成し、9月13日に仮開業するに至った。また、地区画整理事業地区内を貫く都市計画道路大道金池線は平成18年度、同金池桜ヶ丘線は平成19年度に部分的に完成し一部供用が開始されおり、都市計画道路庄ノ原佐野線については本事業地区内の部分は平成20年度に完成して供用が開始されている。

本事業着手に先立ち、地区内の埋蔵文化財の所在状況に関して平成8年10月都市計画課駅南対策室より大分市教育委員会文化財室に照会された。事業予定地内における遺跡の所在状況については全く不明であったため、大分市教育委員会では平成8年9月25日から10月11日に現駅周辺総合整備課（平成9年4月に正式設置）事務所予定地の試掘調査を実施し、遺構が存在することを確認した。（=東大道遺跡：平成12年度から大道遺跡群と改称）この結果を受け、大分市教育委員会では、平成9年度から住宅等の移転により空地となった地点から順次試掘調査を実施して、埋蔵文化財の所在状況を確認し、本調査が必要な箇所の絞り込みを行うことにした。平成9年度から11年度にかけて断続的に実施した試掘調査の結果、事業予定地内には2地区に埋蔵文化財包蔵地が所在することが判明し、それぞれ南金池遺跡と大道遺跡群として周知されることになった。

このうち大道遺跡群は、大分駅南土地区画整理事業地区の中心地域に所在する遺跡であり、東大道、金池南、桜ヶ丘地区に広がる微高地上に点在する遺跡を総称するもので、当初は東西約1.5km、南北約0.8kmの範囲でしたがその後の発掘調査が進展した結果、平成19年4月には大分駅の南側、東西約0.6km、南北約0.7kmに範囲が訂正されている。

本書に収録した大道遺跡群の各調査地点は、第9～11次が平成17年度、第14～19次が平成18年度、第22・24次が平成19年度、第25次が平成20年度に調査されたものであり、いずれも地区画整理事業地内における街路ないし街区の整備予定地を対象とした発掘調査である。

第1表 調査地点一覧表

調査次	所在地	調査担当	調査期間	調査面積
第9次調査	大分市金池南1丁目	高畠 豊・羽田野裕之・森岡晃司	2005.06.07～2005.06.14	103m <sup>2</sup>
第10次調査	大分市金池南1丁目	高畠 豊・羽田野裕之・森岡晃司	2005.06.16～2005.08.30	560m <sup>2</sup>
第11次調査	大分市金池南1丁目	高畠 豊・羽田野裕之・森岡晃司	2005.08.12～2005.10.28	246m <sup>2</sup>
第14次調査	大分市金池南1丁目	永松正大・古田 陽	2006.04.25～2006.06.15	317m <sup>2</sup>
第15次調査	大分市金池南1丁目	永松正大・古田 陽	2006.06.19～2006.08.28	603m <sup>2</sup>
第16次調査	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.10.27～2006.12.15	683m <sup>2</sup>
第17次調査	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.08.21～2006.09.14	297m <sup>2</sup>
第18次調査	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.08.28～2006.09.14	57m <sup>2</sup>
第19次調査	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.09.15～2006.11.08	306m <sup>2</sup>
第22次調査	大分市金池南1丁目	高畠 豊・羽田野達郎・上原翔平	2007.07.02～2007.07.23	573m <sup>2</sup>
第24次調査	大分市金池南1丁目	高畠 豊・羽田野達郎・上原翔平	2008.02.04～2008.03.11	658m <sup>2</sup>
第25次調査	大分市金池南1丁目	中西武尚	2008.05.22～2008.08.04	125m <sup>2</sup>

## 第2節 調査組織

平成17年度（調査）

駅周辺総合整備課

都市計画部次長兼任駅周辺総合整備課長 木崎 康雄

参考事 首藤 国利

課長補佐 後藤 修

管理係

課長補佐兼管理係長 岩田祐治

主 査 中野志津香 桜井敏男 山本雅博

換地工務係

課長補佐兼換地工務係長 森本 順次

主 任 村田 潤

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会

教育総務部文化財課長 佐藤 功

文化財課 参 事 玉永 光洋

管理係 管理係長 安東 時男

主 査 平野 勝敏

指導主事 姫野 公徳

主 任 桑原 治 栗田 博之 安部 一成  
加藤 キヌ

文化財係 課長補佐兼文化財係長 讀岐 和夫

指導主事 後藤 典幸

専門員 塔鼻 光司 坪根 伸也

主 任 池邊千太郎 塩地 潤一 高畠 豊

河野 史郎

技 師 中西 武尚

主 事 永松 正大 佐藤 道文 五十川雄也

事務員 古川 匠

嘱 託 井口あけみ 梅木 信宏 梅田 昭宏

衛藤 亮介 萩 幸二 奥村 義貴

小住 武史 莖谷 史穂 佐藤 孝則

仲矢 咲紀 羽田野達郎 羽田野裕之

服部 真和 姫野 久恵 松尾 聰

松田幸之助 松竹 智之 水町 裕子

古田 陽 宮田 剛 森岡 晃司

山下 美郷 山本 哲也 若松 善満

課長補佐兼管理係長 岩田 祐治

主 査 桜井 敏男 山本 雅博

主 任 加藤真由美

換地工務係

係 長 富永 好一

主 査 後藤 正一

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会

教育総務部文化財課長 佐藤 功（～平成18年9月30日）

玉永 光洋（平成18年10月1日～）

文化財課 参 事 玉永 光洋（～平成18年9月30日）

管理係 管理係長 安東 時男

主 査 幸 俊昭

指導主事 姫野 公徳 植木 和美

主 任 桑原 治 栗田 博之 加藤 キヌ  
加悦 真里

文化財係 文化財係長 塔鼻 光司

専門員 坪根 伸也

主 任 池邊千太郎 塩地 潤一 高畠 豊  
河野 史郎 中西 武尚

主 事 永松 正大 佐藤 道文 五十川雄也  
古川 匠

事務員 長 直信

嘱 託 井口あけみ 萩 幸二 奥村 義貴  
佐藤 孝則 仲矢 咲紀 羽田野達郎

羽田野裕之 姫野 久恵 古田 陽  
水町 裕子 宮田 剛 山本 哲也

若松 善満 五十川慎也 碓田 智美  
山下 桂 山下 朋紀

平成19年度（調査）

駅周辺総合整備課

部参考事兼課長 木崎 康雄

管理係 課長補佐兼係長 岩田 祐治

主 査 桜井 敏男 山本 雅博

主 任 加藤真由美

換地工務係

課長補佐兼係長 富永 好一

主 査 後藤 正一

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

足立 一馬

（平成19年5月～）

平成18年度（調査）

駅周辺総合整備課

都市計画部次長兼任駅周辺総合整備課長 木崎 康雄

管理係

事務局	大分市教育委員会	主 事	佐藤 道文	五十川雄也	古川 匠
教育総務部文化財課長	玉永 光洋	長 直信			
文化財課 参 事	渋谷 建治	嘱 託	井口あけみ	五十川慎也	上原 翔平
管理係 管理係長	安東 時男		奥村 義貴	佐藤 孝則	仲町 憲治
主 査 幸 俊昭	桑原 治		羽田野達郎	羽田野裕之	稗田 智美
指導主事 姫野 公徳	植木 和美		三嶋 桂司	山下 朋紀	山本 哲也
主 任 栗田 博之	加藤 キヌ	加悦 真里		若松 善満	廣瀬 育子
文化財係 文化財係長	塔鼻 光司				
専門員 坪根 伸也	池邊千太郎				
主 任 塩地 潤一	高畠 豊	河野 史郎			
	中西 武尚	永松 正大			
主 事 佐藤 道文	五十川雄也	古川 匠			
	長 直信				
嘱 託 井口あけみ	五十川慎也	奥村 義貴			
	佐藤 孝則	羽田野達郎	羽田野裕之		
	稗田 智美	山下 朋紀	山本 哲也		
	若松 善満	上原 翔平	三嶋 桂司		

## 平成 21 年度 (整理)

都市計画部次長兼駅周辺総合整備課長	中畑 修
管理係	
参事兼係長 伊達 俊秀	
主査 高屋 修司	
主査 加藤真由美	
主事 大川内匡史	
換地工務係	
課長補佐兼係長 富永 好一	
主査 後藤 正一	

## 平成 20 年度 (調査)

駅周辺総合整備課	
都市計画部参事兼課長 木崎 康雄	
管理係	
参事兼係長 伊達 俊秀	
主 査 桜井 敏男	
主 任 加藤真由美	
主 事 大川内匡史	
換地工務係	
課長補佐兼係長 富永 好一	
主 査 後藤 正一	

調査主体	大分市教育委員会	教育長	足立 一馬
事務局	大分市教育委員会		
教育部次長兼文化財課長	玉永 光洋		
文化財課 参 事	岩田 祐治		
管理係 課長補佐兼管理係長	福田 誠一		
主 査 幸 俊昭			
	筒井 和信 (平成 20 年 12 月～)		
	桑原 治		
指導主事 姫野 公徳	植木 和美		
主 任 宮崎 勲	栗田 博之	加藤 キヌ	
	竹中 智美		
文化財係 課長補佐兼文化財係長	塔鼻 光司		
専門員 坪根 伸也	池邊千太郎		
主 任 高畠 豊	河野 史郎	塩地 潤一	
	永松 正大		

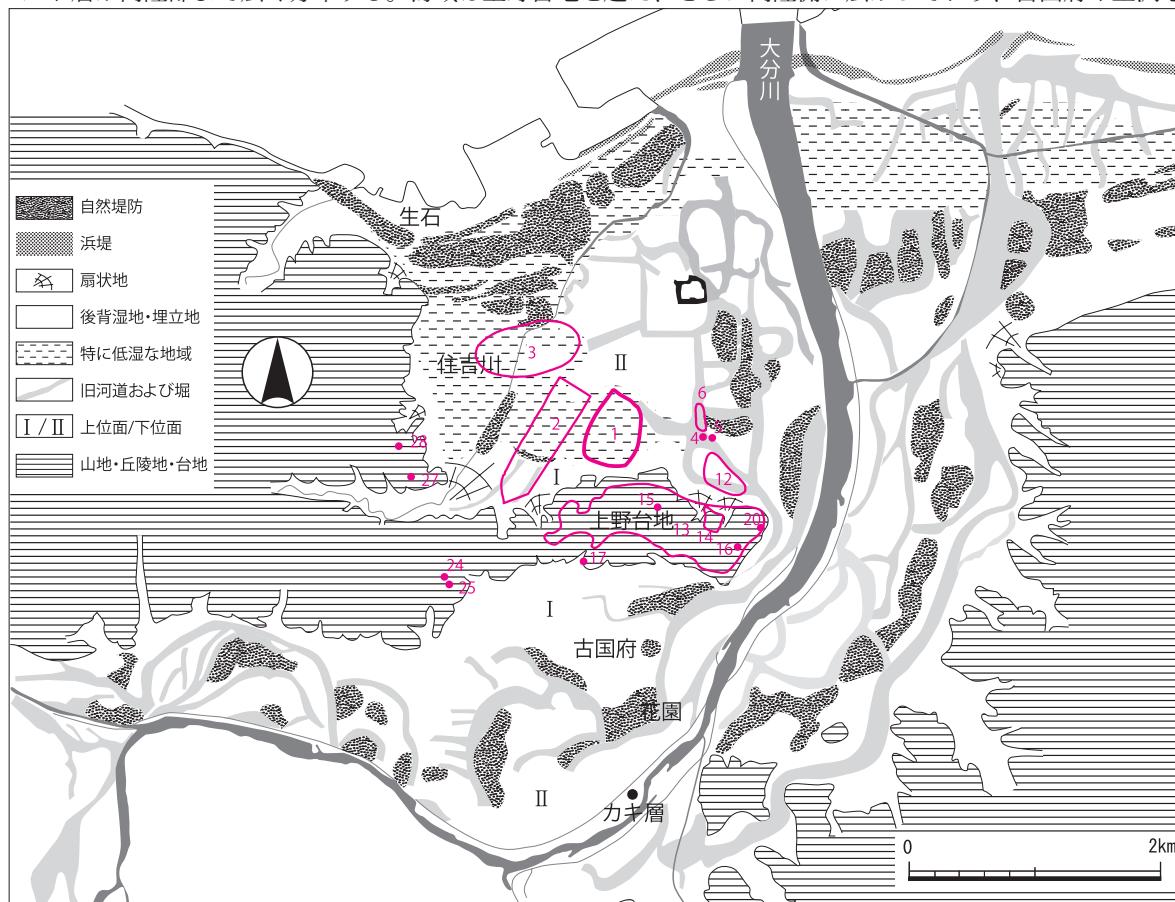
調査主体	大分市教育委員会	教育長	足立 一馬
事務局	大分市教育委員会		
教育部次長兼文化財課長	玉永 光洋		
文化財課 参 事	岩田 祐治		
管理係 課長補佐兼管理係長	福田 誠一		
主 査 幸 俊昭			
	筒井 和信 (平成 20 年 12 月～)		
	桑原 治		
指導主事 姫野 公徳	植木 和美		
主 任 宮崎 勲	栗田 博之	加藤 キヌ	
	竹中 智美		
文化財係 課長補佐兼文化財係長	塔鼻 光司		
専門員 坪根 伸也	池邊千太郎		
主 任 高畠 豊	河野 史郎	塩地 潤一	
	永松 正大		

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 地理的環境

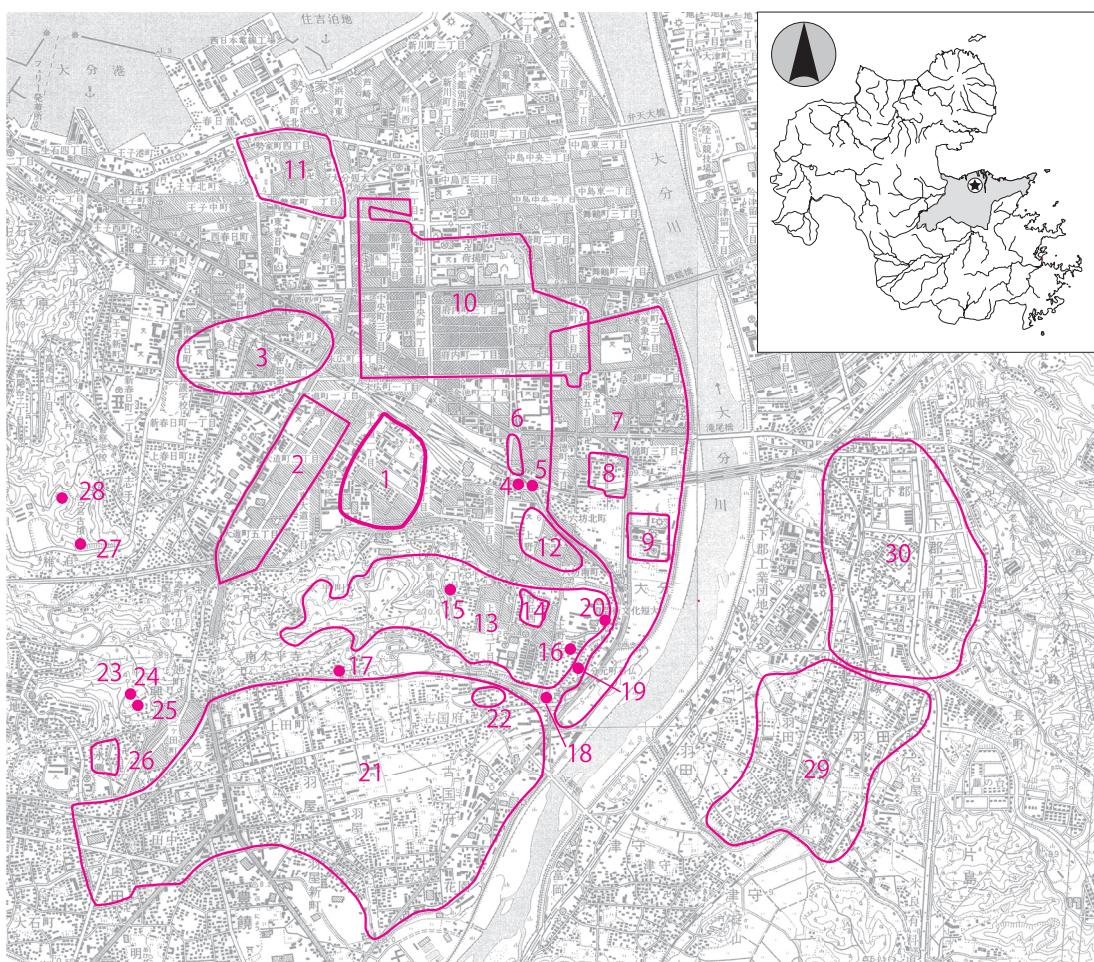
大分平野は九州北東部に位置し、その北側は瀬戸内海西端の別府湾に面する。平野の中央部を大野川が北流し、また平野西部には由布岳の東裾に源を発する大分川が東流のち北流する。この二つの河川はその流域に河岸段丘を発達させ、河口部には三角州を展開する。大分市街地はいずれもこの三角州上に形成されたものである。大分平野はその南を山地で限られており、東側の山地は結晶片岩からなる佐賀関山地、中部は霊山山地が位置する。一方、西側には国東半島の両子山から鶴見岳・由布岳・九重山・阿蘇山へ北東～南西方向に続く第四紀火山列があり、高崎山がこれに含まれる。平野の内部には新生代第三紀中新世から第四紀の地層である豊州累層群が広く分布する。これらが、丘陵地・台地・低地を作り、いわゆる大分平野を形成している。そして、低地は重要な生産活動の場を提供している。大分川は大道遺跡群が位置する大分平野の西半分の形成に関わる河川である。大分川下流に広がる低地を総称して大分川デルタと呼ばれる。大分川デルタは微地形からみて、東西に延びる上野台地により二分される。上流側の自然堤防の卓越する地帯と下流側のいわゆる三角州地帯である。河川の浸食は、海水面の上昇時にはその力が低下して堆積作用が増し、後退時には浸食作用が大きくなることによって河岸段丘を形成していった。県内の大野川や大分川のような主要な河川の両側に平坦な段丘が発達しているが、これらも洪積世の間の形成になるものであり、おおくの旧石器時代の遺跡が残されている。

沖積平野で最も注目されるのは、今から約7400年前に最高水位に達した海域に堆積した時の海成層の分布である。この時に海域に堆積した海成層は、通常、沖積層中部粘土・シルト層と呼ばれる。現在の大分市街の中心部が立地している平野は、沖積層が特に厚く発達し、内陸部では鬼界アカホヤ火山灰層を挟む沖積層中部粘土・シルト層が内陸部まで広く分布する。海域は上野台地を越え、さらに内陸側に広がっており、古国府や玉沢地区



第1図 調査地周辺地形分類図（『大分市史』上 一部改変）および遺跡分布図 (1/60000)

近くまで至っていた。この層の分布を確認することで、縄文時代の人々の生活環境が明らかとなる。さらに、上流の中部泥層は泥層地の堆積物のようで、後背湿地の環境下で堆積したと考えられる。従って海岸線は大分川から約6km遡った地点になる「花園カキ層」が含まれる花園付近で、ここまでは確実に内湾が広がっていたと考えられる。第1図は、調査地周辺の地形分類図である。平野の地形はいわゆる台地と沖積平野に区分され、沖積平野はさらに扇状地、氾濫源、三角洲に分けられる。これらの扇状地、氾濫源、三角洲は、小地形にあたる。氾濫源では、微地形と呼ばれる自然堤防、後背湿地、旧河道などの地形を読みとれる。大分市街地には低い後背湿地が広がっており、大分駅付近には網状流路跡がみられる。多くの低地遺跡は、流路と流路に挟まれた部分の紡錘形の平面をもつ微高地に立地している。大分川の氾濫源に分布する、自然堤防、後背湿地、旧河道の変遷が周辺に居住する人々の生活に大きな影響を与えている。自然堤防上に立地している遺跡は、生活環境として周辺



1	大道遺跡群	11	勢家遺跡	21	古国府遺跡群
2	大道条里跡	12	若宮八幡宮遺跡	22	岩屋寺遺跡
3	東田室遺跡	13	上野遺跡群	23	城南遺跡
4	上野町遺跡	14	上野大友館跡(上原館跡)	24	千人塚古墳
5	顕徳寺遺跡	15	上野廃寺	25	弘法穴古墳
6	南金池遺跡	16	上野竜王畑遺跡	26	永興遺跡
7	中世大友府内町跡	17	元町石仏	27	古宮古墳
8	大友氏館跡	18	岩屋寺石仏	28	亀甲古墳
9	万寿寺跡	19	伽藍石仏	29	羽田遺跡
10	府内城・城下町跡	20	大臣塚古墳	30	下郡遺跡群

第2図 周辺遺跡位置図 (1/40000)

より乾燥した土地条件と、洪水氾濫という災害から集落を守るために、また、水田を行うのに適した後背湿地に隣接するという点も重要な条件であると考えられる。

### 歴史的環境

前述したが、活発な生産活動の場であり、人々が居住してきた沖積低地では、第四紀末期の環境変動が大きな影響を与え、さまざまな地形環境の変化を引き起こしてきたことが分かっている。

### 縄文時代

大道遺跡群では、当該期の遺構は未発見であるが、大道遺跡群第7次調査で多数の縄文時代後期の土器がまとまって出土している。今回の報告次数では第10次・第14次・第15次において縄文土器が遺構の下位や包含層から一定量出土している。縄文時代前期から晩期までの土器が断絶することなく出土していることから、周辺では、途絶えることなく人々の営みがあったと想定される。また、縄文海進最盛期の海岸線の復元図をみると、遺跡の東側に立地する横尾貝塚とは海岸線でつながっていることになる。今後、当時の海岸線と推定される地点に立地する遺跡を対象とした活動領域の推定も期待される。

周辺では、大道遺跡群が立地する微高地群を形成した大分川の河床において、縄文時代前期の轟式土器、中期の瀬戸内系土器である船元式土器、後期の磨消文土器、晩期の刻目突帯文土器が多量に出土しており、周辺低地での遺跡の存在を示唆する。大道遺跡群の南側の上野台地上に位置する上野遺跡群では、腰岳産、姫島産黒曜石を使用した石鏸や金山産チャートを使用した石器が出土している。

### 弥生時代

上野台地北側の低地に位置する若宮八幡宮遺跡では、溝状遺構から下黒野式段階に比定される土器が一定量出土している。このことから、弥生時代早期段階には微高地としてすでに安定しており、人々が進出し活動していくとされる。また、大道遺跡群の西側の標高約5.00mに位置する東田室遺跡では、弥生時代前期末の貯蔵穴が多数確認されている。中期に入ると、台地上に加え沖積面上においても集落が確認され始める。若宮八幡宮遺跡では、中期後半～後期初頭には集落が展開していることが確認されている。東田室遺跡では、中期後半には竪穴住居がつくられる。また、板付式系壺、下城式系カメと共に頸部に多重沈線を有した口縁下端突状カメが出土している。このカメは下城式系カメと西部瀬戸内系カメの特徴を色濃く残しており、東部九州と瀬戸内地方の文化交流を示す貴重な資料といえる。また、大道遺跡群の南西側に位置する尼ヶ城遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭の集落が確認され、瀬戸内地方との交流を示唆する製塩土器が出土している。大道遺跡群の南側の上野台地上に位置する上野遺跡群では、弥生時代中期に比定される環濠が確認されている。このように、弥生時代には台地上と低地で集落が確認される様になる。低地に立地する集落では、外来系土器が出土することからも、海上交通、河川交通による広範囲に及ぶ交流の跡がうかがえる。

### 古墳時代

大道遺跡群では、第20次・第23次において、土器が大量に破棄された幅約2～4mの環濠が確認された。集落の中心は現在の大分駅付近と考えられるが、後世の削平によりほとんど失われている。環濠からは、大形の土錘や多数の製塩土器、瀬戸内系土器といった海岸線付近の集落であったことを示唆する遺物が出土している。環濠からは、猿形土製品も出土しており注目される。また、今回報告する第24次調査地では、当該期の井戸跡が多数検出され、そのうちの1基からクスノキを使ったほぼ完形の臼と半円状の蓋が出土している。当該期は海に携わる人々の拠点集落であったと考えられる。

周辺では、東田室遺跡において、古墳時代前期後半～中期にかけての住居跡が多数確認される。出土遺物に布留式系、山陰系、畿内系など外来系の土器がみられ、古墳時代前期前半段階に比定される船形土製品が出土していることから海上交流が示唆される。さらに、古墳時代に入ると大分平野の首長墓と目される墳丘墓が大分川左岸の台地上に次々と造営される。これらの内、古墳時代前期の拠点集落に対応する墳墓として想定されるのが、

この地域最古の古墳である亀甲山古墳である。円墳もしくは前方後円墳とされており、主体部の箱式石棺からは、豊後で唯一の三角縁神獸鏡が出土している。

若宮八幡宮遺跡では、古墳時代中期末から後期の集落が確認されている。5世紀末から6世紀代にかけての竪穴住居跡が検出され、そのうち3基の内部から多量の未成品を含む石製玉類と素材剥片類、工具類が出土し、玉類製品製作関連遺構と判断されている。さらに、工房である住居内部から近畿地方との交流を示唆する大阪湾岸製塩土器が出土している。上野台地上には5世紀代の造営と考えられる全長50mの前方後円墳である大臣塚古墳が出現する。5世紀後半には永興台地上に推定全長47mの千人塚古墳が築かれる。その南側斜面には、6世紀末から7世紀に比定される大規模な横穴式石室をもつ弘法穴古墳が造営される。これらの古墳は一系列の首長墓であると考えられる。

当時の海岸線もしくは河川周辺での玉類製品製作関連遺構は、従来の外来系土器が出土し交通の要衝であるという低地遺跡の評価と別に、稻作以外の経済的基盤を提供している可能性を示唆する。

### 古代

大道遺跡群第23次調査では、8世紀末から9世紀前半の官衙跡と推定される掘立柱建物跡が14棟確認されている。また、第4・5次調査地点では当該期の井戸跡や掘立柱建物跡だけでなく、円面硯や奈良三彩陶器壺も出土している。第28次調査では、海とつながっていたと考えられる水路から『厨』と刻まれた土師器が出土している。

周辺では、従来の豊後国府の比定地であった古国府遺跡群にかわり上野台地上に豊後国府および国衙関連施設の存在を推定する考えが有力になってきている。上野竜王畠遺跡では、7世紀後半から10世紀代にかけての、まとまった大規模建物群が確認されている。遺構群が一定方位に沿って規格的に配置されている状況が確認され、これが「国司館」の一部であった可能性が考えられている。隣接地では古代寺院である上野廃寺が位置し、版築により築造された8世紀代から9世紀代に比定される基壇跡と基壇上に築かれた礎石建物跡が確認されている。

このような状況から、大道遺跡群に展開する当該期の遺構群は、大分川河口部の水上交通に関わる施設、古代笠和郷に関わる施設等が想定され、上野台地にあったと推定される国府との関連が注目される。

同様、上野町遺跡では、8世紀後半から9世紀前半にかけて埋積した自然流路の可能性がある落ち込みが確認され、9世紀中頃から後半の層位からは、大形土錘79個、小形土錘339個が集中して出土している。これらの土錘の存在は海岸線付近であることと漁撈を営む集団が居住していたことを示唆している。さらに、埋土中からは墨書き器や円面硯、焼塩用製塩土器等が出土している。9世紀中頃から後半の遺物群の中にも、円面硯のほか、貿易陶磁器である長沙窯系黄褐彩水柱片が出土している。国府比定地の北側に位置しており、大道遺跡群同様に国府との関連性をもつ水上交通の拠点であった可能性が高い。

大道遺跡群には古墳時代と古代に画期があることが分かりつつある。当調査地は約1700年前には、海とのつながりを持つ大規模な集落が形成され、広範囲に及ぶ交易圏・流通網の中にあったと考えられる。また、約1200年前には水上交通の要衝であり、国府に関連する建物群が展開し、政治的にも中心地であったと言える。

### <参考文献>

大分市史編纂委員会編 1987『大分市史』上巻

大分市教育委員会『東田室遺跡2 都市計画道路田室町春日線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2005年

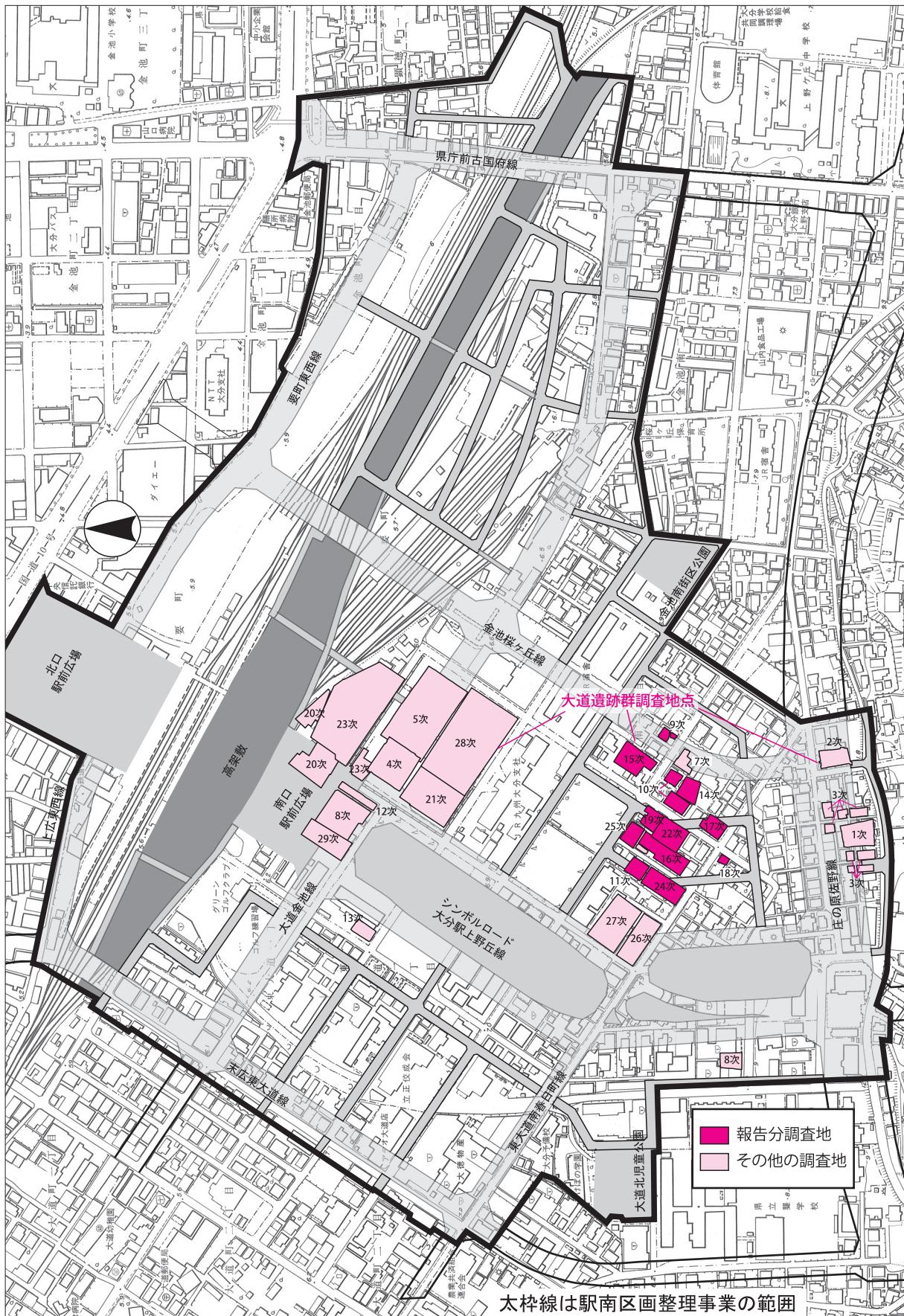
大分市教育委員会『上野遺跡群 大分市立美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1993年

大分市教育委員会『若宮八幡宮遺跡第1次発掘調査 上野ヶ丘中学校の校舎建替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

大分県教育委員会『東大道遺跡（A地区）庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 第166』

大分県教育委員会『上野町遺跡・顯徳寺遺跡 大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書I』2006

大分県教育庁埋蔵文化財センター『東田室遺跡 大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（7）』2008



第3図 調査区位置図 (1/5000)

## 第3章 調査の成果

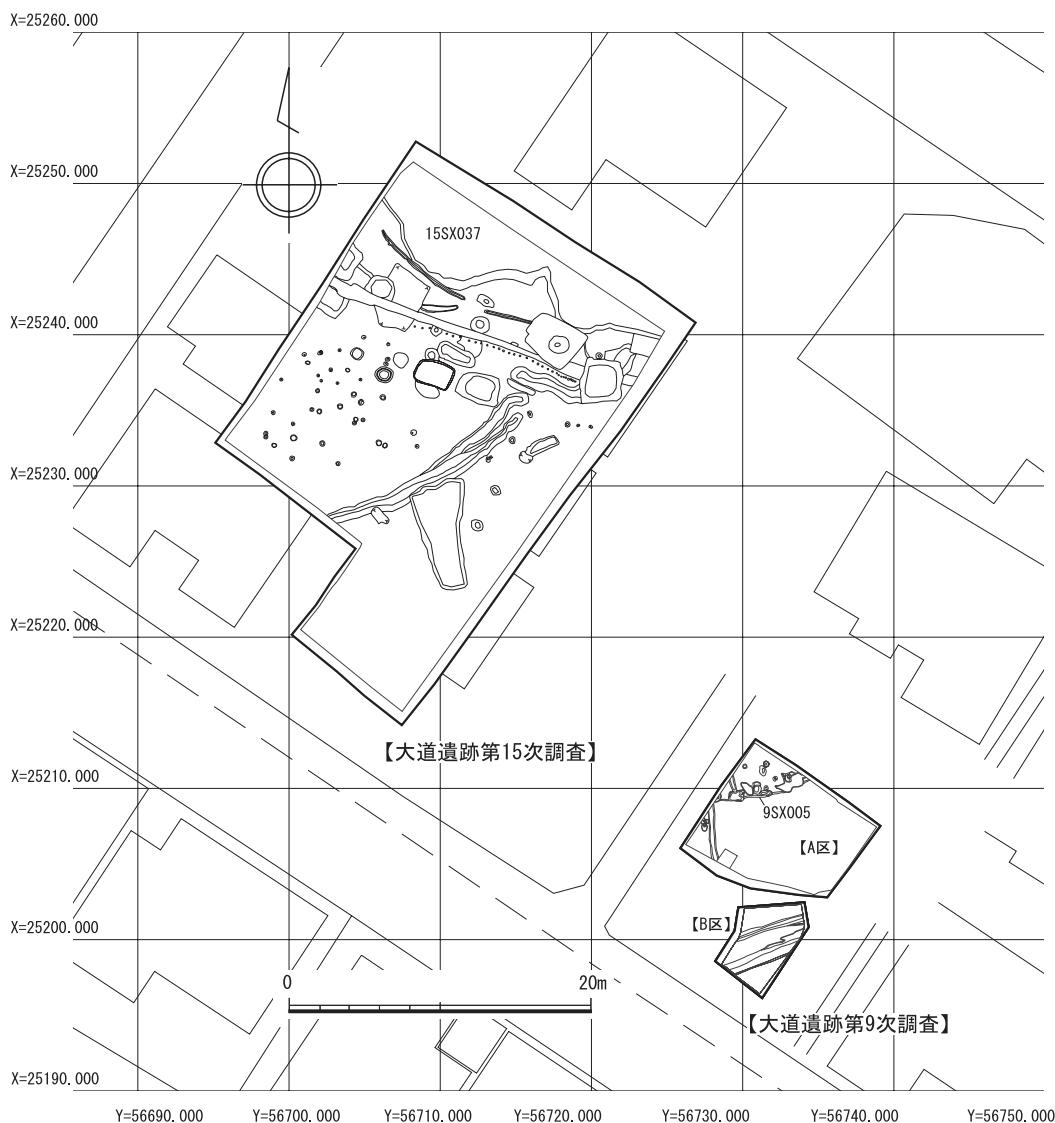
### 第1節 大道遺跡群第9次・第15次調査

#### 概要

当該地点の周辺では、平成9年度以来、平成15年度までに行われた試掘・確認調査によっても遺構がほとんど検出されておらず、特に第7次調査の東側および北側地点では低湿地が広がっていることが判明していた。

第1節では、第7次調査の北側に位置することから大道遺跡群の東側の地形的な境であると想定される第9次調査および第15次調査について報告するものである。調査区からはいずれも地形的な落ちが確認されており、全体に北東方向へのゆるやかな傾斜をみせる。当該地における微高地のラインを復元する手がかりとなるとともに、第9次調査区が大道遺跡群の東端部であることを示唆するものといえよう。

第15次調査区では地形の落ちに沿うようにして古墳時代の井戸跡を確認した。一方の第9次調査区では、微高地から下る低地部分において古墳時代の廃棄土坑を確認している。集落を形成するにあたって地盤の安定した



第4図 第1節 調査区配置図 (1/500)

微高地を生活空間として選択し、一方で境外となる後背湿地を集落における廃棄空間として利用していた可能性も考えられる。

また第15次SX037は地形の落ちにあたる。遺物包含層からは縄文時代から近世にかけての広い範囲で遺物が出土しており、とくに縄文前期～中期に比定される船元式土器が出土している点は興味深い。微高地を形成する層に縄文土器が混入していることから、微高地の形成時期は縄文時代前期まで遡ると考えられる。出土している縄文土器は比較的良好な状態であることから、河川の影響を受けておらず、突発的に起きた洪水によって、縄文時代の遺構が展開されていた小微高地ごと破堤堆積物にのみ込まれ、検出面である微高地を形成したと推測される。同様の状況は調査区南側に接する第10次および第14次・17次・18次調査区においても確認されており、第15次調査区周辺において当該期の遺構が形成、あるいは展開する可能性を示すものといえる。

以下、調査次ごとに説明する。

## 大道遺跡群第9次調査

### 1. 調査の概要

調査地は大分市金池南1丁目に所在する。区画整理地内の宅地造成に伴い、平成17年6月7日から平成17年6月14日の期間に調査を実施した。調査面積は103m<sup>2</sup>である。大道遺跡群内の南端部分に位置する。調査区を設定する際に、北側をA区、南側をB区とした。調査の結果、溝状遺構、土坑を確認した。

### 2. 基本土層（第5図）

現地標高は約6.10mを測り、調査区を覆っている約0.40～0.50mの灰色粘質土の表土を除去すると、暗灰褐色土の耕作土層が確認される。耕作土の下位には、鉄分の沈着した層が確認でき、この層を除去すると黄茶褐色粘質土（基盤土層）が現れる。

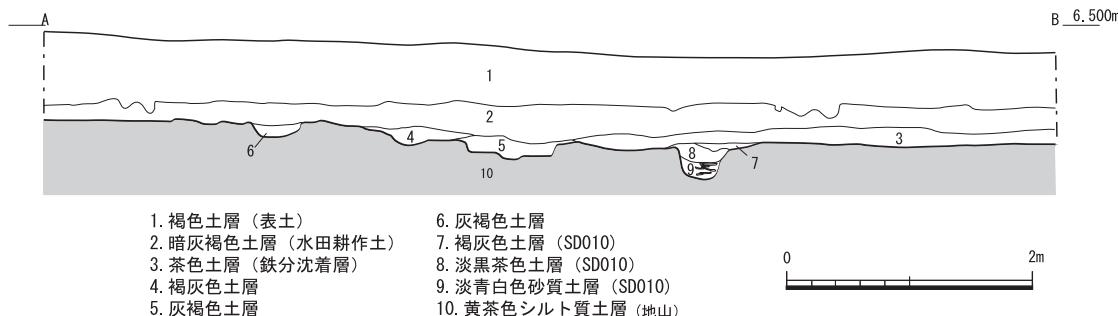
### 3. 遺構・遺物

#### 溝状遺構（SD）

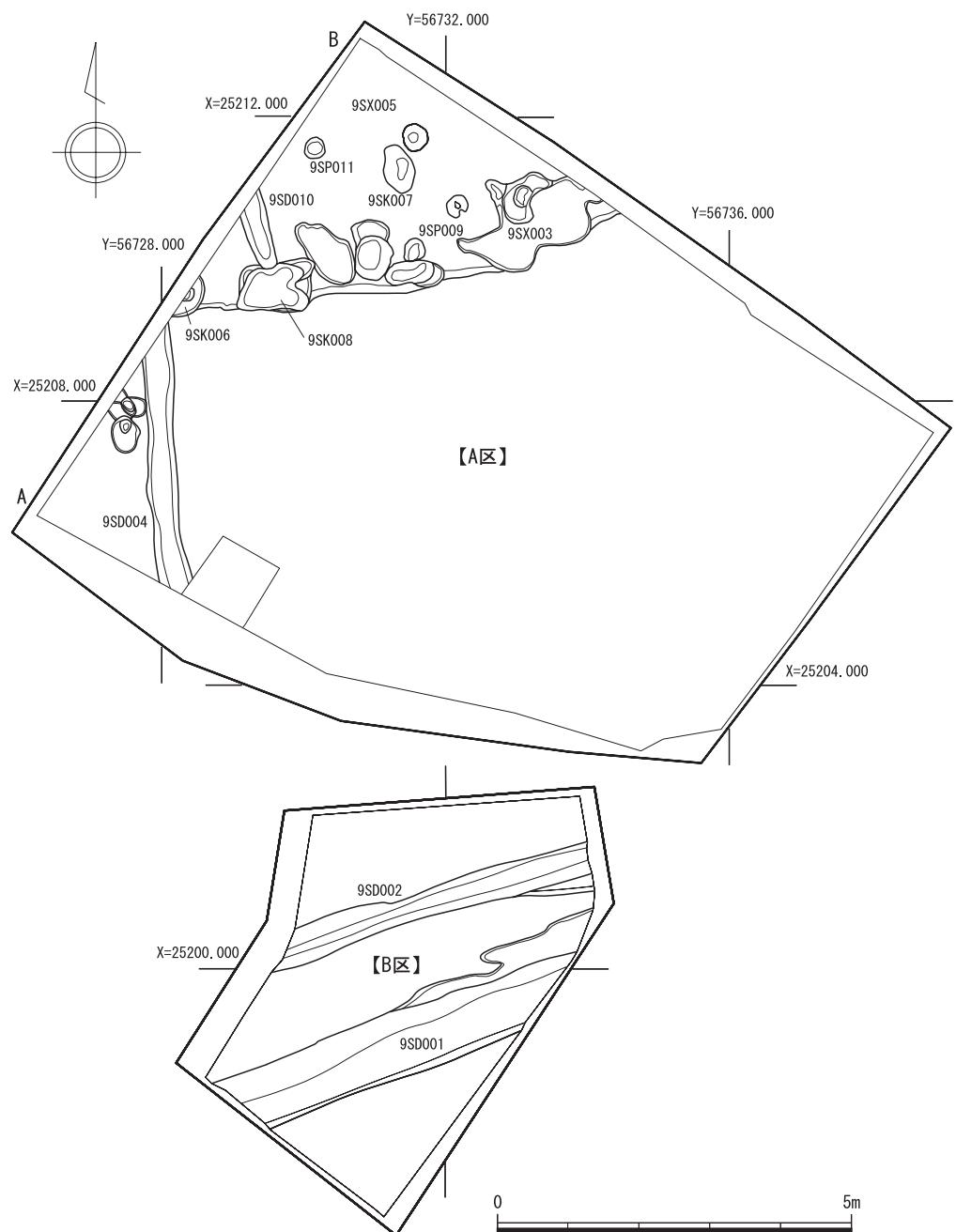
##### 9SD001（第6図）

B区の北西で検出した東西方向の溝状遺構である。現状の検出長は約5.00m、幅約0.90mを測り、断面形状は逆台形を呈す。土層観察からは堆積土からは、流水等の状況は確認できなかった。

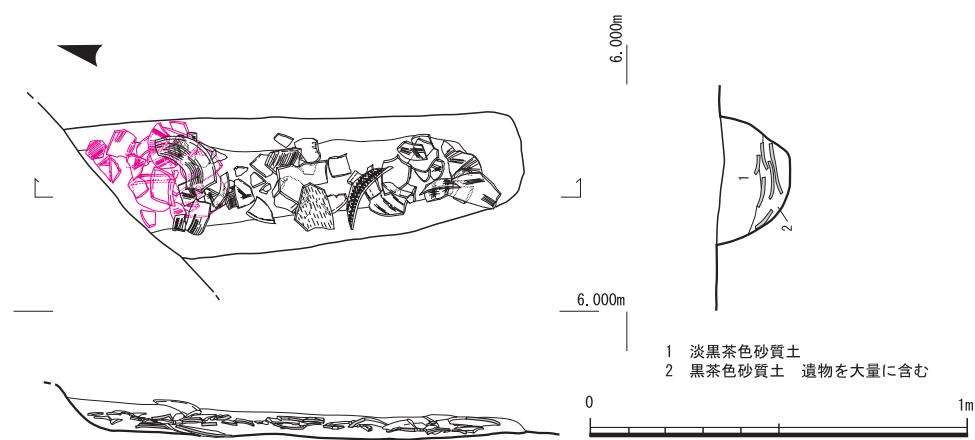
**出土遺物（第8図）**1は、陶胎染付碗底部。肥前産で、17世紀末から18世紀前半の所産である。2は、見込み蛇ノ目釉剥ぎの磁器皿。肥前産で、17世紀末から18世紀前半の所産である。3は、外面に梵字文を描く青花皿C群の底部。景德鎮窯系。4は、備前焼大甕の口縁部である。



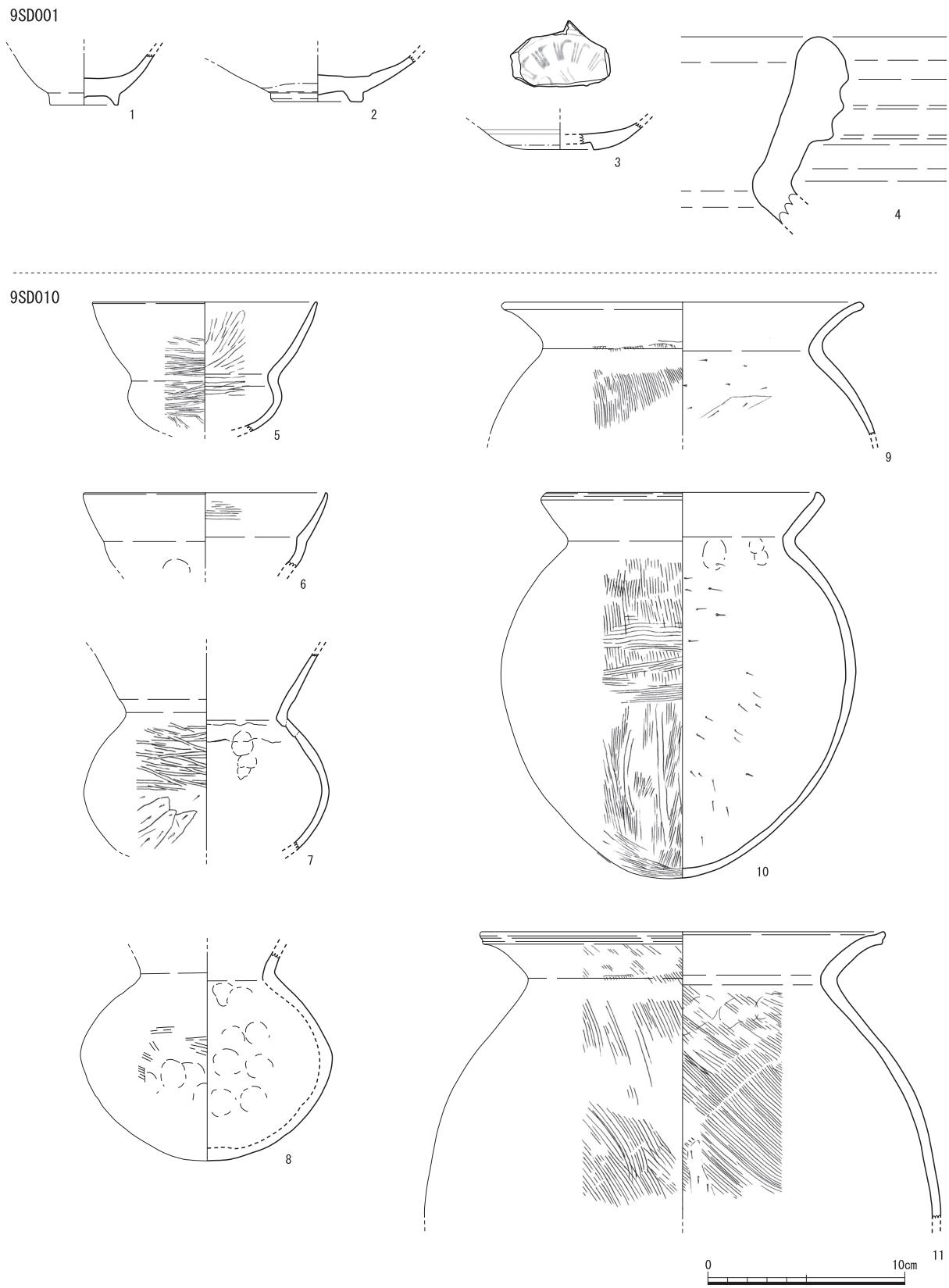
第5図 大道9次調査区西壁土層断面実測図 (1/60)



第6図 大道9次調査遺構平面図 (1/100)



第7図 9SD010 平面・断面・土層実測図 (1/20)



第8図 9SD010 出土遺物実測図① (1/3)

## 9SD002 (第6図)

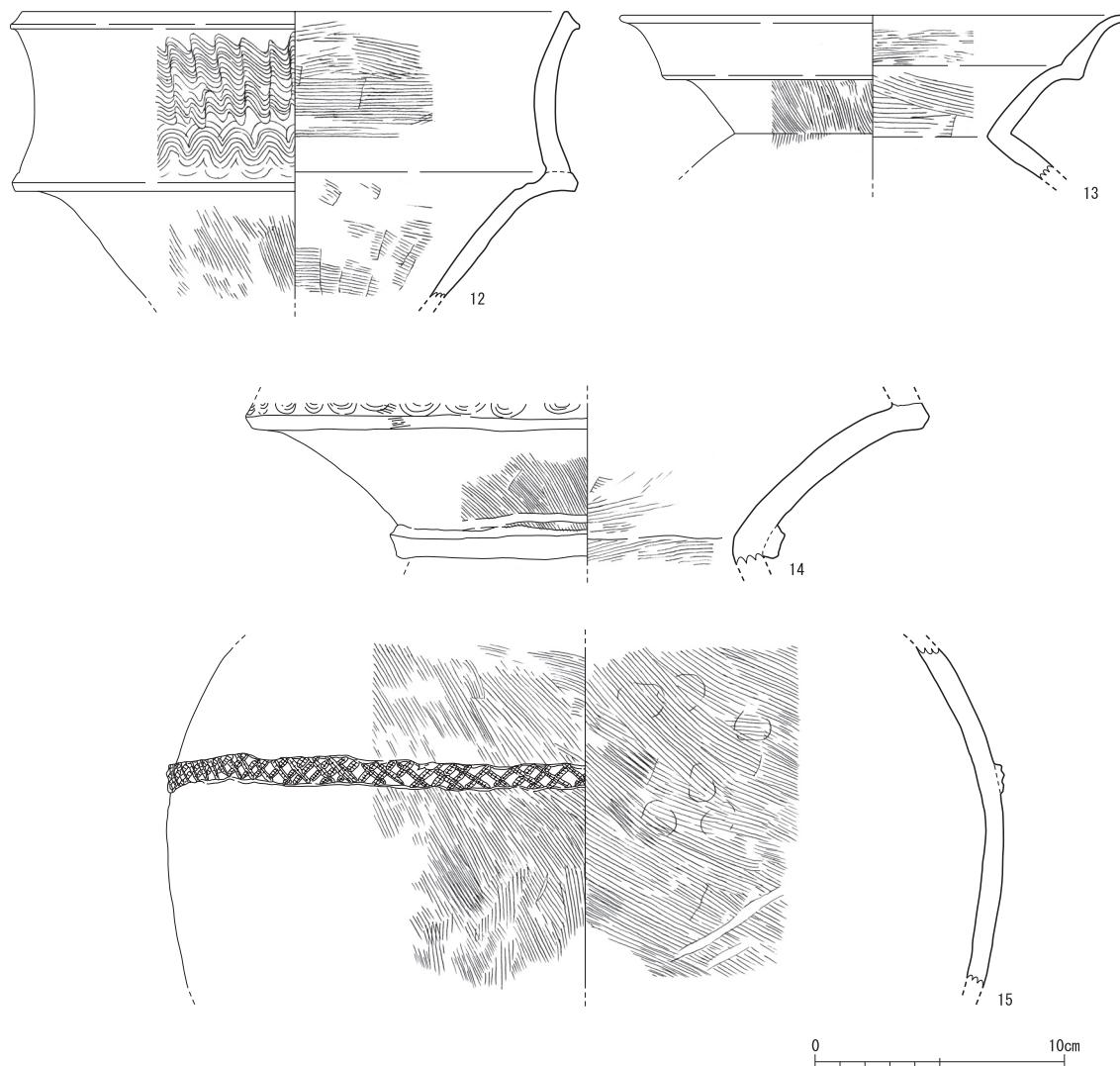
B区で検出した東西方向の溝状遺構である。現状の検出長は約4.50m、幅約0.30～0.60mを測り、断面形状は浅い皿形を呈す。堆積土からは、流水等の状況は確認できなかった。遺物は出土していない。

## 9SD004 (第6図)

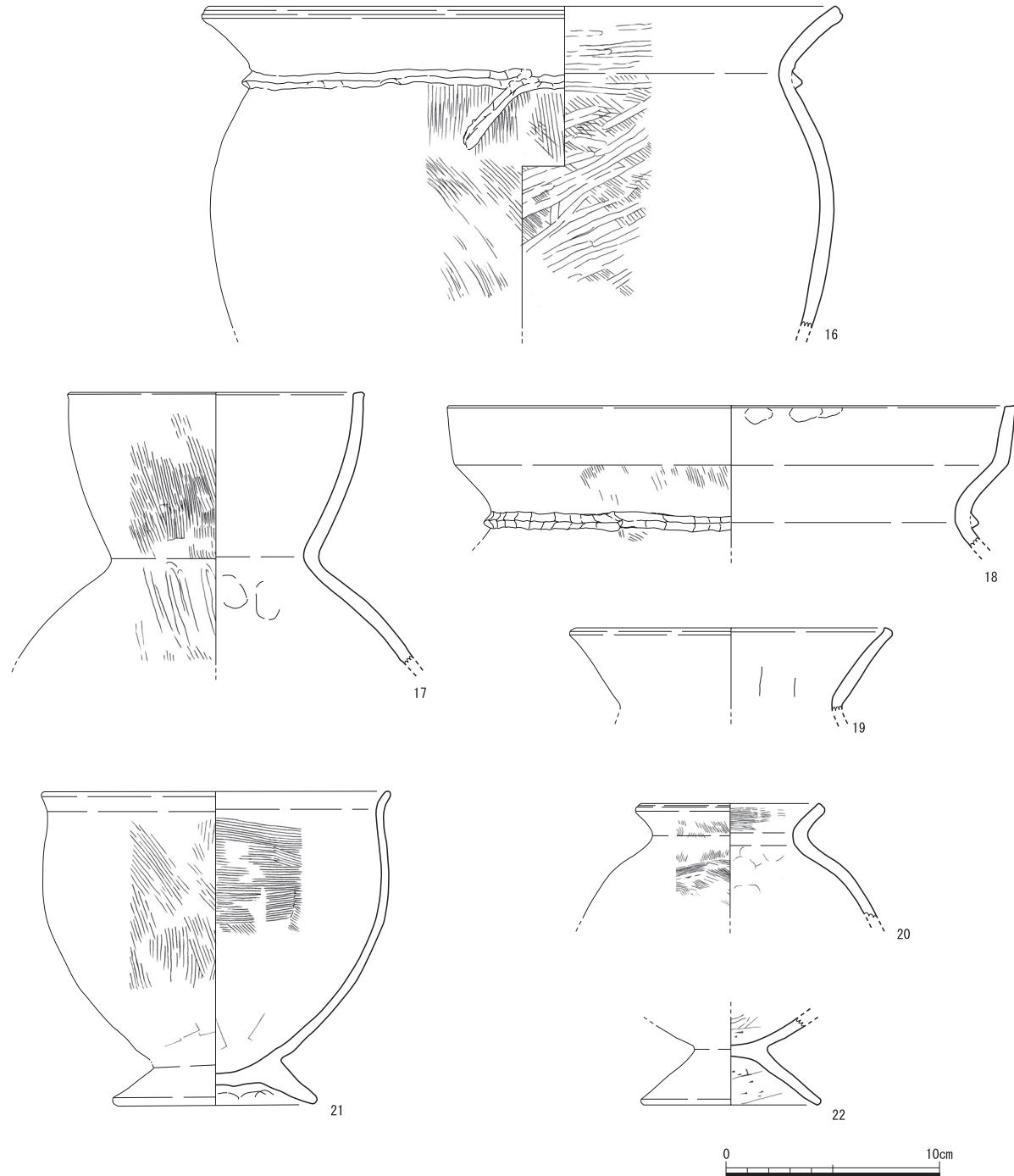
A区の西側隅で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約3.50m、幅約0.50m、深さ約0.15mを測り、断面形状は浅い皿形を呈す。遺構の検出標高は約4.70mを測り、溝の基底部の標高は約4.56mを測る。現状の調査区内で高低差は確認できなかった。堆積土からは、流水等の状況は確認できなかった。遺物は出土していない。

## 9SD010 (第6・7図)

A区の西側隅で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約1.00m、幅約0.40m、深さ約0.30mを測り、断面形状は逆台形を呈す。遺構の検出標高は約4.60mを測り、溝の基底部の標高は約4.30mを測る。調査区の壁に向かって徐々に深くなる。堆積土からは、流水等の状況は確認できなかった。



第9図 9SD010 出土遺物実測図② (1/3)



第10図 9SK006・007出土遺物実測図 (1/3)

**出土遺物 (第8・9図)** 5、6、7は、土師器小形丸底壺で、5の胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内外面ナデ後ミガキ調整、内面に指頭圧痕が認められ口径約11.4cmを測る。

6の胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で、口径約12.2cmを測る。7の胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ、外面はケズリ後ナデ後ミガキ調整で内面に粘土の輪積み痕と指頭圧痕が認められる。

8は、胴部半ばに最大径が来るタイプの長頸壺で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ後ミガキ調整で、内面に指頭圧痕が認められる。

9は、土師器甕口縁部。胎土は、石英・長石・角閃石を含み、色調は内面橙色、外面にぶい橙色を呈し内外面

ハケメ後ナデ調整で口径は約 18.0 cm を測る。

10 は、布留系の土師器甕で、胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内面明黄褐色、外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ、ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 13.6 cm、高さ 19.7 cm を測る。内面頸部に指頭圧痕が、外面に煤の付着が認められる。

11 は、在地系の土師器甕口縁部。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調は内面明褐色、外面にぶい褐色を呈し、内面ナデ、ハケメ、外面ナデハケメ後ナデ調整で口径約 20.5 cm を測る。

12～15 は複合口縁壺の口縁部と胴部。12・14・15 は、安国寺式壺で口縁部の形態や胴部の貼り付け突帯が上部に位置する事から古墳時代前期と考えられる。13 は、畿内系の口縁端部が外反するタイプの壺で古墳時代前期の所産と考えられる。12 の口径は約 21.9 cm、13 は約 20.0 cm を測る。

## 土坑 (SK)

### 9SK006 (第 6 図)

A 区の西側で検出した土坑である。調査区にかかっているため全体のプランは不明であるが、現状で長軸約 0.70 m、短軸約 0.30 m、深さ約 0.10～0.15 m を測る。遺構の検出標高は、約 4.60 m を測り、基底部までの深さは約 0.15 m を測る。

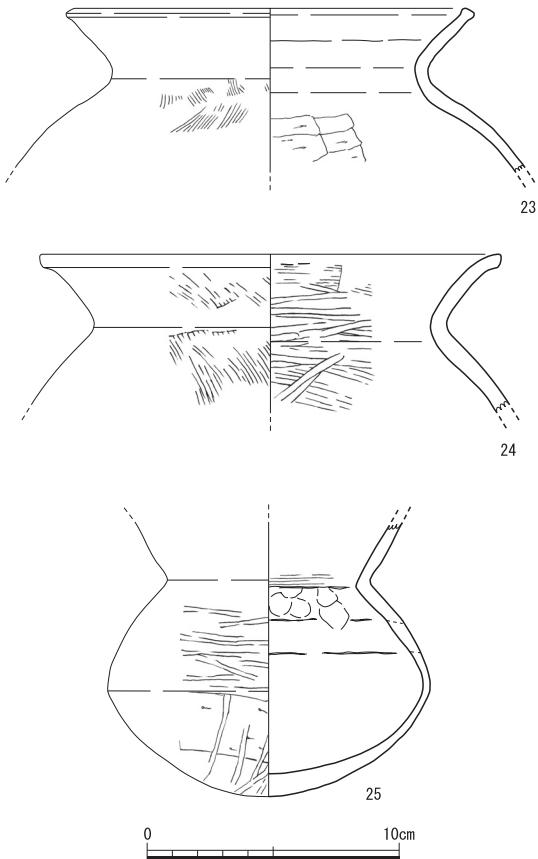
**出土遺物 (第 10 図)** 16 は、土師器鉢。口縁部は逆「く」の字状を呈し、頸部外面に断面三角形の突帯を巡らすものである。16 の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 29.3 cm を測る。

### 9SK007 (第 6 図)

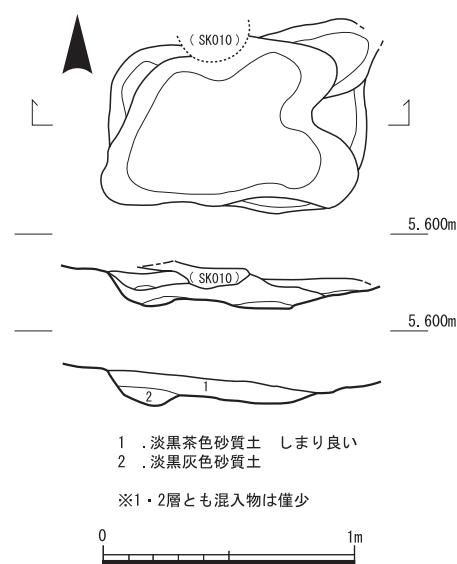
A 区の北側で検出した土坑である。検出面での平面形状は、長軸約 0.70 m、短軸約 0.50 m を測る不定楕円形のプランを呈す。遺構の検出標高は、約 4.60 m を測る。上面が削平され底部のみ残存していると考えられるが基底部までの深さは約 0.15 m を測る。大量の土器片が出土しており、廃棄土坑と想定される。堆積土は、地山ブロック土を多く含む黄褐色土の单一土層で、一度に埋められた状況が確認できる。

**出土遺物 (第 10 図)** 17 は、口縁部が内湾するタイプの長頸壺口縁部。胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ミガキ調整で口径約 13.7 cm を測る。

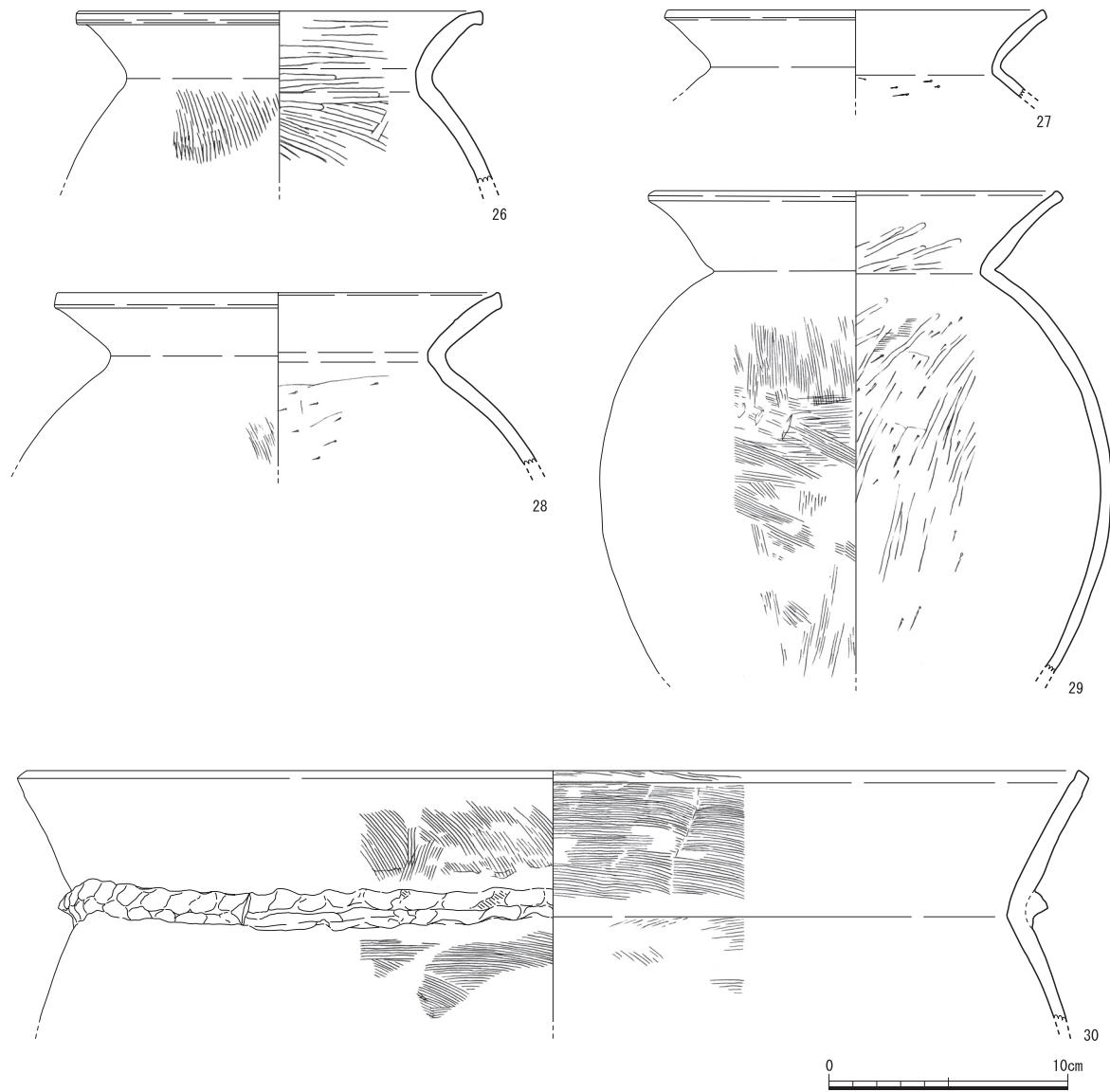
18 は、土師器鉢口縁部。頸部に断面三角形の突帯を巡らす。19 は、壺口縁部で、内外面ナデ調整で、口径約 14.4 cm を測る。



第 11 図 9SP009・011 出土遺物実測図 (1/3)



第 12 図 9SK008 平面・断面・土層実測図 (1/30)



第13図 9SX005 出土遺物実測図 (1/3)

20は、土師器壺で、口縁端部は短く外反する。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径8.3cmを測る。

21, 22は脚台付き鉢。21の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約16.0cm、器高14.8cm、底径9.2cmを測る。22の脚部底径は約8.2cmを測る。

#### 9SK008 (第6・12図)

A区の東側で検出した土坑である。検出面での平面形状は、長軸約1.00m、短軸約0.70mを測る橢円形のプランを呈す。遺構の検出標高は、約5.50mを測り、基底部までの深さは約0.10～0.13mを測る。

## 柱穴 (SP)

### 9SP011 (第6図)

A区の北側で検出した柱穴である。検出面での平面形状は、直径約0.30mを測り、橢円形のプランを呈す。

**出土遺物 (第11図)** SP011出土遺物。23、24は、土師器甕口縁部。23の胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色を呈し、内面はナデ、ケズリ、外面はハケメ後ナデ調整で口径約15.5cmを測る。24の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ミガキ、外面ハケメ調整で口径約18.2cmを測る。

25は、小形丸底壺で、口縁部を欠失している。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ナデ後ミガキ調整である。内面頸部下に指頭圧痕が認められる。

## 不明遺構 (SX)

### 9SX005 (第6図)

A区の北側で確認された地形的な落ちである。南側から北側に向かって落ちており、土器片が多数出土している。

**出土遺物 (第13図)** 26～29は土師器甕。26の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ミガキ風ナデ、外面ナデ、ハケメ調整で口径約16.8cmを測る。27の口径は約15.6cmを測る。28の胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内面明褐色、外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約18.4cmを測る。

29の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ケズリ後ハケメ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約16.8cmを測る。

30は、土師器鉢口縁部。頸部に貼り付け突帯を1条巡らす。胎土は石英・長石・赤色粒子を含み、色調は内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約44.0cmを測る。SD010、SK006・007、SP009・011、SX005からの出土遺物は、どの遺構とも接合関係が見られることなどをみると、同じ遺構と考えられるものである。遺物の時期は古墳時代前期と考えられる。

## 小結

調査区南東に向かい、ゆるやかな傾斜がみてとれ、自然地形の落ち部分にあたり、地形的な落ちを利用した土器の廃棄場所であったと想定される。また、明確な遺構が検出されないことから、本調査区は遺跡内の東端部と想定される。

## 大道遺跡群第15次調査

### 1. 調査の概要

調査地は大分市金池南1丁目に所在し、上野台地北側の沖積低地に位置する。本調査は区画整理地内街路整備事業に伴い、平成18年6月19日から平成18年8月28日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は603m<sup>2</sup>を測り、大道遺跡群内の南に位置している。調査の結果、古墳時代から近世にかけての遺構群を確認している。

### 2. 基本土層

現地表下約0.60mで層厚約0.20mの旧水田耕作土が検出され、その直下の黄褐色細砂～シルト層上面で遺構が検出される。調査区の北部、概ね15SD007（近世溝）以北では地形が北側に向かって大きく落ち込んでおり、調査区北端では低湿地に移行している。北端部では水田耕作土層下部まで地表下約1.70mを測る。

### 3. 遺構・遺物

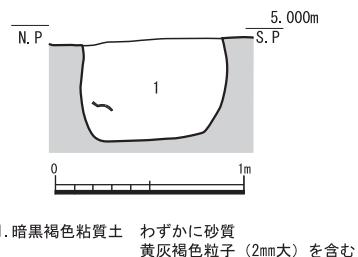
#### 井戸跡 (SE)

##### 15SE003（第14図）

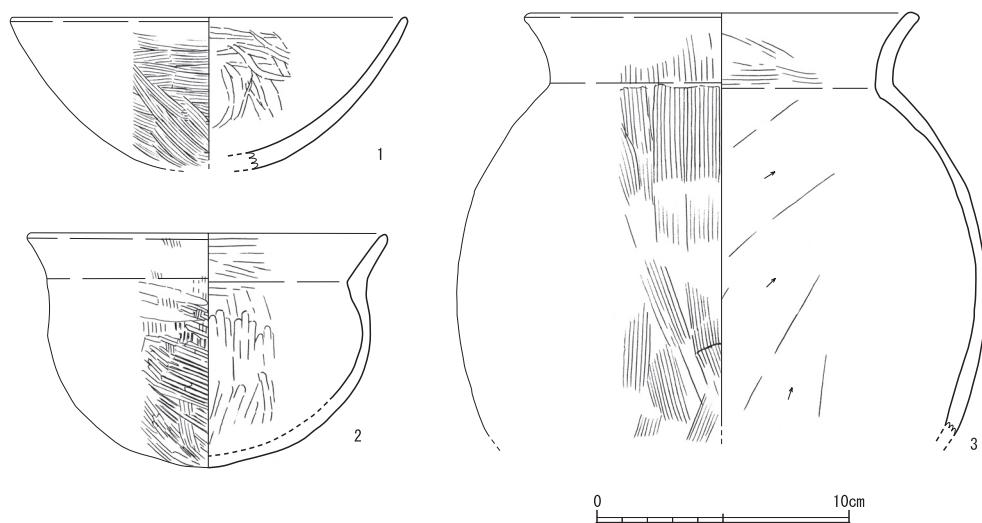
調査区西に位置する井戸跡である。平面円形、断面は円筒形を呈し長径約0.80m、短径約0.76m、深さ約0.50mを測る。素掘りと考えられる。上面が削平をうけていたため土層は暗黒褐色粘質土のみが確認でき、基底部からは湧水が認められた。埋土からは古式土師器などが出土しており、一部の土器は隣接する15SE004と接合することから、古墳時代以降の廃絶時期が考えられる。

**出土遺物（第15図）** 1は土師器碗で、胎土は長石・角閃石・白色粒子・雲母を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ミガキ、外面ハケメ調整で口径約15.6cmを測る。

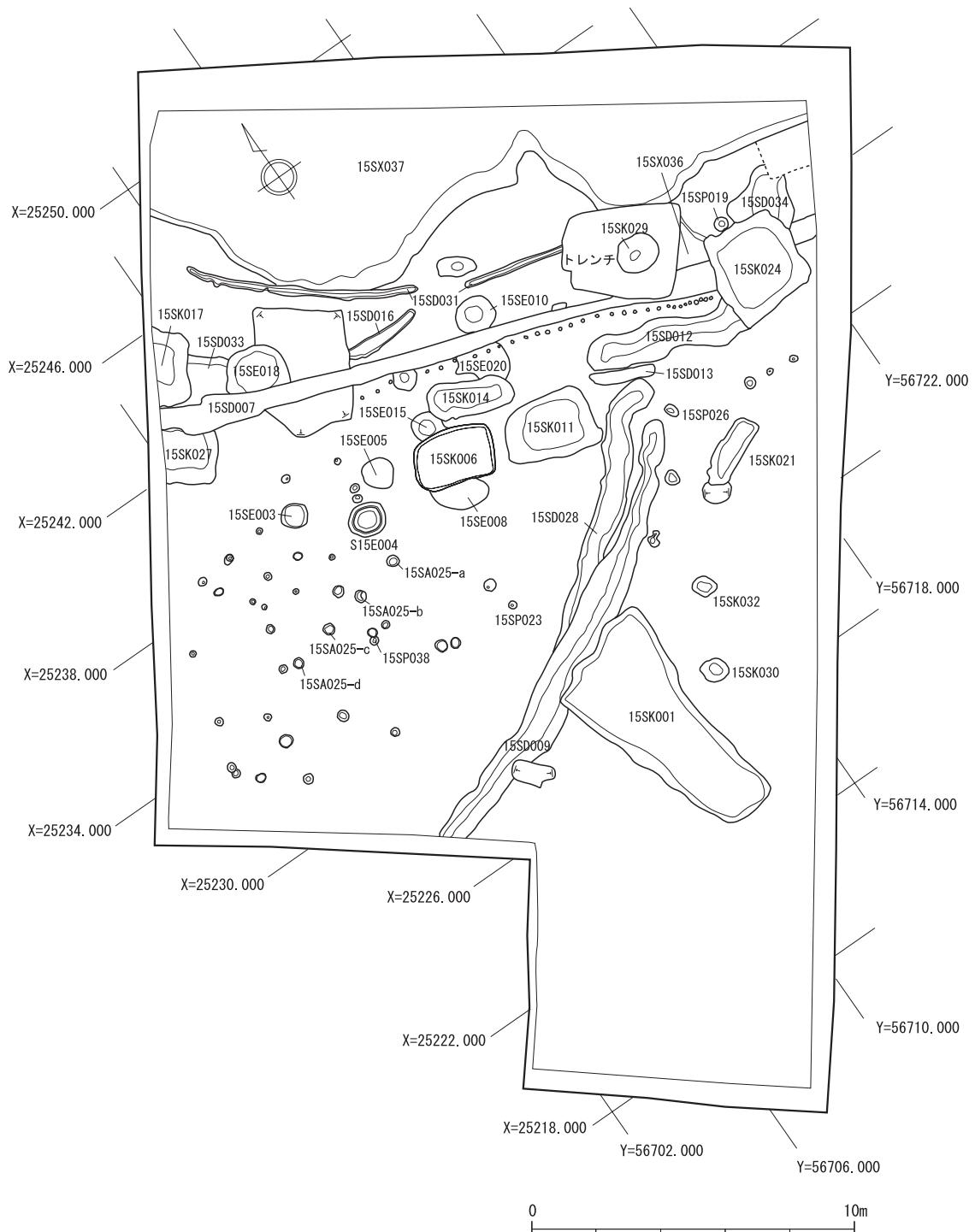
2は小形丸底壺で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面明赤褐色を呈し、内面ハケメ後ミガキ、外面ハケメ後丁寧なナデ調整で口径約14.1cm、器高9.3cmを測る。3は土師器甕で、胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ調整で口径約15.6cmを測る。



第14図 15SE003 土層断面  
実測図 (1/40)



第15図 15SE003 出土遺物実測図 (1/3)



第 16 図 大道 15 次調査遺構平面図 (1/200)

## 15SE004（第16図）

調査区中央よりやや西に位置する。平面は橢円形を呈しており、長径約1.11m、短径約1.02mを測る。断面形状は上面に浅い丸底、下面に筒状を呈するもので、井筒抜き取り後に埋め戻した可能性も考えられる。埋土からは大量の土器片が廃棄されている状況を確認しており、出土遺物から古墳時代に帰属する遺構と推測される。また北西に隣接する15SE003、北に隣接する15SE005の出土遺物との接合関係も見られており、これらの井戸跡はほぼ同時期に廃絶されたと考えられる。

**出土遺物（第17・18図）**4、5は、土師器碗。4は、口縁部端部が尖るタイプ。胎土は石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、内面ハケメ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約12.2cmを測る。

5の胎土は石英・角閃石・赤色粒子・雲母を含み、色調は内面橙色、外面にぶい褐色を呈し、内面ハケメ後ミガキ、外面ナデ後ミガキ調整で口径約17.4cm、器高5.7cmを測る。外面に指頭圧痕、底部に黒斑が認められる。

6は土師器鉢で、胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内面赤褐色～明赤褐色、外面赤褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ調整で口径約18.5cm、器高10.1cmを測る。外面底部に黒斑、内外面に指頭圧痕が認められる。

7は小形丸底壺で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約13.4cm、器高6.3cmを測る。内面に黒斑が認められる。

8は台付き鉢で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子・雲母を含み、色調は内面明褐色、外面にぶい赤褐色を呈し、内面ハケメ後ミガキ風ナデ、外面ハケメ調整で口径約18.0cm、器高10.5+ $\alpha$ cmを測る。外面に煤付着が認められる。

9は小形丸底壺で、胎土は石英・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面口縁部ハケメ内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約13.3cm、器高11.3cmを測る。外面に煤付着が認められる。

10は複合口縁壺で、口縁部が逆「く」の字形に開く畿内5様式の壺。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整で口径20.0cmを測る。

11～19は土師器甕。11の胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄褐色～赤褐色、外面赤褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約22.0cmを測る。外面に土器焼成のハツレ痕が認められる。

12はケズリを意識した布留系の甕で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内面にぶい黄褐色～赤褐色、外面赤褐色を呈し、内面ハケメ後ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約15.0cm、器高22.7cmを測る。外面に煤付着が認められる。煤は、炭化物の炭素14年代測定に使用し、1800±30、較正年代AD130-AD260に82.7%の確率密度との測定値が出ている。

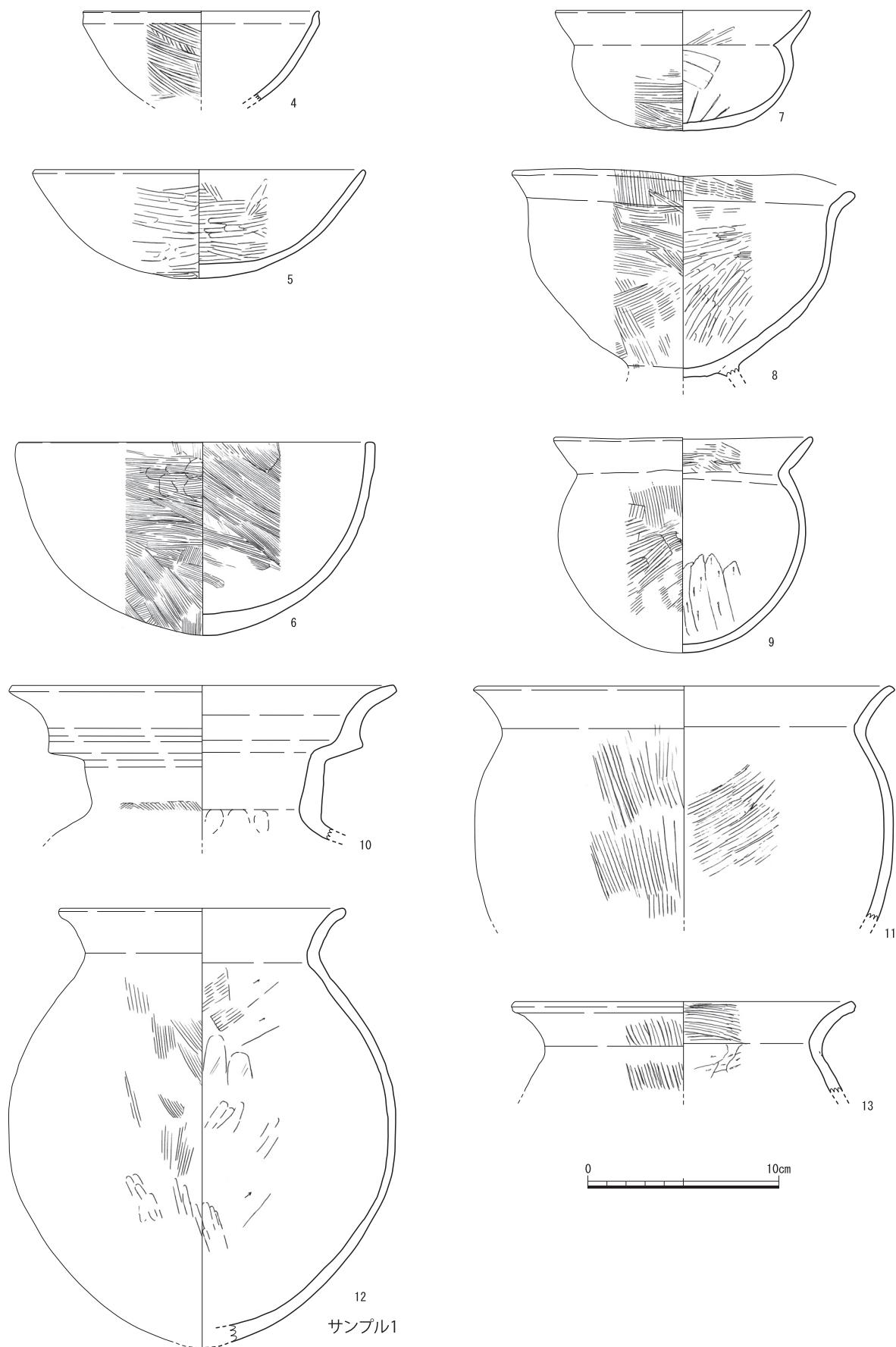
13の胎土は長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内面褐色、外面黒褐色を呈し、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口縁部外面に煤付着が認められる。口径約18.0cmを測る。

14の胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径は約16.6cmを測る。

15は小形の甕で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、内面ハケメ後ケズリ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約13.2cm、器高17.0cmを測る。

16は布留系の甕を意識したもので、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面明赤褐色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口縁部外面全体に煤付着が認められる。口径18.8cm、器高約24.1+ $\alpha$ を測る。

17是在地系の甕で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調は内外面明赤褐色を呈し、内面ハケメ後ケズリ、外面ハケメ調整で、口径約17.1cm、器高24.9cmを測る。外面に一部黒斑が認められる。



第17図 15SE004 出土遺物実測図① (1/3)



第18図 15SE004 出土遺物実測図② (1/3)

18は在地形の甕で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面ハケメ調整で口縁部外面に煤付着が認められる。口径約15.0cm、高さ26.7cmを測る。外面に煤の付着が認められる。煤は、炭化物の炭素14年代測定に使用し、1880±30、較正年代AD65-AD225に95.4%の確率密度との測定値が出ている。

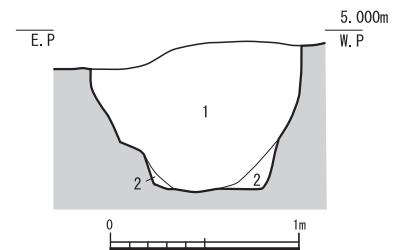
19是在地形甕底部。外面に煤付着が認められる。煤は、炭化物の炭素14年代測定に使用し、1940±30、較正年代AD1-AD130に94.6%の確率密度との測定値が出ている。

### 15SE005（第19図）

調査区中央よりやや西に位置し、15SE004に隣接する井戸跡である。平面橢円形を呈し、長径約1.20m、短径約1.00mを測る。また断面は2段にわたって掘り下がり、深さは約0.80mを測る。埋土は暗黒褐色粘質土が大半を占め、遺物もこの層からの出土が確認された。遺物は古墳時代に比定されるものが中心であり、その他種子が数点出土している。また出土した土器の一部は15SE004の出土遺物との接合関係がみられることから、15SE003・004・005がほぼ同時期において廃絶された可能性が考えられる。

**出土遺物（第20図）** 20は、小形台付き鉢。胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面暗褐色、外面明褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ナ

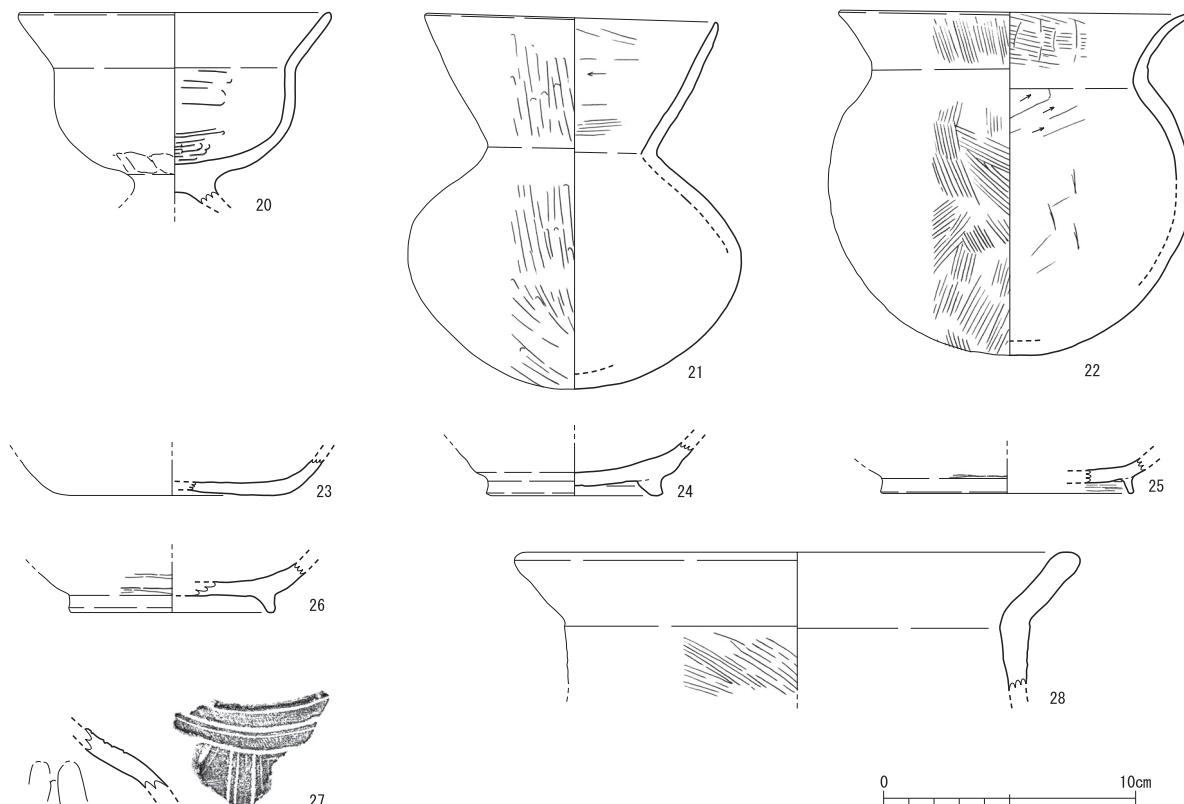
21は小形の長頸壺。胎土は石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面明褐色～黄橙色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ナ



1. 暗黒褐色粘質土 わずかに砂質  
黄灰褐色粒子（2mm大）を含む  
2. 黄灰黒褐色砂質土 黄灰褐色砂質土と  
暗黒褐色粘質土の混土層

第19図 15SE005 土層断面

実測図 (1/40)



第20図 15SE005・008・015・018 出土遺物実測図 (1/3)

デ後ミガキ調整で、口径 13.5 cm、器高約 14.9 cm を測る。内外面に黒斑が認められる。

22 は小形の甕。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄橙色、外面赤褐色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ調整で、口径 13.6 cm、器高約 13.7 cm を測る。内外面に指頭圧痕と外面に煤の付着が認められる。

15SE005 からは、桃の種子 1 点、イチイ櫻の実 1 点、瓜類の種子 5 点の種子類が検出されている。また、第 15 図 1、第 18 図 18 のように 15SE003 と 004 の出土遺物に接合関係がみられ、第 17 図 13 は、15SE005 と接合関係が見られる事からほぼ同時期に廃棄された事が認められる。遺物は、布留 I 式の時期と考えられるもので古墳時代前期前葉に比定される。

#### 15SE008（第 16 図）

調査区中央に位置し、北側部分を 15SK006 に切られる井戸跡である。平面楕円形、断面浅丸底状を呈するが、削平を大きくうけているため規模は不明である。土層は 3 層に分層され、観察から井戸使用時の淡灰褐色砂質土（3 層）と埋め戻し時の黒褐色粘質土（2 層）および黒褐黄色砂質土（1 層）の堆積状況を確認した。出土遺物から古代に帰属する遺構と考えられる。

**出土遺物（第 20 図）** 23～25。23 は土師器坏底部。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、内面はナデ、外面はヘラ切り後ナデ調整で、底径 10 cm を測る。

24、25、26 は高台付きの坏底部。いずれも古代で 8 世紀末～9 世紀初頭に比定されるものである。15SE008 から桃の実 5 点が出土している。

#### 15SE015（第 16 図）

調査区中央に位置し、15SK006・15SK014 に切られる井戸跡である。平面円形、断面はやや歪な逆台形を呈し、現存する長径 0.90 m、短径 0.70 m、深さは約 0.60 m を測る。埋土からは井筒や木枠が確認されず、素掘りの井戸である可能性が高い。埋土から混ざり込みと思われる弥生土器の壺が確認された。出土した遺物は古代に比定されるものが中心となっており、井戸の廃絶時期に伴い、廃棄されたものと考えられる。

**出土遺物（第 20 図）** 27 は、弥生土器で下城式壺の頸部である。時期としては、弥生時代中期に比定される。

#### 15SE018（第 16 図）

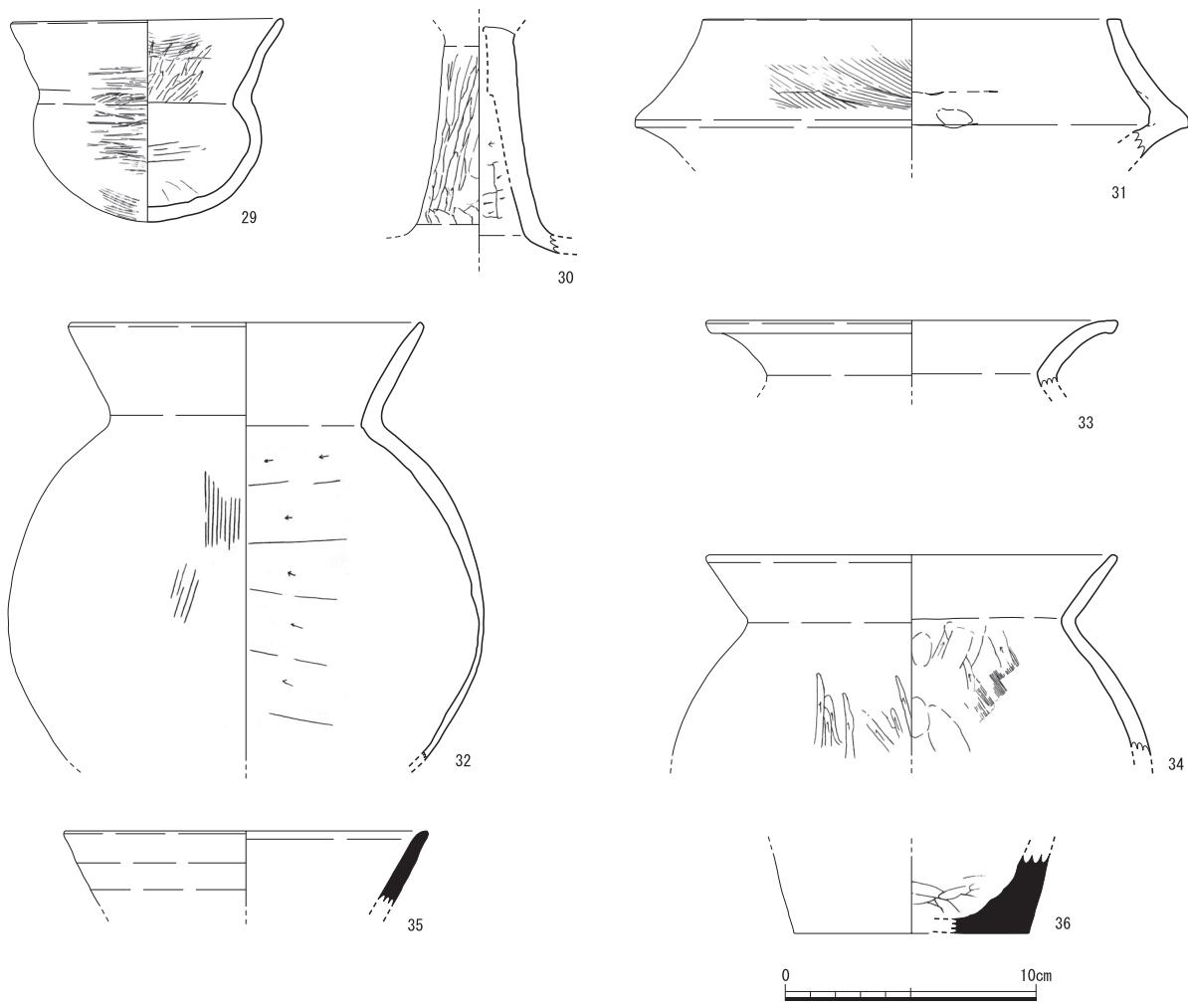
調査区北西に位置し、15SD007・15SD033 を切る井戸跡である。平面楕円形、断面は逆台形状を呈しており、長径約 2.00 m、短径約 1.80 m を測る。土層堆積からは灰褐黒色粘質土と淡灰褐色砂質土の 2 層を確認し、基底部からの湧水が認められる。埋土からは企救型甕片が出土しており、8 世紀から 9 世紀代に帰属する遺構と考えられる。

**出土遺物（第 20 図）** 28 は土師器甕で、企救型甕の口縁部。胎土は石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ、外面の口縁部はナデ、胴部はハケメ調整で口径約 22.4 cm を測る。時期としては 8 世紀末～9 世紀初頭に比定される。

#### 15SE020（第 16 図）

調査区中央よりやや北に位置する井戸跡である。遺構は 15SD007・15SK014 に切られるため全容は不明であるが、現存長は東西約 1.70 m、南北約 0.80 m を測る不整形平面プランを呈す。埋土からは古式土師器の他に須恵器片が出土しており、遺構の埋没時期が古代であることが推測される。

**出土遺物（第 21 図）** 29～34 は土師器。29 は小形丸底壺で、口径 10.7 cm、高さ 8.1 cm を測る。



第21図 15SE020出土遺物実測図 (1/3)

30は、高坏脚部で内面ケズリ後ナデ、外面ケズリ後ミガキ調整である。

31は、複合口縁壺の口縁部で、口径約16.6cmを測る。32は、甕で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面灰黄色を呈し、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約14cm、高さ17.5+αcmで、外面に煤付着が認められる。

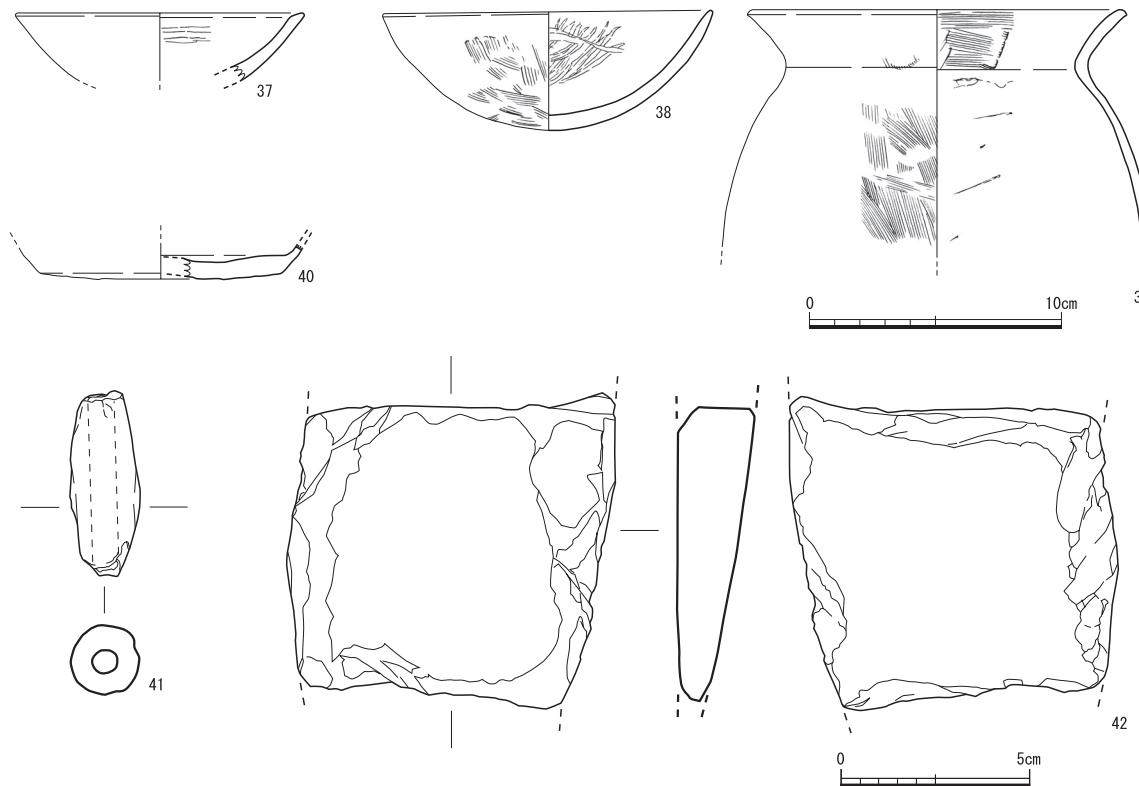
33は、甕口縁部で口径約16.4cmを測る。34も甕口縁部で口径約16.2cmを測る。

35は須恵器坏口縁部。口径約14.4cmを測る。36は、須恵器壺底部。回転ナデ調整後指頭圧痕が認められる。底径約9.4cmを測る。古墳時代前期前葉の遺物も見られるが、須恵器の坏と壺の存在を考えると、8世紀末～9世紀初頭の時期に比定される。

#### 溝状遺構 (SD)

##### 15SD007 (第16図)

調査区中央からやや北に位置する溝跡である。東西方向へと延びており幅約0.50mを測るが、区外へと続くため全長は不明である。溝の南側には杭跡が一定の間隔で多数配置しており、近世の水路であったと想定できる。また、遺構からは縄文晩期に比定される打製石斧が出土しているがおそらくは流れ込みによる混入品であると考



第22図 15SD012・013・028出土遺物実測図 (1/3) 42は(1/2)

えられる。

**出土遺物 (第22図) 42** は凝灰岩製の打製石斧で、幅8.1cm、長さ7.6cm、重量189.0gを量る。上部と下部を欠損しているが、左右に打ち欠いた調整痕が認められる。縄文時代晩期に良く見られるもので、土掘りの道具と考えられている石器である。

#### 15SD012 (第16図)

調査区の東に位置し、北西方向へと延びる溝跡である。断面形状は浅い逆台形を呈しており、深さは約0.10mを測る。また遺構は北西部で15SK024に切られており、現存長は約4.80m、幅約0.90mである。土層は淡黒灰褐色砂質土の単一層であった。埋土から水性堆積は認められず、出土遺物から古代以降に埋没したものと考えられる。

**出土遺物 (第22図) 37** は土師器碗の口縁部。40はSD012出土の土師器壺の底部で、底径は約9.6cmを測る。時期は古代に比定される。

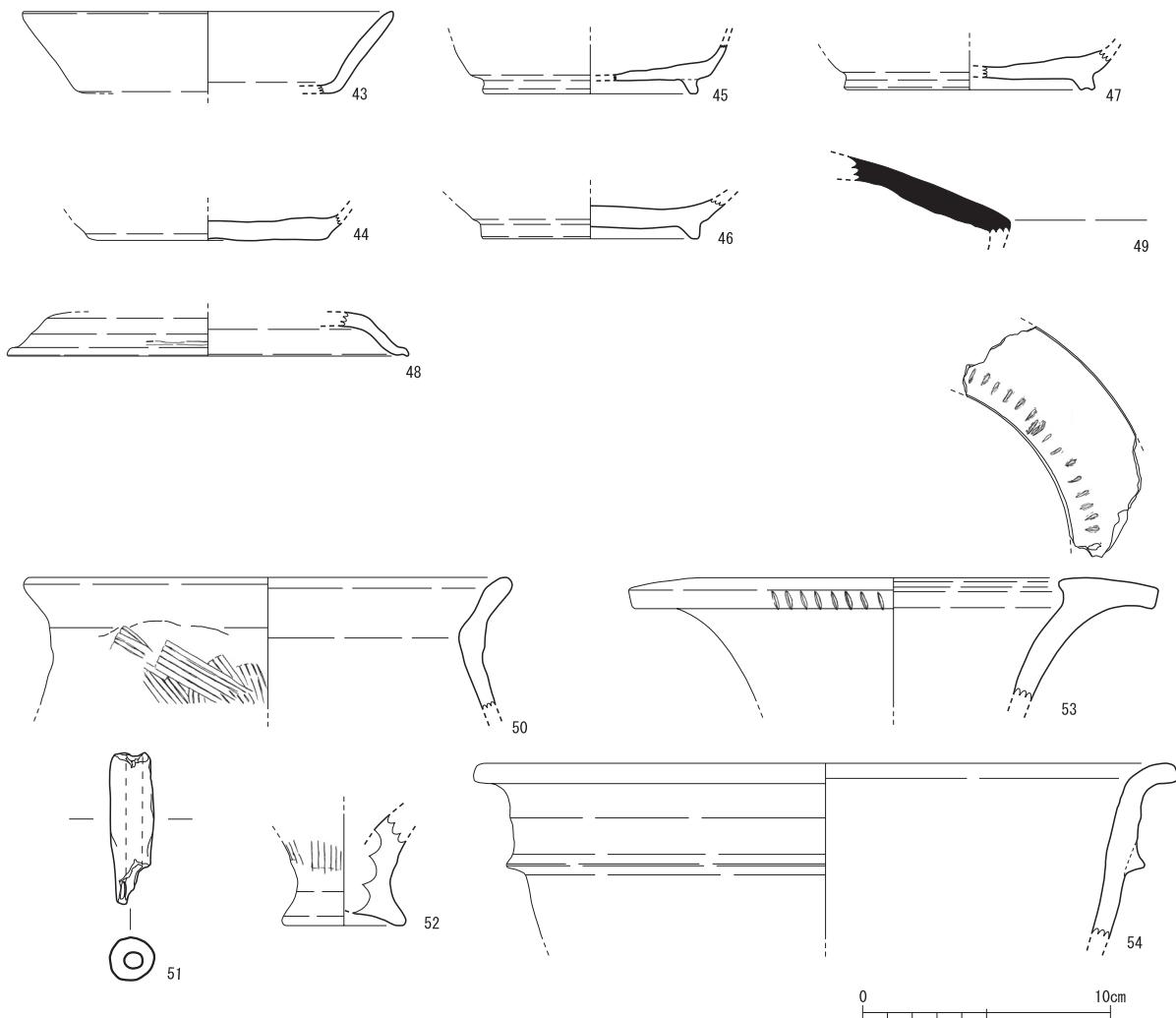
#### 15SD013 (第16図)

調査区東に位置し、北西から南東方向へと延びる溝跡である。溝状遺構としての残部は僅少であり、遺物の出土時期から遺構が古墳時代以降に埋没した可能性が考えられるといえる程度である。

**出土遺物 (第22図) 38** は土師器碗、39は土師器壺。いずれも古墳時代前期前葉に比定されるものである。

#### 15SD028 (第16図)

調査区中央からやや東に位置し、南西方向へと延びる溝跡である。遺構は15SD009に切られているため全容



第23図 15SX036出土遺物実測図 (1/3)

は不明であり、現存長は約 6.70 m を測る。埋土からは土錐 1 点が出土しているが、これで遺構の時期を比定することは出来ない。

**出土遺物 (第22図)** 41 は、SD028 出土の土師器土錐。幅 1.7 cm、長さ  $4.9 + \alpha$  cm、孔径 0.9 cm を測り重量 14.7 g を量る。土錐のみの出土などで時期比定は困難である。

#### 不明遺構 (SX)

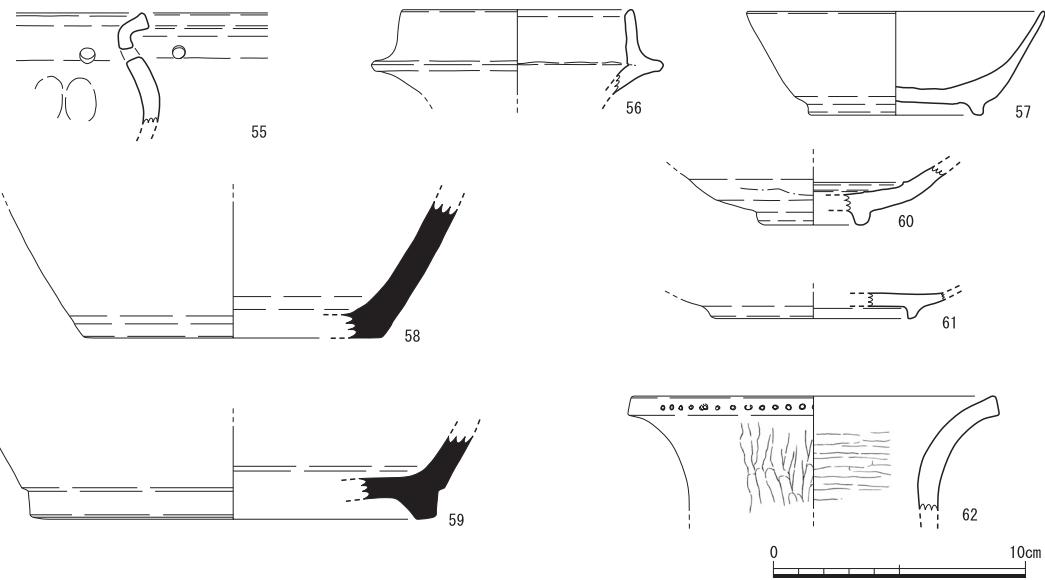
##### 15SX036 (第16図)

調査区東に位置する不明遺構である。遺構の大部分を 15SX037・15SD007・15SK024 らに切られているために規模・性格を判断するのは困難な状況であった。出土遺物からは 8 世紀から 9 世紀代に帰属するものと考えられる。

**出土土器 (第23図)** 43～54。43～50 は、古代の遺物である。43 は、土師器壺口縁部で口径約 15 cm を測る。44 は、土師器壺底部で底径約 9.7 cm を測る。45～47 は、高台付き壺の底部で底径約 8.6～9.8 cm を測る。

48 は、土師器壺蓋で口径約 16.2 cm を測る。49 は須恵器長恵壺の胴部。50 は企救型甕口縁部で口径約 19.6 cm を測る。時期としては 8 世紀末～9 世紀初頭に比定される。

51 は土師器土錐で一部欠損している。幅 1.8 cm、長さ 6.1 cm、孔径 0.75 cm を測り、重量 16.5 g を量る。



第24図 15SX037・表土出土遺物実測図 (1/3)

52は弥生後期に比定される甕底部で、底径約4.8cmを測る。53は弥生土器壺口縁部。鋤先口縁部を呈し口径約21.4cmを測る。

54は口縁下部に断面三角形の貼り付け突帯を巡らす甕。時期としては弥生時代後期初頭に比定される。弥生土器は流れ込みによるもので、古代の遺構と考えられる。

#### 15SX037（第16図）

調査区北東で確認されているが、区外へと延びるために全容は不明である。不整形な平面プランおよび浅い段状の断面形状を呈す。現存長は調査区東壁から西壁までの約20.50mに及び、南北長は約5.40mを測る。遺物包含層からは縄文土器から近世陶磁器まで出土しているが、とくに古墳時代から古代にかけての遺物を中心に出土している。

**出土遺物（第24図）55～62。**55は、弥生土器壺口縁部。口縁部下に穿孔が施されている。

56は、弥生土器複合口縁壺で、口径は、約9.0cmを測る。57は、土師器壺。

58、59は、須恵器壺底部。60は唐津焼皿底部。61は、白磁皿底部。出土遺物の時期は弥生時代～17世紀初頭にまたがっており時期比定は困難である。

62は表土出土の壺口縁部。口縁端部に竹管による文様を巡らす。また、第15次遺跡の包含層から縄文土器中期に比定される船元式土器が検出されていることは注目できる。

#### 縄文土器

第15次遺跡では、縄文時代中期～後期の遺物が出土している。1は、里木式と考えられる深鉢口縁部。

2は、口縁部外側に肥厚させそれに平行の沈線、同心円状の沈線をめぐらした津雲上層式と考えられる縁帶文土器の口縁部。

3の外面は爪形文が全面に施されており、縄文時代中期から後期にかけての船元式の浅鉢と考えられるものである。

4は口縁部が外反する深鉢で内外面とも貝殻条痕文が施されている。5は、深鉢口縁部で内面の調整は貝殻条

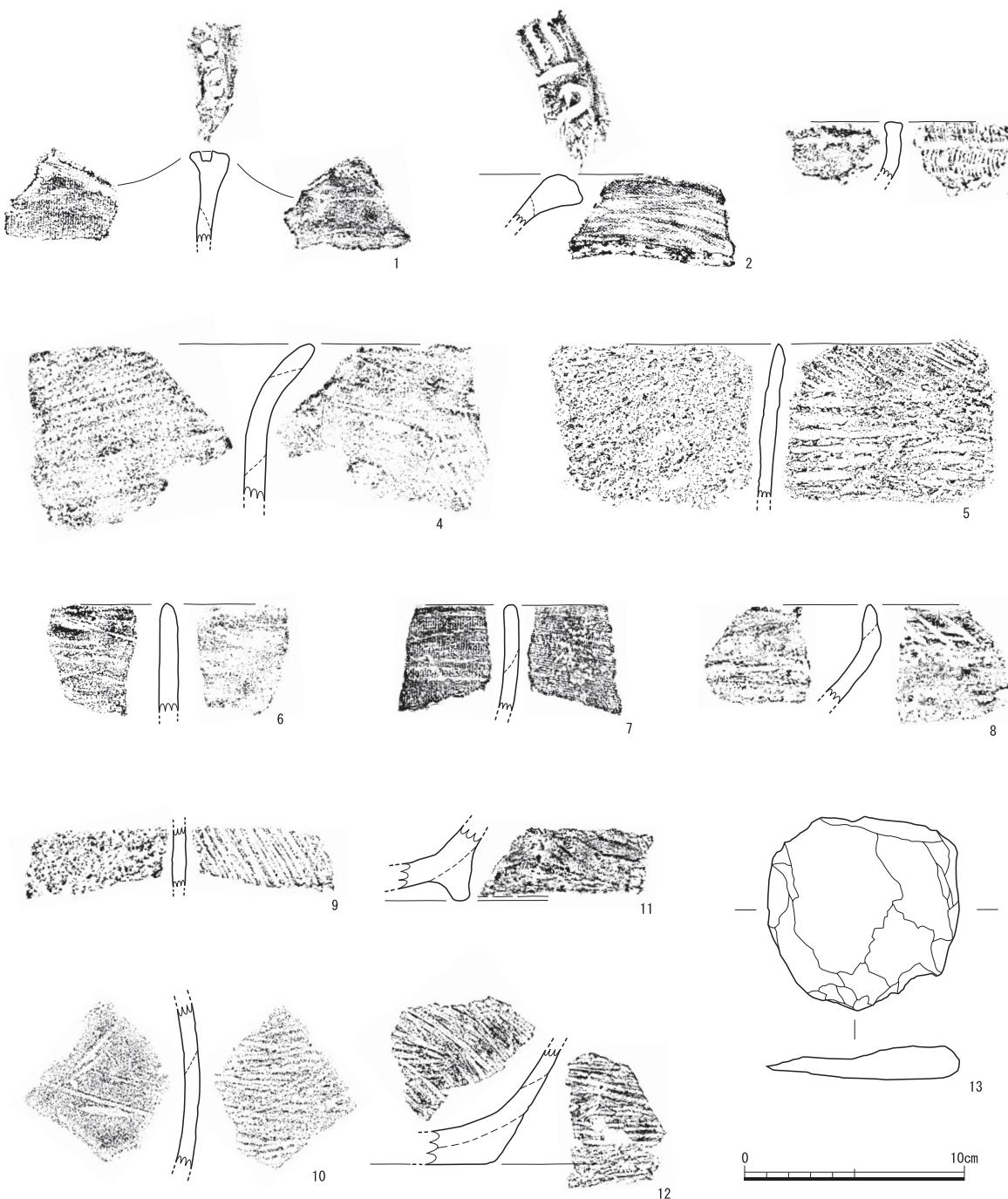
痕文後ナデ、外面は貝殻条痕文である。

6は、深鉢口縁部で内外面の調整は貝殻条痕文である。7は、口縁部からやや丸みを帯びた形の深鉢口縁部。内外面の調整は貝殻条痕文である。8は、浅鉢口縁部で、内外面貝殻条痕文後ナデ調整で、口縁部外面に斜めの沈線が認められる。

9、10は、無紋土器の胴部破片。11、12は、縄文土器深鉢の底部。

12は、小池原上層式の深鉢の底部で内外面貝殻条痕調整である。縄文時代後期でも古い様相を示している。

13は、一部欠損が認められるが凝灰岩製の打製石斧と考えられるものである。重さ150gを量る。



第25図 大道15次出土縄文土器実測図 (1/3)

## 小結

本調査では古墳時代および古代を中心とする井戸跡8基、溝状遺構9基、土坑11基、ピット4基、柵列遺構1列、性格不明遺構2基を確認した。遺構出土遺物は古墳時代前期前葉と古代の2時期がみられる。

古墳時代初頭に比定される井戸跡15SE003・004・005は隣接しほぼ同程度の規模を呈するもので、また出土遺物は互いに接合関係を持っていることから、井戸の機能および廃絶がほぼ同時期に成された可能性が考えられる。

古代になると調査区内に新たな井戸（15SE008・018・020）が作られ、それに伴い水路となる溝（15SD009・028）が形成される。この時点で古墳時代の井戸・土坑は大半が埋没しているが、井戸底には魔除けとなる種子を入れて廃絶しており、古墳時代の遺構に近接して造成された遺構群からは当該地を引き続き水利の空間として利用した痕跡が窺える。この時期の井戸跡からも基底部から廃絶時の魔除けと考えられる桃の実5点が出土した。

近世に比定される遺構では東西方向へと延びる溝（15SD007）が存在する。南側には木杭跡が多数見られ、水路として機能したものであろう。中世に比定される遺構は確認できなかったが、調査区に古墳時代から水利に伴う空間が存在し、以後一部を踏襲しつつ継続して利用された状況が明らかとなった。さらに包含層から縄文土器が検出されている。縄文時代中期～後期に比定される土器が出土している。そのなかで注目されるのは、津雲上層式と考えられる縁帶文土器の口縁部、里木式と考えられる深鉢口縁部、船元式浅鉢など縄文時代中期に比定できる遺物である。瀬戸内海の西岸にあたる当遺跡も近畿、四国、中国地方に分布する船元式文化圏の影響を受けていた事を窺わせる事例である。横尾遺跡でも船元式土器が出土しており、海岸線にそった交易の存在も示唆できる事は、注目できることである。また、出土遺物の中に弥生時代後期の遺物が認められるが、遺構の検出が見られない事から、周辺にこの時期の遺構が展開する可能性が考えられる。

## 第2節 大道遺跡群第10次・第14次・第17次・第18次調査

当該地点の周辺では、平成9年度以来、平成15年度までに行われた試掘・確認調査によっても遺構がほとんど検出されておらず、特に第7次調査の東側および北側の地点では低湿地が広がっていることが判明していた。第10次A区の東側に隣接する第7次調査では、調査区を東西に走る溝状遺構（7SD001）と溝下層から100個体を超える古墳時代の遺物が一括廃棄された土坑（7SK002）が検出されている。

第2節では、大道遺跡群の東側の地形的な境であると考えられる、第10次・第14次・第17次・第18次の4地点の説明を行う。この4地点ではそれぞれの地点で地形的な落ちもしくは溝状遺構が検出されており、周辺の地形復元のヒントになる可能性が考えられる。

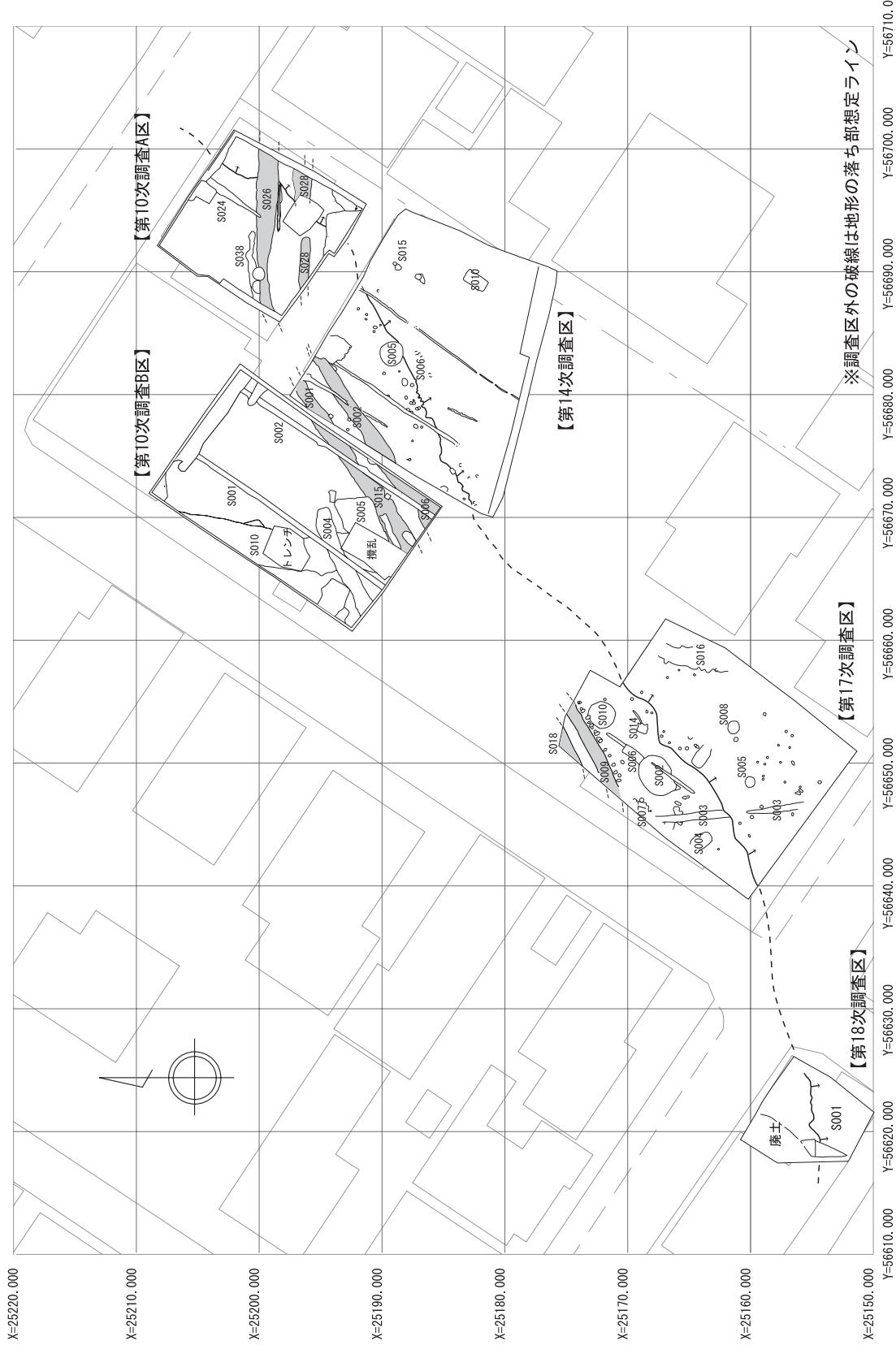
第26図は調査区配置図であるが、示している線は、各次数で確認された落ちもしくは溝状遺構をつないだ地形想定線である。この線から東方向へ向かい緩やかに下っていくと想定される。

地形的な落ちにほぼ沿うように、溝①・溝②が確認された。あくまでも復元であるが、同一の溝である可能性が高い。また、出土遺物に関しては調査区ごとに時期が違っている。弥生時代から近世まで幅広い時期の遺物が出土している。第10次A区10SD026の土層断面の観察により、上層は16世紀代、下層は弥生時代後期中葉と分層できた。このことから、同地点に踏襲して溝が形成されていた可能性も指摘できる。また、地形的にも緩やかに下る先端付近となることから、水利的な性格を持つ溝であった可能性も指摘できる。

また、第7次・第10次・第14次調査においては、遺構の下層および包含層から一定量の縄文土器が出土している。これまでには、第7次調査において、縄文時代後期～晩期の遺物が出土していたが、今回の調査では、前期～弥生早期の遺物が出土している。このことから、当調査区周辺では、縄文時代の遺物が断絶することなく出土することが確認された。

微高地を形成する層に縄文土器が混入していることから、微高地の形成時期は縄文時代前期まで遡ることとなる。出土している縄文土器は比較的良好な状態であることから、河川の影響を受けておらず、突発的に起きた洪水によって、縄文時代の遺構が展開されていた小微高地ごと破堤堆積物にのみ込まれ、検出面である微高地を形成したと推測される。

以下、調査次数ごとに述べる。



## 第 26 図 第 2 節 調査区配置図 (1/500)

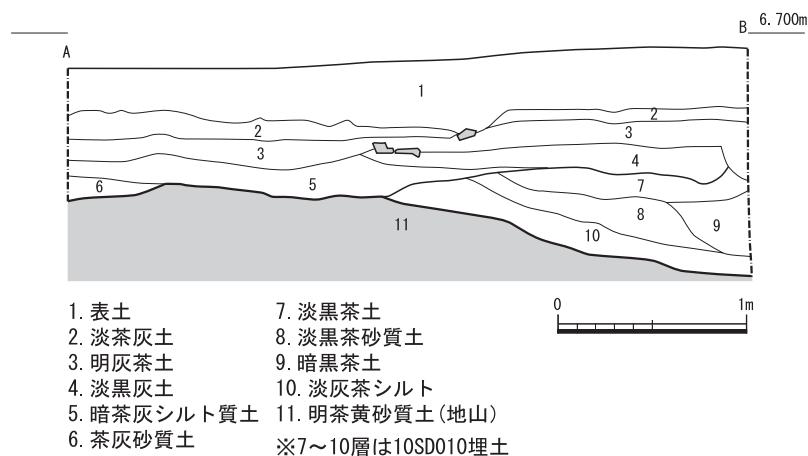
## 大道遺跡群第10次調査

### 1. 調査の概要（第26図）

調査地は大分市金池南1丁目に所在する。区画整理地内の宅地造成に伴い、平成17年6月16日から平成17年8月30日の期間に調査を実施した。調査対象地区のうち北東部をA区、南西部をB区として調査を行った。調査面積は約560m<sup>2</sup>である。大道遺跡群内の東端部分に位置する。調査区東側の隣接地点に第7次調査地があり、第7次調査地より東側および北側では低湿地が広がっていることが確認されている。調査の結果、溝状遺構、土坑を確認した。

### 2. 基本土層（第27図）

現地標高は約6.64mを測り、調査区を覆っている礫混じりの淡褐色土を約0.30m除去すると、淡茶灰色土の耕作土層が確認される。この耕作土を含み下位には、数層にわたり耕作土層が確認できる。これらの耕作土を約0.30m除去すると暗茶灰色シルト質土安定面（基盤土層）が現れる。検出面の標高は約6.00mである。



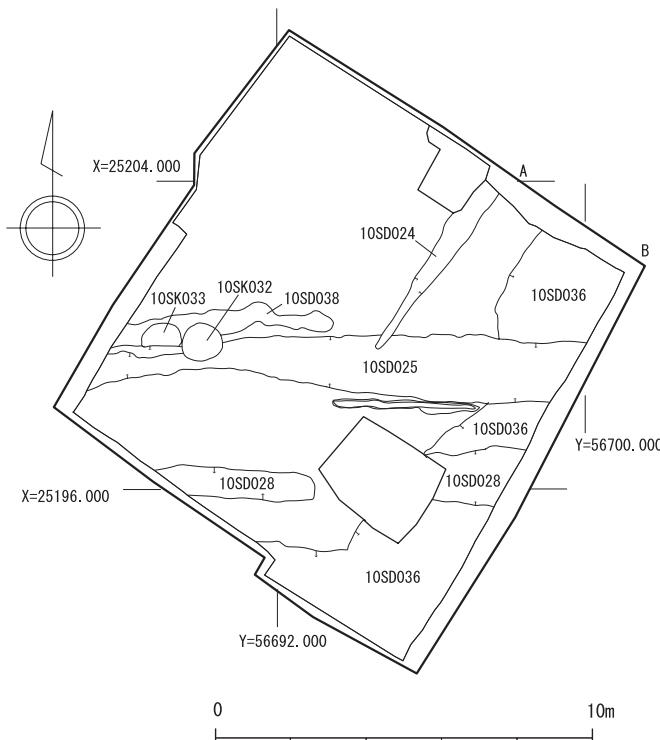
第27図 大道10次調査区北壁土層断面実測図（1/40）

### 3. 遺構・遺物

#### 溝状遺構（SD）

##### 10SD001（第30図）

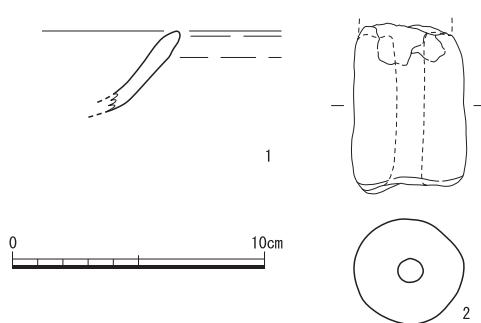
B調査区中央付近で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約18.5m、幅約0.40mを測る。出土遺物から近世に比定される。



第29図 A調査区遺構配置図（1/200）

##### 10SD002（第30図）

B調査区の東側で検出した南北方向の溝状遺構



第28図 10SD002・SD006出土遺物実測図（1/3）

である。現状の検出長は約 18.5m、幅約 0.40～0.50m を測る。出土遺物から近世に比定される。

**出土遺物（第 28 図）1** は、京都系土師器口縁部で、時期は 16 世紀後半に比定できる。

#### 10SD004（第 30 図）

B 調査区の中央で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約 9.00m、幅約 1.00～1.40m、深さ約 0.06m を測り、断面形状は浅い逆台形を呈す。堆積土からは、流水等の状況は確認できなかった。

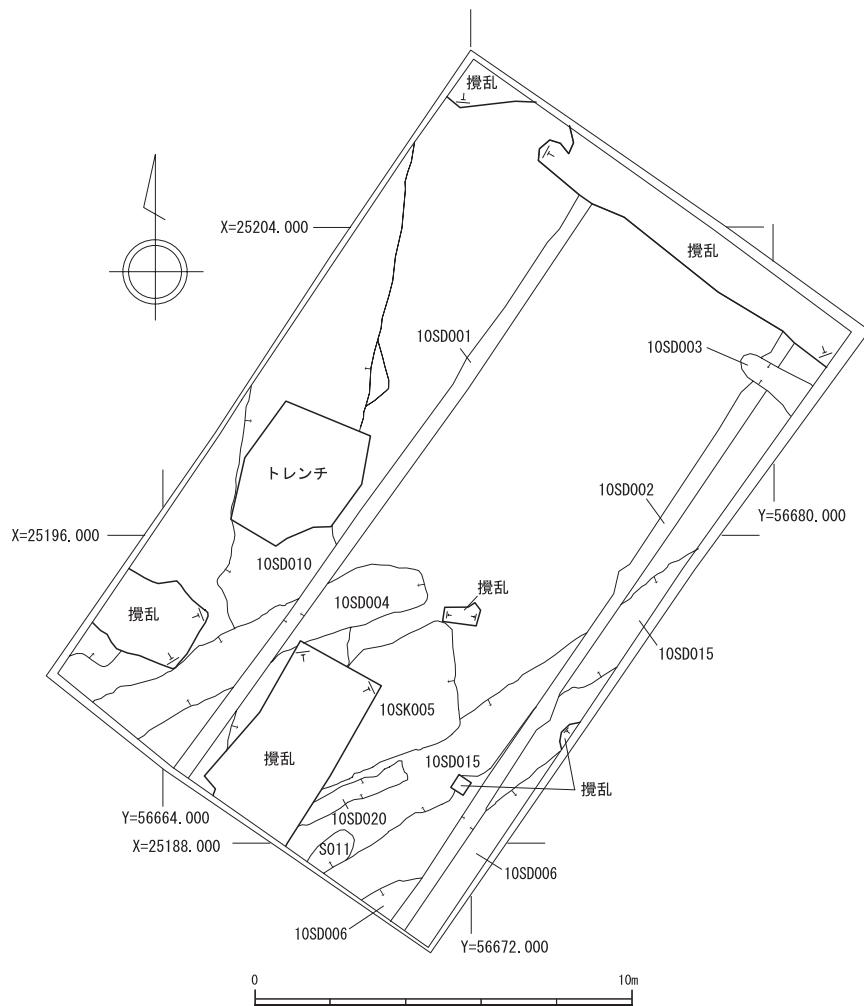
#### 10SD006（第 30 図）

B 調査区の南東隅で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約 4.50m、大半が調査区外になるため規模は不明である。A 区の SD028 と同一であると考えられる。

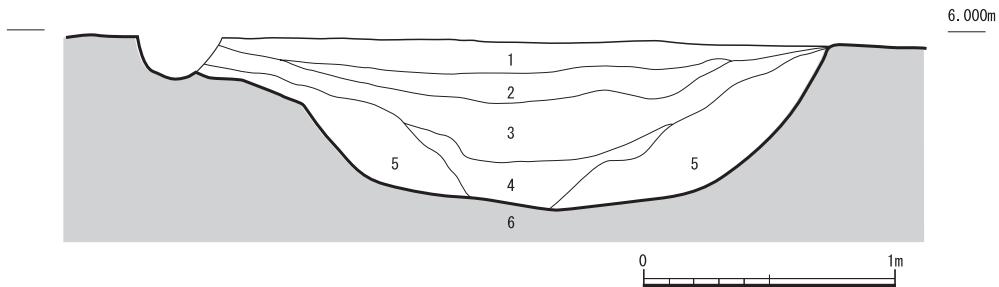
**出土遺物（第 28 図）2** は、大形の管状土錐。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は、にぶい橙色を呈す。上下端部に使用したときの欠損が認められる。また、被熱を受けた痕跡も見られるもので、最大長 6.8 cm、幅 4.5 cm、孔径 1.5 × 1.2 cm、重さ 149.6g を量る。

#### 10SD010（第 30・31 図）

B 調査区の西側で検出した南北方向の溝状遺構である。検出標高は約 5.60 m である。現状の検出長は約



第 30 図 B 調査区遺構配置図 (1/200)



- 1 暗黒褐色土 (橙色粒子、白色粒子を多く含む。)  
 2 黒褐色土 (橙色粒子、白色粒子を多く含む。)  
 3 暗灰褐色土 (白色粒子を多く含む。)  
 4 暗黒褐色土  
 5 暗黒褐色土  
 6 黄褐色粘質土 (地山)

第31図 10SD010 土層断面実測図 (1/30)

14.00m、幅約3.00m、深さ約0.65mを測り、断面形状は浅い逆台形を呈す。堆積土は大部分が黒色を呈しており、流水等の状況は確認できなかった。

**出土土器（第32・33図）** 1は、高环坏部で、内湾氣味に口縁が立ち上がる器形で、胎土は、石英・長石・雲母角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ミガキ調整で、口径約10.7cmを測る。時期は、弥生時代中期の所産。

2は台付き鉢の受け部で、胎土は、石英・長石・雲母・角閃石を含み、色調は内面にぶい黄橙色、外面燈色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ヘラミガキ調整である。時期は、弥生時代中期。3は、高环脚部で、胎土は、石英・長石・雲母・角閃石を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ後ミガキ調整で、底径約14.5cmを測る。脚部端部は指で成形しており指頭圧痕が目立つ。時期は、弥生時代後期中葉。

4は、小形の長頸壺で、胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内面黄灰色、外面橙色を呈し、内面ナデ後に指による整形、外面ハケメ後ミガキ調整で、底径5.1cm、器高 $12.6 + \alpha$ cmを測る。時期は弥生時代前期末。

5は、台付き鉢の脚部で、粘土板充填の痕跡が確認できる。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ後ヘラナデ調整で、内外面指頭圧痕が認められる。弥生時代中期。

6は、長頸壺の口縁部で、頸部に断面三角形の突帯を巡らし、その下に浮文を貼り付けている。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面黒褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ハケメ調整で、口径約10.4cmを測る。時期は、弥生時代後期中葉。

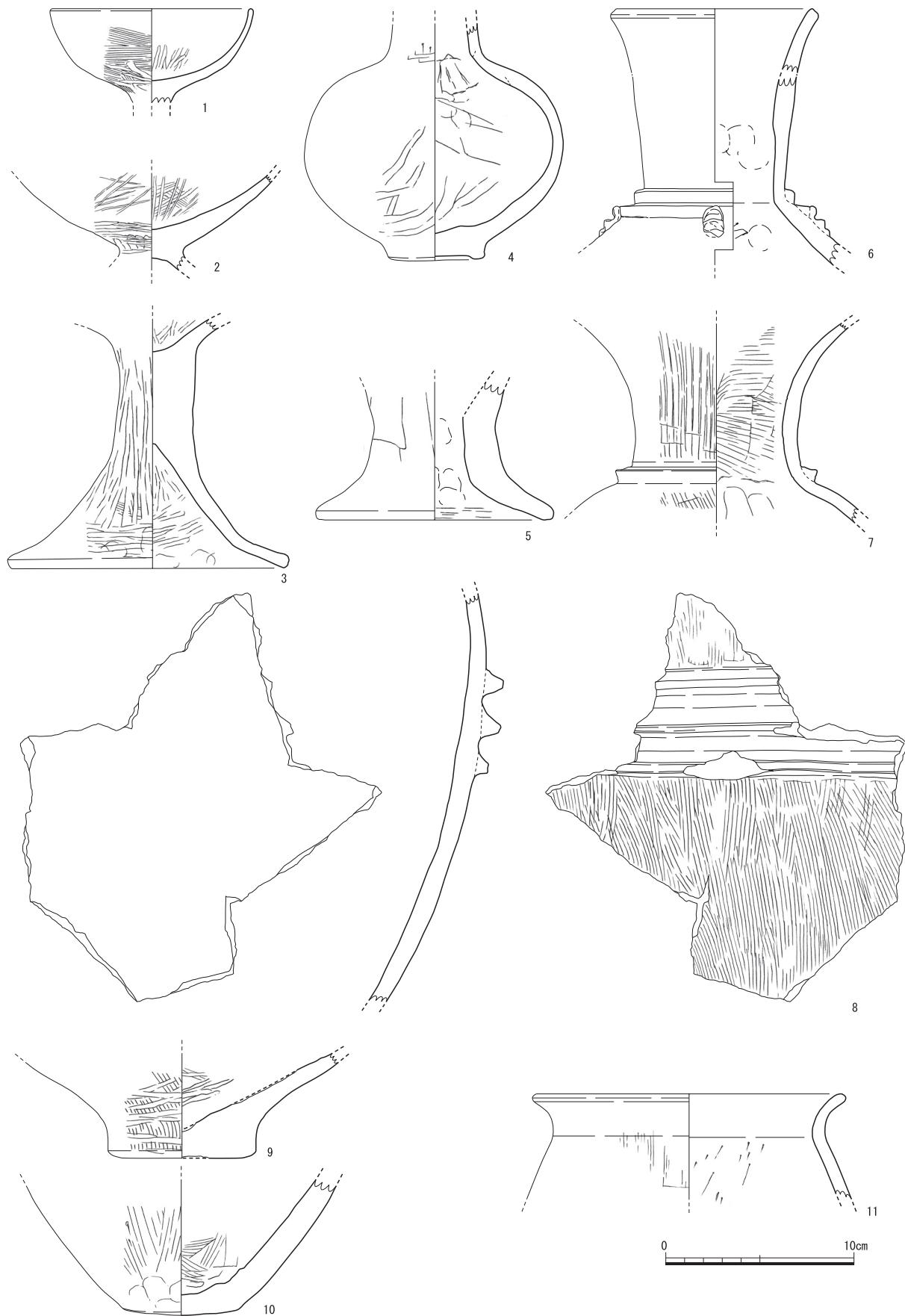
7は、長頸壺で頸部に断面三角形の突帯を巡らす。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面横方向のハケメ、外面縦方向のハケメ調整で外面には赤色顔料貼付が認められる。時期は、弥生時代後期中葉。

8も頸部に突帯を巡らすタイプの壺胴部で、断面三角形の突帯を3条巡らす。時期は後期中葉。

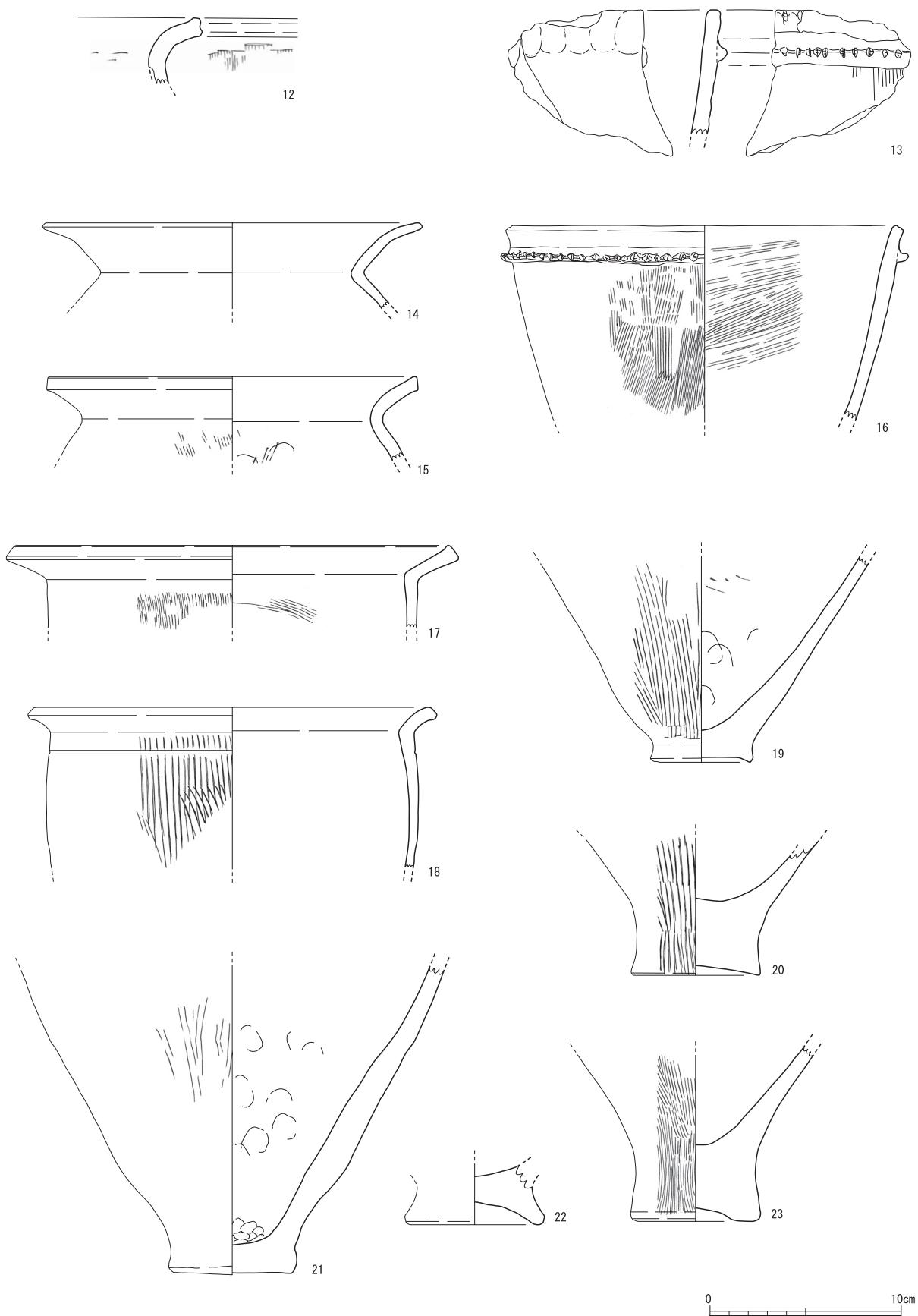
9は、弥生土器壺底部で、胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内面褐灰色、外面暗赤褐色を呈し、内面ミガキ、外面ハケメ後ミガキ調整で底径は約7.8cmを測る。時期は、弥生時代前期末。

10は、弥生土器底部で胎土は、長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面明黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ヘラナデ調整で底径約6.0cmを測る。時期は、弥生時代中期。

11は、弥生土器甕口縁部。内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約16.2cmを測る。時期は、弥生時代後期初頭。12は、弥生土器壺口縁部。13は、弥生土器壺口縁部で、口径は約19.4cmを測る。



第32図 10SD010 出土遺物実測図① (1/3)



第33図 10SD010 出土遺物実測図② (1/3)

14は、口縁が「く」の字状にのびる甕口縁部で、口径は約20.0cmを測る。15は、はね上げ口縁甕の口縁部で、口径は約22.6cmを測る。時期は弥生時代後期初頭。

16は、胴部上部にハケメ後に沈線を1条巡らす甕で、胎土は、石英・角閃石を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整で口径約20.3cmを測る。時期は、弥生時代中期初頭。

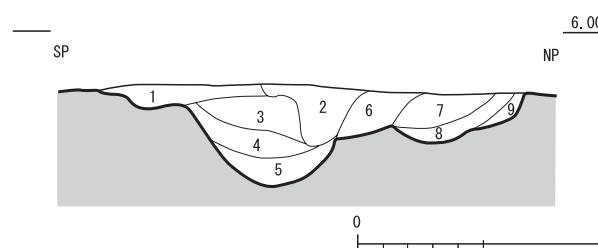
17は、下城式甕口縁部。18も下城式甕で、胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整で口径約20.3cmを測る。時期は、弥生時代中期初頭。

19・20・23は弥生土器甕底部。21は、甕底部。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整後ミガキ風ナデ調整で底径約6.2cmを測る。時期は、弥生時代中期初頭。22は、弥生土器底部で底径6.6cmを測る。時期は弥生時代後期中葉。遺物は、弥生時代前期末から中期初頭と弥生時代後期中葉の所産と考えられる2群が出土している。

10SD026 (第29・34図)

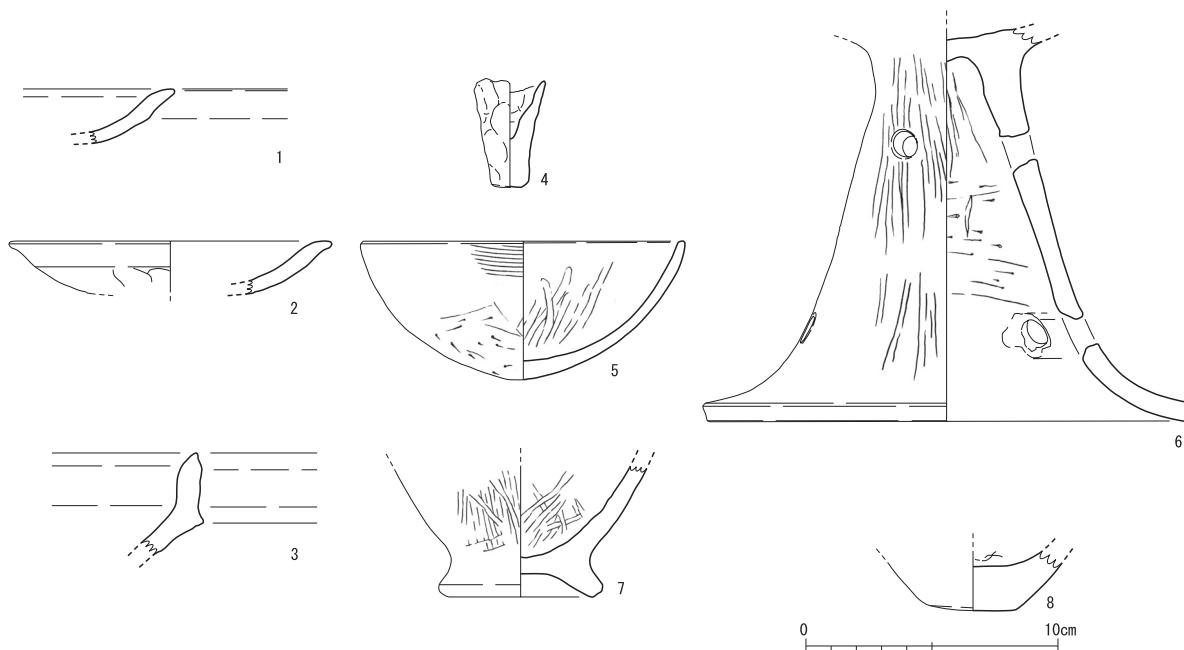
A調査区の中央で検出した東西方向の溝状遺構である。現状の検出長は、約12.30m、幅約0.80～1.80m、深さ約0.40mを測り、土層堆積から最低でも2回の掘り返しが行われたと推定される。堆積土はシルト質土と砂質土が含まれるが礫層は含まれない。B区の10SD015と同一と考えられる。

出土遺物 (第35図) 1、2は、京都系土師器坏で、色調は内外面角褐灰色を呈するもので、2の口径は約12.6cmを測る。3は、備前焼擂鉢口縁部。5本の擂



1. 明灰色シルト質土 (しまりが強い、下層に粘土の混じりが多い、地山ブロックも少量含む)
2. 明灰茶色砂質土 (しまりがやや強い)
3. 暗灰色粘質土 (しまりが強い 粘土を多量に含む。遺物を取り上げる)
4. 暗灰色シルト質土 (3層と4層の間に鉄分の沈着あり)
5. 暗灰茶色粘質土 (下層に地山ブロックを含む、自然堆積か)
6. 淡灰茶色砂質土 (しまりやや強い)
7. 明灰茶色砂質土
8. 暗灰茶色粘質土 (地山ブロックが少量混じる)
9. 明灰茶色シルト質土 (地山ブロックが少量混じる)

第34図 10SD026 土層断面実測図 (1/30)



第35図 10SD026・SD036 出土遺物実測図 (1/3)

り目単位が認められる。時期は中世で、16世紀後半の所産。

4は、手づくねによるミニチュア土器で、口径は2.8cm、底径1.1cm、高さ4.3cmを測る。5は、碗。胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ調整後ナデ後ミガキ調整で口径12.7cm、器高5.5cmを測る。

6は、高壙脚部で、胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面に絞り痕、ケズリ後ナデ、外面ハケメ後ミガキ調整で底径18.8cmを測る。7は、甕底部。底径約5.7cmを測る。8は、壺底部で底径は約3.5cmを測る。4～8は弥生土器で、時期は弥生時代後期中葉と考えられる。したがって下層の時期は弥生時代後期中葉、上層では、16世紀後半と考えられる遺物が認められ、時期の違う2群の土器群が認められる。

#### 10SD036（第29図）

A調査区の東側で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は、約11.80m、幅約2.60～4.60m、深さ約0.40mを測る。溝の東側の肩は調査区外であるため、確認されていない。よって、この西側の肩より東側への地形的な落ちである可能性も考えられる。縄文土器が多数出土している。

#### 土坑（SK）

##### 10SK005（第30図）

B調査区の南側で検出した土坑である。南側の大部分を搅乱で削平されている。検出面での平面形状は、幅約3.00mを測る方形のプランを呈す。

**出土遺物（第36図）**1は、弥生土器で袋状口縁壺の口縁部。胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈し、内外面ナデ調整で口径約8.2cmを測る。時期は、弥生時代後期中葉。

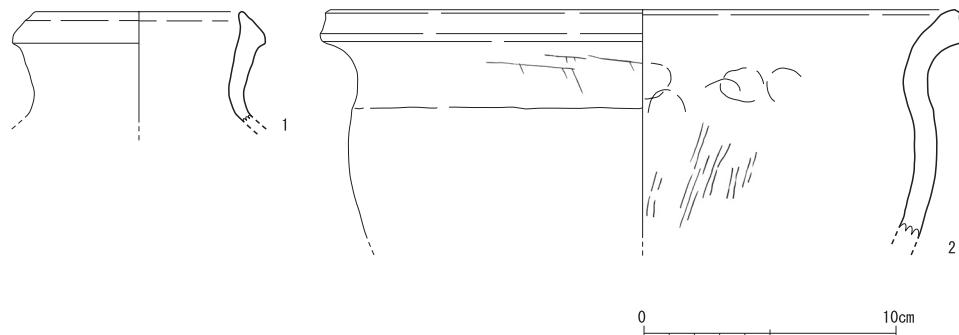
##### 10SK042（第29図）

A調査区の南側で検出した土坑である。検出面での平面形状は、直径約0.60mを測り、不定楕円形プランを呈す。

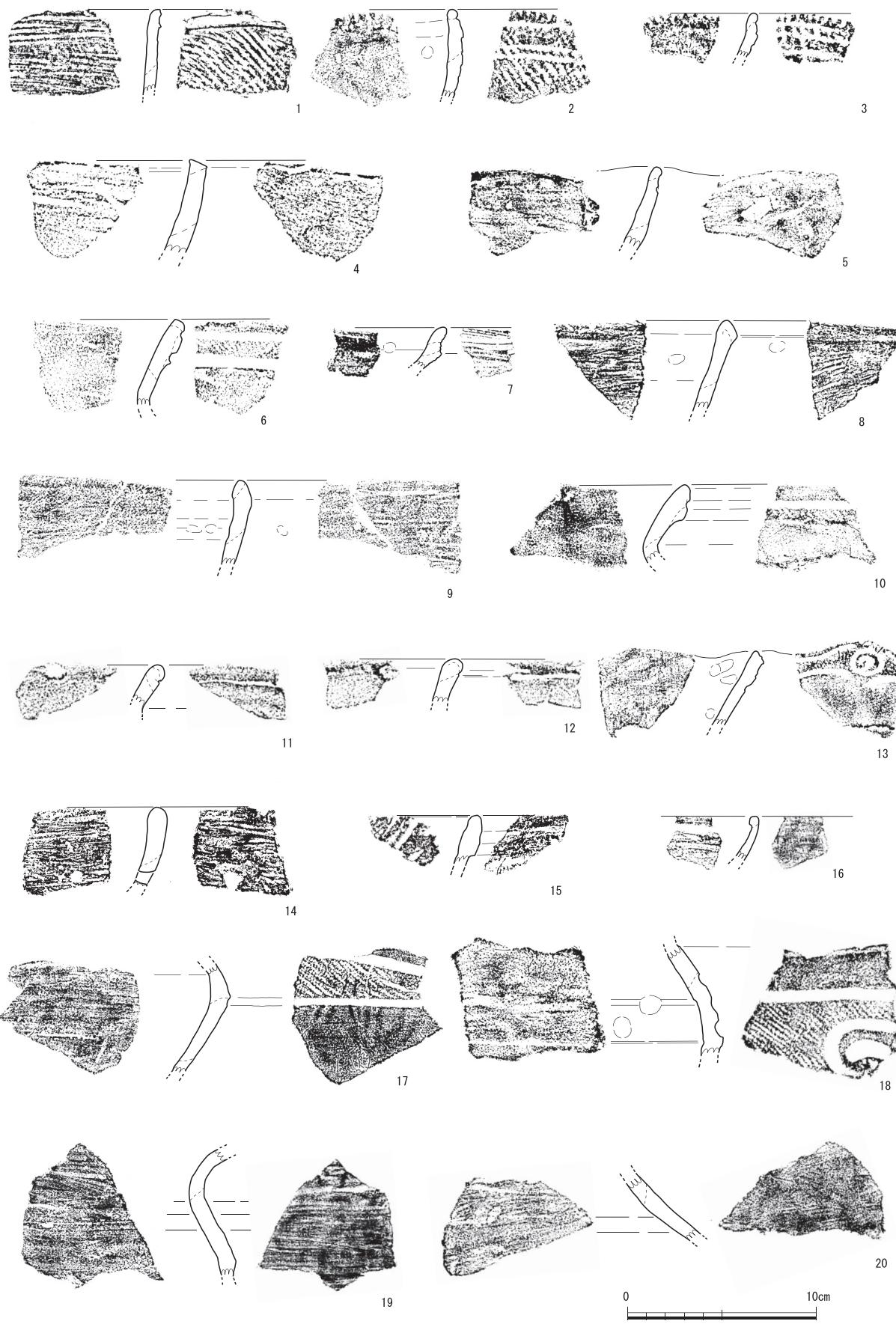
**出土遺物（第36図）**2は、弥生土器甕。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ナデ調整で口径約24.8cmを測る。時期は、弥生時代後期中葉。

#### 縄文時代の遺物

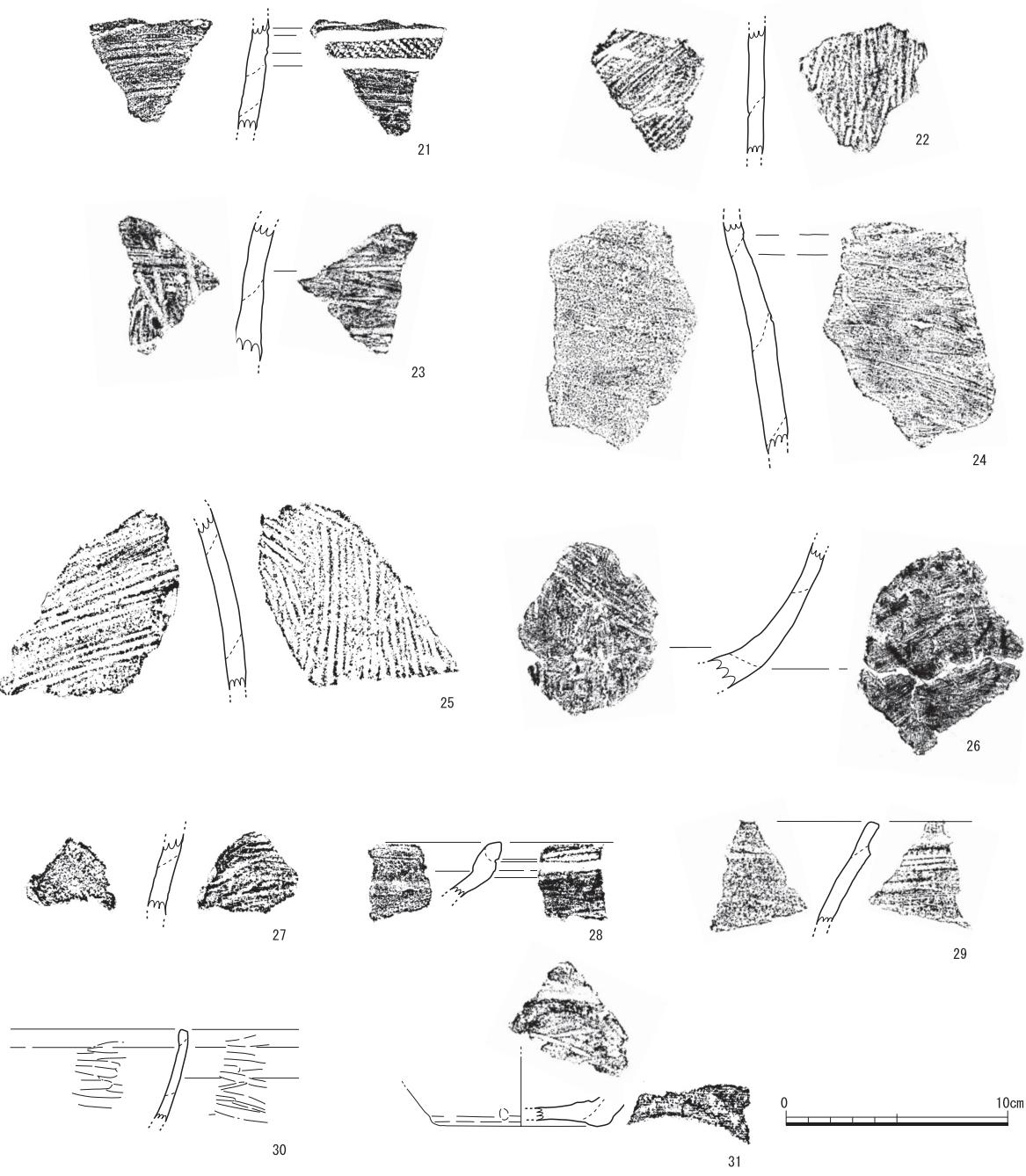
10SD010・026・036、10SK042の下層から縄文土器が出土している。出土している層を確認すると、標高



第36図 10SK005・042 出土遺物実測図（1/3）



第37図 大道10次出土縄文土器実測図① (1/3)



第38図 大道10次出土縄文土器実測図② (1/3)

に若干のばらつきがあるものの、検出面より下層に縄文土器を一定量包含している層が存在することが想定される。第10次B区の東側に隣接する第14次や第15次調査地でも同様に確認しており、周辺での当該期の遺物を包含する層が比較的広範囲にわたって形成されていることが示唆される。

#### 縄文土器 (第37・38図)

1は、口唇部外面に2条の隆起線文を巡らし、内面横方向の条痕、外面斜め方向の条痕が認められる。深鉢口縁部で、轟式土器4式の時期で、縄文時代前期後葉のものと考えられる。2は、内面はナデ後指才サエ、外面および口縁端部に爪状の刻み目文が施されている。縄文時代中期の船元式土器の口縁部。3は、口縁端部を爪による刻み目を施す縄文時代中期の船元式土器の浅鉢口縁部。

4は、口縁端部を平坦に作り、内面条痕、外面条痕後ナデ調整の縄文時代後期前葉の深鉢口縁部。

5は口縁端部を指で摘み上げやや波状につくり、胎土は角閃石・長石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい褐色で、内外面条痕後ナデ調整の鉢口縁部。

6は、口縁部内面は条痕後ナデで、外面に2本の沈線を巡らした間に磨消縄文が認められる縁帶文土器で、縄文後期前葉の深鉢口縁部。7は、口縁内面はナデ後沈線を1条巡らし、外面は条痕で縄文時代後期前葉の浅鉢口縁部。8は、口縁端部をやや尖らせた形で、胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄橙色、外面褐灰色で内外面工具痕が認められるもので、縄文時代後期前葉の深鉢の口縁部。

9は、口縁部がやや内湾する形で内外面条痕後ナデ調整の縄文時代後期の深鉢。10は、口縁部内面は、条痕後ナデで、外面に1本の沈線を巡らした間に磨消縄文が認められるもので、縄文後期前葉縁帶文土器の深鉢口縁部。

11、12も深鉢口縁部。13は、ゆるい波状口縁で外面に沈線で文様を付け、変形渦巻状文を沈線で描いたものである。時期は、縄文時代中期から後期に比定される。14は、口縁部下に外面から内面へ土器焼成後の穿孔が認められるもので、内外面貝殻条痕調整の条痕文土器の鉢口縁部で縄文時代後期。

15は、深鉢口縁部で、縄文時代後期の産と考えられる。内、外面横ナデ調整である。16も浅鉢口縁部と考えられるものである。17の内面は、条痕後ナデ調整で、外面に2本の沈線を巡らした間に磨消縄文が認められ、外面下部は、条痕後ミガキを施された縁帶文土器で、縄文後期前葉の深鉢胴部。

18の内面は、条痕後ナデ調整で、外面に沈線や変形渦巻き状を沈線で描いた間に磨消縄文が認められるもので、縄文後期前葉の小池原上層式深鉢胴部。23も磨消縄文が認められる深鉢胴部。

19、20、22～25は、胴部破片であるが、内外面に条痕文が認められ、縄文時代後期に比定される粗製深鉢の胴部。26は内外面条痕後ナデ調整の底部。器形から、縄文時代後期の深鉢底部と考えられる。

27は、内面ナデ、外面巻貝による条痕が施された縄文土器の底部に近い胴部破片。28は、内面ナデ、外面条痕文調整で縄文時代晩期の浅鉢。29は縄文後期と考えられる鉢の口縁部。

30は、黒色研磨の鉢口縁部で時期は、縄文時代晩期。31の胎土は、石英・角閃石・長石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、内外面ナデ調整で底径約8.0cmを測る。網代痕が見られる縄文時代後期の深鉢底部。

## 小結

東側に隣接する第7次調査地の検出面の標高が約5.50～5.60mであり、当地点が約6.00mであったことから東側へ地形的に緩やかに下っていく状況が確認された。また、遺構密度も地形の落ちにつれ、減っていくことも確認された。

今回検出された10SD026は7SD001と同一の遺構である可能性が考えられるが、10SD026は、下層が弥生時代後期中葉で上層が16世紀代に比定される遺物が出土しているのに対し、7SD001では8世紀末～9世紀初めに比定される遺物が出土している。周辺の調査から、当調査地点付近では、古代の遺物を包含する層が検出面上層に存在していると考えられ、今回の調査ではこの層を表土除去の際に削平した可能性が考えられる。

また、今調査地からは縄文時代前期から後期に比定される遺物が出土している。出土地点は遺構の下層や落ちに伴う包含層内から出土したものであり、当該期の遺構は認められなかった。第7次調査地と同様に、出土した土器は比較的大きな破片も含まれており、鉄分が付着し、器面が若干荒れているものの、比較的良好な状態であるといえる。調査地周辺に当該期の遺構が展開していた可能性が高いと考えられる。このことから、当地域における微高地の形成年代が縄文時代前期後葉にまで遡ることが確認された。

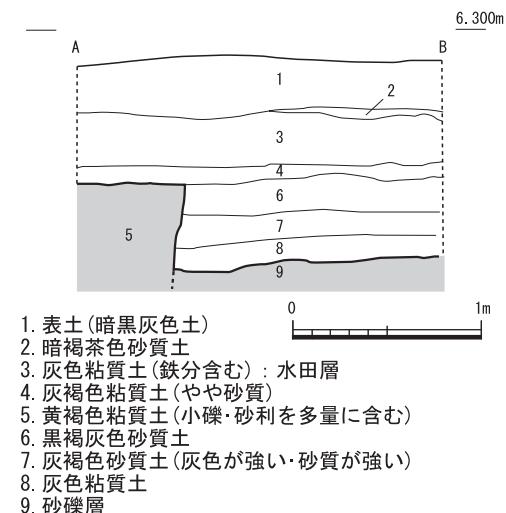
## 大道遺跡群第14次調査

### 1. 調査の概要 (第26図)

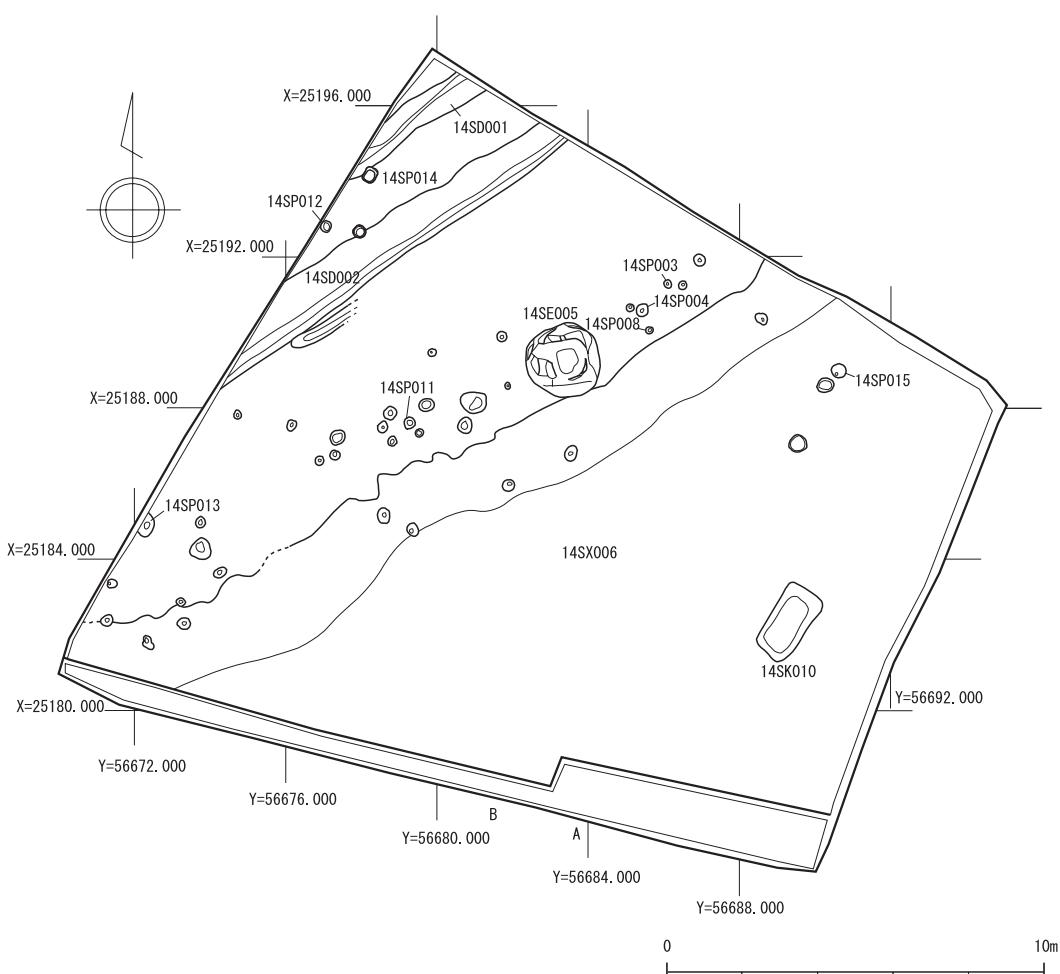
調査地は大分市金池南1丁目に所在する。区画整理地内の宅地造成に伴い、平成18年4月25日から平成18年6月15日の期間に調査を実施した。調査面積は317m<sup>2</sup>である。大道遺跡群内の南端部分に位置する。調査の結果、溝状遺構、井戸跡、土坑を確認した。

### 2. 基本土層 (第39図)

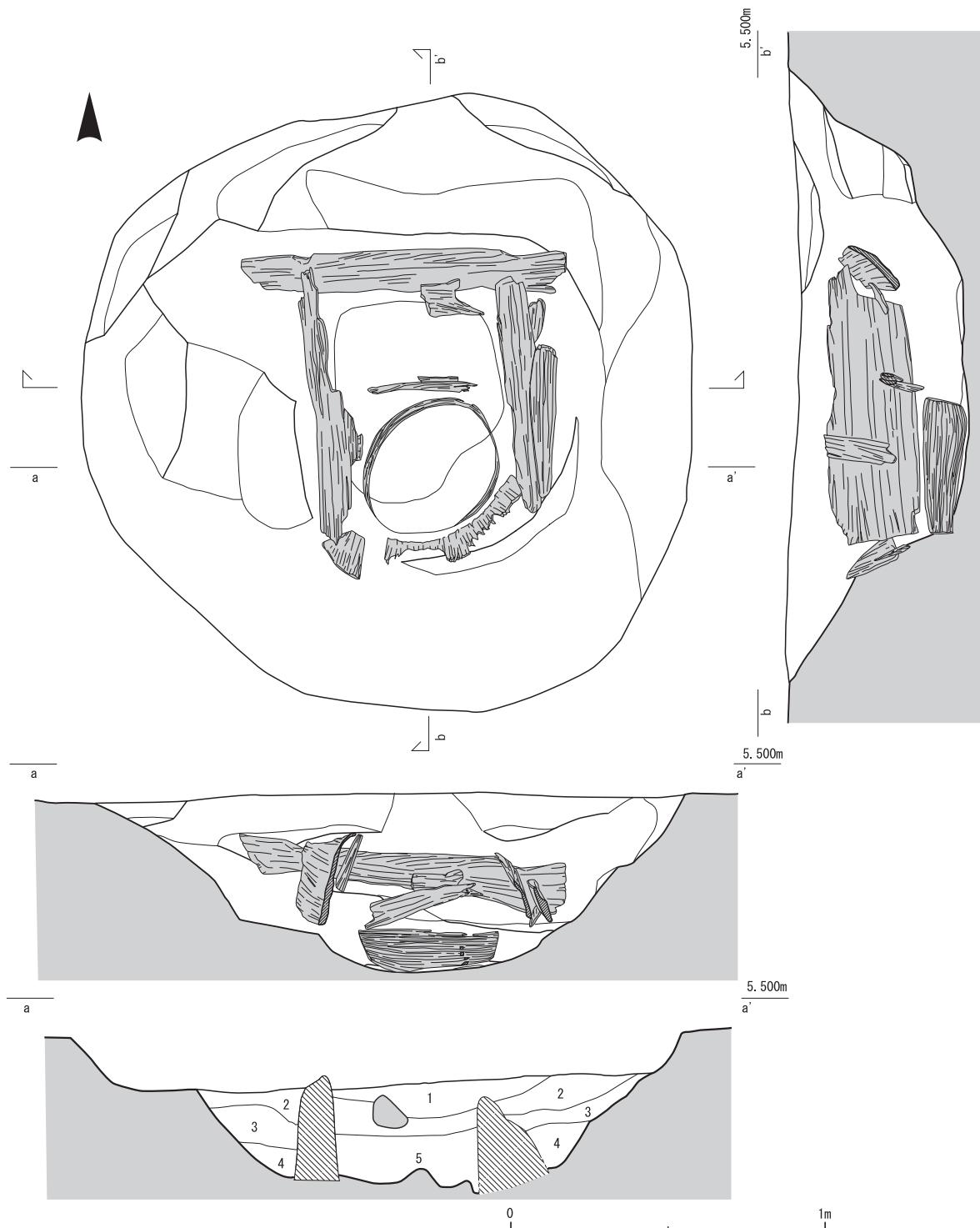
現地標高は約6.20mを測り、調査区を覆っている約0.30mの灰色粘質土の水田層を除去すると、灰褐色粘質土の耕作土層が確認される。この耕作土を含み下位には、数層にわたり耕作土層が確認でき、6層を除去すると約5.40mで検出面である灰褐色砂質土が現れる。



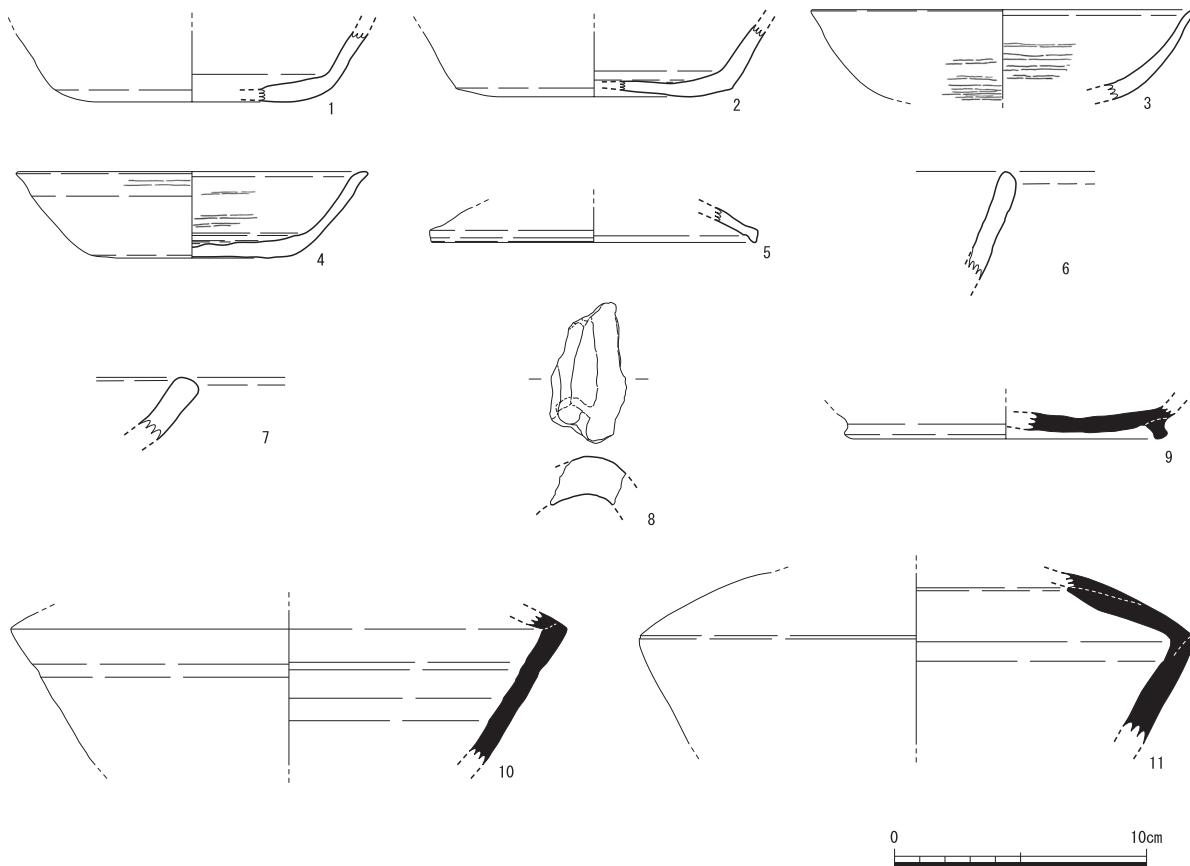
第39図 大道14次調査区南壁土層断面  
実測図 (1/40)



第40図 大道14次平面図 (1/200)



第41図 14SE005 平面・断面・土層断面実測図 (1/20)



第42図 14SE005 出土遺物 実測図 (1/3)

### 3. 遺構・遺物

#### 井戸跡 (SE)

##### 14SE005 (第40・41図)

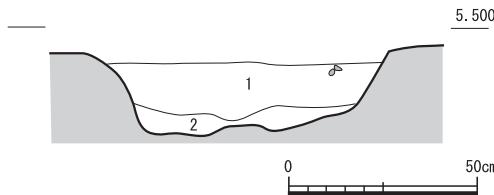
井戸跡は調査区のほぼ中央に位置する。径約1.95mの円形プランを呈し、約0.60m遺存する鉢形の掘り方をもつ大型の井戸である。長方形に木組がなされた井桁が、掘り方のほぼ中央に位置し、その内部に、薄板を留め具で固定した曲物が設置されている。井桁に使用されている板材は約1.00mを測り、その内部は約0.55m四方である。曲物は、径約0.40mの円形で、約0.25mの高さである。遺構の検出面の標高は、約5.40mである。井桁の上面の標高が約5.20m、井筒の上面の標高が約4.95mを測る。材質は不明である。出土遺物から8世紀中頃～後半頃に廃絶したものされる。

**出土遺物 (第42図)** 1、2は、土師器底底部。底部は、ヘラ切りで、底径は1、2とも約11.0cmを測る。

3は、土師器底で、口縁部先端部が外反し、胴部形態は内湾気味に立ち上がる形で、内外面ミガキ調整で口径約15.2cm、器高3.5+ $\alpha$ cmを測る。4は、土師器底で、胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色で、底部ヘラ切り、内外面ナデ調整で、口径約14.0cm、器高3.5cm、底径8.0cmを測る。

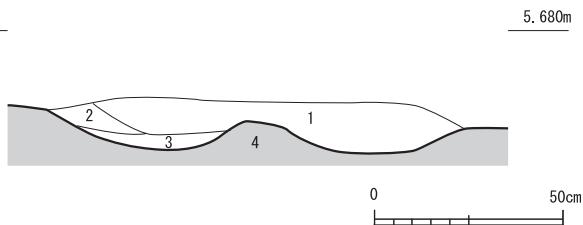
5は、土師器底蓋で、口縁部内面に沈線状のくぼみが認められる。6は、製塩土器口縁部。形造り成形で砲弾形をした焼塩用の土器。小田和利編年のII類に当たる。7は、土師器企救型甕の口縁部。

8は、羽口の破片で外面に被熱痕が認められる。9は、底径が約12.8cmの踏ん張り気味の角高台を持つ須恵器壺で長頸壺と推定される。10、11は、須恵器壺の胴部屈曲部。1～11を観察した結果、時期は8世紀中頃～後半の範囲に入る遺物群といえよう。



1. 暗灰褐茶色砂質土（鉄分の沈着が固着、集積している箇所あり）  
2. 灰褐黄色砂質土（黄灰褐色砂質土を少量含むしまりあり）

第43図 14SD001 土層断面実測図（1/20）



1. 淡灰褐色砂質土（灰褐色粘質土が混入・鉄分の沈着が見られる）  
2. 黄赤褐色砂質土（砂質が強い・酸化作用）  
3. 淡灰黄褐色砂質土（砂質強い）  
4. 淡灰茶褐色砂質土（地山）

第44図 14SD002 土層断面実測図（1/20）

### 溝状遺構 (SD)

#### 14SD001 (第40・43図)

調査区の北西隅で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約3.70m、幅約0.80m、深さ約0.20mを測り、断面形状は逆台形を呈す。遺構の検出標高は約5.45mを測り、溝の基底部の標高は約5.25mを測る。現状の調査区内で高低差は確認できなかった。堆積土は砂質であり、水性堆積の状況がうかがえる。

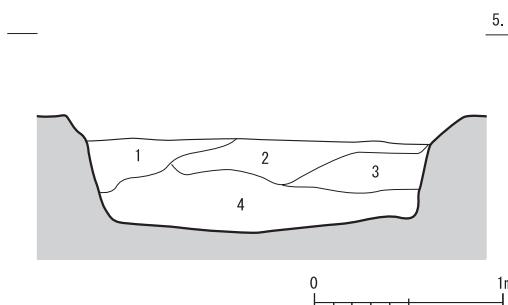
#### 14SD002 (第40・44図)

調査区の北西で検出した南北方向の溝状遺構である。現状の検出長は約10.00m、幅約0.90～1.40m、深さ約0.15mを測り、断面形状は中央付近に高まりがある浅い皿形を呈す。遺構の検出標高は約5.48mを測り、溝の基底部の標高は約5.33mを測る。現状の調査区内で高低差は確認できなかった。堆積土は砂質であり、水性堆積の状況がうかがえる。

### 土坑 (SK)

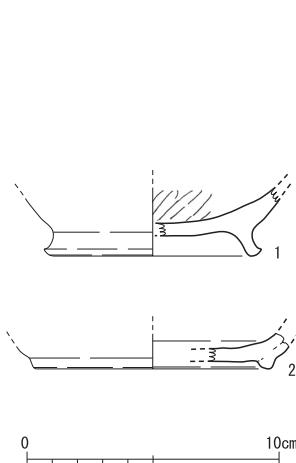
#### 14SK010 (第40・45図)

調査区の東側で検出した土坑である。検出面での平面形状は、長軸約2.00m、短軸約1.00mを測る隅丸長方形プランを呈す。遺構の検出標高は、約5.25mを測り、基底部までの深さは約0.50mを測る。堆積土は、地山



1. 茶褐色砂質土（小礫・砂利を多量に含む、淡灰褐色粘質土をわずかに含む）  
2. 黒灰色粘質土（粘質が強い、泥質に近い、砂質土を少量含む）  
3. 茶灰褐色砂質土（小礫、砂利を多量に含む、ややしまる、灰褐色シルト質土が混入）  
4. 灰褐色シルト質土（泥質、黒灰色粘質土をわずかに含む、1～3層に比べて砂利・小礫は少量）

第45図 14SK010 土層断面実測図（1/40）



第46図 14SK010 出土遺物実測図（1/3）

ブロック土を多く含む黄褐色土の单一土層で、一度に埋められた状況が確認できる。遺構の性格は不明であり、出土した土師器片から古代以降に埋められたと言える程度である。

**出土遺物（第46図）** 1は、踏ん張り高台を持つ土師器碗底部。底径は、約7.8cmを測る。

2は、高台付坏底部。底径は、約9.2cmを測る。どちらとも8世紀後半から9世紀初頭に比定できる。

#### 不明遺構 (SX)

##### 14SX006（第40図）

調査区の中央で検出した西から東方向へ下る落ちの肩である。現状の検出長は約20.0mで調査区を縦断している。この肩から東側の包含層より多数の遺物が出土している。

**出土遺物（第47～50図）** 1は、土師器碗で、内外面ヘラナデの後に指で成形を行っており、口径約12.0cm、器高3.1cmを測る。2は、土師器器台で、胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調は内面にぶい橙色、外面燈色を呈し、内外面ナデ調整で、底径約12.2cmを測る。

3は、高坏坏部。胎土は石英・長石を含み、色調は内外面浅黄橙色を呈し、内外面ナデ調整で口径約18.0cmを測る。

4は、土師器高坏。坏部下段が平坦化し、坏部上段が直線的に外反する器形で、胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子・砂粒を含み、色調は、内面にぶい橙色、外面浅黄橙色を呈し、内外面ナデ調整で、口径15.0cm、器高12.2cm、底径12.0cmを測る。

5は、小形丸底壺で、胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面明赤褐色、外面橙色を呈し、内外面ナデ調整で、口径11.7cm、器高8.5cmを測る。口縁部と胴部の境に成形時の指オサエ痕が認められる。

6は、小形丸底壺の口縁部で口径約16.4cmを測る。

7は、台付き鉢の坏部。胎土は、石英・角閃石を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で、口径約13.0cmを測る。8は、台付き鉢の鉢部。胎土は、石英・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で、口径約16.6cmを測る。

9は、台付き鉢。口縁部が逆「く」の字状を呈し口縁端部は細く伸び、体部は丸く収まる器形である。胎土は、石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約17.0cmを測る。内面全体に黒斑が認められる。

10～12は、大形鉢の口縁部で、頸部外面に1条の突帯を巡らすタイプ。13、14は、安国寺式複合口縁壺の口縁部。9の口径は、約20.2cm、14は、約15.0cmを測る。15は、土師器甕。胎土は、石英・長石・角閃石を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で、口径約14.0cmを測る。

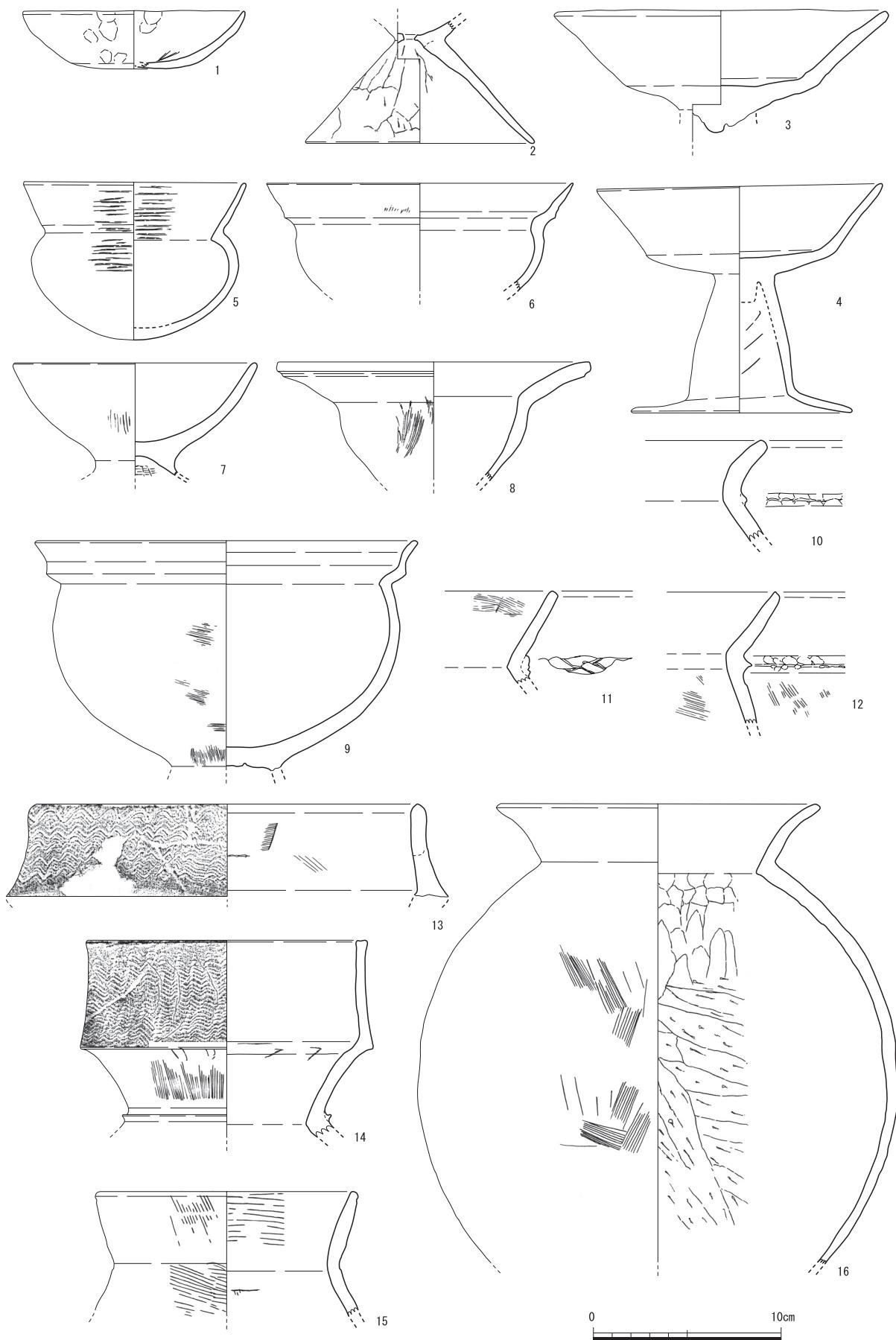
16は、土師器甕で、頸部から「く」の字状に伸びる口縁形態で、胎土は、石英・角閃石・赤色顔料を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面口縁部ナデ、胴部ケズリ、頸部指ナデ調整で、口径約17.2cm、器形24.5+ $\alpha$ cmを測る。内外面指頭圧痕が認められる。

17は、土師器甕。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴部ハケメ調整で、口径約16.8cmを測る。18は、土師器坏蓋。蓋中心部から緩やかに端部へ曲り、端部で一度屈曲する器形で、口径約16.4cmを測る。

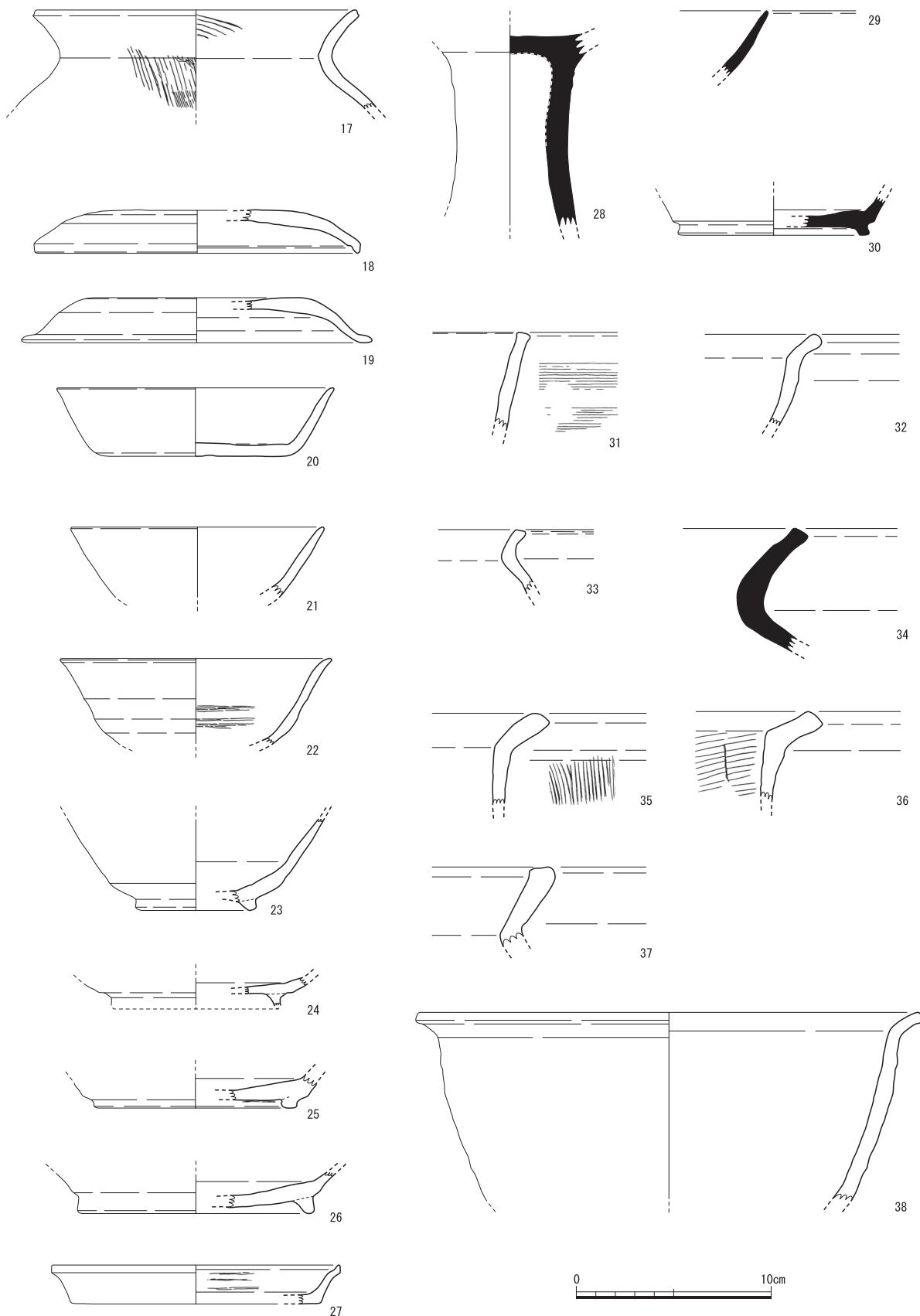
19は、土師器坏蓋。天井部は、ヘラ切り、端部で角度を持って曲がり口縁端部は丸みを持つ器形で口径約18.0cmを測る。20は、土師器坏で、口縁部は先端をやや尖り気味に仕上げ、胴部は、直線的に立ち上がるもので、口径約14.2cm、器高3.5cm、底径約10.0cmを測る。

21は、坏。口縁部が外反し先端部をやや尖り気味に仕上げるもので、口径約13.0cmを測る。22は、21と同様の器形であるが外面にミガキが認められるもので、口径約13.8cmを測る。

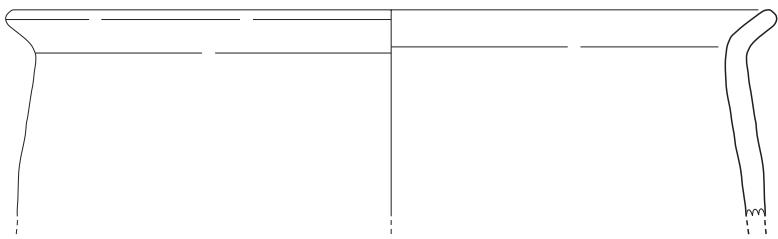
23～26は、土師器高台付坏である。27は、土師器皿で、口縁部内面に1条の沈線を巡らすもので、口径約



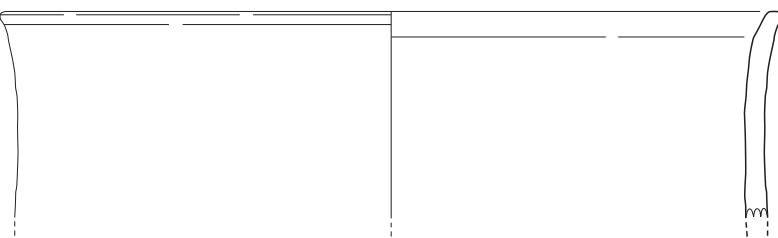
第47図 14SX006 出土遺物実測図① (1/3)



第48図 14SX006 出土遺物実測図② (1/3)

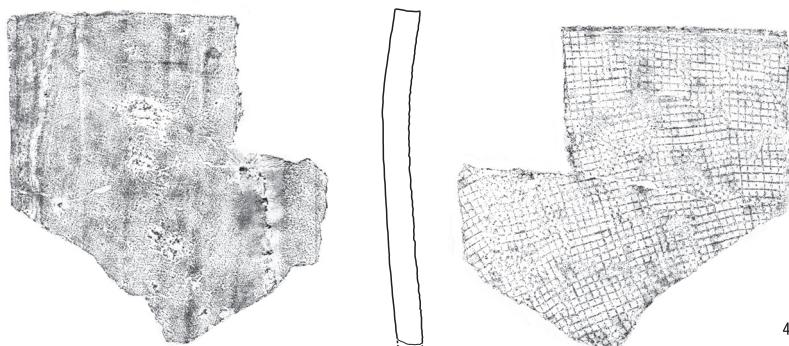


39



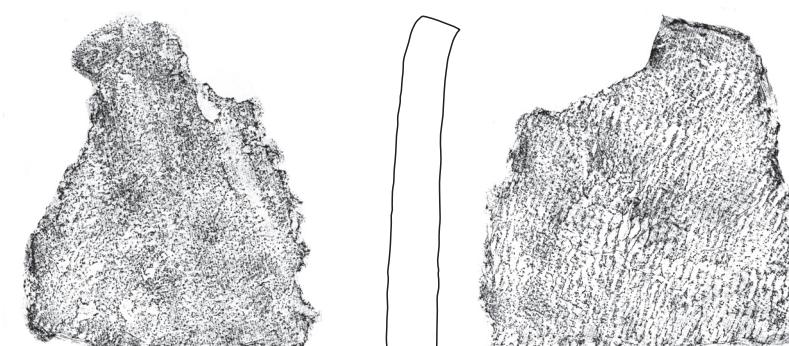
40

0 10cm



41

0 20cm



42

0 10cm

第49図 14SX006 出土遺物実測図③ (1/3、41は1/6)

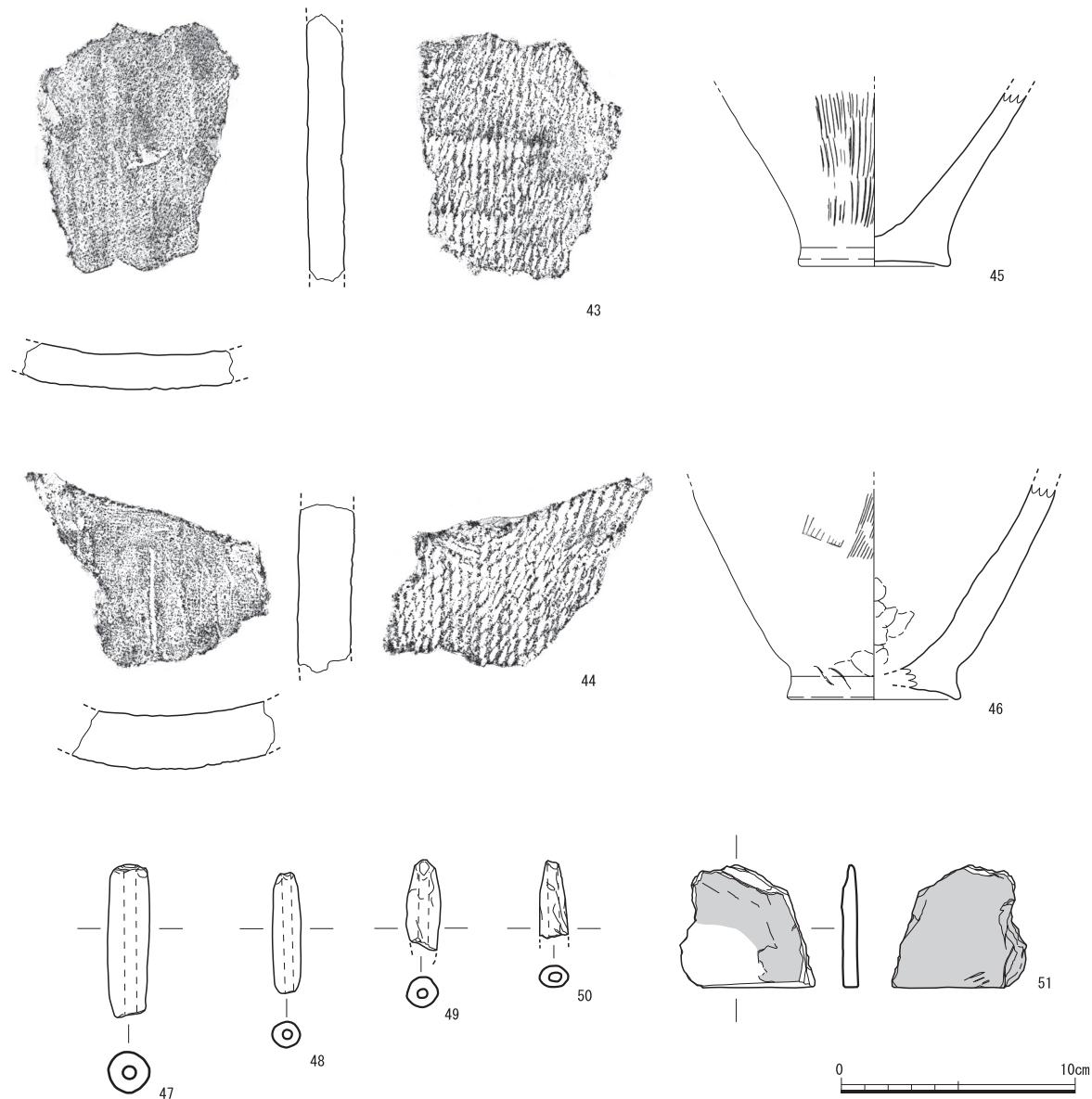
14.2 cm、高さ 2.0 cm、底径約 12.8 cmを測る。28 は、須恵器高坏の脚部。29 は、須恵器坏の口縁部。

30 は、須恵器高台付坏の底部で、やや踏ん張り気味の角高台が貼付されており、底径は約 13.0 cmを測る。31 は、豊後大分型甌の口縁部。32 は、鉢の口縁部。33 は、土師器壺口縁部。

34 は、須恵器甌口縁部で、緩やかな肩部から外反する口縁部を有し、口縁部内面は、回転ナデ、外面はタタキ後ナデ調整である。35～37 は、企救型甌口縁部。38 は、土師器甌。口縁端部は強いナデ調整でやや丸みを帯びた端部を形成する。器面調整は横方向のナデ調整を行っている。口径約 25.6cm を測る。

39 は、土師器甌。口縁部形状は外反し、比較的短い口縁部で、やや丸み帯びた端部を形成する。内外面ヨコナデで、口径は、約 30.0 cmを測る。40 は、豊後大分型甌の口縁部で、口径約 31.0 cmを測る。

41～44 は、軒平瓦。外面に布目痕が認められる。45 は、弥生土器で下城式甌の底部。底径は、約 6.5 cmを測る。46 は、弥生土器甌底部。内外面ハケメ後ナデ調整で、底径約 7.4 cmを測る。底部付近に指頭圧痕が認められる。時期は弥生時代後期末に比定できる。47 は、管状を呈する土錐。胎土は、長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は灰白色を呈し、掛け紐によると考えられる横方向の圧痕が認められる。最大長 6.3 cm、最大幅 1.7 cm、



第 50 図 14SX006 出土遺物実測図④ (1/3)

孔径 0.5 cm、重さ 24.7 g を測る。48 は、紡錘状を呈する土錐。胎土は石英・角閃石・赤色粒子を含み、色調はにぶい黄橙色を呈し、中ほどに掛け紐によると考えられる斜め方向の圧痕が認められる。最大長 5.2 cm、最大幅 1.2 cm、孔径 0.4 cm、重さ 8.0 g を測る。49 は、紡錘状を呈する土錐。1/3 ほど欠損している。胎土は、石英・長石・角閃石・黒色粒子・白色粒子を含み、色調は褐灰色を呈し、掛け紐によると考えられる欠けと斜め方向の圧痕が認められる。最大長  $3.9 + \alpha$  cm、最大幅 1.3 cm、孔径 0.35 cm、重さ 6.3 g を測る。50 は、紡錘状を呈する土錐。半分ほど欠損している。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調はにぶい橙色～明褐灰色を呈し、掛け紐によると考えられる欠けと斜め方向の圧痕が認められる。最大長  $3.3 + \alpha$  cm、最大幅 1.2 cm、孔径 0.4 cm、重さ 3.3 g を測る。51 は、粘板岩製の砥石破片。下部は真っ直ぐ切られている。裏面には、剥がれた痕跡が認められるが、その後使用された磨り痕が認められる。表面は、磨り痕が顕著に見られる。長さ 5.2 cm、幅 5.9 cm、厚さ 0.6 cm、重さ 32.6 g を測る。SX006 出土遺物の検討。SX006 は、落ち込み遺構と考えられるものである。出土遺物の 1 ～ 16 は概ね古墳時代前期の範疇に入る土器群であり、時期は古墳時代前期に比定される一群である。また、17 ～ 44 は、古代と考えられるもので時期は、8 世紀末～9 世紀初頭に比定される土器群である。瓦の出土は、上野台地上に存在した国衙に関連した遺構が存在する可能性を示唆しており興味深い。

### 縄文時代の土器

今回の調査区では、遺構の下層および包含層から一定量の縄文土器が出土している。調査区内の下層に縄文土器を包含する層が確認された。ここでは、縄文土器をまとめて説明する。

#### 縄文土器（第 51 ～ 55 図）

縄文時代後期を主体とした土器が出土している。

1 は、口縁部形態が波状形で、内面条痕文、外面磨消縄文のある深鉢口縁部。時期は、縄文時代後期前葉。

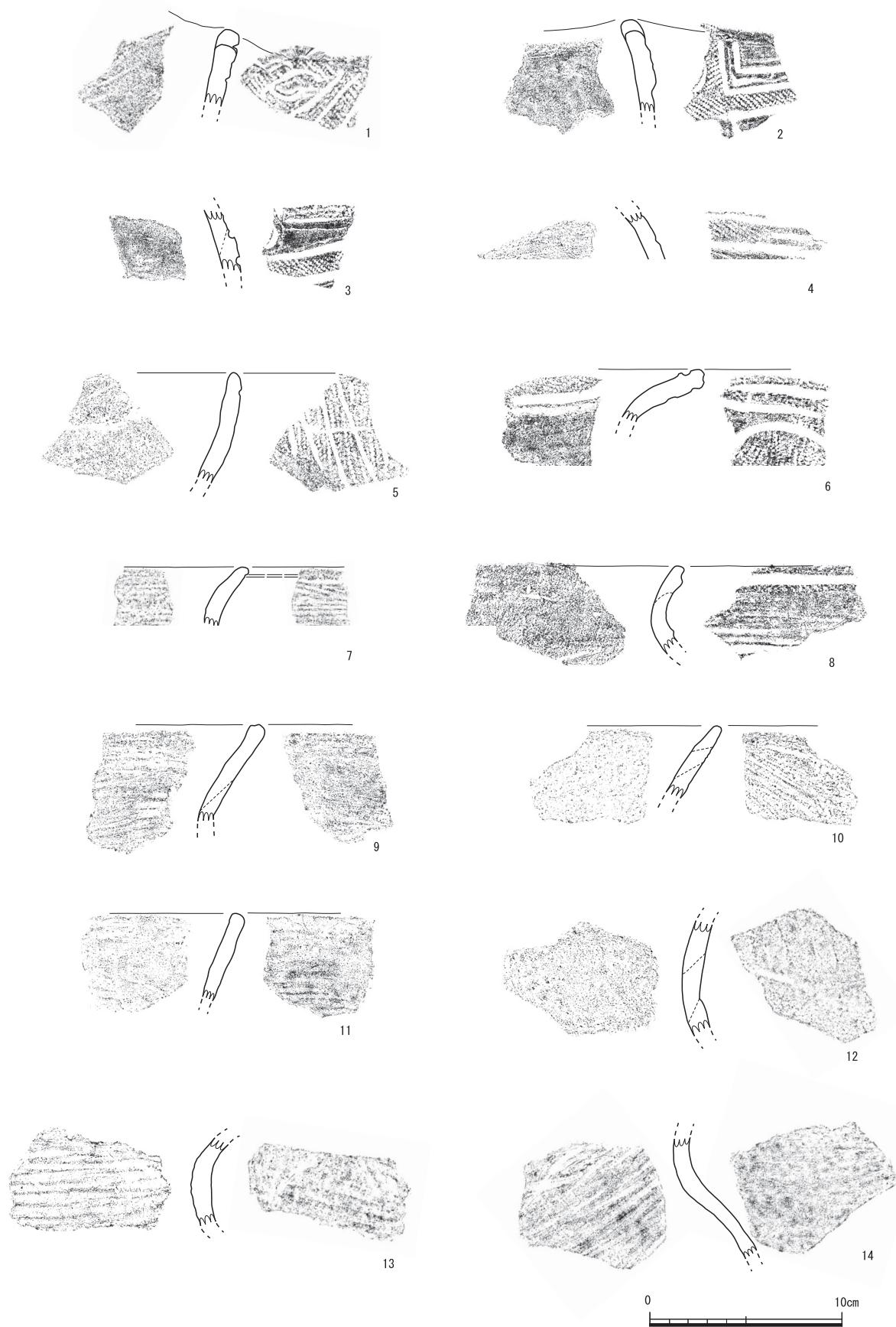
2 は、内面ナデ、外面磨消縄文のある深鉢口縁部で、文様から北久根式土器と考えられるもので、時期は縄文時代後期中頃。3、4 は、縁帶文土器の深鉢の胴部と考えられるもので、時期は縄文時代後期前葉。

5 は、外面に斜め方向の文様を入れる縁帶文土器の深鉢口縁部で、時期は縄文時代後期前葉。6 は、口縁部が外反する縁帶文土器の深鉢口縁部で、時期は縄文時代後期前葉。7 は、内面貝殻条痕文、外面貝殻条痕文後ナデ調整の口縁部がやや外反する深鉢口縁部。時期は縄文時代後期。8 の内面は、貝殻条痕後丁寧なナデ、外面は、貝殻条痕後ナデ調整で口縁部外面に沈線を巡らす縁帶文土器深鉢口縁部。時期は縄文時代前期前葉。9 は、内面条痕後ナデ、外面ナデ調整の深鉢口縁部で、時期は縄文時代後期。10 は、内面条痕文後ナデ、外面貝殻条痕文調整の深鉢口縁部で口縁部端部は指オサエで形成している。時期は縄文時代後期前葉。11 は、内外面条痕文後ナデ調整の深鉢口縁部。時期は縄文時代後期。12 ～ 14 は、内外面条痕文土器の縄文土器深鉢の胴部で、時期は縄文時代後期。15 は、内外面条痕後ナデ調整の深鉢口縁部。時期は縄文時代後期。16 の胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、内外面条痕後ナデ調整で、口縁部が波状の深鉢。時期は縄文時代後期。17 は、内外面条痕調整で口唇部に刻み目を入れる浅鉢口縁部。時期は、縄文時代後期。

18 ～ 25 は、条痕文土器の口縁部。時期は、縄文時代後期。26、27 は、内面ナデ、外面沈線の鉢口縁部。時期は縄文時代後期。28 は、内外面条痕文後ナデ調整の鉢口縁部。時期は縄文時代後期。29 は、内面条痕文後ナデ調整、外面沈線文土器の鉢口縁部。時期は縄文時代後期前葉。

30 ～ 37 は、内外面条痕文を残す縄文土器の胴部。時期は縄文時代後期。38 は、内外面条痕文後ナデ調整で、口縁端部は内面に折りたたむ処理をして、端部に縄文を施した鉢口縁部。39 ～ 44 は、内外面条痕文調整の深鉢胴部。43 は、阿高系の土器胴部と考えられる。45 ～ 53 は、深鉢の底部。時期は縄文時代後期。

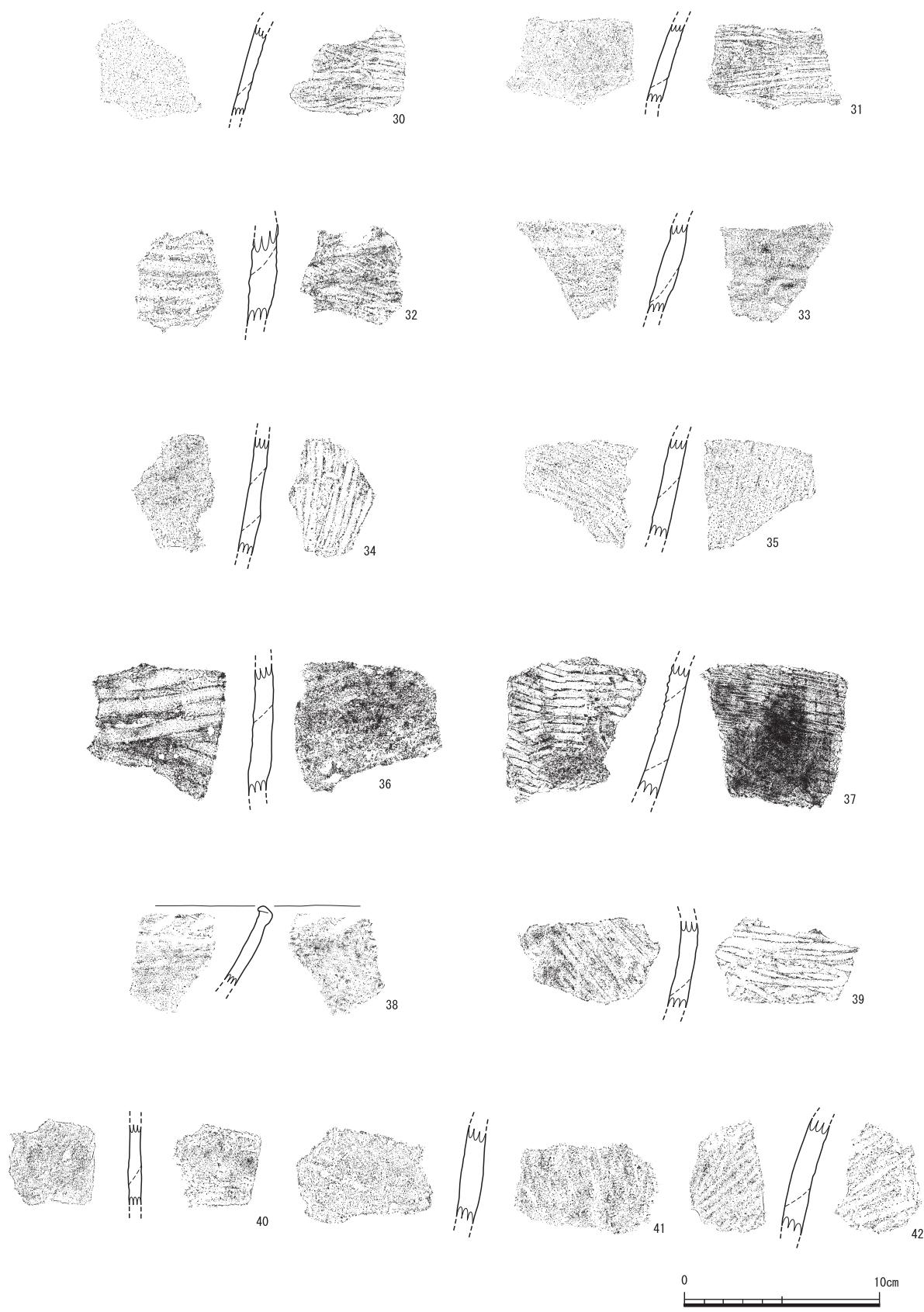
51 は底径約 12、2 cm を測る土器底部で、阿高系の底部と考えられる。54、55 は、内外面条痕文後ナデ調整の浅鉢と考えられる口縁部。時期は弥生時代早期と考えられる。



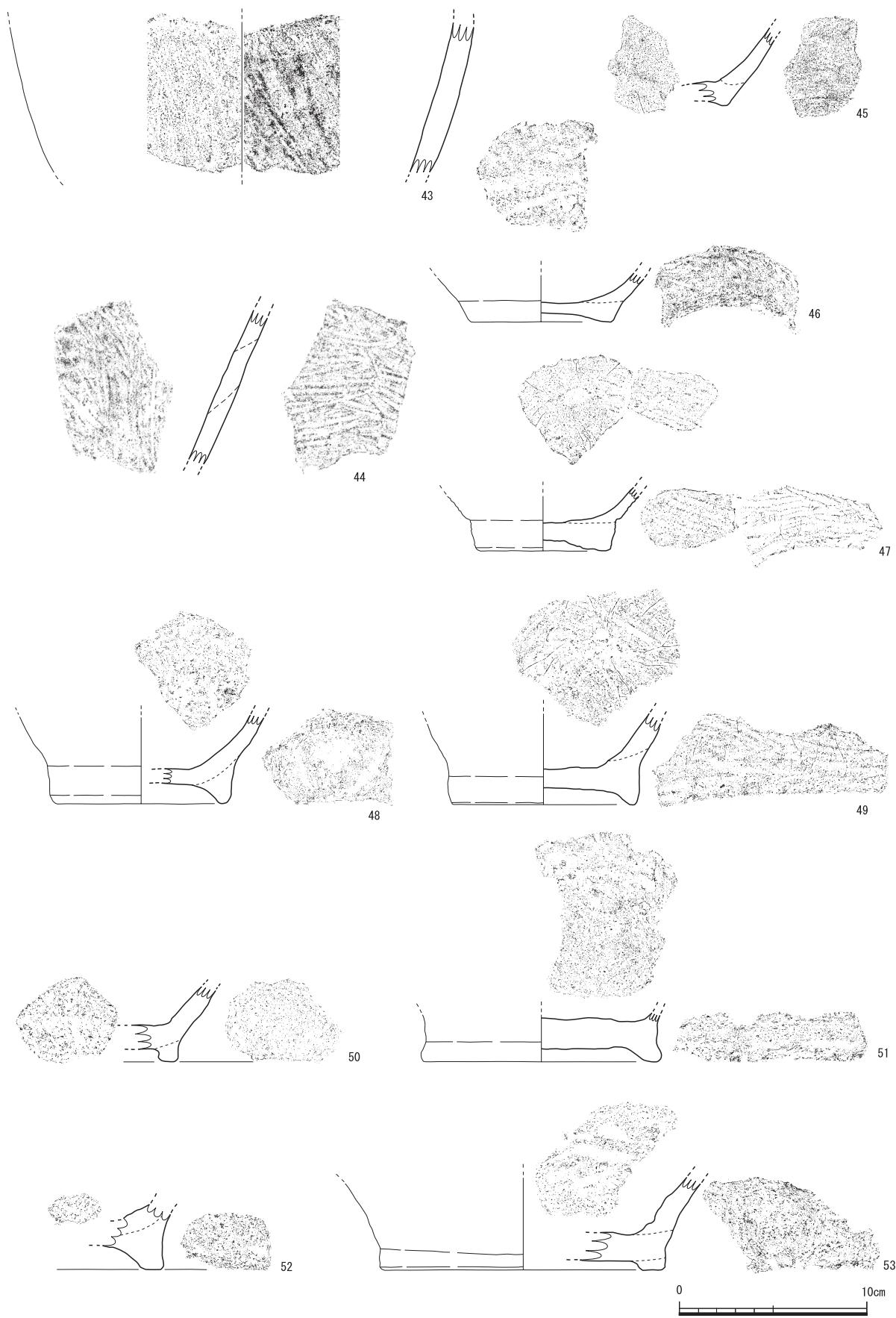
第51図 大道14次出土縄文土器実測図① (1/3)



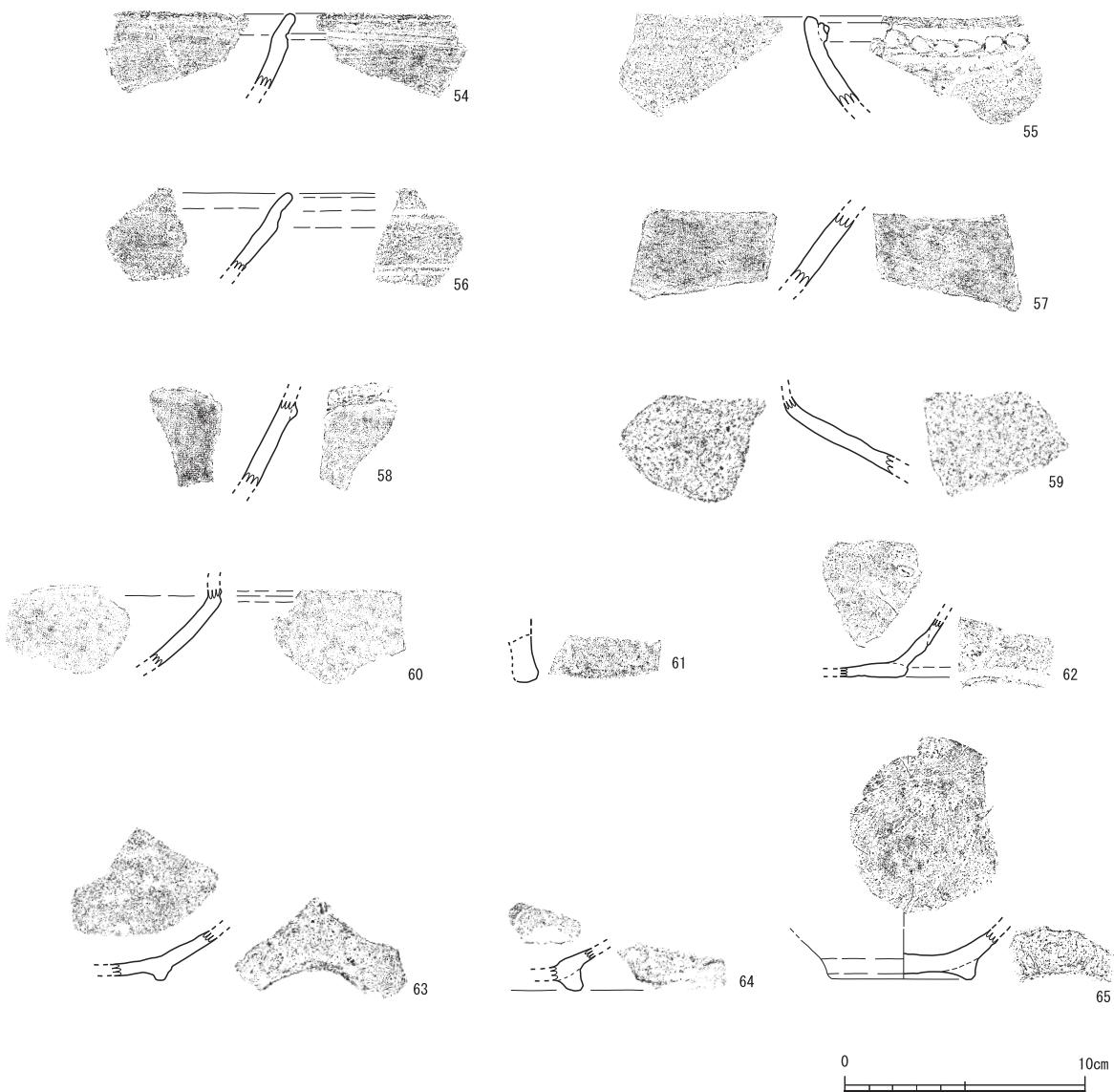
第52図 大道14次出土縄文土器実測図② (1/3)



第53図 大道14次出土縄文土器実測図③ (1/3)



第54図 大道14次出土縄文土器実測図④ (1/3)



第55図 大道14次出土縄文土器実測図⑤ (1/3)

56は、口縁部外面端部に貼り付け突帯を巡らす深鉢口縁部。弥生時代早期と考えられる。57は弥生時代早期の浅鉢胴部で、58、60は、同じく弥生時代早期の浅鉢の屈曲部。59は、壺の頸部で、弥生時代早期と考えられる。61、62は、深鉢の底部で、63～65は浅鉢の底部で65の底径5.2cmを測る。54～65の遺物の時期は弥生時代早期と考えられる。大道第14次遺跡から出土した遺物は、殆んどが縄文時代後期前葉から中頃に比定できる土器群であった。また、若干の弥生時代早期の遺物も見られた。遺跡の検出はいまだ確認できないが、縄文時代後期の自然環境を考える上で、重要な遺物群と考えられる。

### 小結

本調査区も第7次・第10次同様に西から東に向けて下る緩斜面の肩部にあたることが確認された。調査区の東側では、遺構も希薄であることから、本調査区は遺跡内の東端部と想定される。第7次・第10次と同一の可能性がある溝状遺構では、他の調査区では確認されなかった砂質の堆積が確認され、水を使用していた可能性が高いという結果を得た。井戸跡は、地形的な落ちの肩部に位置する。当時の湧水層は不明であるが、地形的な要因によりこの位置に設置した可能性が示唆される。

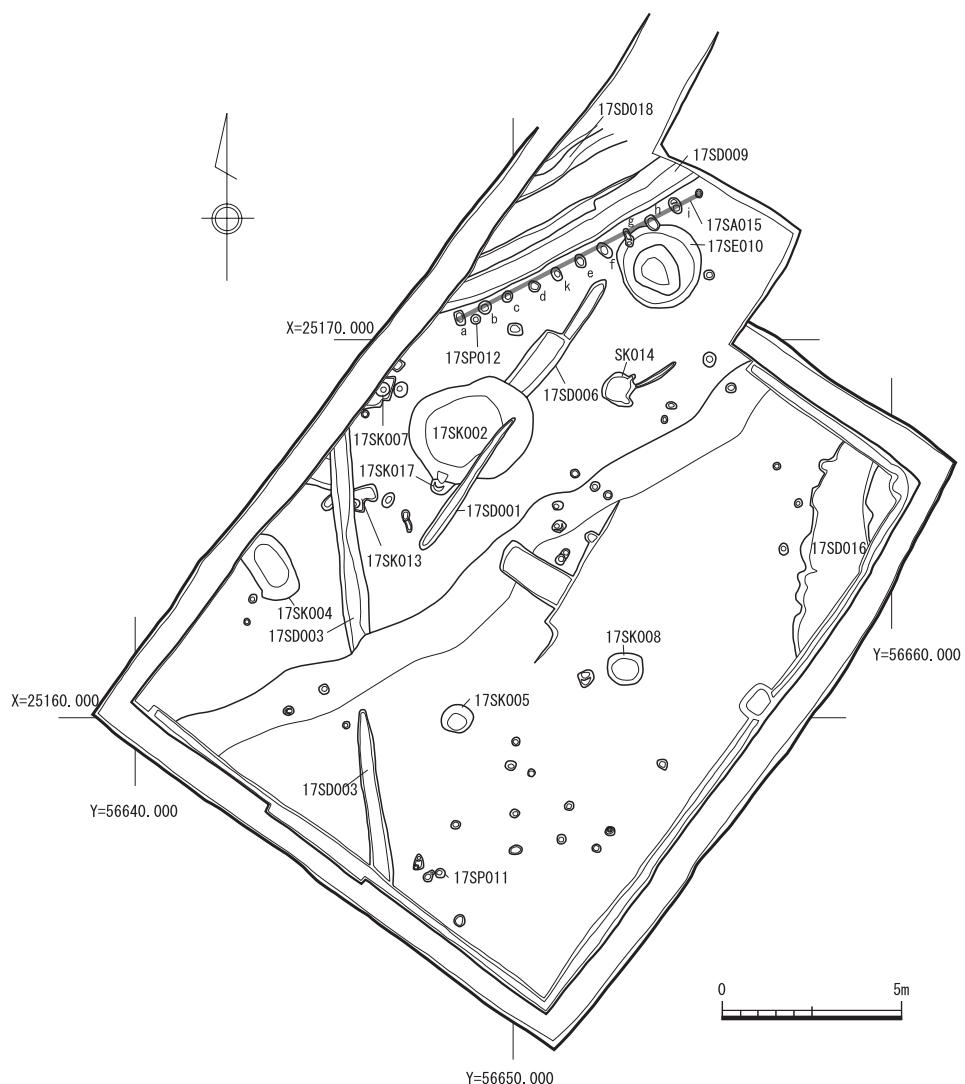
## 大道遺跡群第 17 次調査

### 1. 調査の概要（第 26 図）

調査地は大分市金池南 1 丁目に所在し、上野台地北側の沖積低地に位置する。本調査は区画整理地内の宅地造成に伴い、大道遺跡第 18 次調査と並行して平成 18 年 8 月 21 日から平成 18 年 9 月 14 日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は 297 m<sup>2</sup>を測り、大道遺跡群内の南に位置している。調査の結果弥生時代中期から近現代にかけての遺構群を確認している。

### 2. 基本土層

調査区を覆う土地整備に伴う客土を除去すると灰褐色～暗灰褐色の水田耕作土層が検出され、その下より検出された黄灰褐色シルト質土で遺構が確認されており、本調査区における遺構検出面と位置付ける。また、黄灰褐色シルト質土は調査区西側と比較して東側に深く、地形的に落ち込みが形成された地点と推定できる。遺構検出面となる黄灰褐色シルト質土は、落ちの肩部となる調査区西側で標高約 5.80m を測る。



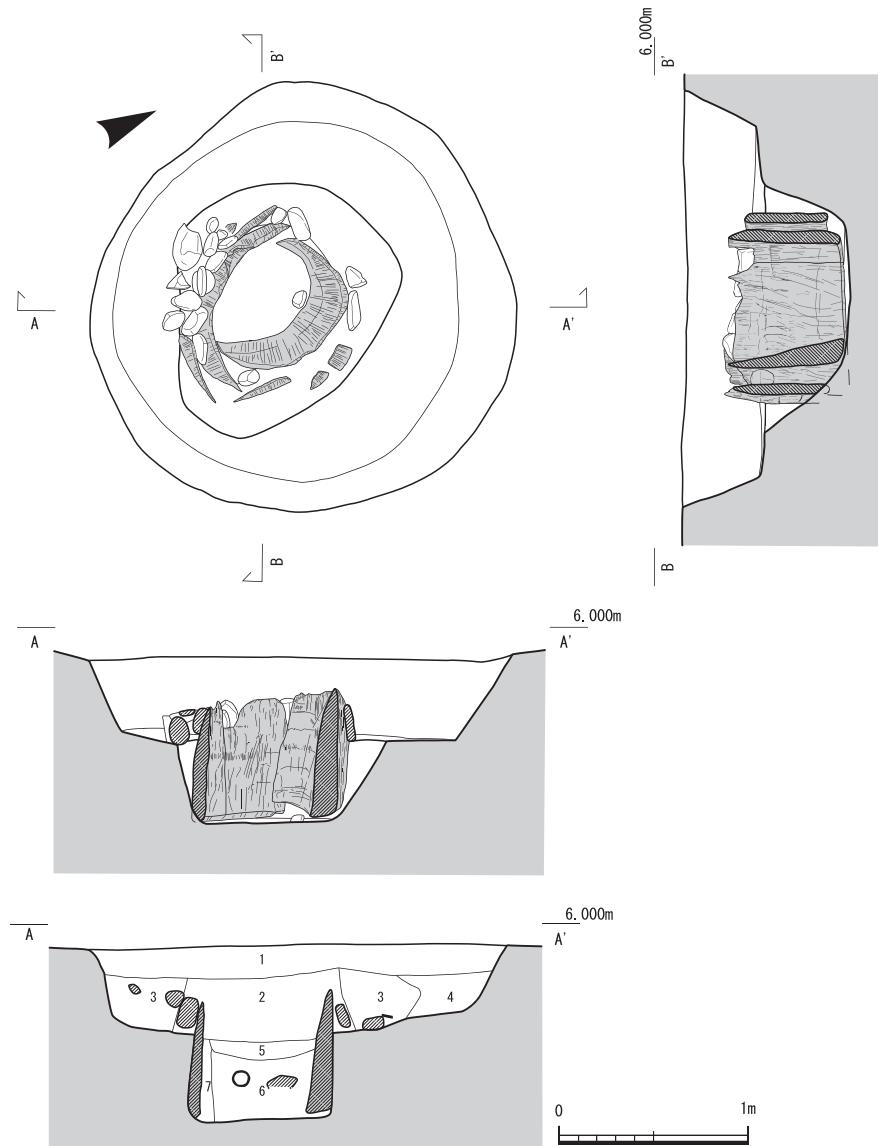
第 56 図 大道 17 次調査遺構平面図 (1/200)

### 3. 遺構・遺物

#### 井戸跡 (SE)

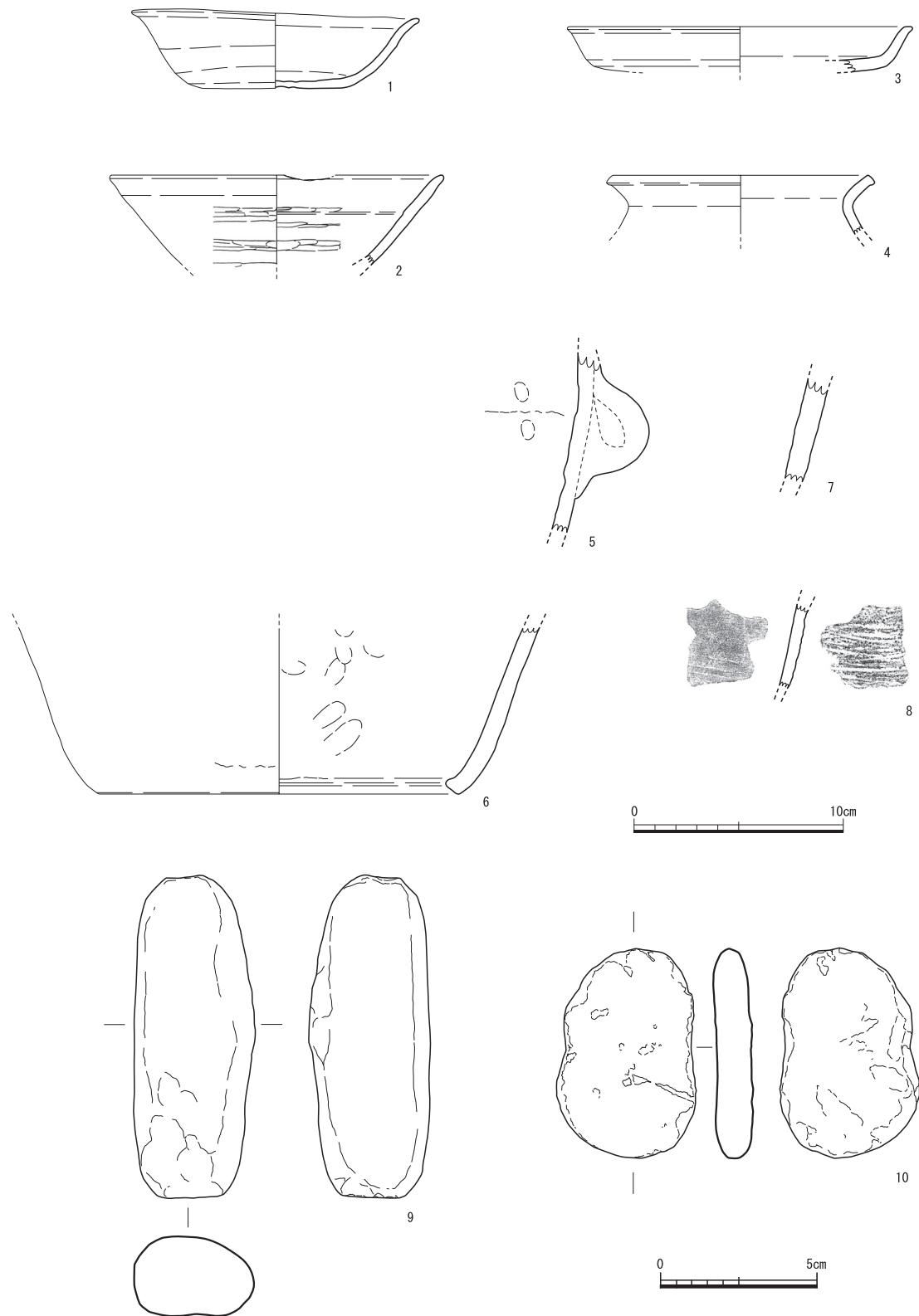
##### 17SE010 (第 56・57 図)

調査区北側に位置する井戸跡である。遺構本来の標高は後世の削平のために不明であるが、検出面からは東西 2.20 m、南北 2.30 m、深さ 0.87 m を測り平面円形、断面形状は段掘り状を呈す。検出面から深さおよそ 0.20 m で木枠を確認している。井戸の水溜部にあたる木枠は丸太を削り抜いたもので、真中で二つにわかれている。また西側の木枠は同様の板材が囲う二重構造になっており、その上面には裏込めに伴うと考えられる礫群が確認



1. 淡黒灰褐色砂質土(砂質が強い・鉄分の沈着が斑状に見られる)
2. 暗黒褐色砂質土(粘質)
3. 黒褐色粘質土(砂質土が混入・10cm大の礫が混入)
4. 黒褐灰色砂質土(硬化・しまりあり・砂質が強い・黄灰褐色砂質土を含む)
5. 黒褐茶灰色粘質土(灰褐黒色砂質土を混入・有機質の植物遺体が混入)
6. 暗黒灰褐色粘質土(シルト質・泥質が強い)
7. 灰褐黒色砂質土(砂質が強い)

第 57 図 17SE010 平面・断面・土層断面実測図 (1/40)



第58図 17SE010出土遺物実測図 (1/3, 9・10は1/2)

されている。

土層はあわせて7層を確認した。このうち廃絶時の埋め戻し土である2層（暗黒褐色砂質土）と、裏込め土と考えられる3層（黒褐色粘質土）はほぼ垂直に分層されており、上方の井筒を抜き取った後すぐに埋め戻したものと考えられる。また土層観察から遺構が2層まで埋め戻されたのち1層（淡黒灰褐色砂質土）が堆積した状況がみてとれるが、いずれにせよ上面の大半が削平をうけているために詳細な情報は得られなかった。出土遺物から遺構の最終的な埋没時期は8世紀から9世紀ごろと推測される。出土した井筒は、樹種は、クスノキ材である。高さが70cmほど残存するもので、水溜部の下部の内径が約70cm、厚さ6.5cm、上部の内径約89.2cm、厚さ約4.8cmを測るものである。半円形の井筒の下部2ヶ所に縦約3.2cm、横約5.8cmの柄孔を施しており、クスノキ材の丸太を二分割にして中を割り貫き、柄孔どうしをつないで設置したものと考えられる。また、クスノキ材を割り貫いて井筒に使用している例としては、下郡遺跡群第5次調査で検出された9世紀に構築された5SE093や8世紀末から9世紀初頭と考えられる下郡遺跡群第19次調査19SE002がある。19SE002の井筒の内径は約1.20mを測る大きなものである。

**出土遺物（第58図）**1は、土師器坏。口縁先端部が外反し、先端部は丸みを帯びるもので、口径約13.8cm、器高3.8cm、底径約6.6cmを測る。

2は、土師器高台付坏の口縁部。口縁部先端は丸みを帯び、内外面ヨコナデ後ミガキa2調整が施されている物で、口径は、15.8cmを測る。

3は、土師器皿。内外面回転ナデ調整で口径約16.5cmを測る。

4は、土師器甕口縁部で、口径約11.2cmを測る。5、6は、豊後大分型甕の底部から胴部。5は、内面ナデ、外面ハケメ調整。内面に把手貼付け時の指頭圧痕が認められる。6は、底部の部分で、内面ナデ、外面カキメ調整で底径は約17.0cmを測る。

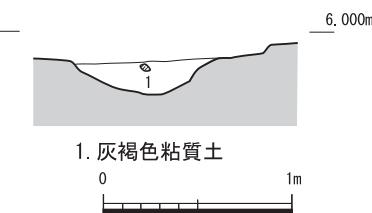
7は製塩土器の胴部片。胎土は石英・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面浅黄橙色を呈する。

8は、縄文土器鉢胴部破片。内面ミガキ、外面貝殻条痕調整である。

9は、安山岩製の敲石で、自然礫を利用している。長さ15.5cm、幅5.7cm、厚さ4.1cm、重さ600gを測る。下端部は一部欠損が認められるが、上端部、下端部とも敲打による潰れ痕が顕著に認められる。側面は磨石としても使用されている。

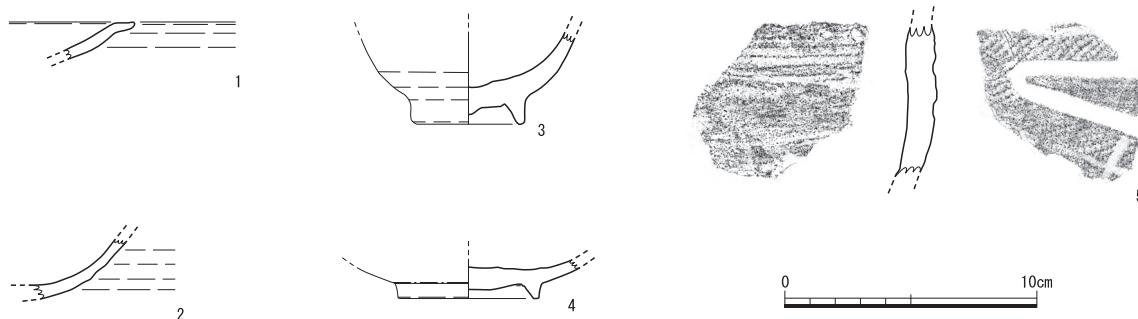
10は、砂岩製の石錘。長楕円形の扁平な自然礫を素材とし、裏面は殆んど礫面が残る。表面のみ調整を施した後、表裏面の周辺に整形のため二次加工を行い、左右側縁に打ち欠きによる抉りを入れている。長さ10.0cm、幅6.7cm、厚さ1.9cm、重さ205gを測る。

1から7の時期は、8世紀末～9世紀初頭に比定できる遺物である。下層から石器と縄文土器破片が出土している。



第59図 17SD009 土層断面

実測図 (1/40)



第60図 17SD003・009 出土遺物実測図 (1/3)

溝状遺構 (SD)

17SD003 (第 56 図)

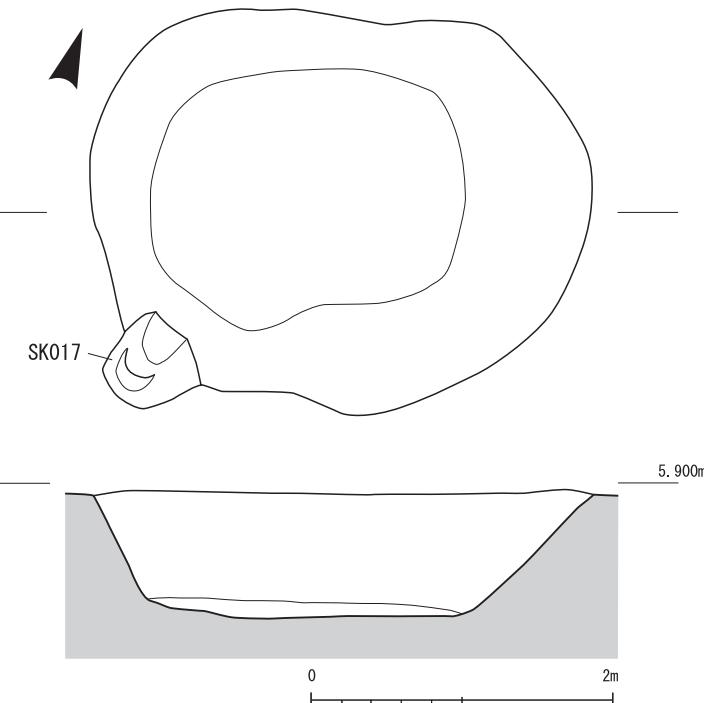
調査区西側に位置し、南北方向へ延びる溝跡である。区外へと延長するために規模は不明であるが、深さはおよそ 0.05 ~ 0.30 m を測り、また中央付近では削平のため遺構の一部が消失する。遺構からは京都系土師器片、白磁皿などが出土しており、中世段階に帰属するものと考えられる。

出土遺物 (第 60 図) 1 は、京都系土師器坏口縁部で、16 世紀後半に比定される。2 は、白磁碗の胴部。

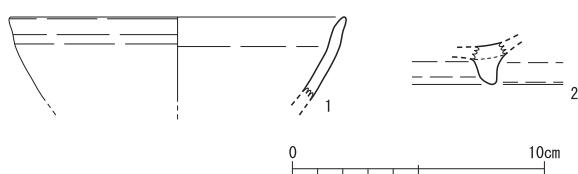
17SD009 (第 56・59 図)

調査区の北東に位置し、南西方向から北西方向へと延びる溝跡であるが、両端ともに区外へと延長するため規模は不明である。深さおよそ 0.20 m を測り、断面は浅めの逆三角形を呈す。出土遺物から近世に帰属する遺構と考えられる。

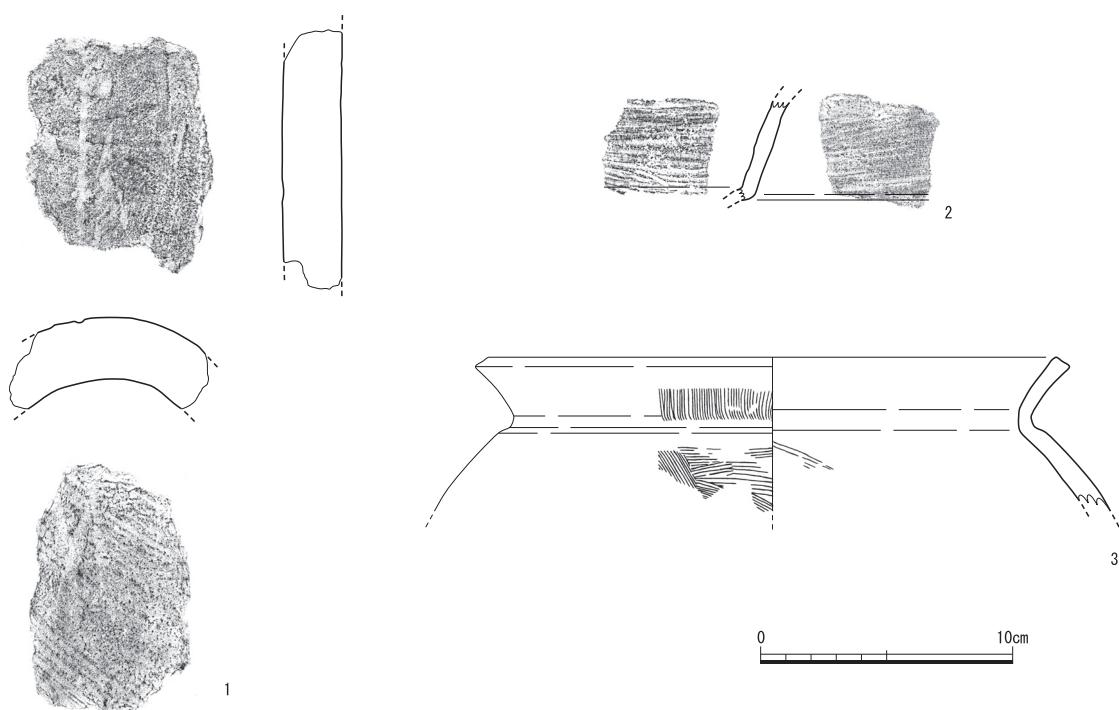
出土遺物 (第 60 図) 3 は、陶磁器碗の底部。4 は、見込みが蛇目釉剥ぎの白磁皿底部。底



第 61 図 17SK002 平面・断面実測図 (1/50)



第 62 図 17SK002 出土遺物実測図 (1/3)



第 63 図 17SK007・014 出土遺物実測図 (1/3)

径は約 5.6 cmを測る。

5 は、磨消縄文が認められる縁帶文土器深鉢の胴部。

## 土坑 (SK)

### 17SK002 (第 56・61 図)

調査区中央からやや北に位置する大型土坑である。平面橢円形、断面形状は逆台形を呈しており長径約 3.30 m、短径約 2.60 m、深さ約 0.84 mを測る。遺構は 17SD001 や 17SD006 と切り合い関係を持つが、写真記録・土層記録が存在しないため性格は不明であった。出土遺物についても破片資料であり、当該遺構については中世段階での機能または廃絶がなされていたと推測される程度である。

**出土遺物 (第 62 図)** 1 は、中国福建省産と考えられる天目碗の口縁部で、口径約 13.4 cmを測る。時期は 14 世紀～ 16 世紀に比定される。2 は、土師器高台付坏の底部。底径約 6.6 cmを測る。

### 17SK007 (第 56 図)

調査区西端に位置する土坑で、平面は不整方形を呈する。調査区壁に切られるため全容は不明であり、東西径約 0.55 mを測る。遺構からは瓦片が出土し、中世に比定するものと考えられる。

**出土遺物 (第 63 図)** 1 は、丸瓦の破片。内面に金引き痕が認められる。時期としては中世。

### 17SK014 (第 56 図)

調査区中央からやや北に位置しており、平面は南東部がやや張り出す歪な隅丸方形を呈する。長径約 1.00 m、短径約 0.80 mを測る。また断面形状は未実測のため不明であり、深さは約 0.60 mを測る。遺構の性格は不明であるが、出土遺物から古代以降に埋没したものであろうと推測される。

**出土遺物 (第 63 図)** 2 は、内外面条痕文の浅鉢の胴部。3 は、土師器甕口縁部で、口径約 22.6 cmを測る。

## 4. 小結

第 17 次調査では溝状遺構を中心とする遺構群が検出された。調査区北側に位置する 17SD009 は近世に比定する溝跡であるが、これに並行するかたちで古代に比定される連結土坑 17SA015 が展開している。古代に比定される溝跡 17SD018 に関連するものであろうが、後世の 17SD009 形成時に 17SD018 のラインが踏襲された可能性も考えられる。また、調査区中央付近では南東方向へと下がる傾斜が確認されている。西に位置する第 18 次調査区や北東に位置する第 14 次調査区でも同様に落ちが確認され、当該地周辺の自然地形を実証するまでの手がかりとなった。

## 大道遺跡群第18次調査

### 1. 調査の概要（第26図）

調査地は大分市金池南1丁目に所在する。本調査は区画整理地内の宅地造成に伴い、大道遺跡群第17次調査と併行して平成18年8月28日から平成18年9月14日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は約57m<sup>2</sup>を測り、大道遺跡群内の南端部分に位置する。調査の結果、地形の落ちを確認した。

### 2. 基本土層（第64図）

現地標高は約6.70mを測る。調査区を覆っている約0.30mの表土の茶灰褐色土を除去すると、淡茶褐色土の耕作土層を確認した。耕作土は以下5層までおよそ0.50mの深さで続いており、この耕作土を除去すると黄茶褐色シルト質土が現れて調査区の安定面（基盤土層）となる。

### 3. 遺構・遺物

#### 不明遺構（SX）

##### 18SX001（第64・65図）

調査区中央付近に位置する不明遺構である。北から南方向へかけてゆるやかな傾斜を保ちながら段状にくだり、調査区外へと延長する。遺構の埋土は暗黒褐色の砂質土および粘質土であり、これは本調査区の北側に位置する第15次調査で確認されたものに類似する。埋土は多量の土器を包含しており、およそ8世紀から9世紀代に比定される。このことから当該遺構は自然地形の落ちにあたり、古代以後に整地等の目的から埋没したものと考えられる。

**出土遺物（第66図）** 1は、土師器蓋。2は、土師器坏で口縁部端部が外反し、先端部は丸みを帯びる器形で口径約12.9cmを測る。

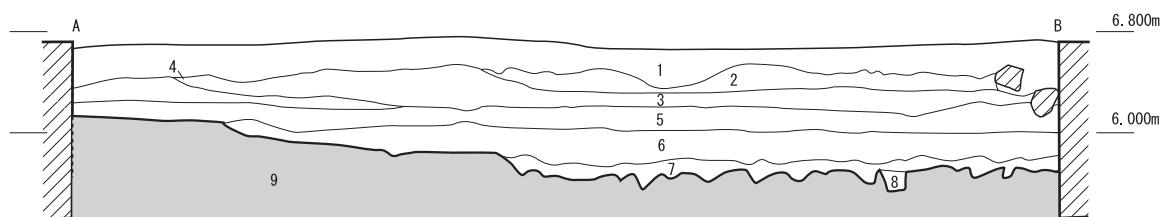
3は、土師器坏で、胴部は、内湾気味に立ち上がり、口縁部端部は丸く仕上げるもので口径約11.2cmを測る。

4は、土師器坏で、胴部は、内湾気味に立ち上がり、口縁部端部は丸く仕上げるもので、口径約16.2cmを測る。

5は、高台付き坏の底部で、底径は8cmを測る。

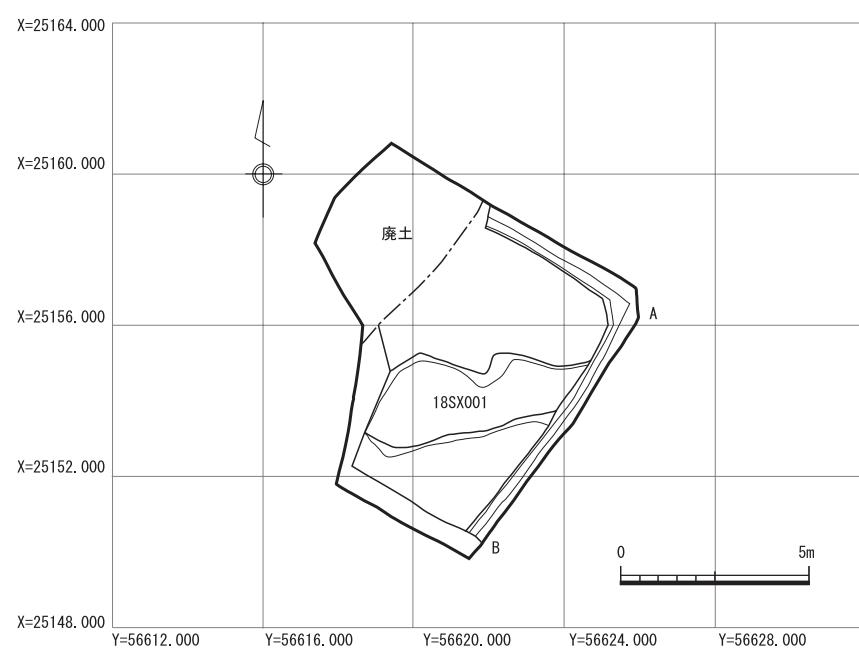
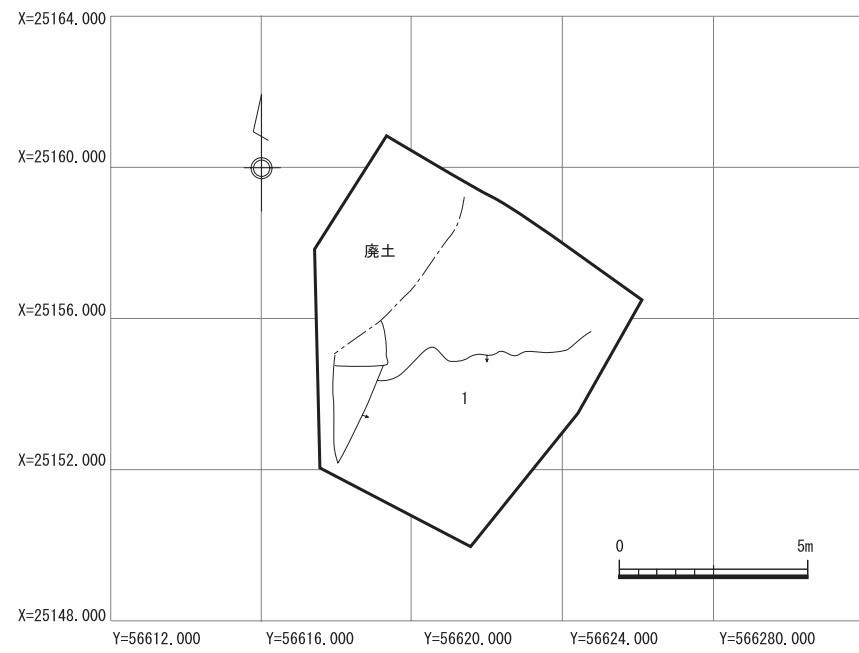
6は、須恵器蓋で、口縁端部に沈線状の窪みを持つタイプで、口径約12.4cmを測る。

7は、須恵器坏口縁部。8は、須恵器高台付き坏の底部で、底径は7.8cmを測る。9～11は、企救型甕の口縁部。



1. 茶灰褐色土：表土
2. 茶褐色粘質土（粒子の粗い砂が少量混じる）
3. 茶褐色砂質土（粒子の粗い砂が多量に混入、鉄分の沈着が見られる）
4. 褐茶灰色砂質土（しまりが強い、粒子が粗い砂少量混入）
5. 灰褐色粘質土（粒子が粗い砂粒が層上位に堆積、鉄分の沈着が見られる）
6. 黒褐色灰色砂質土（しまりがやや強い、鉄分の沈着が見られる、小礫（1mm大）が混入、粒子の粗い砂が多量に混入）
7. 黑茶褐色粘質土（粒子の粗い砂質が少量混入、小礫（2～4mm大）を多量に混入）※6・7層はSX001埋土
8. 黑褐色粘質土
9. 黄茶褐色シルト質土

第64図 大道18次調査区東壁土層断面実測図（1/60）

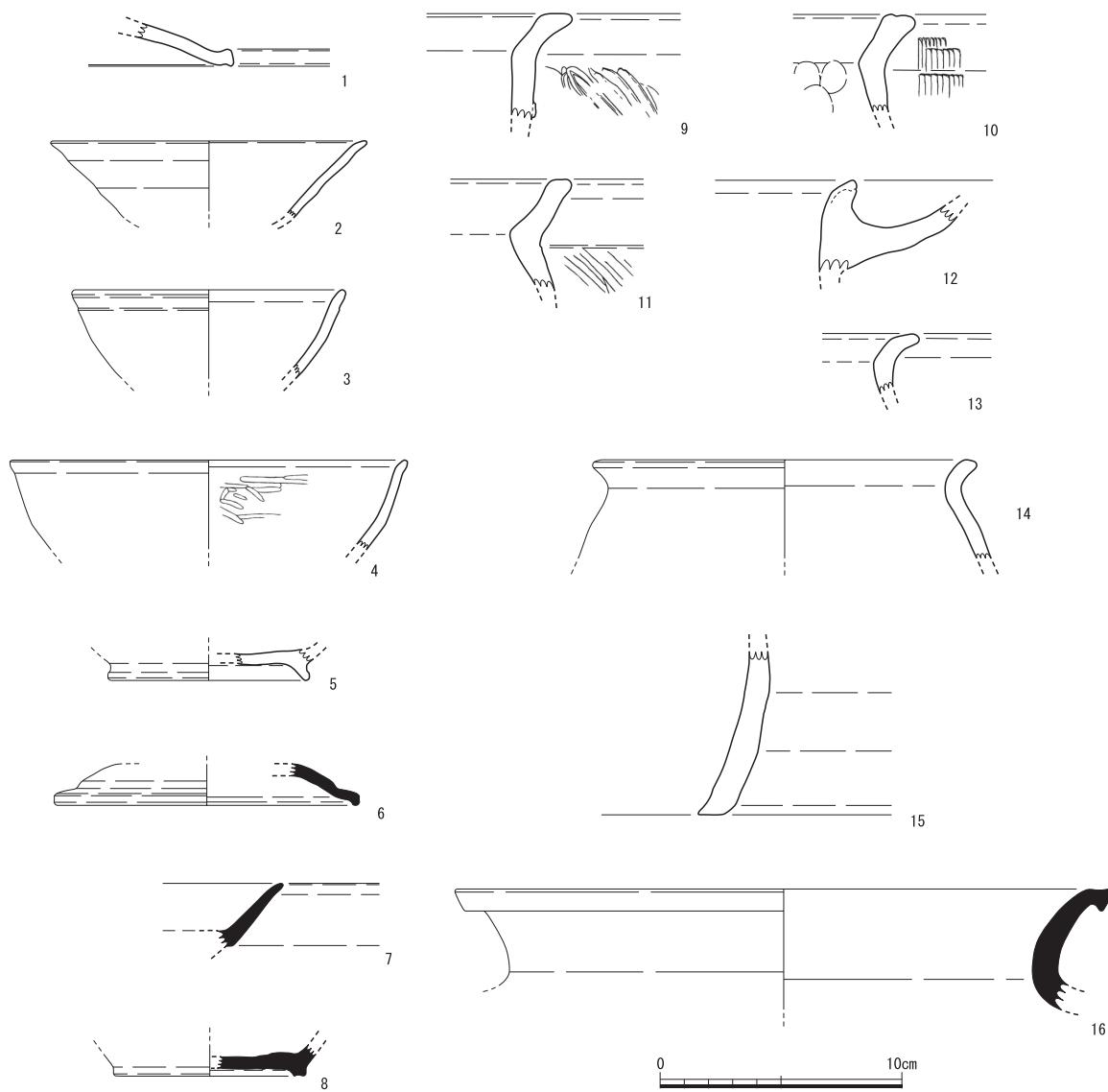


第 65 図 大道 18 次調査遺構配置図・平面図 (1/200)

12は、口縁部外面に把手を持つタイプで、鍋または鉢と考えられる。13は、土師器甕口縁部。  
14は、土師器甕で頸部から口縁部に「く」の字状に外反する器形で、口径約15.0cmを測る。  
15は、甕の底部。内外面にぶい黄橙色を呈し、内外面ナデ調整。16は、須恵器甕口縁部で、口径は約27.2cmを測る。1～16の遺物は、いずれも8世紀末から9世紀初頭の時期に該当するものである。

#### 4. 小結

本調査では自然地形の落ちにあたる部分を確認した。落ちは南東方向へ向かうゆるやかな傾斜をなしており、同様の傾斜は隣接する第17次調査区および第14次調査区からも確認されており、他の遺構が検出されないことからも本調査区が遺跡内の東南端部であることが想定される。加えて土層観察からは18SX001の下層である7層に攪拌の痕跡が顕著に見えており、当該地の水田利用を強く印象づける。18SX001が、北から南東方向への地形的な落ちを利用した水田である可能性を想起させるものといえる。



第66図 18SX001出土遺物実測図 (1/3)

### 第3節 大道遺跡群第16次・第19次・第22次・第25次調査

#### 概要

第3節においては第16次・第19次・第22次・第25次調査の説明を行う。同地は本報告書で紹介する調査区のちょうど中央部に位置しており、旧地形における微高地上に位置するものである。

第3節において最も古いものとしては第22次調査区の土坑22SK031である。弥生時代前期から中期に比定するものとして挙げられるが、遺構の性格は不明であり、これに続いて弥生時代後期に比定される大型溝状遺構19SD020と弥生時代後期～末に比定される溝状遺構16SD003・22SD014・19SD029が検出され、後者については第26図で示した地形想定線とほぼ同じ角度で展開する。19SD020からは水性堆積が認められ、当該期の集落が水路を伴うものであった可能性が考えられる。

古墳時代の遺構のなかで特徴的なものに22SX005が挙げられる。方形周溝を呈するもので墳墓遺構の可能性をもつが、周囲に同様の遺構は確認できず、また遺物も僅少であることから詳細は不明である。古墳時代の遺構としては溝跡のほかに井戸状遺構4基と土坑5基が出土しており、主に第22次調査区からの検出が多くあった。遺構上面の多くは削平を受けており、一定の深度をもった遺構の一部が残存する状況であると考えられる。

古代の遺構としては区画溝と考えられる溝状遺構および掘立柱建物跡が検出されている。本調査で確認された建物跡は一部に柱材を残す19SB005の1棟のみであり、遺構の南西部から同様の建物跡は検出されなかった。第19次・第25次調査区の北側はいまだ調査が成されておらず、こちらに当該期の遺構が展開する可能性が残されている。溝状遺構は弥生時代の溝跡の東側に沿うかたちで配置しており、弥生時代の地割を踏襲、あるいは拡張したものと推定される。

中世・近世にかけての遺構は第16次・第25次調査区に集中するかたちで確認できる。近世において17世紀代前半に実施された初瀬井路の整備により、微高地を含む大道遺跡群内の水田化が行われるにつれて形成された溜井遺構や、灌漑用水路となる溝状遺構が主に確認されている。大道遺跡群内では他の調査区からも同様の遺構が確認されているが、25SX010は機能時期が中世に特定できるものであり、近世の整備以前から水利施設を伴う区画であった可能性が想定できる。

本調査区において確認された溝跡は時代が異なるにも関わらずほぼ同様の振り幅であり、古くからのラインを踏襲した痕跡がうかがえるものである。当該地において、弥生時代以前に形成されたラインが古墳時代や古代になるとそれに沿うようなかたちで徐々に拡張され、中世・近世段階に水田化する際に前段階のラインの一部を継承しつつも新規の区画ラインを形成していくものと考えられる。

また、今回確認された古墳時代に比定される周溝遺構や古代に比定される掘立柱建物跡は、周囲の状況および出土遺物が僅少であるため詳細の判明には至らず、今後、集落部分にあたると想定される第25次調査区の北西部における調査実施によって当該地における集落の様相が判明されることが期待される。

以下、調査次数ごとに述べる。



第67図 第3節調査区配置図 (1/400)

## 大道遺跡群第16次調査

### 1. 調査の概要

調査地は大分市金池南1丁目に所在し、上野台地北側の沖積低地に位置する。本調査は区画整理地内街路整備事業に伴い、平成18年10月27日から平成18年12月15日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は683m<sup>2</sup>を測り、大道遺跡群内の南に位置している。調査の結果、弥生時代から近世にかけての遺構群を確認している。

### 2. 基本土層（第68図）

調査区は西壁土層を基本層位とする。表土面である黒茶黃褐色土（1層）を除くと、近世の水田層である（3層）が確認できる。その下層には0.10m程の厚さで埋積する淡黒灰褐色土（5層）があり、基本として遺構は黒灰褐色土（6層）上面からの検出を見せる。遺構検出面の標高は約6.00mである。

### 3. 遺構・遺物

#### 溝状遺構（SD）

##### 16SD001（第69図）

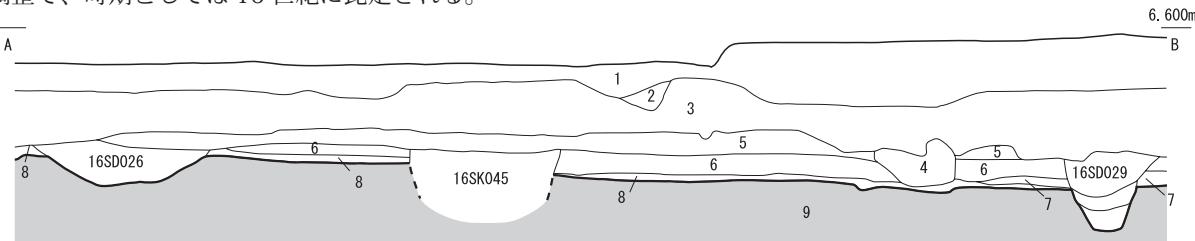
調査区中央から南東方向に延びる溝跡で、区外へと続くため全容は不明である。近世に比定される遺構である16SD030、16SK035、16SE040を切っており、幅約0.65～0.80mを測る。出土遺物から帰属年代は近世と考えられる。

**出土遺物（第72図）** 1は、白磁碗底部。畳付部分のみ露胎で18世紀以降の伊万里産陶磁器。2は、鉄製品で馬の足につける蹄鉄。時期としては、近世に比定される。

##### 16SD002（第69図）

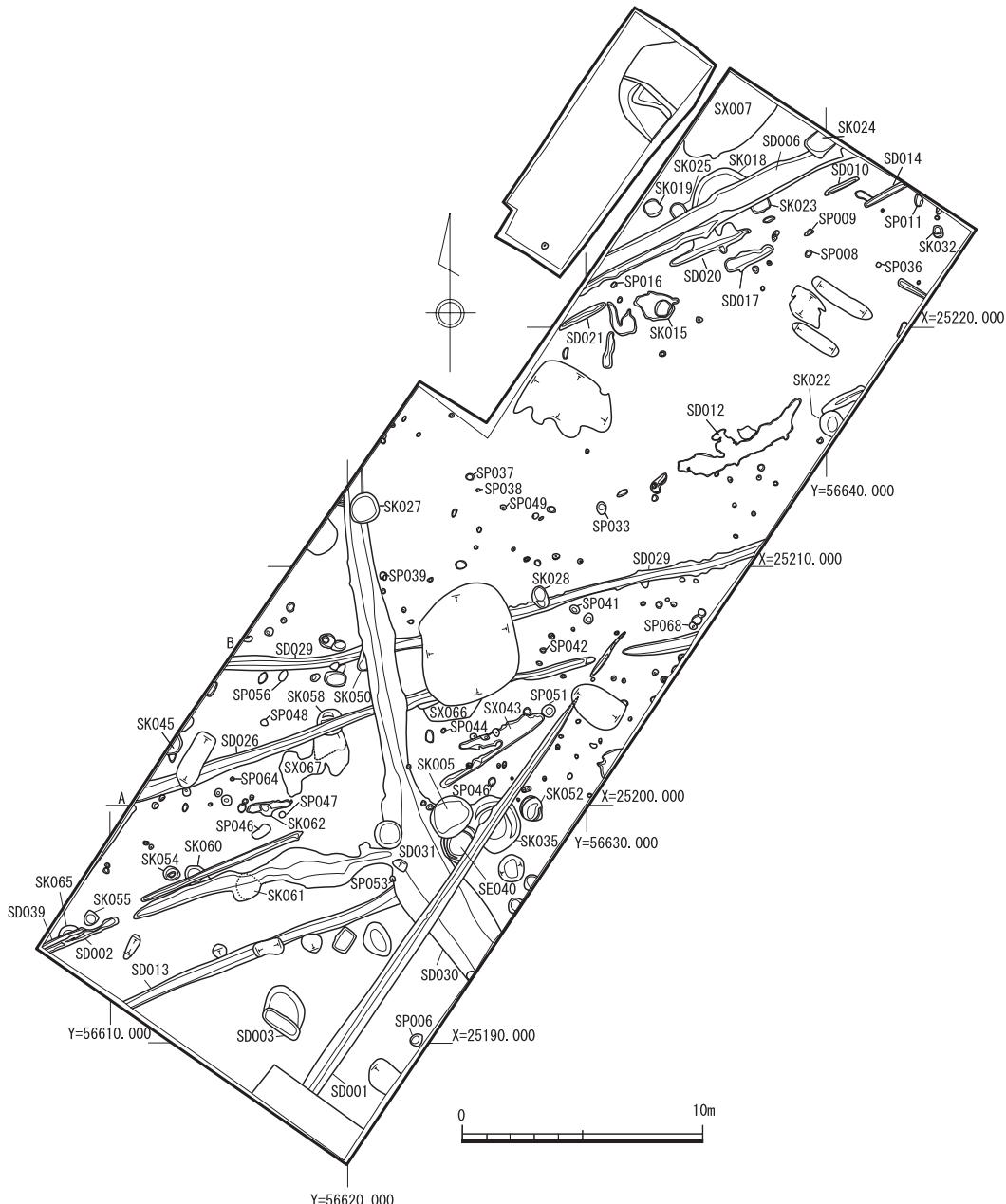
調査区南西端に位置する溝跡である。区外へと延びるため全容は不明であるが、遺構からは備前焼甕口縁や瓦質鉢などが出土しており、近世に比定する遺構と考えられる。

**出土遺物（第72図）** 3は、備前焼大甕口縁部。4は、瓦質土器鉢の口縁部。内面ハケメ、外面ハケメ後ナデ調整で、時期としては16世紀に比定される。



- 1. 黒茶黃褐色土 小礫・灰黃褐褐色土ブロック(5cm大)混入
- 2. カクラン
- 3. 灰茶褐色粘質土 砂質土が多量混入
- 4. 黒褐色土
- 5. 淡黒灰褐色土 赤黄褐色粒子(1cm大)がわずかに混入
- 6. 黒灰褐色土 赤黄褐色粒子(1cm大)が少量混入
- 7. 淡灰褐色砂質土 赤黄褐色粒子(1cm大)がわずかに混入
- 8. 灰褐色シルト質土
- 9. 茶褐色粘質土(地山)

第68図 大道16次調査区西壁土層断面実測図 (1/50)

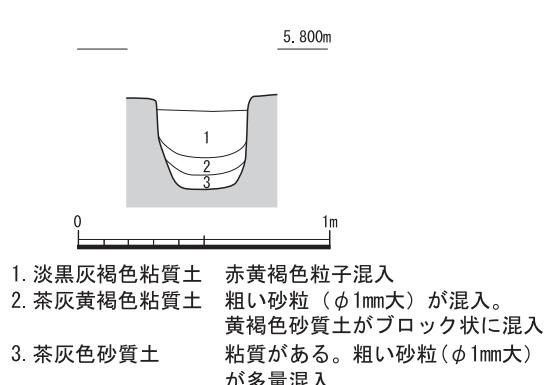


第69図 大道16次調査遺構平面図 (1/300)

16SD029 (第69・70図)

調査区の中央を東西に走り、断面逆台形を呈する溝跡である。幅約0.40mを測り、溝の両端は区外へと延長する。東端は22SD014と接続するが、西端は確認できなかった。埋土は3層を確認し、粘質と砂質の水性堆積が認められるところから、水路として使用されたものである。縄文土器片が出土している。古墳時代に比定される16SK028に切られるところから、それより以前に機能していたと想定される。

**出土遺物 (第72図)** 5～7は、縄文土器鉢胴部。内外面ともに二枚貝による貝殻条痕調整。時期は縄文時代後期と考えられる。



第70図 16SD029 土層断面実測図 (1/30)

## 16SD030 (第 69・71 図)

6.200m

調査区中央を南東から北西方向に、区外へと延びる溝跡で、幅約 2.75 m を測る。断面は浅めの逆台形状を呈し、遺構中央で南西方向への分岐が確認できる。埋土は 5 層確認できており、流水・滯水の状況は認められない。区画に伴う溝として使用されたと考えられる。遺物は

京都系土師器、備前焼擂鉢、唐津・肥前

系陶磁器などが出土しており、遺構の帰属年代は 16 世紀後半から 17 世紀初頭ごろと推測される。

**出土遺物 (第 72 図)** 8～12 は京都系土師器坏口縁部。10 の胎土は雲母・白色粒子を含み、内外面ナデ調整で、口径は約 8.2 cm を測る。11 も内外面ナデ調整で口径は 10.7 cm を測る。

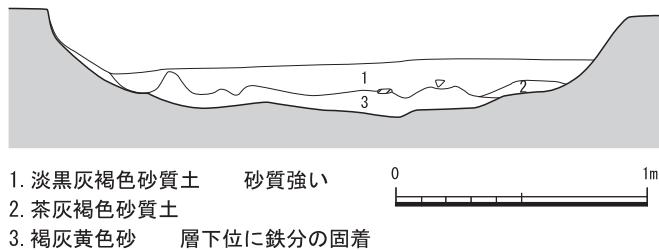
12 はやや大きめのタイプで、口径は約 14.6 cm を測る。13 は防長系瓦質土器鍋の脚部分。鼎状に脚部がつく物である。14、15 は、備前焼擂鉢の口縁部。14 は擂り目が 4 本確認できる。

16 は中国産染付で蓮子碗の口縁部。17 は中国景德鎮窯産白磁皿の口縁部で、口径約 12.4 cm を測る。

18 は中国漳州窯磁器皿の底部で、見込み部分に 1 本の回線があり、その中に花卉文が描かれている。畳付部分は露胎。19 は唐津焼碗底部。見込み部分と底部に、砂目が多量に付着している。また、外面底部は露胎。17 世紀初頭。20 は備前焼大甕の口縁部。21 は備前焼擂鉢の底部で、擂り目が 11 本観察できる。

22 は土製灯火具で、坏部が欠失しているため、全形は不明であるが、やや細身に造られている。また、京都系土師器と類似するような、白っぽい色調の精良な胎土である。穿孔内部にロウソクを立てる木片が残っている。

23 の土錘は紡錘形を呈するもので、口縁部が欠損しているが、長さ 4.7 +  $\alpha$  cm、幅 1.4 cm、口径約 0.6 cm を測る。重さ約 8.2g を量る。16SD030 の時期は、砂目積みの唐津焼碗が認められる事から 17 世紀初頭と考えられる。



第 71 図 16SD030 土層断面実測図 (1/30)

## 土坑 (SK)

## 16SK005 (第 69 図)

調査区南に位置し、近世に比定される 16SD030・16SK035 を切る土坑である。平面隅丸方形および断面逆台形を呈しており、長径約 1.80 m、短径約 1.50 m を測る。土層はブロックを含む粘性暗褐色土が確認されており、廃棄土坑と考えられる。埋土からは近世に比定される染付皿が出土し、他の遺構との切り合い関係から 18 世紀中頃に帰属する可能性が高い。

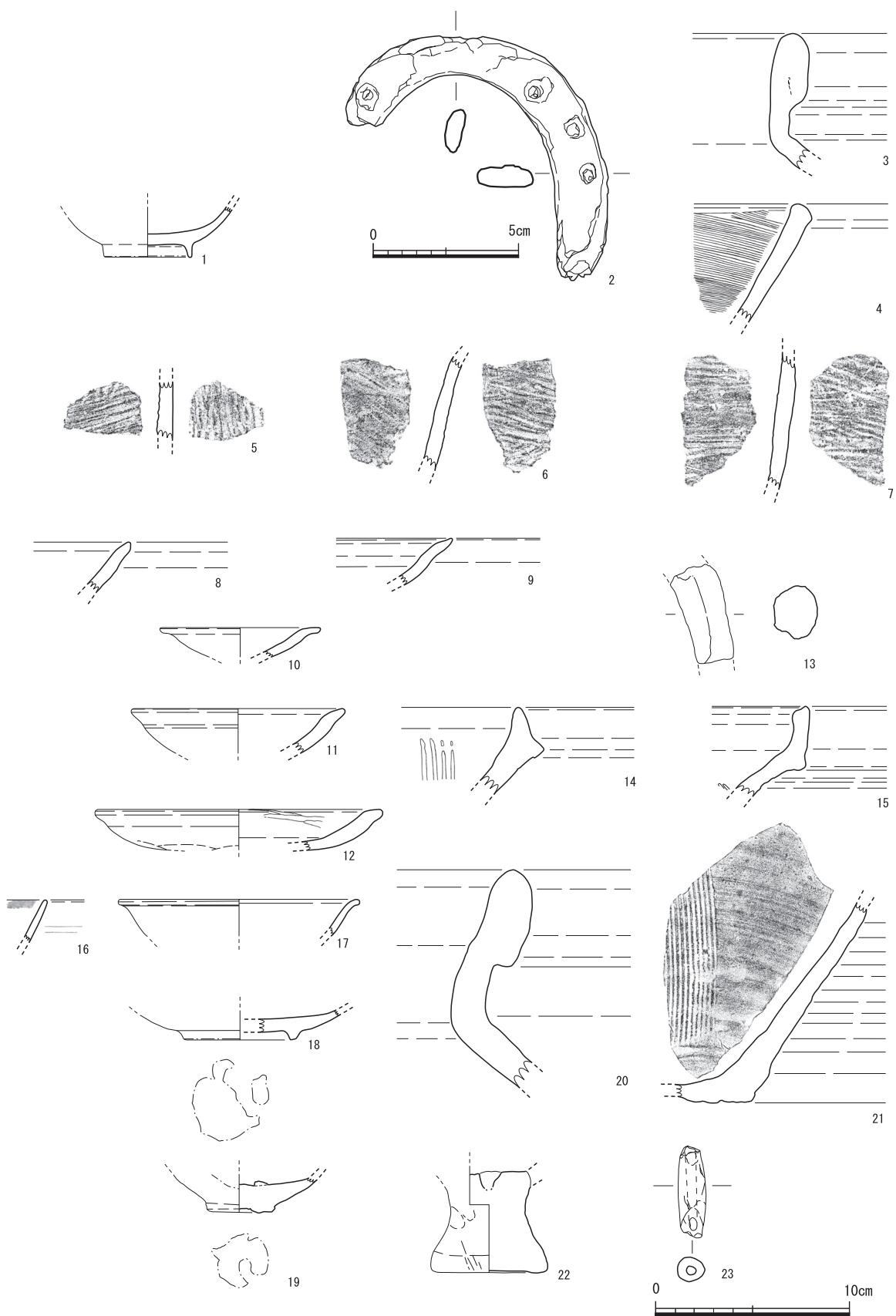
**出土遺物 (第 76 図)** 1 は、染付磁器皿で、口径約 12.8 cm、器高 2.9 cm、底径約 7.1 cm を測る。肥前産で 18 世紀中頃に比定される。3 は、キセルの吸い口部分。

## 16SK015 (第 69 図)

調査区北西部に位置する土坑で、歪な円形平面プランを呈す。南北長約 1.10 m、東西長約 1.50 m を測る。埋土中からは弥生土器や瓦質擂鉢などが出土しており、埋没時期は中世以降と考えられる。

**出土遺物 (第 76 図)** 2 は、瓦質の擂鉢底部で、擂り目が 5 本認められる。時期は中世。

4 は、鉄製の釘で形状は角形をしており長さ 4.5 cm で重さ 2.5g を測る。5 は、弥生土器で下城式の甕口縁部である。口縁部下に刻み目突帯を 2 条巡らす。



第72図 16SD001・002・029・030出土遺物実測図 (2は1/2、その他1/3)

## 16SK022（第 69 図）

調査区北西部に位置する土坑である。遺構の西側は調査区壁にかかっており、残存径約 0.80 m、南北長約 1.00 m を測る橢円形の平面プランを呈す。埋土からは古墳時代に比定される土師器甕が出土しており、遺構が埋没した時期に相当するものと考えられる。

**出土遺物（第 76 図）** 6 は、土師器高坏で坏部は内湾ぎみに外反し、脚部は短い。胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ後ミガキ調整で口径 13.8 cm、器高約 7.6 +  $\alpha$  cm を測る。時期は、古墳時代初頭。

7 は、土師器甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面口縁部はハケメ、体部はケズリ後ナデ、外面口縁部はナデ、体部外面はハケメ調整で口径 13.1 cm、器高約 20.9 cm を測る。外面に煤付着が認められる。時期は古墳時代初頭。

## 16SK028（第 69・73 図）

調査区の中央に位置し、16SD029 を切る土坑である。長径約 0.93 m、短径約 0.66 m を測り平面橢円形を呈す。断面形状はやや歪な逆台形を呈する。遺構からは古墳時代の土師器甕・壺・高坏などが出土した。埋没時のものと推測される。また、高坏は完形で出土しており、埋納を目的とした可能性も考えられる。

**出土遺物（第 76・77 図）** 8 は土師器高坏。胎土は石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ後ナデ後ミガキ調整で口径 13.2 cm、器高約 12.9 cm、底径 11.4 cm を測る。

9 は土師器小壺で、口縁部内面に 1 本の窪みが認められる。胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面赤褐色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ調整で口径 11.5 cm、器高約 16.9 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

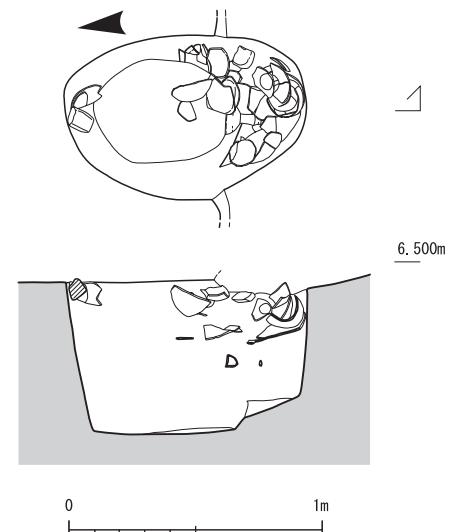
10 は土師器甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は石英・雲母・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面口縁部はハケメ、体部はケズリ後ナデ、外面口縁部はナデ、体部外面はハケメ調整で口径 16.3 cm、器高約 25.7 cm を測る。外面に黒斑が認められる。

11 は土師器複合口縁壺。口縁部は、逆「く」の字状を呈する。胎土は石英・雲母・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面暗赤褐色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ後ケズリ、外面口縁部はナデ、体部外面はハケメ調整で口径 15.0 cm、器高約 18.8 +  $\alpha$  cm を測る。

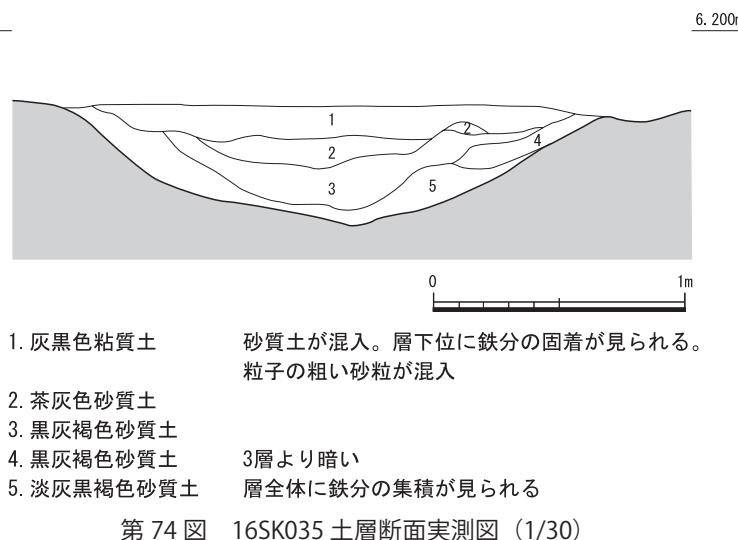
12 は土師器高坏坏部で、胎土は石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は橙色を呈し、内面口縁部はハケメ、体部はケズリ後ナデ、外面口縁部はナデ、体部外面はハケメ調整で、口径は 13.8 cm を測る。外面に黒斑が認められる。

13 は土師器甕胴部で、内面ケズリ、外面ハケメ調整である。古墳時代初頭の時期と考えられる。

14 は土師器甕で口縁部は内湾状に外反する。胴部は、やや丸みを帯びる器形で、胎土は石英・雲母・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面赤褐色、外面淡黄褐色～明赤褐色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ後ケズリ、外面はハケメ調整で口径 14.8 cm、器高約 19.1 cm を測る。外面全体に煤の付着が認められる。布留系の甕であるが、内面にハケメ調整が施されるなど在地の技法も見られる。16SK028 の遺物の時期は古墳時代初頭に該当する。



第 73 図 16SK028 平面・断面実測図 (1/30)



#### 16SK035 (第 69・74 図)

調査区中央から南に位置する土坑である。遺構上面を 16SD001 に、西端部を 16SK005、16SE040 に切られている。残存する平面は長径約 2.31 m、短径約 1.90 m を測る隅丸方形であり、断面形状は深さ約 0.21 m の浅い段状を呈する。出土遺物から近世に帰属する遺構と考えられる。

**出土遺物 (第 77 図)** 15 は白磁の花瓶口縁部。口縁部が細く伸びるタイプで、長さ 4.9 cm を測る。

16 は肥前産染付の紅皿である。時期は、18 世紀中頃に比定される。

17 は肥前産染付碗の底部。底部外面に 4 本の回線が描かれ、スタンプ文の文様を描いている。18 世紀代後半代。

18 は肥前産染付鉢の蓋。外面に草花文が描かれている。時期は、18 世紀代に比定できる。

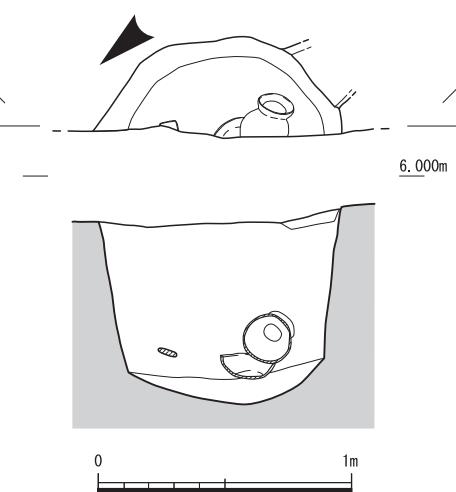
19 は関西系陶器の土瓶の蓋である。時期は、18 世紀後半代と考えられる。20 は軒平瓦の瓦当部。3 単位の雄蕊状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦である。府内城三ノ丸遺跡で出土している瓦分類表の E-3 類に該当する。18 世紀代。21 は 18 世紀前半頃～中頃の丹波系陶器擂鉢底部。内面全体に擂り目が認められる。16SK035 の時期は、江戸時代の 18 世紀中頃～後半代と考えられる。

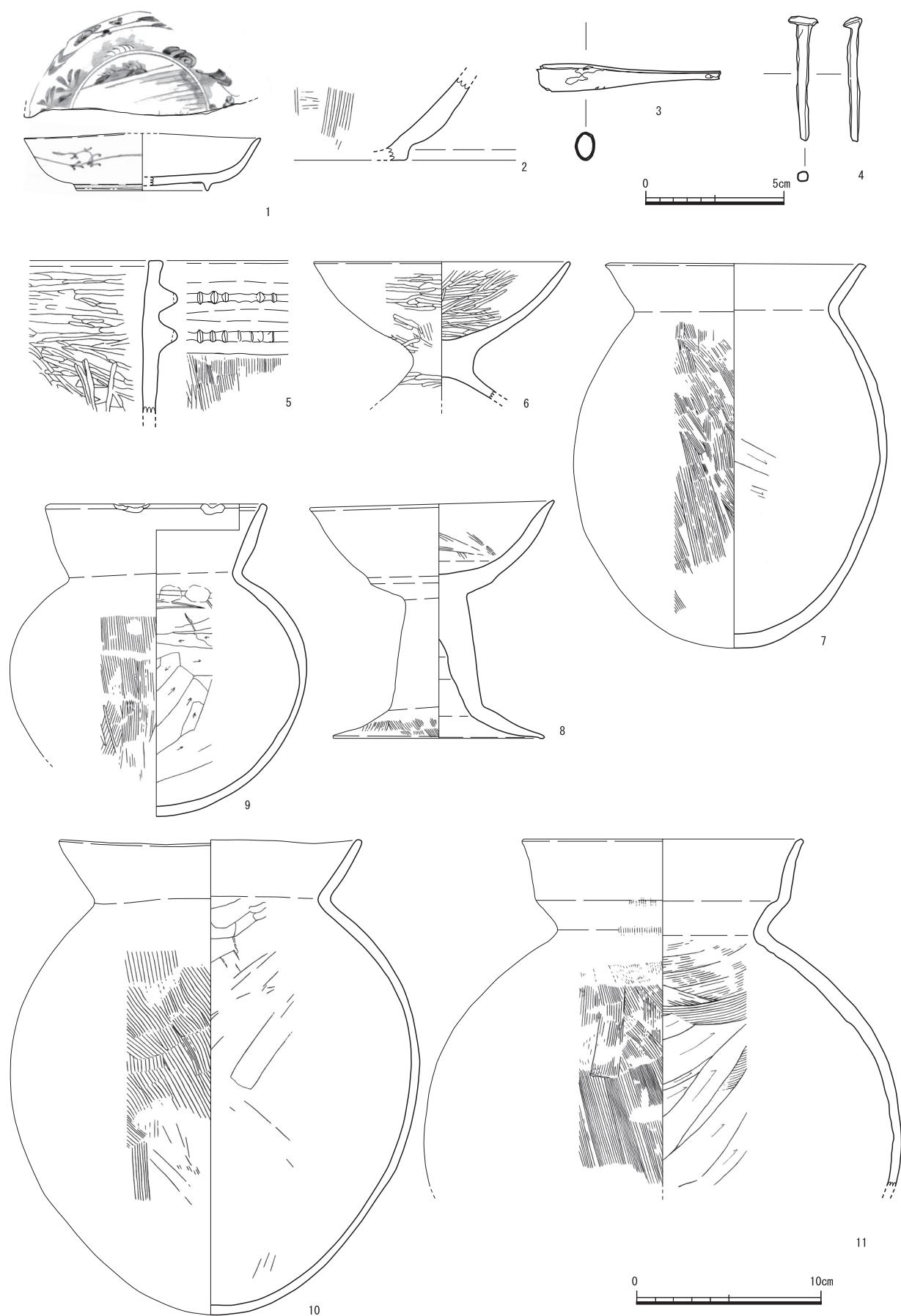
#### 16SK045 (第 75 図)

調査区南西部に位置し、西壁より区外へと延長する土坑である。平面は橢円形、逆台形の断面形状を呈する。残存径は長径約 0.98 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.72 m を測る。底部は砂層であり、湧水も認められることから土坑ではなく素掘井戸である可能性が高い。なお底部からはほぼ完形の土師器甕が出土しており、古墳時代に帰属する遺構と考えられる。

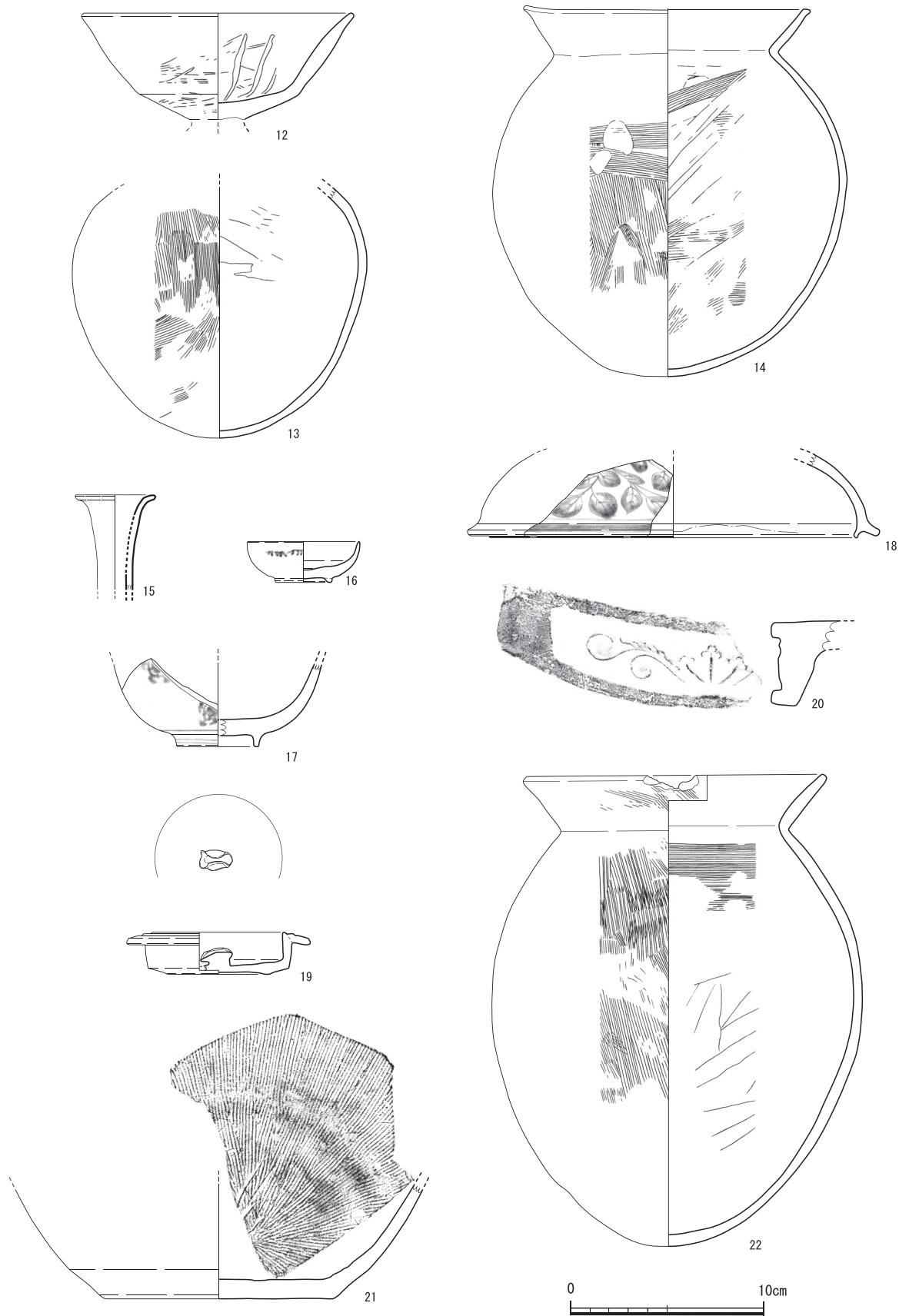
**出土遺物 (第 77 図)** 22 は、土師器甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は橙色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ後ケズリ、外面はハケメ調整で口径 15.3 cm、器高約 24.4 cm を測る。

外面全体に煤の付着が認められる。





第76図 16SK005・015・022・028出土遺物実測図 (3、4は1/2、その他1/3)



第77図 16SK028・035・045 出土遺物実測図 (1/3)

## 16SK050 (第 78 図)

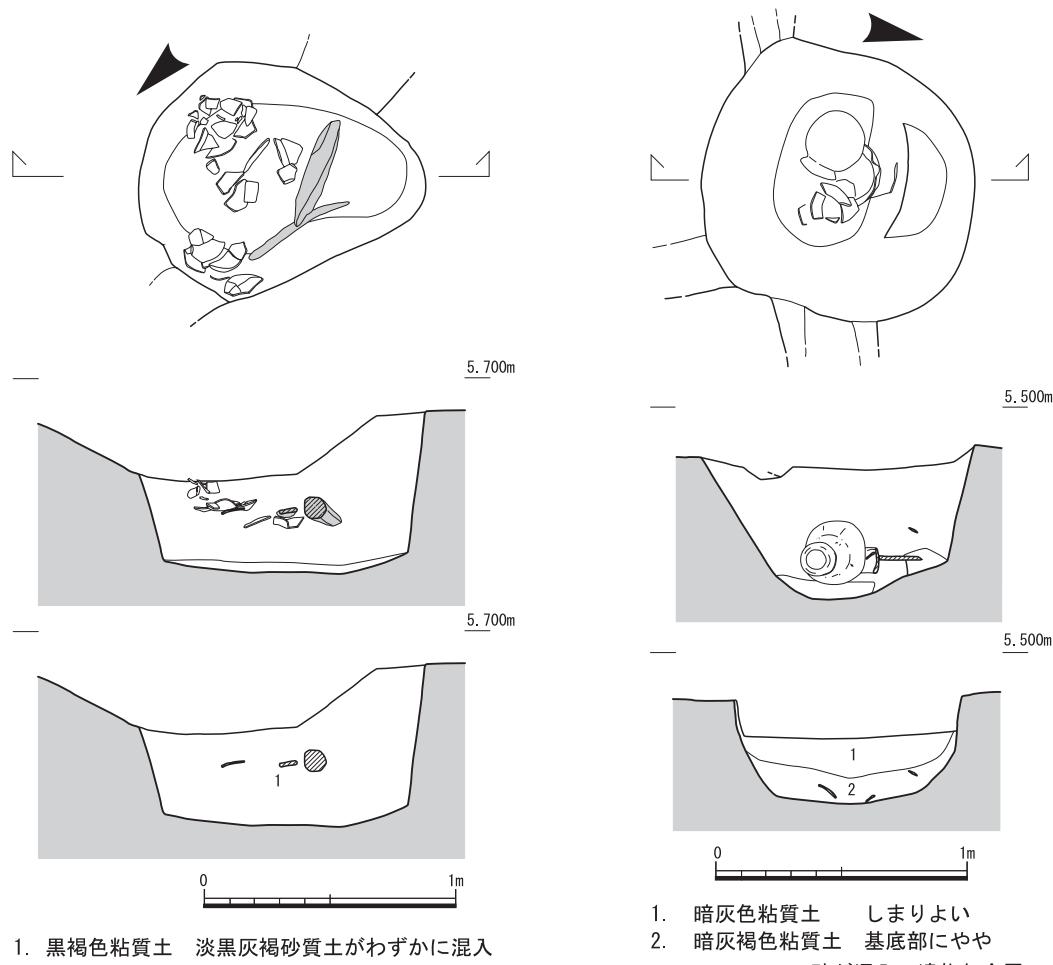
調査区のほぼ中央に位置し、東側を 16SD030 に切られる土坑である。残存径は南北約 1.14 m、東西約 0.95 m、深さは約 0.64 m を測る。埋土は黒褐色粘質土の単一層であり、遺物は複合口縁壺・土師器甕などが出土している。帰属年代は古墳時代前期と推測される。

**出土遺物 (第 80・81 図)** 23 は土師器複合口縁壺で、口縁部は、逆「く」の字状を呈する。胎土は石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面口縁部はナデ、外面口縁部は粗い波状文がみられる。頸部に断面三角形の突帯を巡らす。口径約 19.4 cm を測る。

24 は安国寺式複合口縁壺で、口縁部は逆「く」の字状を呈する。胎土は石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外橙色を呈し、内面口縁部はハケメ後ナデ、外面口縁部は波状文、頸部～胴部はハケメ調整がみられる。頸部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。口径約 16.0 cm を測る。頸部内面に指頭圧痕がみられる。

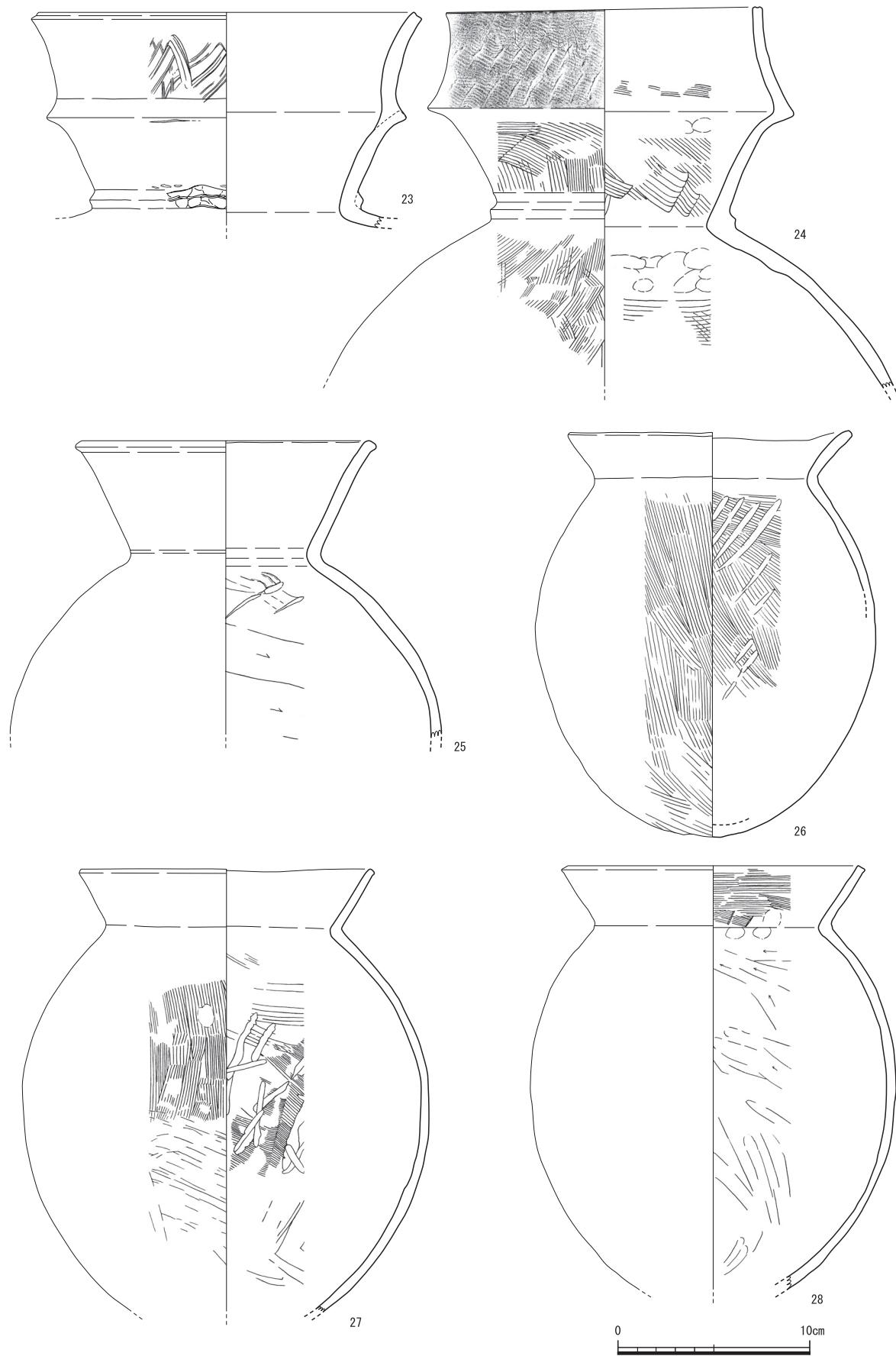
25 は土師器壺で、口縁部が長めに外反し、胴部もやや丸みを帯びる。胎土は石英・雲母・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面明褐色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はケズリ、外面ナデ調整で、口径は約 15.0 cm を測る。

26 は在地系土師器甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面赤色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ、外面はハケメ調整で口径 14.5 cm、器高約 21.1 cm を測る。外面全体に煤の付着が認められる。27 は在地系甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は角

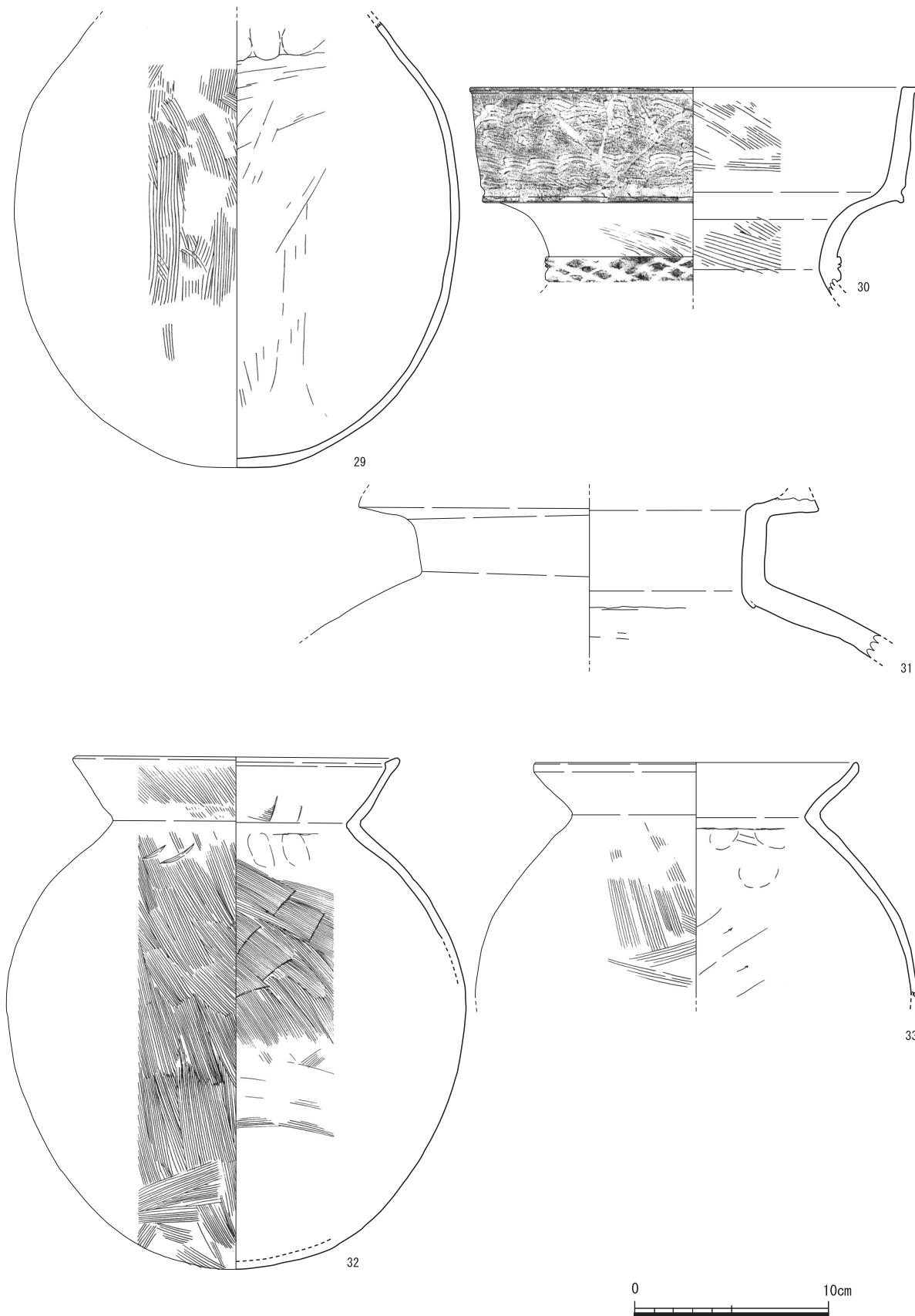


第 78 図 16SK050 平面・断面・土層断面  
実測図 (1/30)

第 79 図 16SK058 平面・断面・土層断面  
実測図 (1/30)



第80図 16SK050出土遺物実測図 (1/3)



第81図 16SK050・058出土遺物実測図 (1/3)

閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面にぶい褐色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ後ケズリ後ミガキ、外面はナデ、体部はハケメ・ケズリ後ナデ調整で口径 15.1 cm、器高約  $25.0 + \alpha$  cm を測る。外面胴部に煤の付着が認められる。

28 は、27 と同じような器形を有するが、外面ナデ、内面ケズリ調整と布留系を意識した造り方である。口径は、約 15.1 cm を測る。29 は土師器甕胴部で、内面ケズリ、外面ハケメ調整である。16SK050 の時期は、古墳時代初頭と考えられる。

#### 16SK058（第 79 図）

調査区中央からやや南西に位置する土坑である。中央を 16SD026 によって切られており、平面は長径約 1.19 m、短径約 1.04 m、深さ約 0.42 m を測る。平面形は不整円形を呈し、断面形状は歪な逆台形を呈する。埋土は暗灰色粘質土と、底部に砂が混じる暗灰褐色粘質土の層を確認している。下層（暗灰褐色粘質土）からは土師器甕や安国寺式の複合口縁壺が出土しており、遺構の埋没時期は古墳時代前期ごろと推測される。

**出土遺物（第 81 図）** 30 は土師器壺口縁部である。口縁部外面に波状文を施した安国寺式であるが、口縁部形態は内傾ではなく立ち上がり気味である。また、頸部に刻み目突帯 1 条を巡らす。口径は約 23.0 cm を測る。

31 は土師器壺の頸部～胴部であるが、畿内 5 様式と考えられるものである。32 は土師器甕で口縁部は、やや内湾気味に外反する。器形は布留系の形を意識しているが作り方は在地系である。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面橙色～黄橙色、外面橙色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はハケメ後ナデ、外面はハケメ調整で口径 16.5 cm、器高約 26.4 cm を測る。内面頸部に指頭圧痕が、外面胴部に煤の付着が認められる。

33 は土師器甕で布留系である。胎土は石英・角閃石・雲母・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面口縁部はナデ、体部はケズリ、外面口縁部はナデ、体部は、ハケメ調整で口径 16.6 cm を測る。外面胴部に煤の付着が認められる。16SK058 の遺物も古墳時代初頭の時期と考えられる。

#### ピット（SP）

##### 16SP008（第 69 図）

調査区北に位置する。長径約 0.30 m、短径約 0.24 m の橢円形を呈するピットで、埋土中からは土製の紡錘車が出土している。

##### 16SP056（第 69 図）

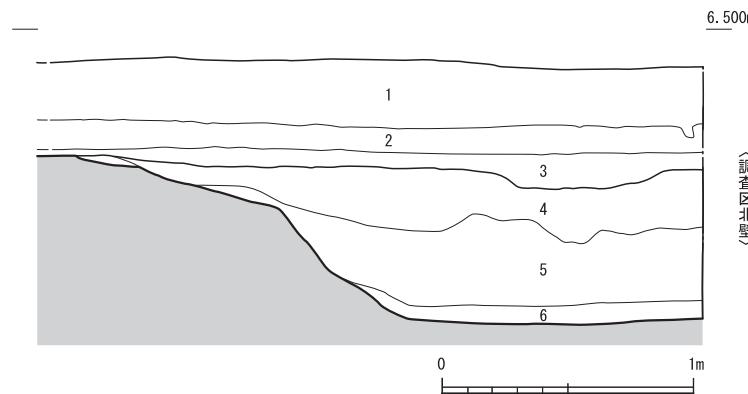
調査区中央よりやや西に位置する。長径約 0.60 m、短径約 0.30 m の橢円形を呈するピットである。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は縄文土器浅鉢片の出土が認められたが、これは下層である旧石器時代の包含層の遺物である可能性が高く、帰属年代の詳細は不明である。

**出土遺物（第 84 図）** 16 は、弥生早期下黒野式土器の浅鉢口縁部。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面明褐色、外面橙色を呈し、内面ナデ、外面はナデ後ミガキ調整で、口縁部を形成するときの指頭圧痕が認められる。

#### 性格不明遺構（SX）

##### 16SX007（第 82 図）

調査区北西端に位置する。区外へと延びるため全容は不明である。現状では南北約 3.86 m、東西約 2.40 m を測り、平面橢円形、断面は浅い段掘り状を呈する。埋土は砂質と粘質の堆積を交互に繰り返しており、調査区の北側に位置する 25SX010 と同様の性格をもつ溜井のような施設であった可能性が高い。京都系土師器・備前焼・

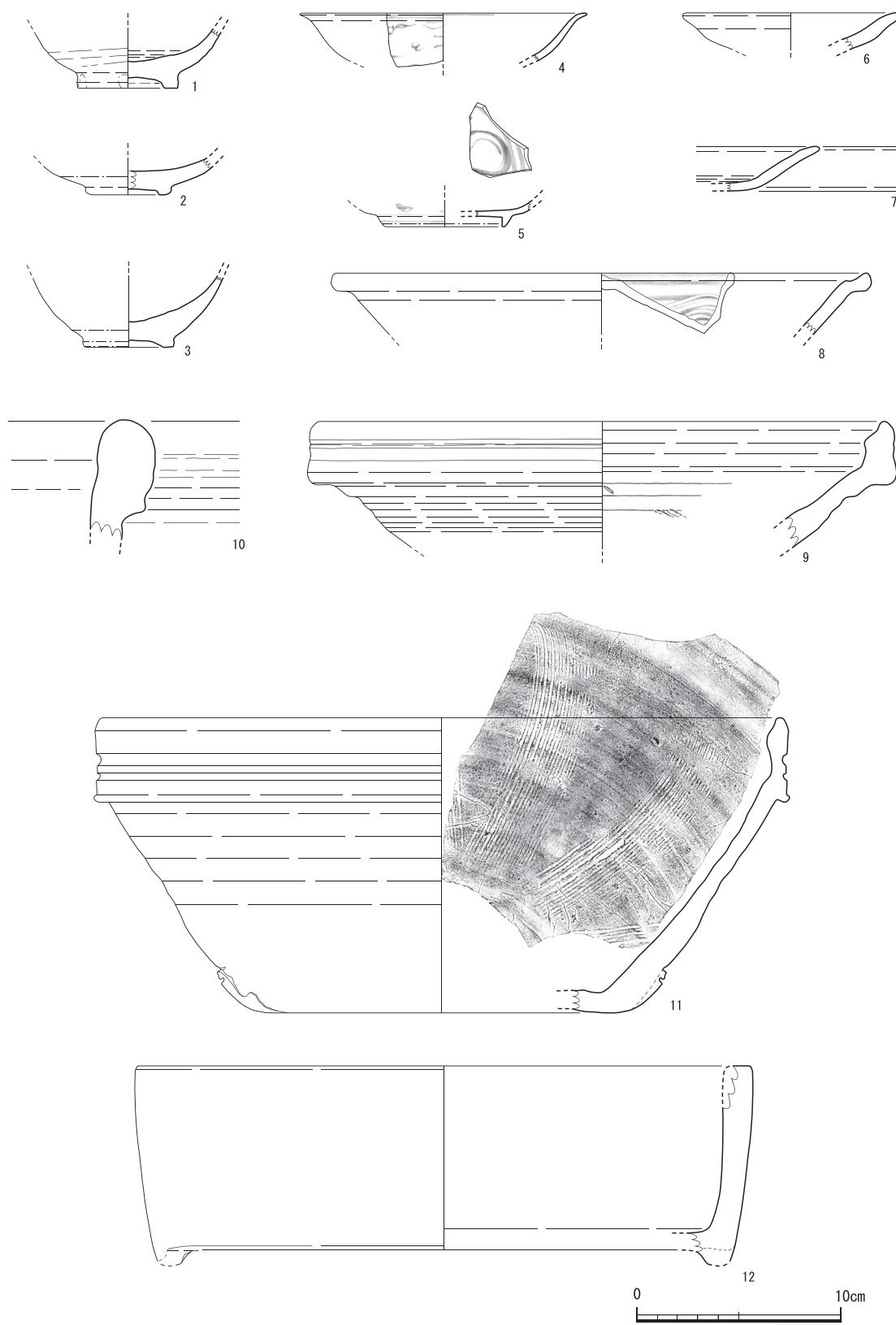


- |             |                                      |
|-------------|--------------------------------------|
| 1. 淡茶褐黑色土   | 砂質土が混入、黒褐色土ブロック1/5程度混入<br>(表土・耕作土)   |
| 2. 灰褐色粘質土   | やや砂質 (水田層)                           |
| 3. 茶褐黑色粘質土  | 黄灰褐色土粒子を多量に混入                        |
| 4. 黒褐黄灰色粘質土 | 黒褐色粘質土と黄灰褐色土と青緑灰褐色土の混土層<br>砂質土が多量に混入 |
| 5. 淡茶灰褐色粘質土 | 泥質がある、有機物が少量混入、粗い砂粒混じる               |
| 6. 淡茶灰褐色砂質土 | 粗い砂粒を多く含む                            |

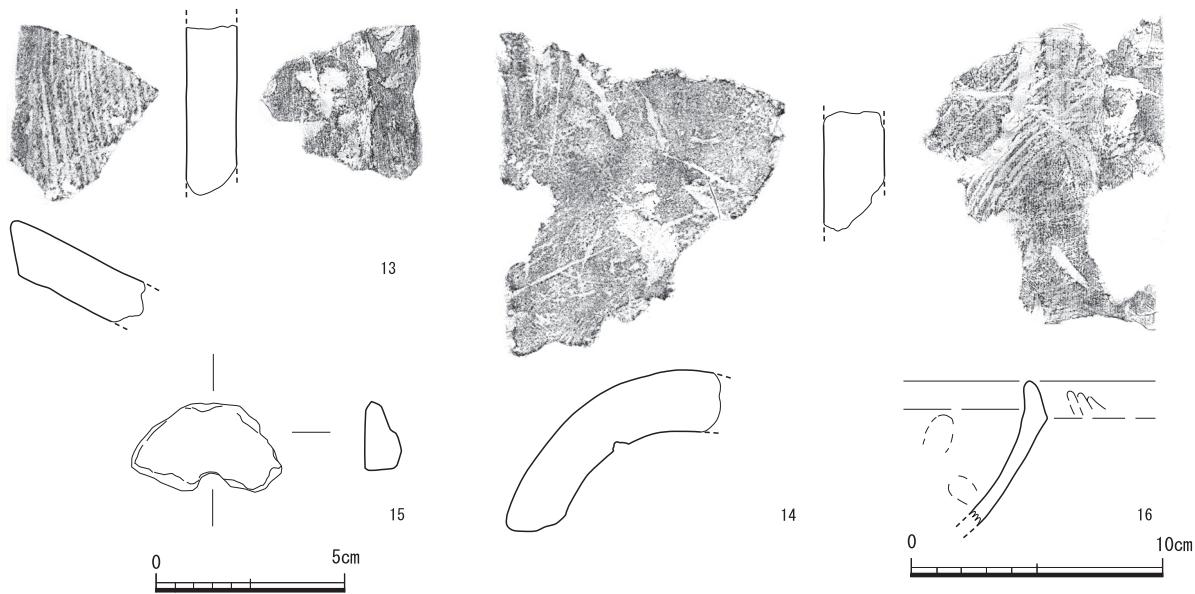
第 82 図 16SX007 土層断面実測図 (1/30)

唐津焼などが埋土中に含まれており、帰属年代は 17 世紀初頭ごろと考えられる。

- 出土遺物 (第 83・84 図) 1 は萩焼陶器碗。畳付部分は露胎で、底径約 4.8 cm を測る。
- 2 は唐津焼皿の底部で、外面底部付近露胎で底径約 3.6 cm を測る。
- 3 は唐津焼碗の底部で、内面見込み部に砂積み痕が認められる。内面施釉、外面露胎で、底径は 4.4 cm を測る。
- 4 は肥前染付皿口縁部。口径約 14.0 cm を測るもので、17 世紀中頃～後半代か。
- 5 は中国景德鎮窯系青花皿底部で、底径約 5.8 cm を測る。
- 6、7 は京都系土師器坏口縁部で、6 の口径は、約 10.6 cm を測る。
- 8 は刷毛目で文様が描かれた肥前陶器皿口縁部。時期は、18 世紀前半代。
- 9 は備前焼擂鉢口縁部で、口径約 27.6cm を測る。
- 10 は備前焼大甕の口縁部。11 は備前焼擂鉢。色調は、内外面にぶい赤褐色を呈し、口径約 33.0cm、器高 14.4 cm、底径約 17.0 cm を測る。刷毛目単位は、9 本である。
- 12 は瓦質土器の火鉢。胎土は石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面灰色を呈し、内外面工具ナデ、調整で口径約 29.8 cm、器高約 9.8 +  $\alpha$  cm、底径約 27.0 cm を測る。時期は、17 世紀前半代。
- 13 は平瓦の破片。 14 は丸瓦の破片。製作技法を見ると 17 世紀代か。
- 15 は土製品で形は紡錘車をかたどっているが、用途不明。最大幅 3.6 cm、孔径約 2.3 cm を測る。時期としては、17 世紀代と考えられる。



第83図 16SX007 出土遺物実測図 (1/3)



第84図 16SX007・SP024・056出土遺物実測図（15は1/2、その他1/3）

#### 4. 小結

本調査区では弥生時代から近世にかけての土坑、溝状遺構、性格不明遺構を確認した。

弥生時代の遺構として溝状遺構1条が確認されている。両端とも調査区外へ延長するが、西側は大道遺跡群第22次調査と隣接しているため続きを確認することができる。

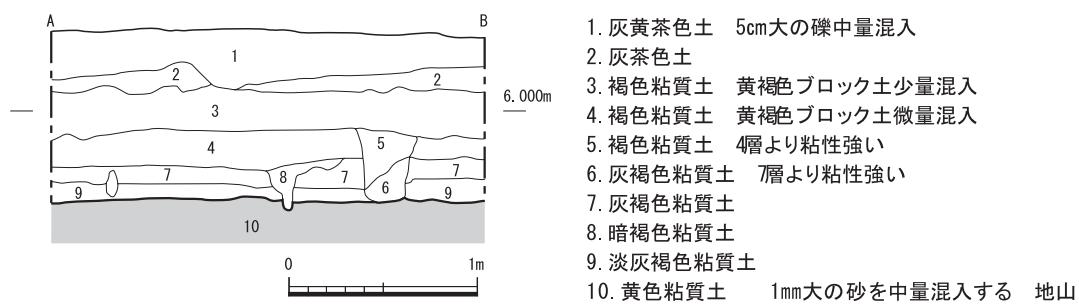
古墳時代の遺構としては底部に当該期の遺物を含む土坑が5基と性格不明遺構1基が確認されており、土坑中には素掘井戸と考えられるものも含む。土坑は深さ1.00mを切っているが、後世の削平をうけたものと考えられ、同地が当該期の集落の範囲に含まれていたことが確認できた。

近世の遺構では区画及び流路である溝4条と溜井と考えられる性格不明遺構1基、他多数の土坑を確認している。これら水利に伴う遺構群は北に隣接する大道遺跡群第25次調査区からも同様に確認されている。このことから同地では少なくとも中世段階、あるいはそれより前段階から水利施設を継続して使用し、徐々に規模を拡大していった経緯が推測される。

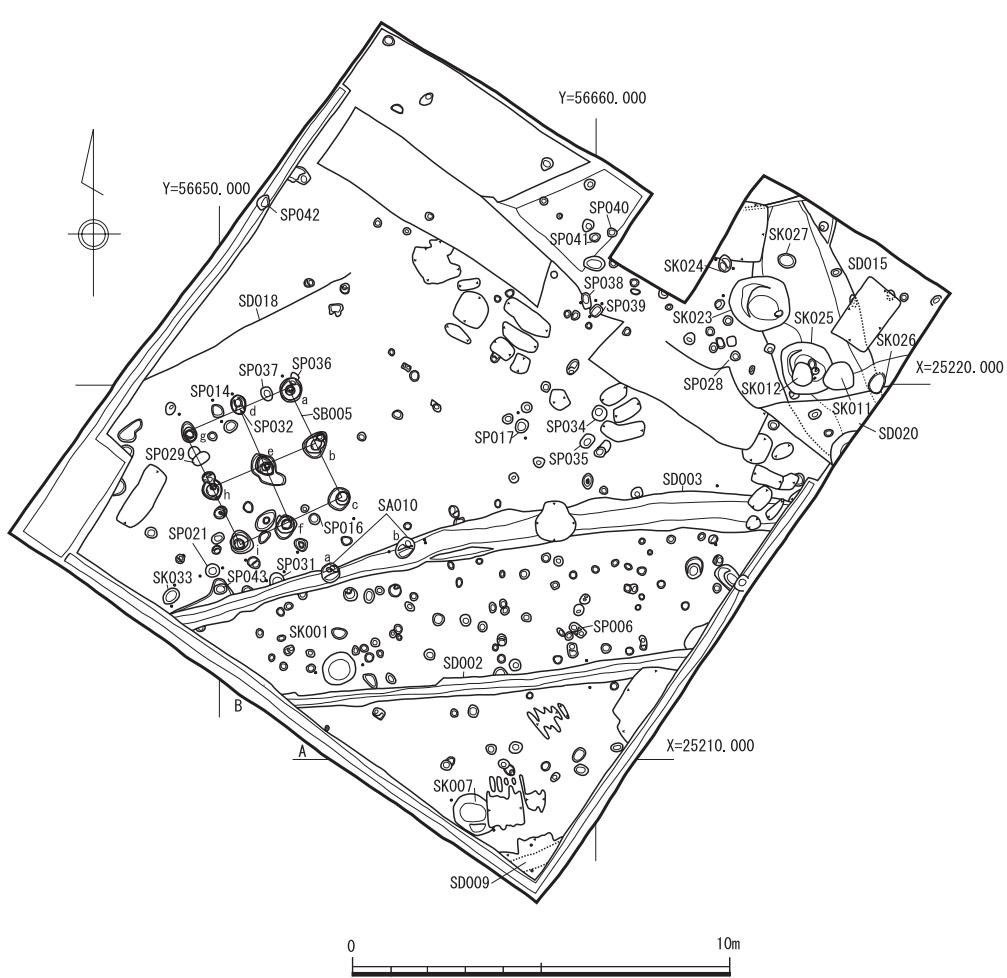
## 大道遺跡群第19次調査

### 1. 調査の概要

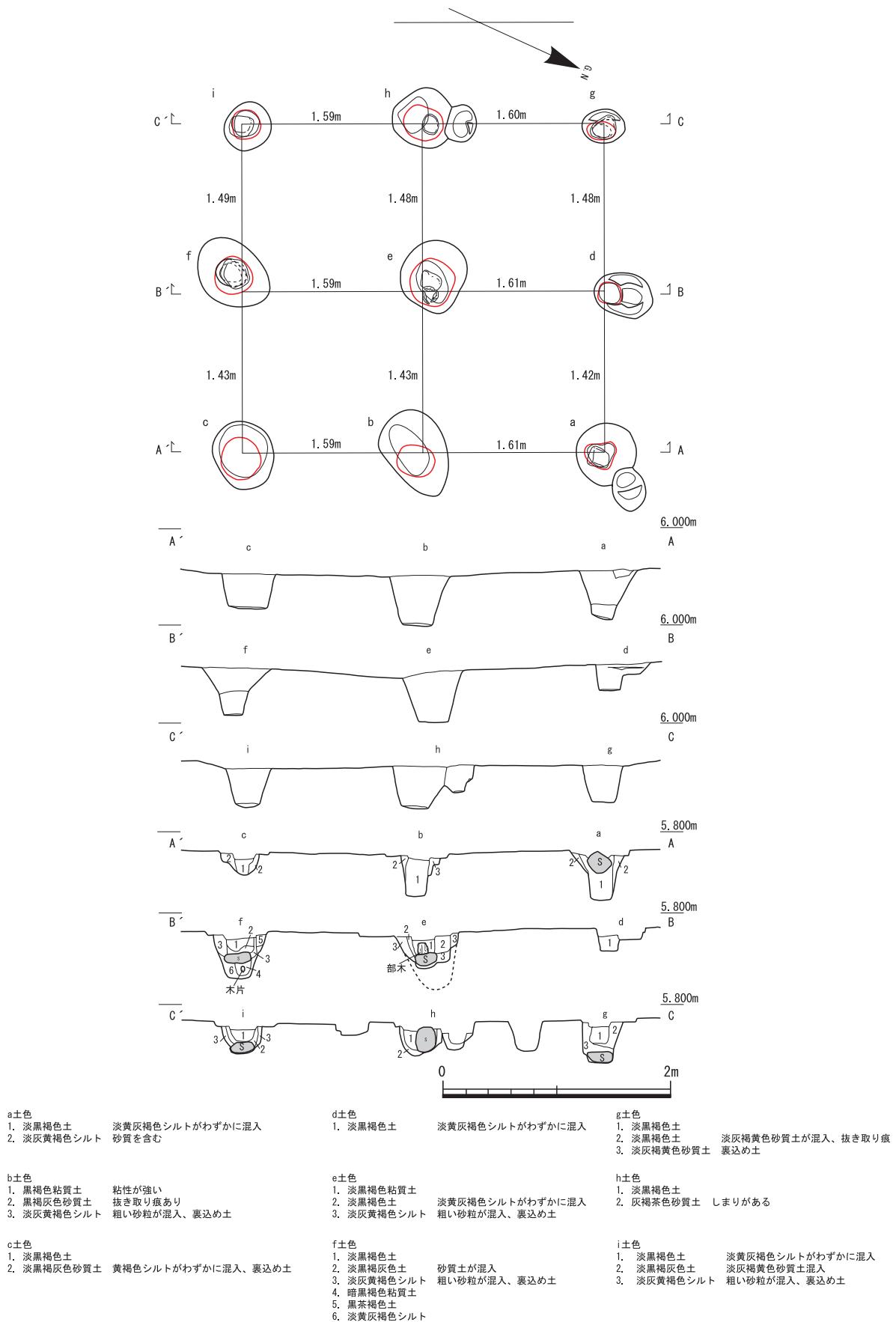
調査地は大分市金池南1丁目に所在し、上野台地北側の沖積低地に位置する。本調査は区画整理地内街路整備事業に伴い、平成18年9月15日から平成18年11月8日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は約306m<sup>2</sup>であり、当該地は大道遺跡群内の南端部分に位置する。調査の結果、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など弥生時代から近世にかけての遺構群を確認している。



第85図 大道19次調査区南壁土層断面実測図 (1/40)



第86図 大道19次調査遺構平面図 (1/200)



第87図 19SB005 平面・断面・土層断面実測図 (1/50)

## 2. 基本土層（第 85 図）

調査区は南壁土層を基本層位とする。客土である灰黄茶色土（1 層）および灰茶色土（2 層）を除くと黄褐色ブロックを含む褐色粘質土（3・4 層）が検出され、およそ 0.40 m の褐色粘質土の下部から灰褐色粘質土～淡灰褐色粘質土の安定面（7・9 層）が現れる。土層観察から遺構は第 4 層上位より確認できたが、調査区内の遺構検出状況から安全面である第 7 層での検出が確実であると判断した。安全面である第 7 層（灰褐色粘質土）の標高は約 5.70 m、本来の遺構面である第 4 層（褐色粘質土）の標高は約 5.90 m を測る。

## 3. 遺構・遺物

### 建物（SB）

#### 19SB005（第 86・87 図）

調査区南西に位置する総柱建物跡である。南北 2 間 × 東西 2 間、身舎面積は約 11.50 m<sup>2</sup> の規模を測り、柱間の総距離は桁行約 3.20m、梁行約 2.90m を測る。柱間は桁平均 1.60m、梁平均 1.45m と若干の差異が見られ、建物の主軸方向は N – 24° 62' – W である。

柱穴は長軸 0.44 ~ 0.70m 程度の不整円形を呈しており、深さは 0.20 ~ 0.50 m を

測る。全 9 基の内 6 基の底部に根締め石と思われる平石が確認できており、SB005-e からは礎石の上に柱材が直立した状態で出土している。柱となる木材の種類は不明であるが、柱材上部は均等な高さで丸みを帯びたもので、柱材を切断・加工したうえで埋め戻した可能性も考えられる。この柱穴からは古代に比定される六連島式製塩土器口縁部が出土している。このことから建物跡は古代に比定される遺構であると考えられる。

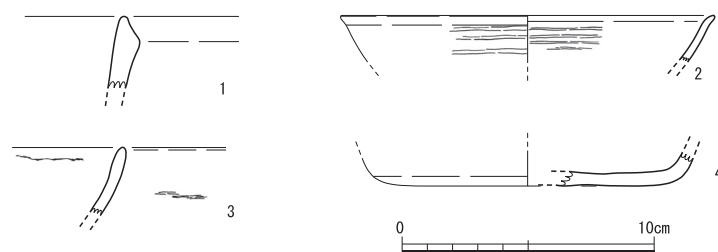
**出土遺物（第 88 図）** 1 は、製塩土器口縁部。型作りで、六連島式と呼称されるものである。内面に布目痕が残るもので、口縁部はヘラ切り調整である。

2 は、土師器坏の口縁部で内外面ミガキ a 2 が施されている。口径は約 14.7 cm を測る。

3 は、土師器坏の口縁部で、内外面ナデ調整である。

4 は、土師器坏底部。底部は手持ちヘラ切りで、内面はナデ調整である。底径約 10.4 cm を測る。

1 ~ 4 の遺物は 8 世紀中頃～9 世紀初頭に比定されるものである。



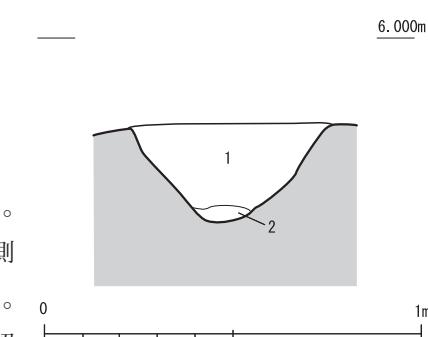
第 88 図 19SB005 出土遺物実測図 (1/3)

### 溝状遺構（SD）

#### 19SD002（第 89 図）

調査区の南に位置し、北東方向から南西方向へと延長する溝跡である。溝の両端は区外へと続き、残存東西長約 10.20m と南北幅約 0.28m を測り、溝の西端は隣接する 22SD013 と接続する。深さは約 0.28m を測る。埋土は黒褐色土と淡黄褐茶色砂質土の 2 層を検出したが、水性堆積が確認できる。古代に比定される土師器の甕が出土しており、少なくとも 8 ~ 9 世紀段階には機能していたものと考えられる。

**出土遺物（第 91 図）** 1 は、弥生土器甕口縁部。2 は、弥生土器甕口縁部。図化できるのは弥生土器甕口縁部であるが、古代に比定できる土師器坏



1. 黒褐色土（砂質土がわずかに混入）  
2. 淡黄褐茶色砂質土  
(φ1mm 大の砂粒が多量に混入)

第 89 図 19SD002 土層断面  
実測図 (1/20)

片、製塙土器破片が出土しており、遺構の時期は古代と考えられる。

#### 19SD018 (第 86 図)

調査区の北に位置し、北東方向から南西方向へと延長する溝跡である。染付片などが出土しており、近世に造成された区画溝と考えられる。

**出土遺物 (第 91 図)** 3 は、古代に比定できる製塙土器の底部であるが、近世の肥前染付けの破片が見られ、時期としては近世と考えられる。

#### 19SD020 (第 86・90 図)

調査区北東に位置し、南北方向へと延びる

溝跡であるが、調査区北壁と東壁からは区外へと延びるため全長は不明である。現存長約 7.34m、幅約 2.64m を測る。断面形状は東へ向かって深くなる不整逆台形であり、深さは最深で約 0.62m を測る。埋土は全体で 10 層を確認し、土層観察からは滯水の状況は確認できなかった。また、堆積状況より最低でも 1 回の掘り返しがなされた状況が確認できる。遺構上面にあたる黒褐色粘質土 (1・2 層) と黒灰褐色砂質土 (6 層) からは弥生土器がそれぞれ出土しており、遺構の最終的な埋没時期は弥生時代後期以降であると考えられる。

**出土遺物 (第 91・92 図)** 4 は、東北部九州系甕口縁部で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内

外面浅黄橙色を呈し、内外面ナデ調整で、口径約 26.8 cm を測る。

5 は、東北部九州系甕で、器壁は薄い。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面浅黄橙色を呈し、内ナデ、外面口縁部ナデ、胴部ハケメ調整で、口径約 25.6 cm を測る。

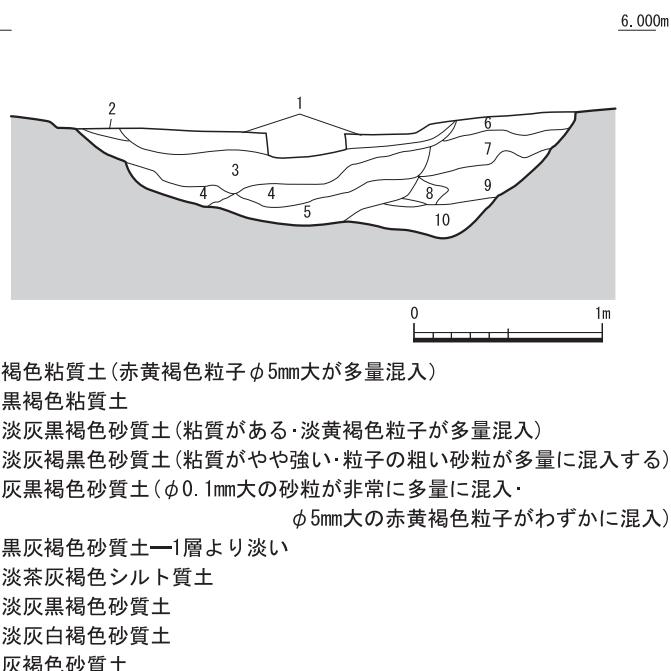
6 は、東北部九州系甕底部で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子・黒色粒子を含み、色調は内面褐色、外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整で、底径 6.2 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

7 は、角閃石安山岩製の敲石と思われるもので、幅 10.7 cm、径 7.2 cm、重さ 700g である。ただし、この石はかなり被熱を受けている事から、支柱石など別の用途も考えられる。この溝の時期は弥生時代中期に比定される。

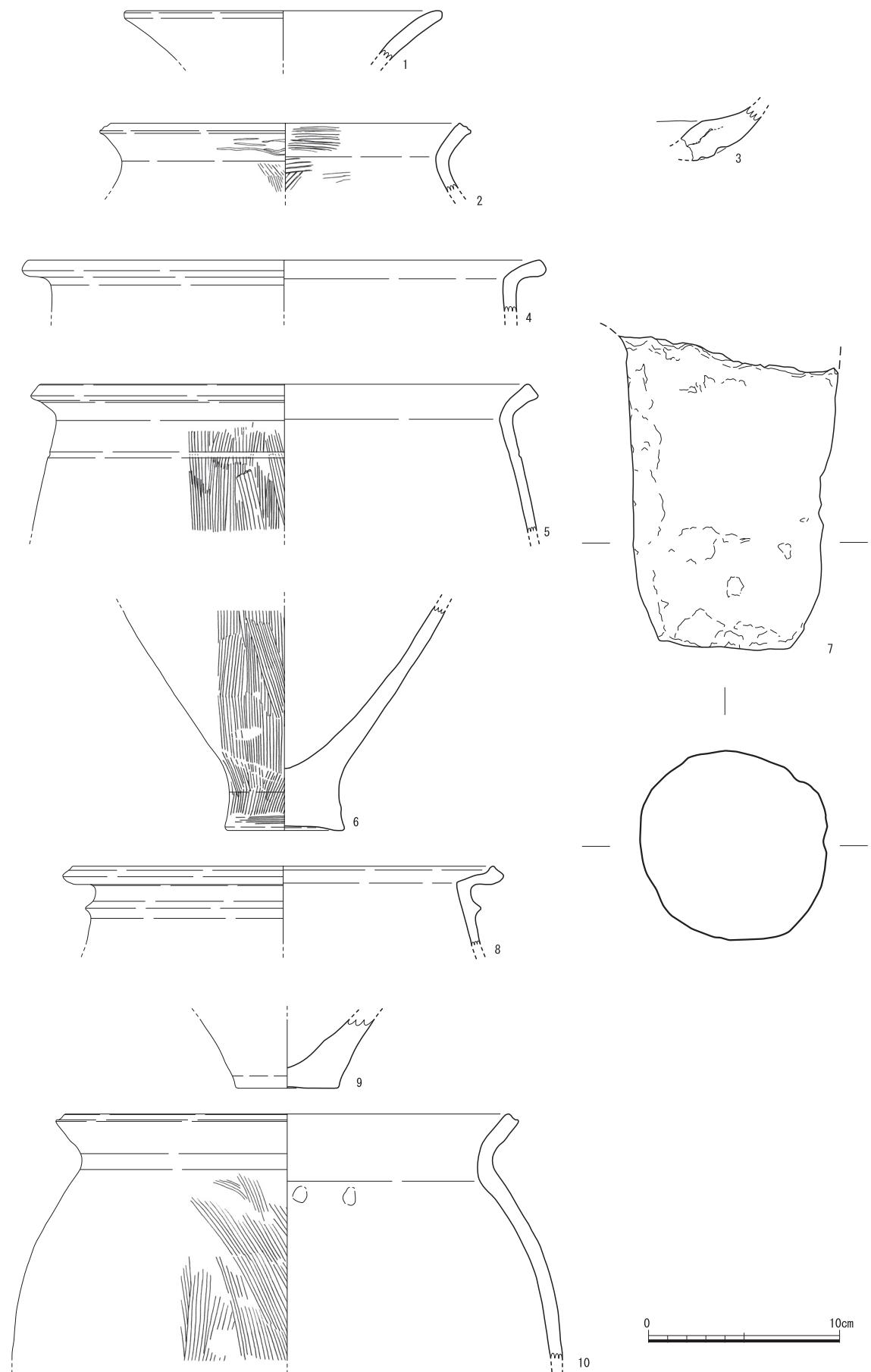
8～28 は遺構上層 (黒褐色土) からの出土遺物。8 は須玖式甕の口縁部で、頸部下に断面三角形の貼り付け帯を 1 条巡らす。口径約 23.0 cm を測る。9 は弥生土器甕底部で、底径約 5.4 cm を測る。8・9 は、弥生時代中期の遺物であり 19SD020 の溝に帰属するものである。

10 は弥生土器甕で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ調整で、口径約 23.0 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

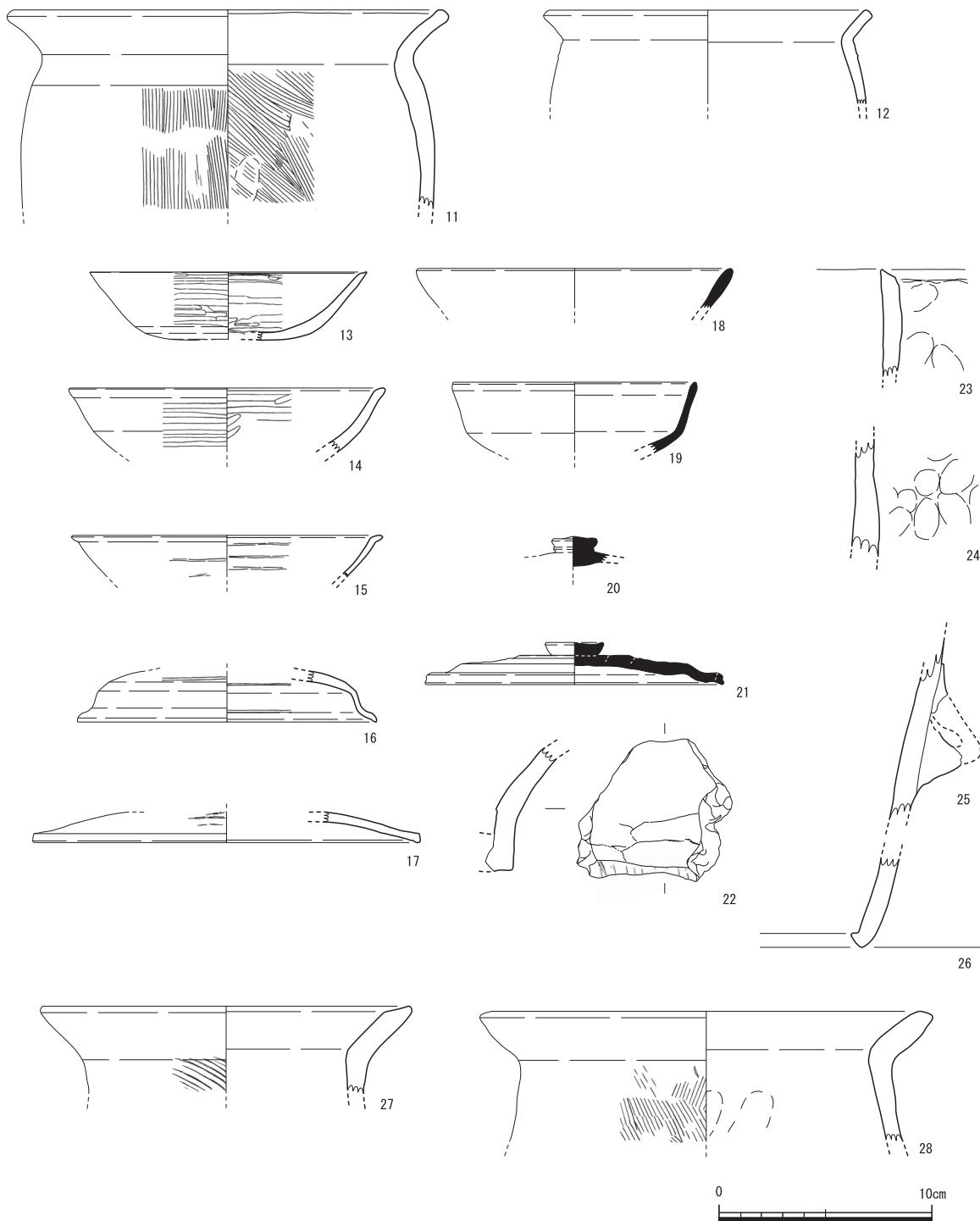
11 は弥生土器甕で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄橙色、外面灰褐色を呈し、



第 90 図 19SD020 土層断面実測図 (1/40)



第91図 19SD002・018・020出土遺物実測図 (1/3)



第92図 19SD020 出土遺物実測図 (1/3)

内外面ナデ調整で、口径約 20.2 cm を測る。10・11 は弥生時代後期と考えられることから、19SD020 を切って構築された 19SK015 に帰属すると考えられる。

12 は土師器甕口縁部で、胎土は石英・長石・角閃石を含み、色調は内面明褐色、外面橙色を呈し、内外面ナデ調整で、口径約 14.8 cm を測る。12 は、19SD020 を切って構築した 19SK015 に帰属すると考えられる。

13 は土師器坏で、口縁部先端をやや尖り気味に仕上げる。胎土は、石英・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面にぶい橙色、外面にぶい赤褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面回転ヘラミガキ調整で、内面に暗文

が見られる。口径約 13.0 cm、器高 3.2 cm を測る。

14・15 は、土師器環で、口縁部先端部が外反し、先端部は丸みを帯びるもので、内外面にミガキ a 2 調整を施している。

16 は土師器環蓋で、蓋上部と口縁部の中心部分が平行であり、端部で角度を持って曲がる器形を呈す。胎土は石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面回転ナデ調整で、口径約 14.0 cm を測る。

17 は土師器環蓋で、蓋中心部から緩やかに曲がる器形で、胎土は石英・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ調整で、口径約 18.2 cm を測る。

18・19 は須恵器環口縁部。20 は須恵器環蓋のツマミ部分で、宝珠形を呈する。21 は須恵器環蓋で、内外面回転ナデ調整で、口径約 14.0 cm、器高 2.1 cm を測る。

22 は土師器手持ち竈の底部で、胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面明赤褐色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ナデ調整。23・24 は、砲弾形をした「六連島式土器」の製塩土器の破片。

25・26 は、豊後大分型甌の把手部分及び底部。27・28 は、土師器甌で、外面に粗い縦方向のハケメを施すもので企救型甌。27・28 の口径は約 17.4 cm、20.0 cm を測る。19SD020 上層の遺物は、8 世紀末から 9 世紀初頭に比定される 1 群である。

## 土坑 (SK)

### 19SK001 (第 93 図)

調査区の南、19SD002 と 19SD003 の間に位置する土坑である。平面形は円形を呈し、断面はやや丸底の形状を呈す。南北長約 0.86m、東西幅約 0.86m、深さは約 0.51m を測る。土層はいずれも埋没時の埋土と考えられ、廃棄土坑であると推定される。高环脚部、土師器甌・壺などが出土しており、古墳時代に帰属する遺構と考えられる。

**出土遺物 (第 96 図)** 1 は、土師器の器台脚部で、胎土は石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、内外面ナデ後ミガキ調整である。

2 は、小形丸底壺の口縁部で、胎土は石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面明赤褐色を呈し、内外面ハケメ後ミガキ調整で、口径約 13.7 cm を測る。

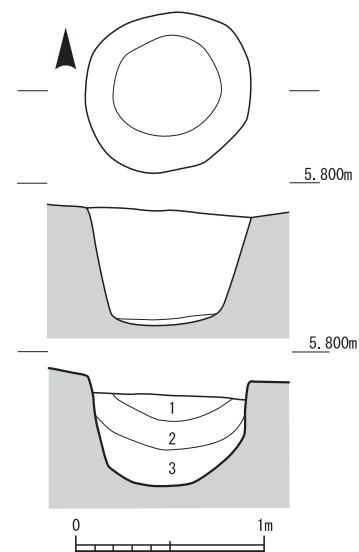
3 は、土師器壺口縁部で、口径約 15.2 cm を測る。

### 19SK011 (第 86 図)

調査区の北東に位置しており、19SK025 の東端を切る土坑である。長径約 0.40m、短径約 0.40m の不整な円形を呈しており、埋土からは企救型甌や製塩土器の破片などが出土している。出土遺物より帰属年代は 8 世紀後半から 9 世紀と推定される。

**出土遺物 (第 96 図)** 4 は、土師器甌で、外面に粗い縦方向のハケメを施すもので企救型甌。

5・6 は、砲弾形をした「六連島式土器」の製塩土器の破片。



1. 黒褐色粘質土
2. 褐黒茶色砂質土(黒褐色粘質土が少量混入)
3. 暗黒褐色砂質土(泥質土が混入)

第 93 図 19SK001 遺構・断面・土層

断面実測図 (1/40)

## 19SK015（第86図）

調査区の北端に位置する土坑であるが、区外へと広がるため全容は不明である。遺構からは企救型甕や土師器高台付壺などが出土しており、8世紀後半から9世紀ごろに帰属する遺構と考えられる。

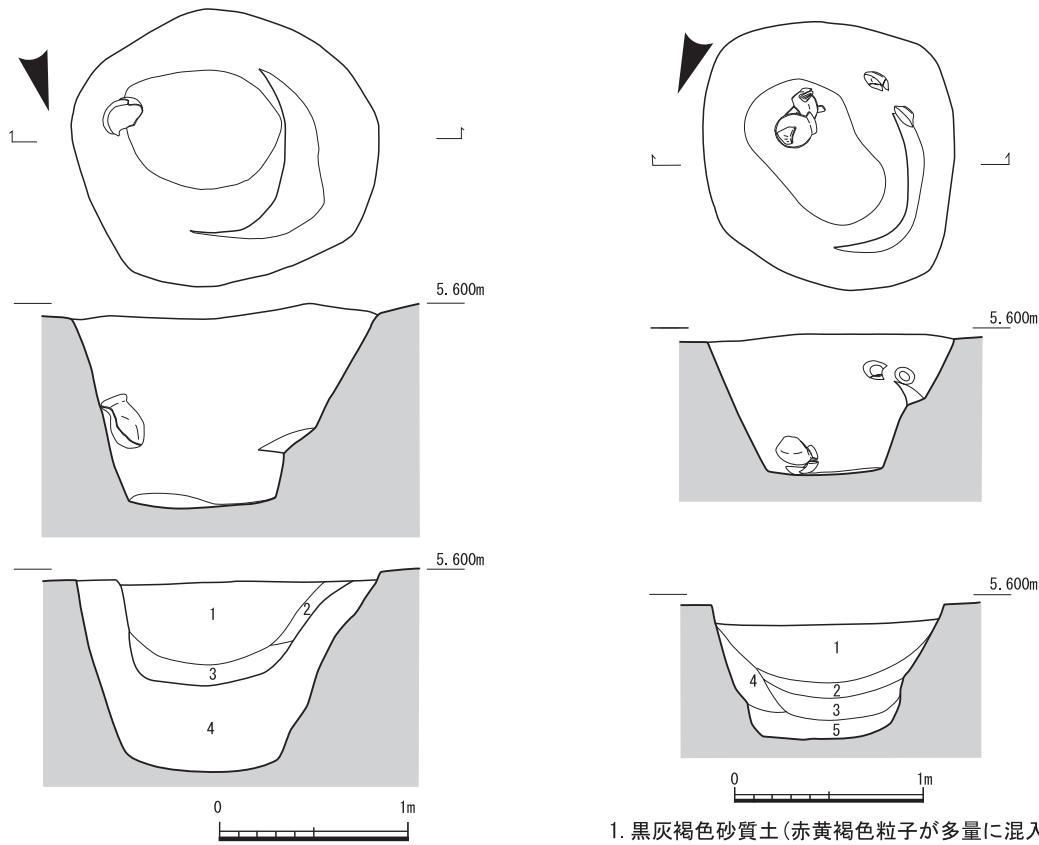
**出土遺物（第96図）** 7は土師器小形丸底壺で、胎土は長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内面赤褐色、外面橙色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面口縁部ヨコナデで胴部はハケメ・ケズリ後ナデ調整で、口径約11.4cm、器高8.4cmを測る。

8は土師器甕で、口縁部が「く」の字状に外反する器形。胎土は石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面明橙色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で、口径約16.0cmを測る。

9は弥生土器壺口縁部で、口唇部の中に1本の沈線を巡らし、その上に丸いツマミを貼り付けるもので、口径約21.6cmを測る。10は弥生土器須玖式甕で、胎土は石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面灰白色、外面浅黄橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約28.4cmを測る。

11は弥生土器甕底部。底径は、6.4cmを測る。外面に煤付着が認められる。12は土師器壺で、器形は箱型。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内外面明赤褐色を呈し、内外面回転ナデ、底部ヘラ切り調整で、口径約14.0cm器高4.0cm、底径8.5cmを測る。

13は高台壺土師器壺底部で、底径約9.5cmを測る。14は土師器甕で、外面に粗い縦方向のハケメを施すもので企救型甕の口縁部。19SK015は、19SD020を切って造られていることから、9～11は、19SD020に帰属



1. 黒灰褐色砂質土(Φ1mm大の赤黄褐色粒子を多量に混入)
2. 黒灰褐色砂質土(1層よりやや暗い)
3. 暗黒褐色粘質土
4. 暗灰色粘質土 遺物混入

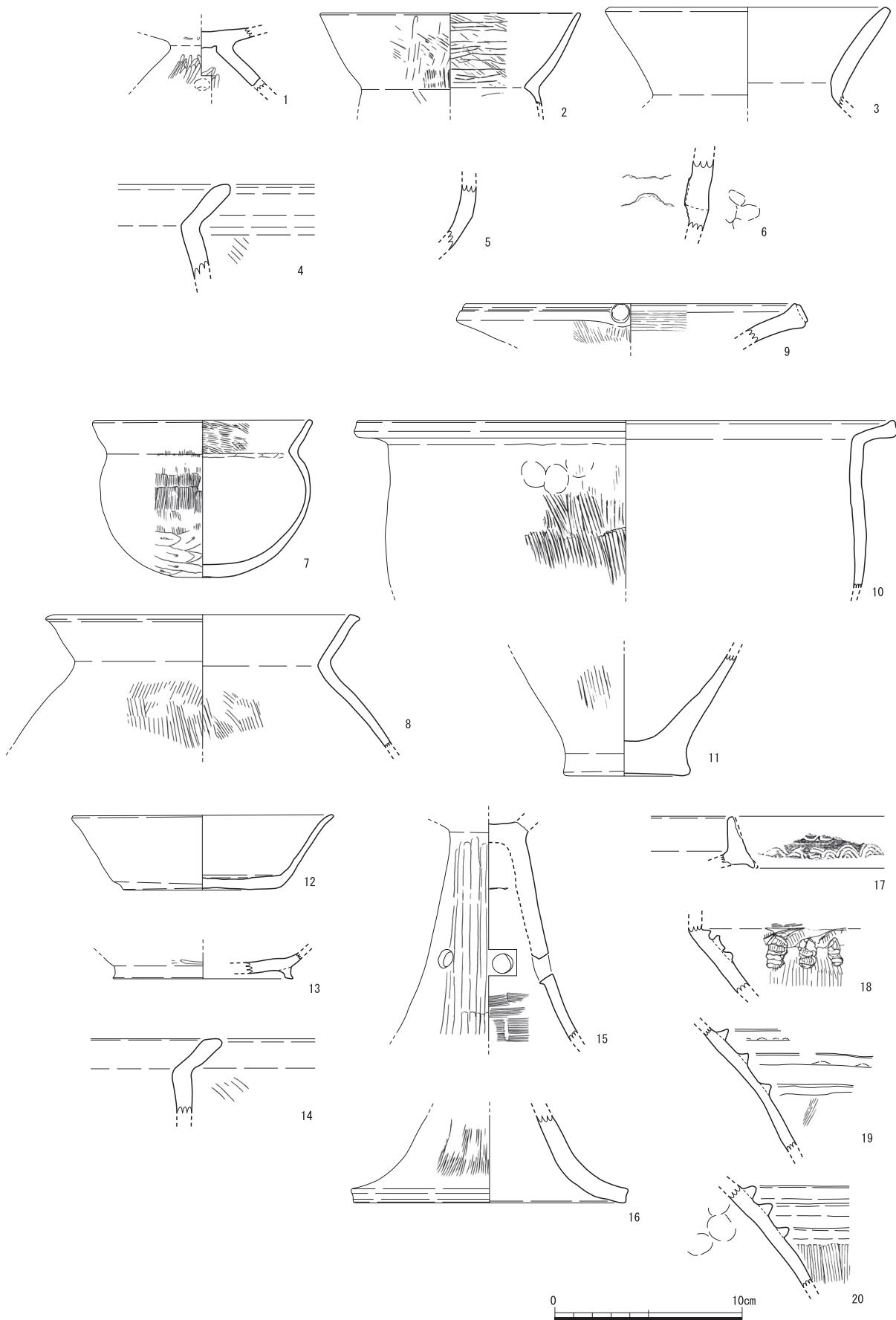
第94図 19SK023 遺構・断面・土層断面

実測図 (1/40)

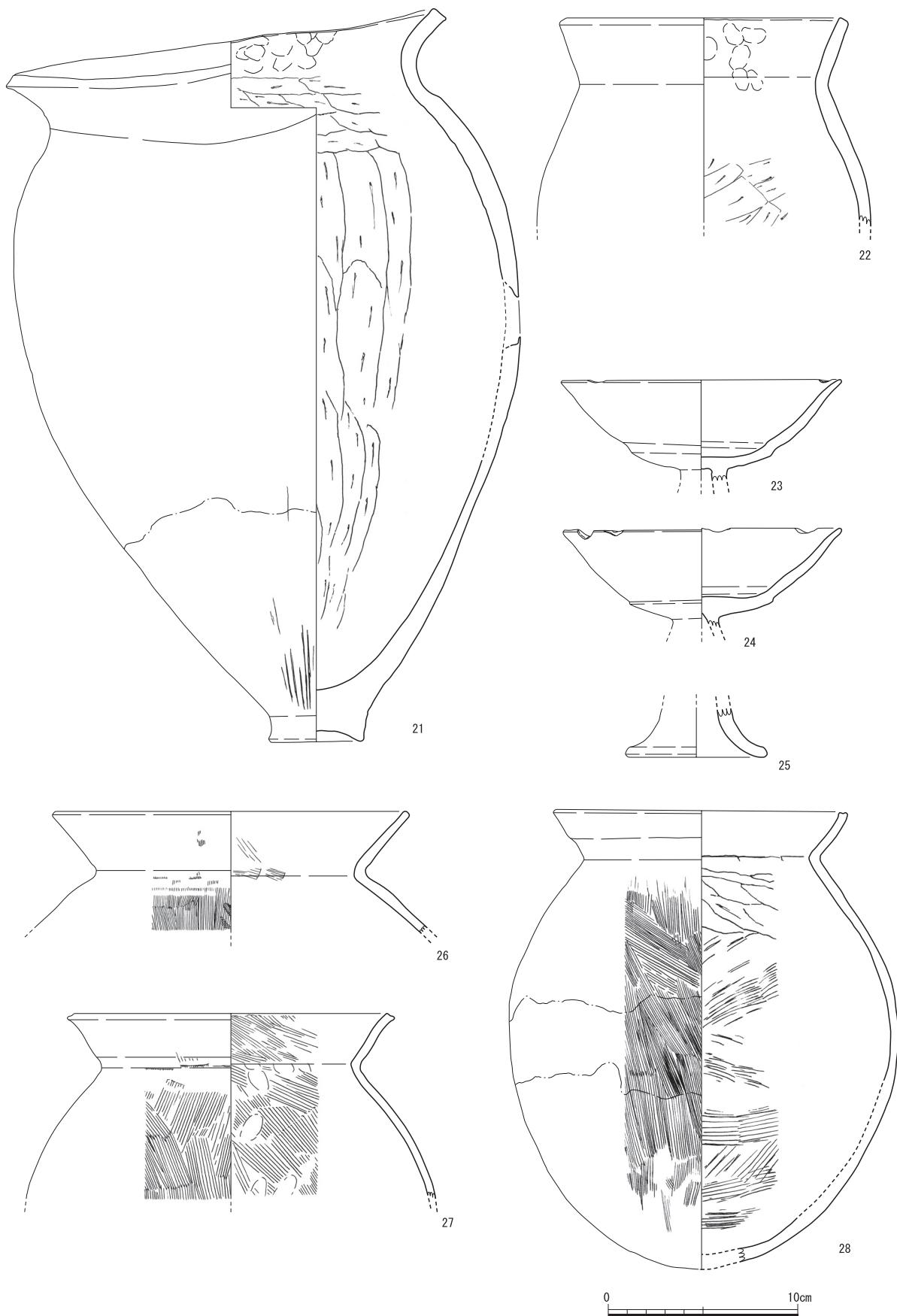
1. 黒灰褐色砂質土(赤黄褐色粒子が多量に混入)
2. 暗黒褐色粘質土(淡灰褐色砂質土がわずかに混入)
3. 暗黒褐色泥質土(Φ0.1mm大の砂粒が多量に混入・淡灰白褐色シルトが水性堆積する)
4. 淡黒灰褐色泥質土(Φ1mm大の砂粒が多量に混入)
5. 茶褐色泥質土(Φ1mm大の砂粒が多量に混入)

第95図 19SK025 遺構・断面・土層断面

実測図 (1/40)



第96図 19SK001・004・011・015・023出土遺物実測図 (1/3)



第97図 19SK023・025出土遺物実測図 (1/3)

する遺物で弥生時代中期。12～14は、古代の遺物で19SD020上層に帰属する遺物であり、古墳時代初頭が19SD015本来の構築時期と考えられる。

#### 19SK023（第94図）

調査区北東に位置し、19SD020を切る大型土坑である。平面はやや不整な円形、断面形状は歪な逆台形を呈する。長径約1.62m、短径約1.45m、深さ約1.00mを測る。埋土からは弥生土器の甕、高坏、壺などが出土しており、弥生時代に帰属する遺構であると考えられる。

**出土遺物（第96・97図）** 15は、弥生土器高坏脚部で、胎土は長石・角閃石・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面縦方向のミガキ調整で脚部下付近に穿孔を5箇所、2段にわたって施している。外面に赤色顔料塗布が認められる。

16は高坏脚部で、緩やかに外反する器形で、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で、底径約14.4cmを測る。外面に赤色顔料塗布が認められる。17は弥生土器複合口縁壺の口縁部で、外面に波状文が認められる。

18～20は弥生土器複合口縁壺の頸部で、弥生時代後期中葉～後葉に比定できる。21は弥生土器甕で、内面は、ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径23.6cm、器高38.7cm、底径5.0cmを測る。

22は弥生土器壺で、胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ・ケズリ、外面ミガキ風ナデ調整で、口径は、約14.4cmを測る。19SK023の時期は、これらの遺物から弥生時代後期中葉～後葉に比定できる。

#### 19SK025（第95図）

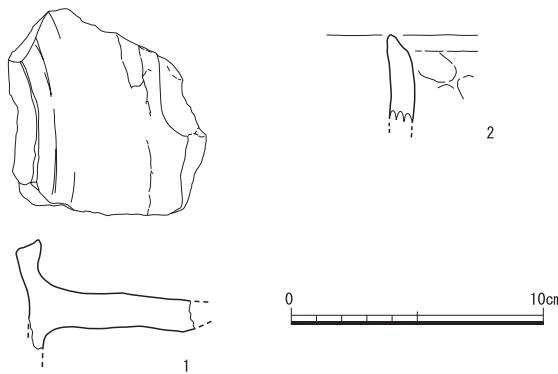
調査区北東に位置する大型土坑である。弥生時代に帰属する19SD020を切るが、古代に帰属する19SK011に切られる。平面は不整な隅丸方形を呈しており、断面は逆台形を呈する。長径約1.60m、短径約1.42m、深さ約0.75mを測る。土層からは暗黒褐色泥質土（3層）において水性堆積が認められるが、19SD020の埋土が混層している可能性も考えられる。埋土からは古墳時代の高坏や甕が出土しており、帰属年代は古墳時代前期ごろと推定される。

**出土遺物（第97図）** 23・24は、土師器高坏環部である。口縁部2段目が1段目より2倍以上長く、外反する器形で、23・24の口径は約14.8cmを測る。25は土師器高坏の底部で、底径約7.2cmを測る。

26は土師器甕で口縁部が「く」の字状に外反する器形。胎土は長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は内面浅黄橙色、外面橙色を呈し、口縁部ハケメ後ナデ、胴部ケズリ後ナデ調整で口径約18.2cmを測る。

27は土師器甕で口縁部が「く」の字状に外反する器形。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面明赤褐色、外面明褐色を呈し、内面口縁部はハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約16.5cmを測る。外面に煤付着が認められる。

28は土師器甕で布留系の甕を意識してつくられている。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面黄橙色を呈し、内面口縁部ナデ、胴部ケズリ・ハケメ後ナデ調整で口径約14.9cm、器高24.9cmを測る。外面に煤付着が認められる。19SK025の時期は、古墳時代初頭に比定できる。



第98図 大道19次 表採出土遺物実測図（1/3）

**表採遺物（第98図）** 1は、土師器手持ち竈の口縁部と底部分。2は、砲弾形をした「六連島式土器」の製塙土器の口縁部。口縁部はヘラ切りである。1・2ともに古代に比定できる遺物である。

#### 4. 小結

本調査区では弥生時代、古墳時代、古代、近世にかけての遺構群を確認した。

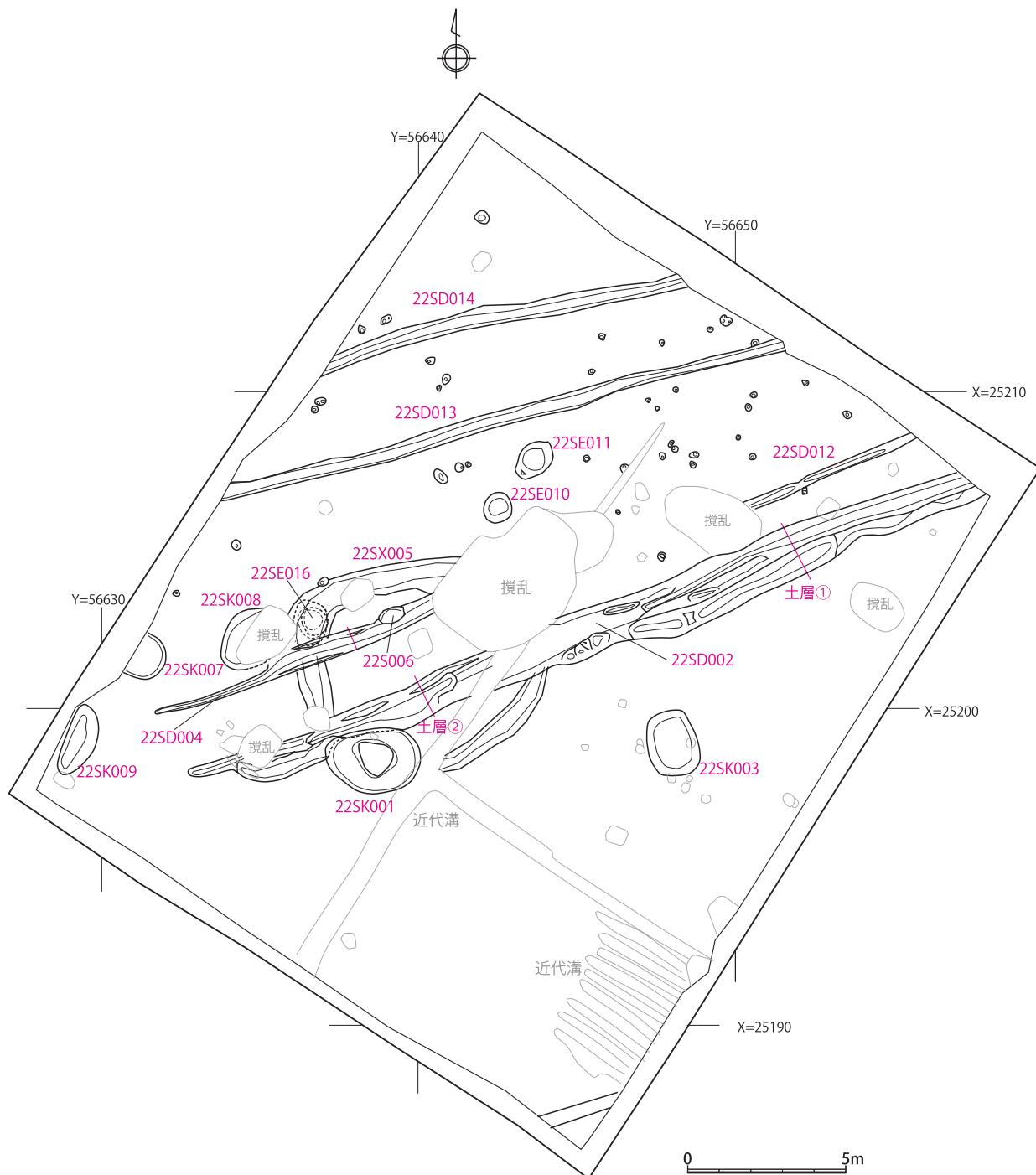
弥生時代中期から後期に比定される溝跡（19SD020）は区外へと延長し、南東に隣接する10次調査B区の溝へと繋がると想定される。またこれにほぼ直交するかたちで19SD003が南北方向へと延びており、19SD020と同様、弥生時代中期から後期にあたる時期に水路として存在した可能性が考えられる。19SD020の上層からは古墳時代に比定される19SK025が検出され、19SD020の埋没後に掘り込まれたものであることがわかつている。

古代に比定される遺構で確認された建物跡は1棟のみである。北東部には搅乱が多く見られることから、建物跡が存在した可能性は残るが、南西部では本調査において建物跡が存在していた痕跡は見られない。溝跡（19SD002、19SD009）は弥生時代に比定される溝跡にほぼ並行しており、建物跡（19SB005）も溝跡に沿うかたちで配置している。一方で調査区北東部では新たな安定面が形成され、19SK025を切る19SK011、19SK015・023が造成される状況を呈する。同様の堆積は南東に隣接する大道遺跡群第10次調査でも確認されており、このことから調査区における弥生時代から古代にかけての集落および生活空間の形成が以前からの地割を踏襲していた状況が推測される。

## 大道遺跡群第22次調査

## 1. 調査の概要

第22次調査地点は、第19次調査の南側、および第16次調査の東側に隣接する地点である。当初、平成19年度はじめに家屋の移転・解体が完了した後、区画街路工事が着工されるまでの間を調査期間として発掘調査を実施する予定であった。しかし、平成19年度から実施された発掘調査にかかる業務委託の契約締結が予定よりも大幅に遅れたことにより調査の着手が遅れ、調査時期が梅雨末期にあたってしまい、実質的な調査期間が10



第99図 大道22次調査区遺構平面図 (1/200)

日間程度しかとれない事態に追い込まれた。

平成21年7月2日に調査開始したものの、梅雨末期の雨が続いたため本格的な表土剥ぎ開始は7月12日となり、7月14日から人力による掘削を開始、7月21日に全景写真の撮影を行って調査を終了した。こうした調査期間の圧縮と、天候の不順のため、井戸等の遺構の掘り下げにおいて湧水による崩落等が発生するなど、不十分な調査となったことは否めないが、弥生時代中期、古墳時代前期および古代の遺構を検出することができた。

## 2. 基本土層

隣接する第16次・19次調査と同様に近現代の水田土層直下が遺構検出面である。おそらく、昭和初期に実施された耕地整理により0.50m～1.00mもの大幅な削平を被っていると推定され、このため、比較的深い井戸においても検出面からの深さが1.00mを超えない。遺構が検出される基盤土層は、黄灰色細砂層であり、北端部のみ暗褐色粘質土層であった。これらの土層は、当該地域における通常の基盤層である黄灰色シルト質土層よりも下位にある基盤土層であり、先述した削平の結果とみられる。

## 3. 遺構・遺物

### 井戸跡 (SE)

#### 22SE010 (第99・100図)

調査区中央部で検出された遺構である。長軸1.00m、短軸0.90mのやや不整な円形を呈し、検出面からの最大深は約0.70mであるが、調査中の崩落が著しく、下底部の確認はできなかった。黒褐色土を基調とする埋土により埋積している。下底部は黄褐色土ブロックおよび炭化物を含む。標高5.50m付近以下には激しい湧水が認められ、そのためか、壁面の一部にオーバーハンプが認められる。井筒は検出されていないが井戸の可能性が高いと思われる。下底部付近から、完形の土師器小形丸底壺が出土しており、何らかの祭祀行為が行われたとみられる。出土遺物から、古墳時代前期に位置づけられる。

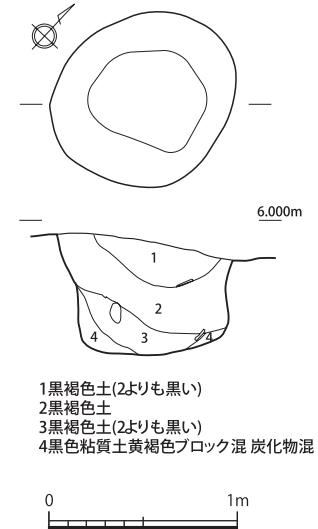
**出土遺物 (第101・102・103図)** 1は土師器碗で胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面明褐色で、内面ナデ、外面ケズリ後ナデ調整で、口径9.6cm、器高5.0cmを測る。口縁部付近に指頭圧痕が、外面に黒斑が認められる。

2は土師器碗で、胎土は長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色で、内面ナデ後ミガキ、外面ケズリ、ハケメ後ナデ・ミガキ調整で、口径14.0cm、器高4.9cmを測る。

3は土師器高杯の杯部で、口縁部に向かってなだらかに外反し、端部は丸く仕上げる。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面明赤褐色で、内面ハケメ後ナデ後縦方向のミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約20.0cmを測る。4は土師器小形丸底壺で、胎土は長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面橙色で、内面ヨコナデ、外面ハケメ後ナデ後横方向のミガキ調整で、口径約11.6cm、器高6.1cmを測る。

5は土師器小形丸底壺で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面橙色で、外面にぶい橙色を呈し、内面ナデ後縦方向のミガキ、外面横方向のナデ調整で、口径約12.6cmを測る。

6は土師器小形丸底壺で、口縁部が直高気味に立ち上がり端部は丸く収める。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面明褐色で、内面ナデ後ミガキ、外面ナデ後ミガキ調整で、口径約10.2cm、器高10.3cmを測る。7は土師器小形丸底壺で、器壁が厚く、口縁部が欠失している。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色で、内面ハケメ後ナデ・底部は指ナデ、外面ハケメ後ナデ調整である。外面に黒斑が認められる。

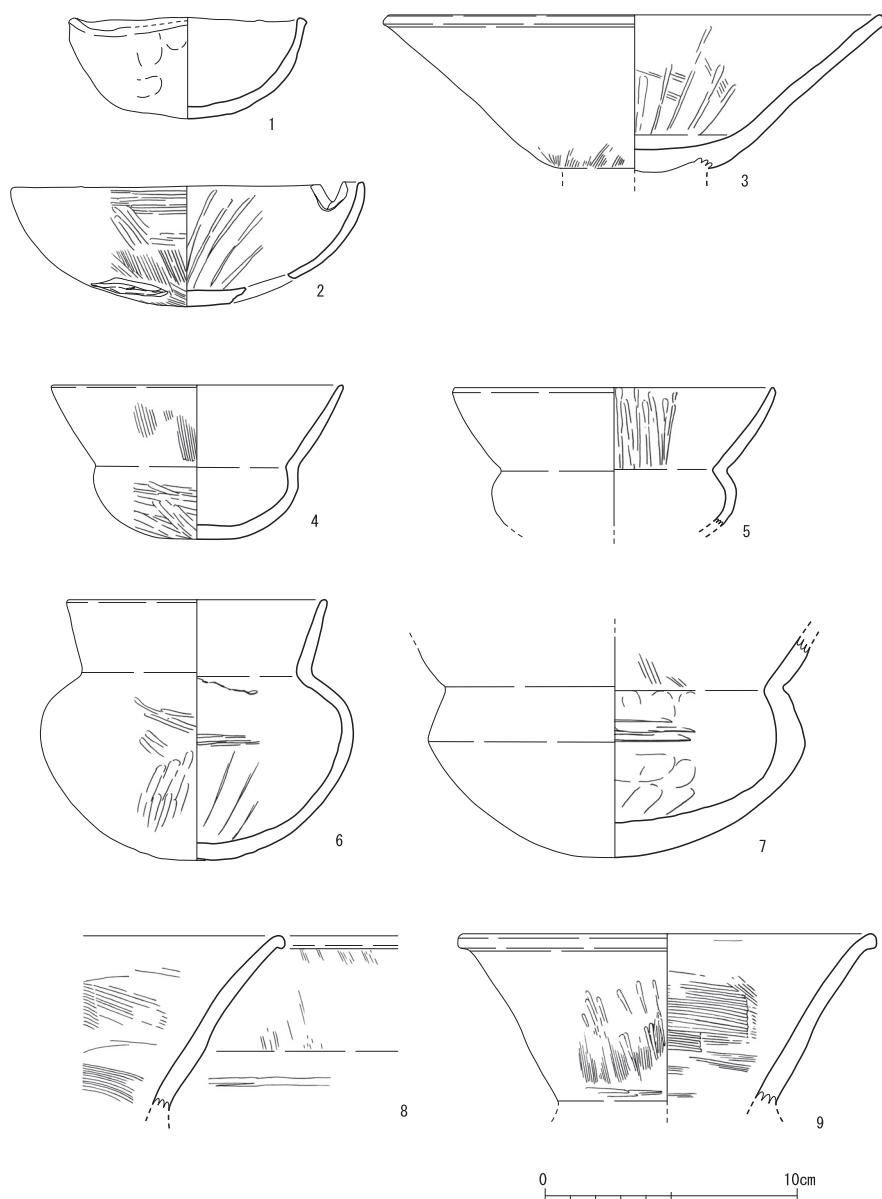


第100図 22SE010 平面・  
土層断面実測図 (1/40)

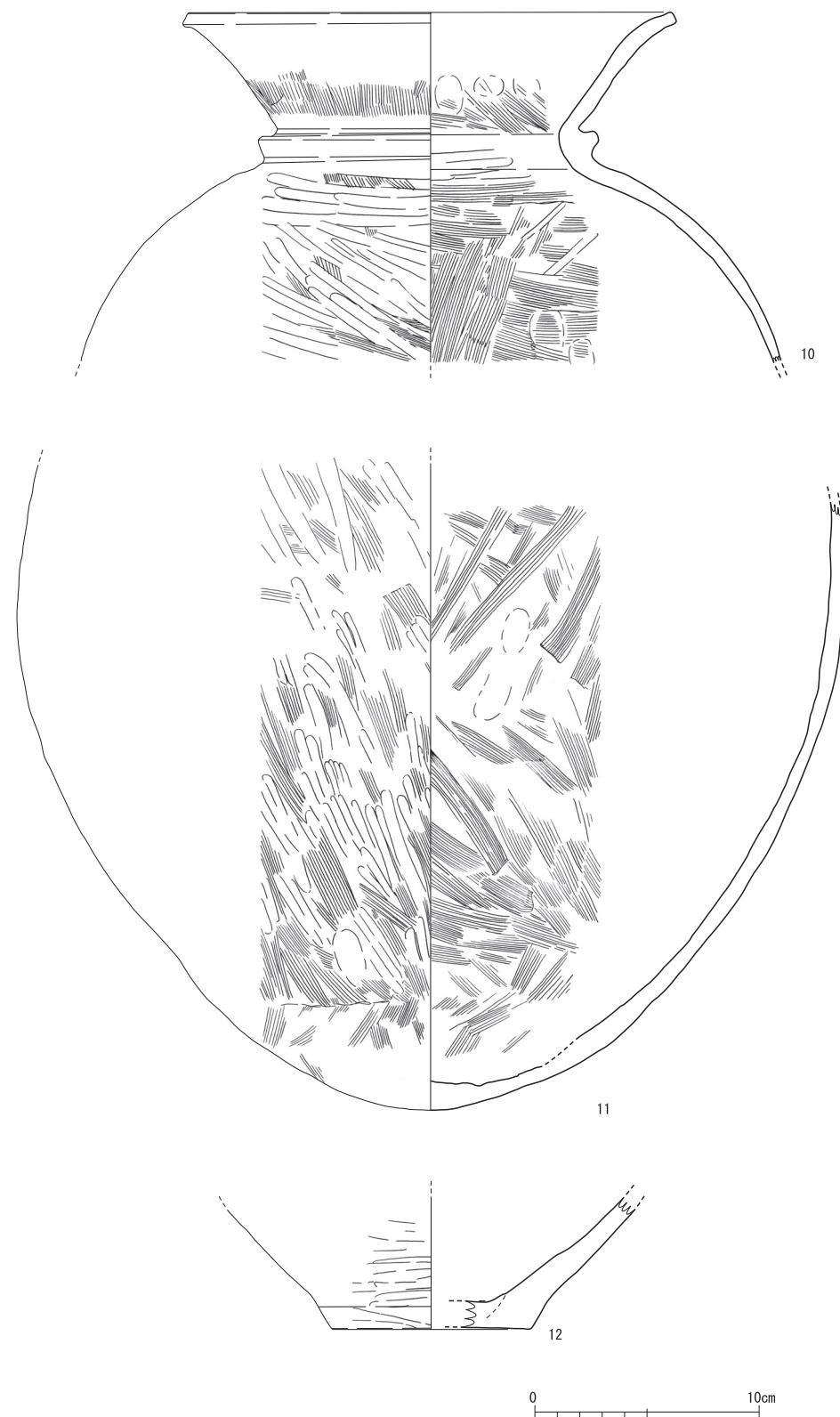
8・9は土師器壺口縁部。口縁端部にかけ外反し、端部は外側に丸く收める。9の胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面暗赤褐色、外面黒褐色で、内面ハケメ後ヨコナデ、外面ハケメ後ナデ後縦方向のミガキ調整である。口径約16.2cmを測る。

10・11は同一個体と考えられる壺である。頸部に断面三角形の突帯を1条巡らすもので、胎土は長石、角閃石、白色粒子を含み、色調は内面明黄褐色、外面明赤褐色で、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ後ナデ後ミガキ調整で、口径約16.2cm、器高34.4+ $\alpha$ cmを測る。外面に煤付着が認められる。12は弥生土器壺底部。弥生時代前期末から中期初頭と考えられるもので、内面ナデ、外面ミガキ調整である。22SE010の時期には帰属しない。13・14・15は土師器甕の口縁部。15の口径は約18.6cmを測る。

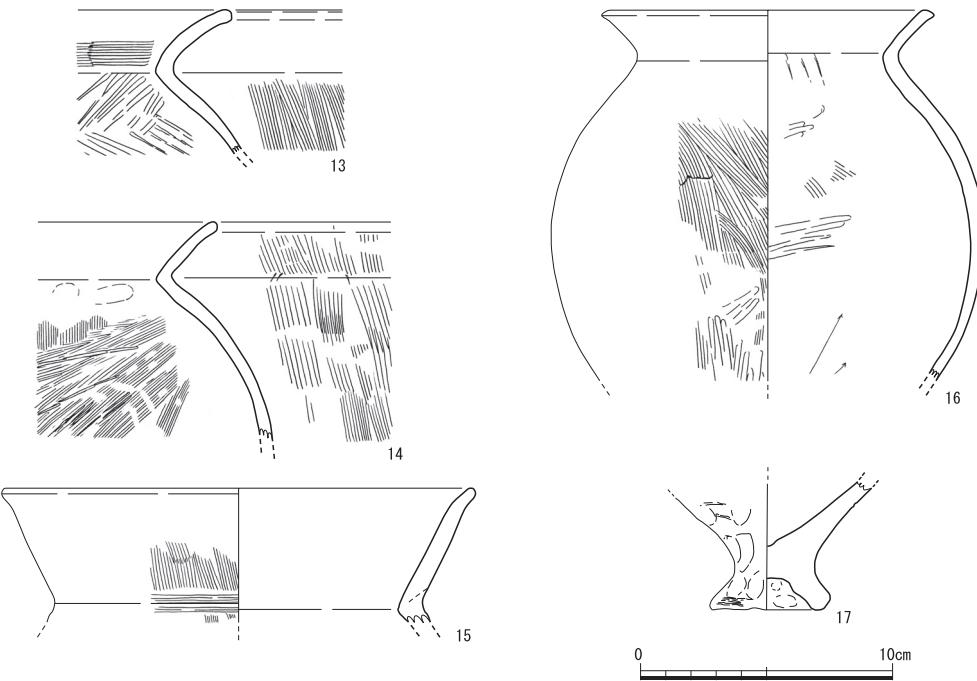
16は土師器甕で、胎土は、長石、角閃石、白色粒子を含み、色調は内面褐色、外面橙色で、内外面ハケメ後ナデ後ミガキ調整で、口径約10.6cmを測る。外面に黒斑が認められる。17は備讃系の製塩土器脚部。胎土は、石英・雲母・赤色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色を呈し、内面ナデ、外面指オサエ調整で、底径4.6cmを測る。外面上部に一部タタキ痕が認められる。



第101図 22SE010出土遺物実測図① (1/3)



第102図 22SE010 出土遺物実測図② (1/3)



第103図 22SE010出土遺物実測図③ (1/3)

22SE011 (第99・104図)

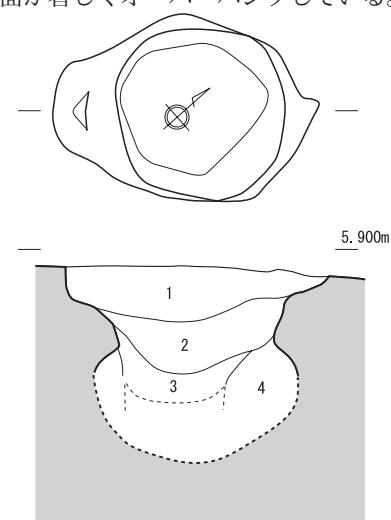
調査区中央部で検出された遺構である。長軸 1.40m、短軸 1.00m の楕円形状を呈し、検出面からの最大深は約 1.00m であるが、調査中の崩落が著しく、下底部の確認はできなかった。黒褐色砂質土を基調とする埋土により埋積している。下底部は炭化物を含む。標高 5.50m 付近以下には激しい湧水が認められるが、遺構が機能していた当時も同様な湧水があったと考えられ、遺構の下半部は崩落し、壁面が著しくオーバーハンプグしている。井筒は確認できていないが、土層堆積状況から、井筒が埋置されていた可能性が高く、井戸と考えられる。出土遺物は僅少であるが、古墳時代前期に位置づけられる土器が出土していることから、当該期に位置づけられる可能性が高い。

22SE016 (第99・105図)

調査区中央部西寄りで検出された遺構である。長軸 1.40m、短軸 1.10m のやや不整な円形を呈し、検出面からの最大深は約 1.00m であるが、調査中の崩落が著しく、下底部の確認はできなかった。黒褐色土を基調とする埋土により埋積している。標高 5.20m 付近より直径約 0.80 ~ 0.90m の部分が一段深く掘り下げられており、この部分に特に激しい湧水が認められたことから、井戸の可能性が高い。湧水のため東側壁面の一部にオーバーハンプグが認められる。井筒は検出されていない。出土遺物から、古墳時代前期に位置づけられる。

**出土遺物 (第106・107図)** 1 は土師器碗で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面明赤褐色、外面橙色で、内面はハケメ後ナデ、底部は指ナデ、外面はハケメ後ナデ調整である。外面に黒斑が認められる。

2 は土師器台付き丸底壺。器台の上に丸底壺を乗せたイメージで形作ら



- 1 黒褐色土  
2 黒褐色土 (1よりも黒い)  
3 黒色土 粘質  
4 黒色土 粘質 炭化物を含む

湧水と崩落が激しい為、下層は不明。

第104図 22SE011平面・土層断面実測図 (1/40)

れている。胎土は角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面暗褐色で、外面にぶい褐色、内面はハケメ後ナデ、外面はナデ後ミガキ調整で、口径 11.8 cm、器高 12.0 +  $\alpha$  cm、底径 11.4 +  $\alpha$  cm を測る。外面に若干の黒斑が認められる。

3 は土師器高環底部で、内面はハケメ・ナデ、外面はナデ後縦方向のミガキ調整で、4ヶ所の穿孔を施している。底径は、約 20.0 cm を測る。4 は土師器壺口縁部。口縁部がやや内側に内湾しながら立ち上がる器形で、口径約 12.0 cm を測る。

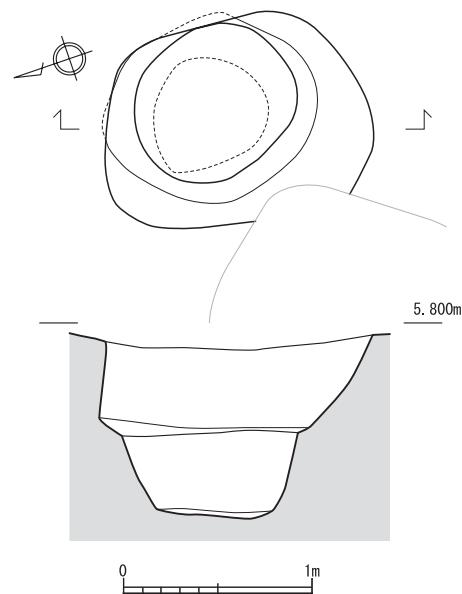
5 は安国寺系の複合口縁壺で、胎土は石英・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面赤褐色で、外面褐色、内面はハケメ後ナデ、外面はハケメ調整で、口径 11.5 cm を測る。

頸部等粘土接合部に、指頭圧痕が認められる。

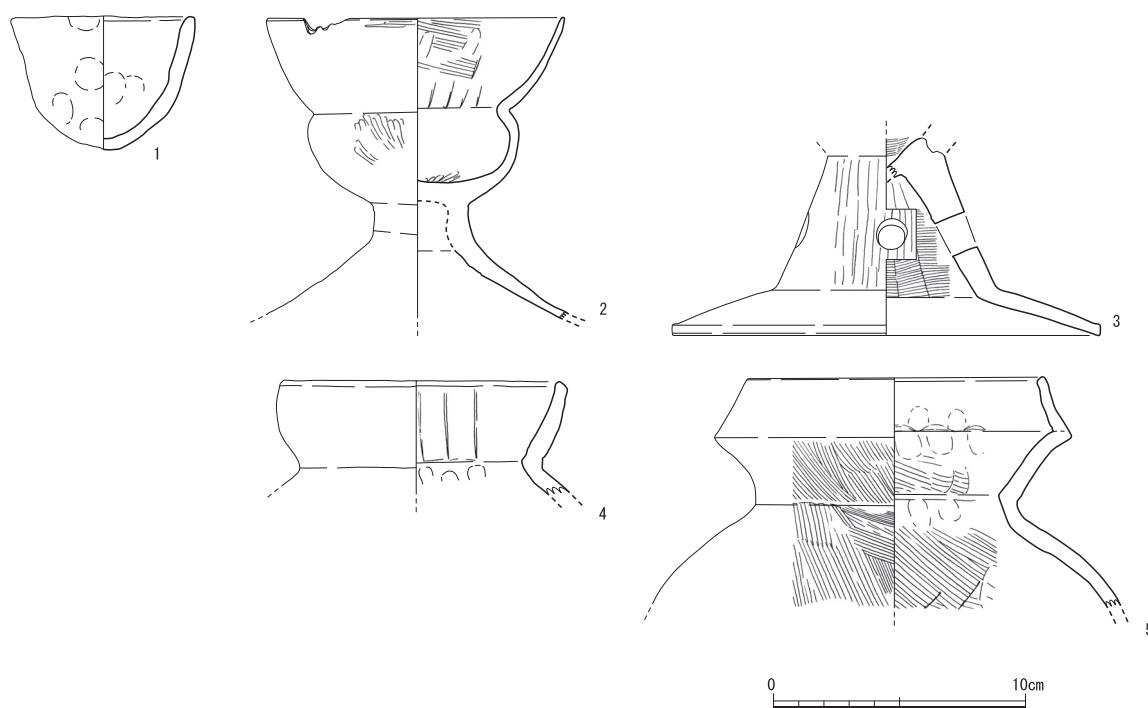
6 は土師器壺で、口縁部が「く」の字状に外反しながら立ち上がる器形で、胎土は長石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面灰褐色で、外面褐色、内面口縁部はハケメ後ナデ、胴部は、斜め方向のハケメ、外面口縁部はハケメ後ナデ、胴部はハケメ後ナデ後縦方向のミガキ調整で、口径 19.6 cm を測る。内外面に黒斑が認められる。

7 は在地系の技法で作られている土師器甕で、胎土は長石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面橙色で、外面暗褐色、内外面はハケメ調整で、口径約 20.4 cm を測る。

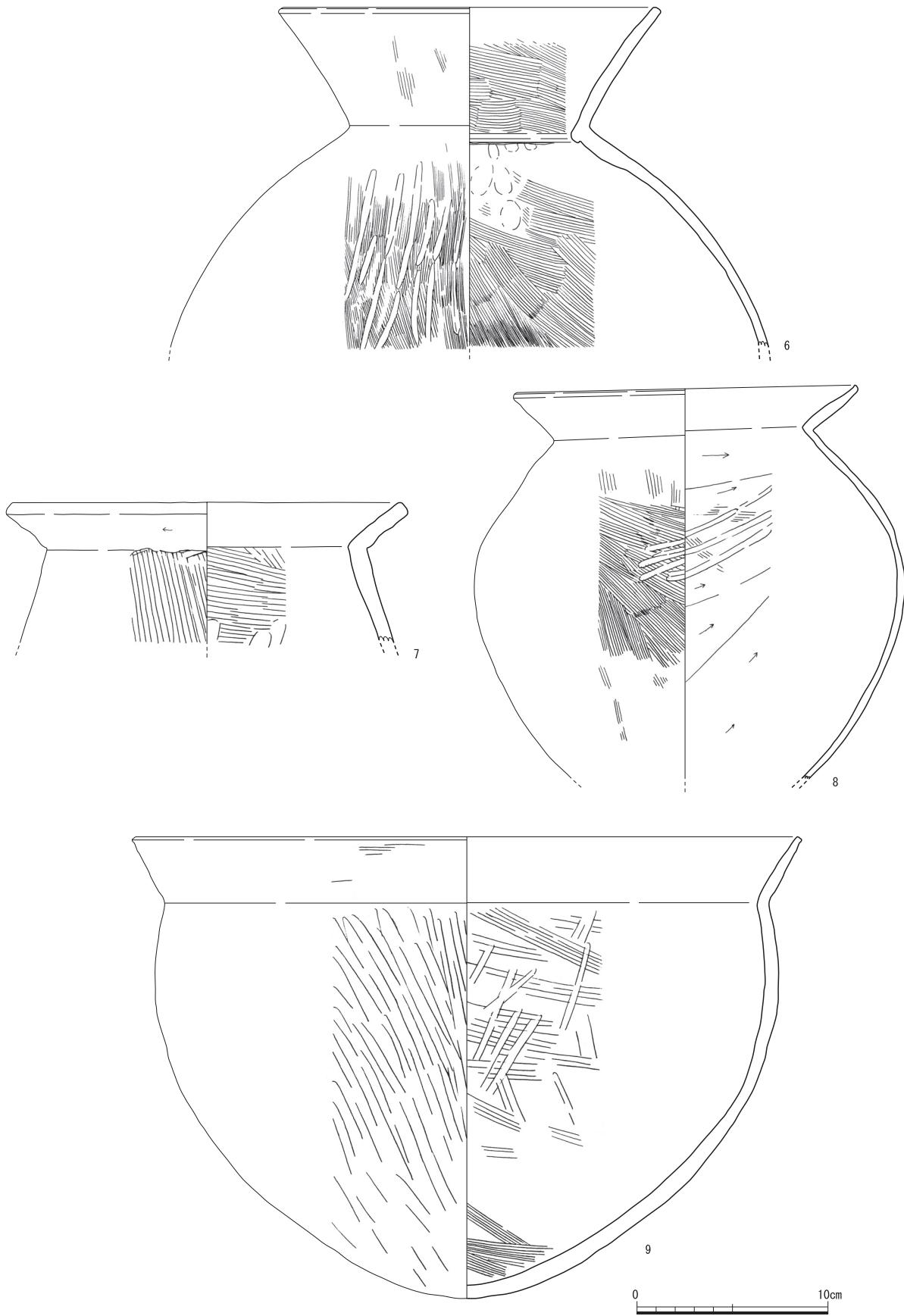
8 は布留系の土師器甕。胎土は角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面橙色で、外面暗褐色、内面口縁部ナデ、胴部ケズリ後ミガキ、外面口縁部ナデ、胴部ハケメ調整で、口径 18.1 cm、器高 20.7 +  $\alpha$  cm を測る。



第 105 図 22SE016 平面・断面実測図  
(1/40)



第 106 図 22SE016 出土遺物実測図① (1/3)



第107図 22SE016 出土遺物実測図② (1/3)

9は土師器大鉢で、胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面はハケメ後ナデ後一部ミガキ、外面はハケメ後ナデ後縦方向のミガキ調整で、口径約35.0cm、器高24.2+ $\alpha$ cmを測る。

### 溝状遺構 (SD)

#### 22SD002・22SD004 (第99・108図)

22SD002は調査区中央部付近を北東から南西方向に斜行する溝状遺構である。N-69°-Eを指向し、22SD002、22SD004および22SD012よりも東に振っている。最大幅約1.90m、検出面からの最大深は約0.40mを測る。黒褐色の砂質土を基調とする埋土で埋積している。少なくとも1回の掘り返しが認められ、その際、南東側に重複する位置に掘りなおされている。底面のレベルからは僅かに南西側から北東側に向かう傾斜を認めることができる。調査中は常に湧水がある状態ではあったが、埋土の観察ではラミナ等は認められず、積極的に水流があったとはいえない状況で、水路としての機能を積極的には認められない。出土遺物からは8世紀末～9世紀初頭に埋積したものと判断される。

22SD004は22SD002の北西側に並行している溝状遺構である。調査区中央部で後世の攪乱が著しく、途切れているところがあるが、本来は22SD012まで一続きの溝であった可能性が高い。遺物は出土せず、所属時期を推定できるものはみられなかった。最大幅1.50～2.50mの間隔を置いてほぼ並行していることから、お互いに関連のある遺構と思われる。

**出土遺物 (第109図)** 1は土師器坏で、箱形を呈する。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面ミガキ a 2調整で、口径約12.0cm、器高3.6cm、底径約6.4cmを測る。

2は大形の土師器坏で、口縁部先端部が外反し、先端部は丸みを帯びる器形で、胎土は石英・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色を呈し、底部はヘラ切り、内外面は丁寧なミガキ a 2調整で、口径18.4cm、器高4.6cm、底径8.1cmを測る。

3は土師器碗で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色、内面はハケナデ後ミガキ、外面はハケメ調整で、口径14.0cm、器高5.1cmを測る。古墳時代初頭。

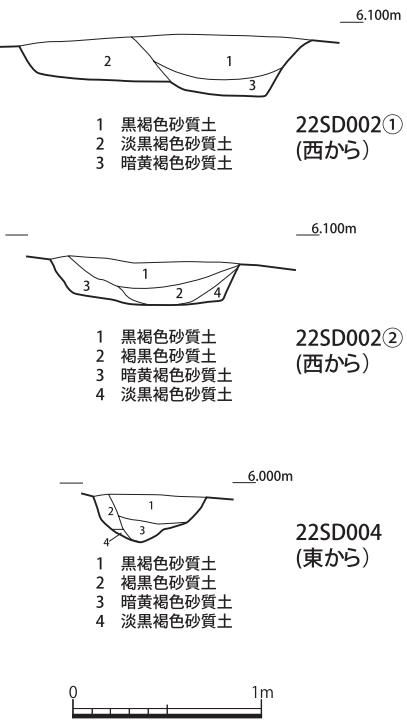
4は土師器坏で、胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、底部はヘラ切り、内外面は丁寧なミガキ a 2調整で、口径約15.0cm、器高6.1cm、底径6.8cmを測る。

5は土師器坏蓋で、口縁部内面に沈線を巡らす。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、底部はヘラ切り、内外面はミガキ a 2調整で、口径約15.3cm、器高約1.6cmを測る。

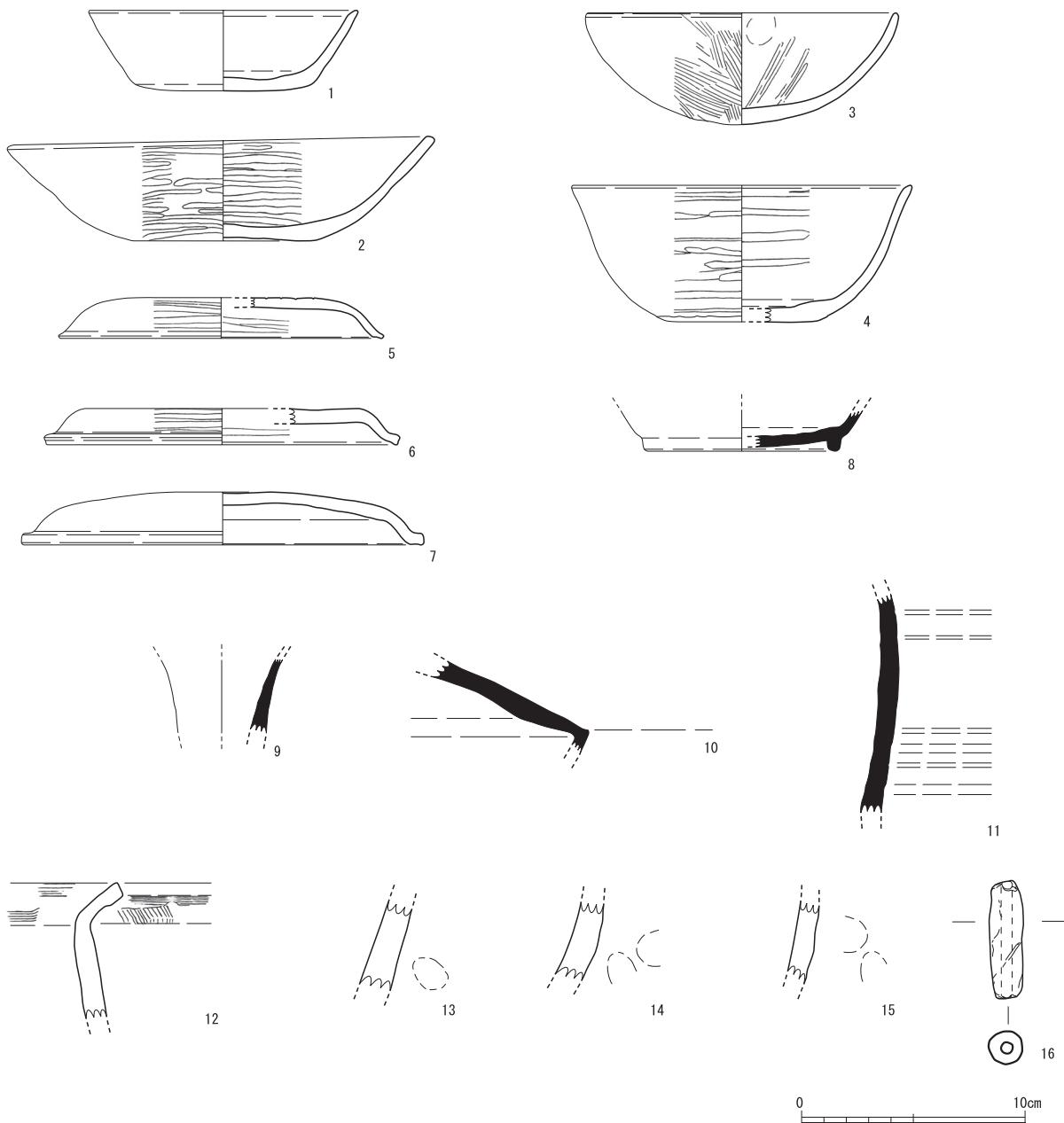
6は土師器坏蓋で、内面に沈線を巡らす。胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、底部はヘラ切り、内外面は丁寧なミガキ a 2調整で、口径約14.8cm、器高6.1cm、底径1.8+ $\alpha$ cmを測る。

7は土師器坏蓋で、口縁部内面に緩やかな沈線を巡らす。胎土は石英・長石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、底部はヘラ切り、内外面はナデ調整で、口径約18.0cm、器高2.4cmを測る。

8は高台付須恵器坏底部。胎土は赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面灰白色を呈し焼きは甘い。内外面



第108図 22SD002・004 土層断面実測図  
(1/40)



第109図 22SD002 出土遺物実測図 (1/3)

はナデ調整で、底径約8.4cmを測る。9は須恵器壺破片。10は須恵器長頸壺の肩部。11は須恵器長頸壺の胴部。12は土師器甕で、外面に縦方向の粗いハケメを施すのが特徴で、企救型甕と呼称される。13から15は製塩土器の胴部。

16は紡錘形を呈する土錘で、かけ紐によると考えられる欠けと、斜め方向の圧痕が認められる。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は橙色を呈する。長さ5.3cm、幅1.5cm、孔径0.6cm、重さ10.9gを測る。

#### 22SD013・22SD014 (第99図)

22SD013は調査区北端付近を北東から南西方向に斜行する溝状遺構である。N-72°-Eを指向し、22SD002、22SD004および22SD012よりも東に振っている。幅約0.40mから0.60m、検出面からの最大深は0.40mを測り、

断面逆台形状を呈し、ほぼ黒色の粘質土で埋積していた。掘り返しは観察されなかった。遺物は出土せず、所属時期を推定できるものはみられなかった。2.30～2.90mの間隔を置いてほぼ並行していることから、お互いに関連のある遺構と思われ、間の空間部分を路面とする道路遺構の可能性も考えられる。

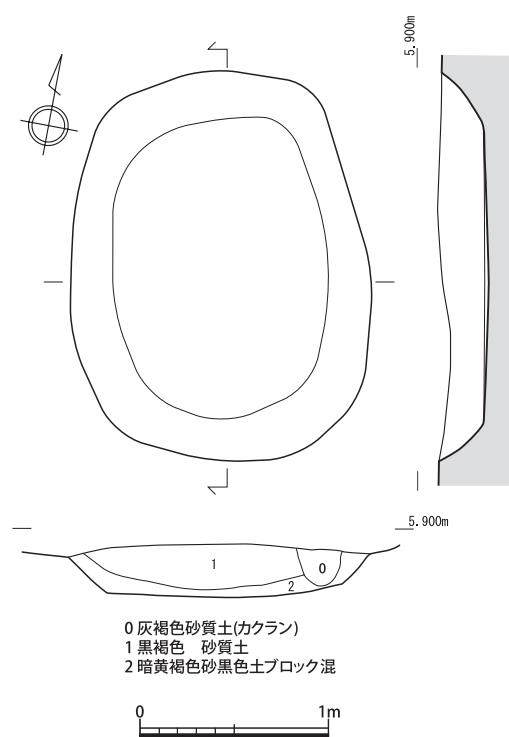
### 土坑 (SK)

#### 22SK003 (第 99・110 図)

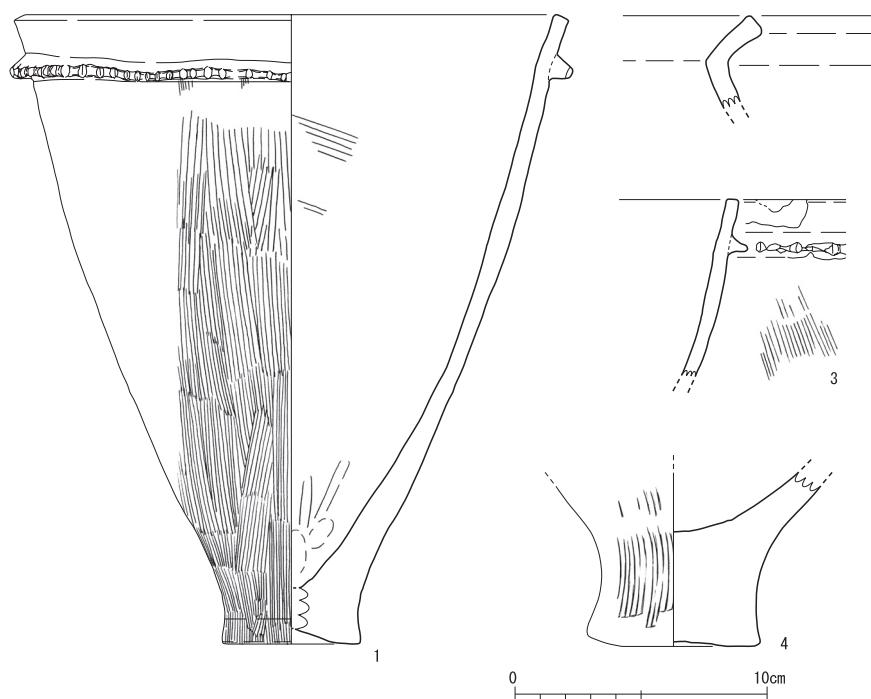
調査区南東部で検出された土坑である。長軸 2.10m、短軸 1.60m の橿円形状を呈し、検出面からの最大深は約 0.30m である。黒褐色砂質土を基調とする埋土により埋積している。出土遺物は僅少であるが、弥生中期前葉に位置づけられる土器のみが出土していることから、当該期に位置づけられる可能性が考えられ、大道遺跡群において検出された遺構中で最も古い一群となる。

**出土遺物 (第 111 図)** 1 は弥生土器甕。口縁部下に突帯を巡らす下城式甕で、胎土は長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ調整で、口径約 22.0 cm、器高 25.0 cm、底径約 5.4 cm を測る。

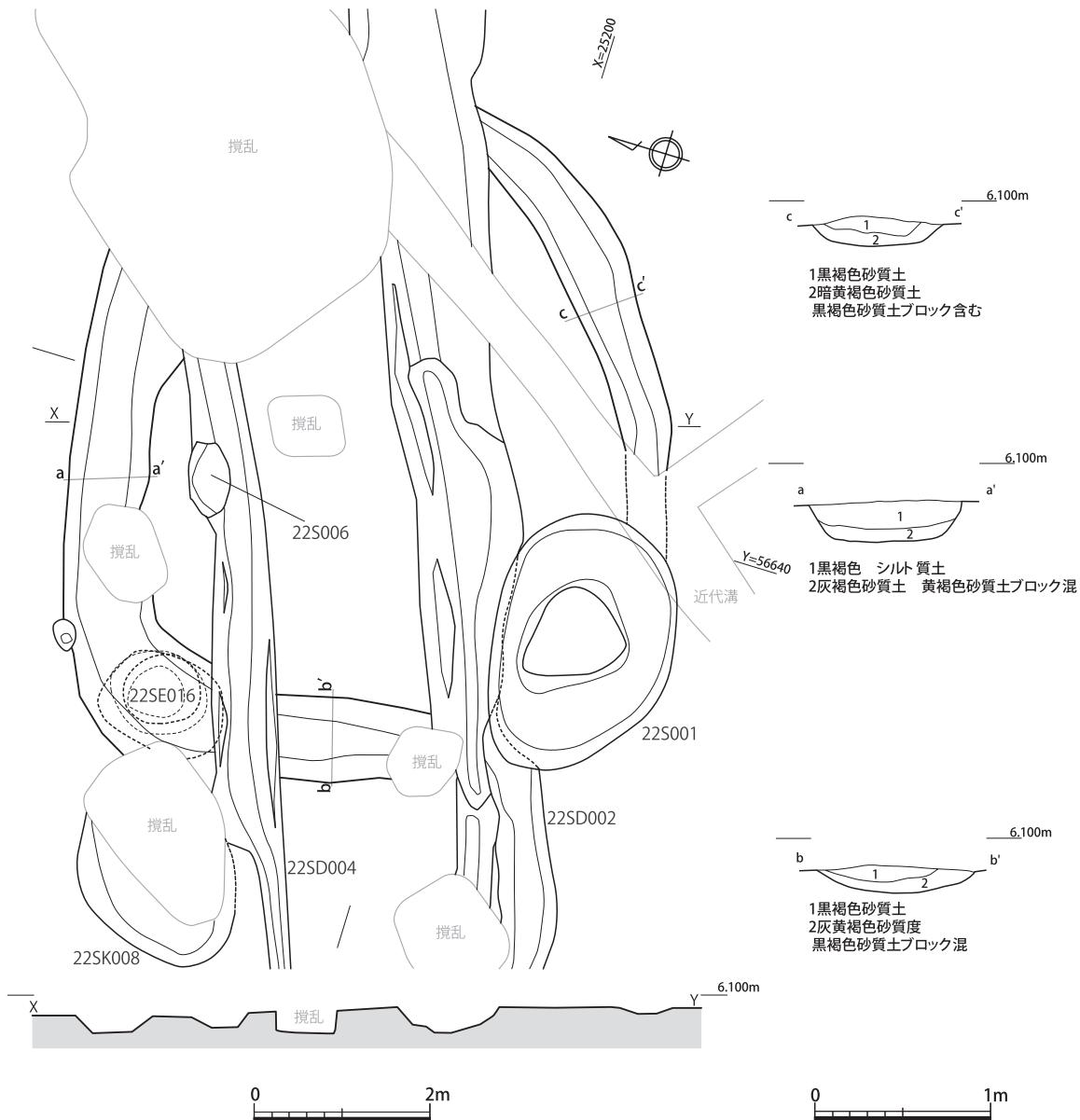
2 は跳ね上げ口縁甕の口縁部。3 は弥生土器甕口縁部。口縁部下に突帯を巡らす下城式甕。4 は弥生土器甕底部で、内面ナ



第 110 図 22SK003 平面・断面  
・土層断面実測図 (1/40)



第 111 図 22SK003 出土遺物実測図 (1/3)



第 112 図 22SX005 平面・断面・土層断面実測図 (1/80・1/40)

デ、外面ハケメ調整で、底径 6.8 cmを測る。弥生時代中期前葉と考えられる一群である。

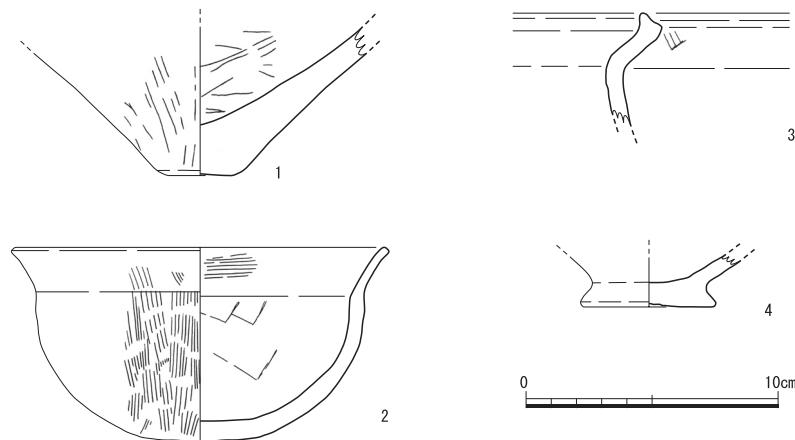
#### 不明遺構 (SX)

##### 22SX001 (第 99 図)

調査区中央部やや西寄りで検出された遺構である。長軸 3.10 m、短軸約 2.00 mを測る不整橢円形を呈す。22SX005 を切っている「落ち込み」であるが、掘り下げる結果人為的な掘り込みではない可能性が高いと判断された。おそらく風倒木痕（いわゆる土層横転構造）ではないかと思われる。

**出土遺物 (第 113 図)** 1 は、弥生土器壺底部。胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面黄橙色を呈し、内面ミガキ、外面底部ハケメ、外面胴部は縦方向のミガキ調整で、底径 3.4 cmを測る。外面に黒斑が認められる。弥生時代中期に比定される。

##### 22SX005 (第 99・112 図)



第113図 22SX001・005 出土遺物実測図 (1/3)

調査区中央部南寄りで検出された遺構である。幅1.00～1.40m、深さ0.20～0.30mの溝が、東西約6.80m、南北約7.80mのやや不整な隅丸長方形に廻るものである。溝は22SE016の埋積後にこれを切って掘られている。溝の埋土は下層が地山土と類似した砂質土で、上層は黒色の砂質土からなり、自然に埋積していくものとみられる。22SX005の溝からは僅少な遺物しか検出されていないが、古墳時代前期に位置づけられる可能性が高いと思われる。当該期の方形周溝遺構は、中央部に石棺等の主体部を有する墳墓であることが想定されるが、ここでは溝で囲まれた範囲内に埋葬主体や土壙等は検出されず、また石棺材の可能性がある石片等も検出されていない。

**出土遺物 (第113図)** 2は、土師器小形丸底壺で、胎土は長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面工具ナデ、外面ハケメ調整で、口径約15.0cm、器高6.8cmを測る。

3は、弥生土器跳ね上げ口縁甕の口縁部。4は、弥生土器小壺の底部で、底径5.2cmを測る。外面に黒斑が認められる。

#### 4. 小結

第22次調査で検出された遺構のうち、最も古く位置づけられるものは弥生時代前期末～中期に比定される土坑22SK003である。これまで大道遺跡群において検出されている遺構は当該期のものであり、大道遺跡群第6次調査で土坑が複数検出されているが、22SK003はこれらと並んで最も古い一群になると考えられる。第6次調査においては多数の同様な土坑が集中して検出されていたことから当該期の貯蔵穴の可能性が考えられたが、本調査地点では1基のみであり、どのような性格のものかは不明である。

古墳時代の遺構は複数検出されており、井戸3基、方形周溝遺構1基が検出されている。方形周溝遺構は井戸を切って築造されているもので、石棺等を主体部とする墳墓遺構あるいは、周溝内部に建物を有する遺構の可能性が考えられる。大道遺跡群の南に隣接する上野遺跡群<sup>(註)</sup>においては、弥生時代後期初頭の同様な遺構が検出されている。

古代の遺構として確実なものは溝状遺構が検出されているが、積極的に水路としての機能を想定できるものではなく、何らかの区画遺構であろう。

#### 【註】

『上野遺跡群 大分市立美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分市教育委員会 1993

## 大道遺跡群第 25 次調査

### 1. 調査の概要

調査地は大分市金池南 1 丁目 28-33 に所在し、上野台地北側の沖積低地に位置する。本調査は区画整理地内の宅地造成に伴い、大道遺跡群第 26 次調査と併行して平成 20 年 5 月 22 日から平成 20 年 8 月 4 日の期間に発掘調査を実施した。調査面積は 125 m<sup>2</sup>を測り、大道遺跡群内の南に位置している。調査の結果、溝状遺構および土坑、性格不明遺構等を確認している。

### 2. 基本土層（第 114 図）

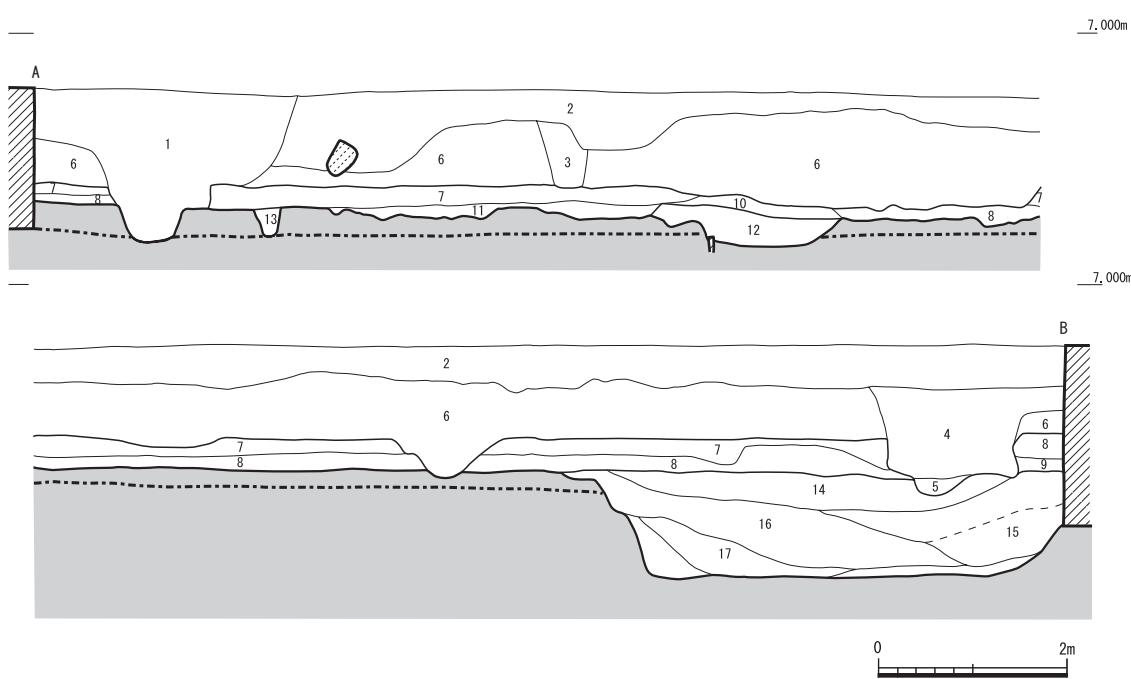
調査区は宅地であったため盛土が厚く覆われていた（6 層）。それらを取り除くと、水田層である灰色及び青灰色を呈す粘質土層が表出する。遺構は、水田層下位の淡黄褐色粘質土より確認され、検出標高は約 5.50 m である。

### 3. 遺構・遺物

#### 溝状遺構（SD）

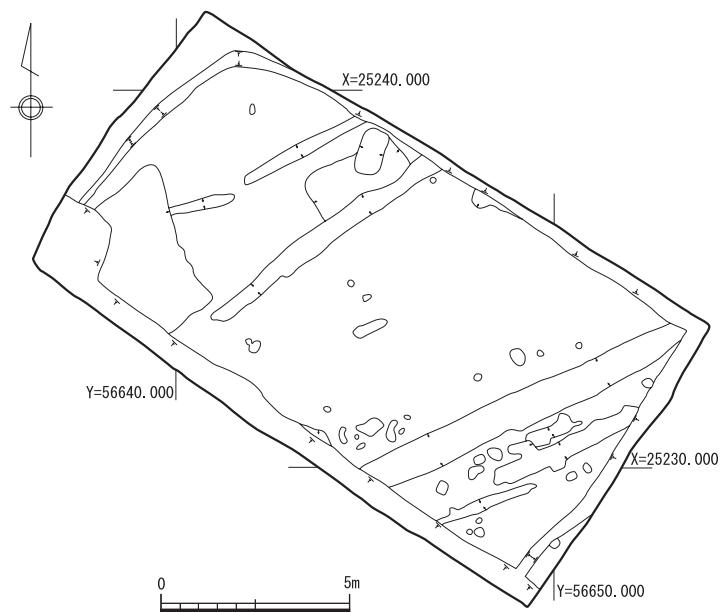
##### 25SD001（第 116 図）

調査区南東部に位置する溝跡で、幅約 0.90 m、深さ約 0.40 m を測る。断面はやや浅めの逆台形を呈し、第 16 次調査区の 16SD006 の北方向への延長部である。埋土は黒褐色土と砂層を確認した。遺構の東側に多数の

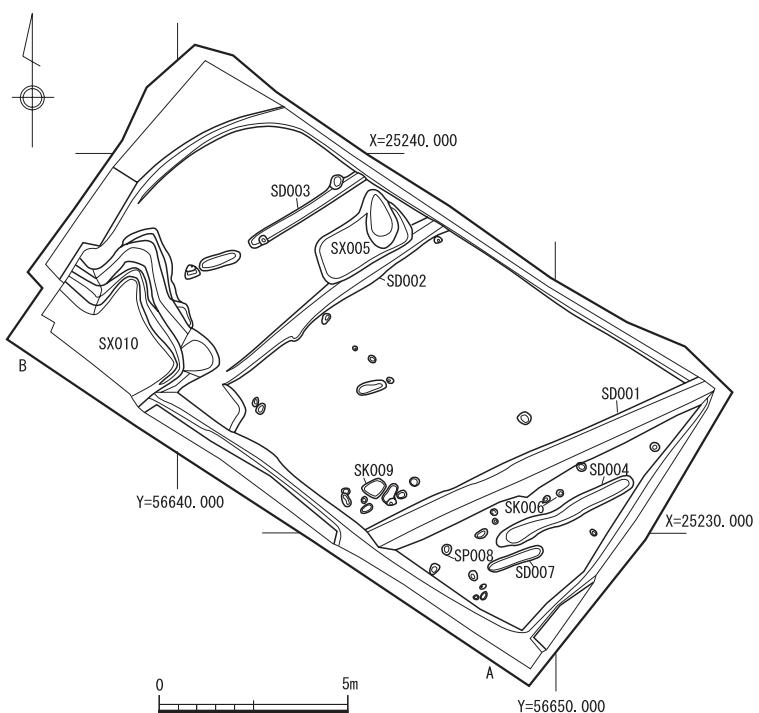


- |                                  |  |
|----------------------------------|--|
| 1. 緑茶褐色土(暗褐色土ブロック含む)一〔水路・埋め戻し跡〕  | 10. 明青灰色粘質土(上部に鉄分を帶状に含む)一〔水田カクハンか〕       |
| 2. 暗茶色砂質土(褐色土ブロック含む)一宅地解体後整地土    | 11. 明茶灰褐色粘質土(やや砂混じり・橙色粒子を全体に含む)一〔水田攪拌層か〕 |
| 3. 暗灰茶色砂質土(褐色土ブロック含む)            | 12. 暗灰褐色粘質土(杭あり)一〔S-1〕                   |
| 4. 淡茶灰色砂質土(褐色土ブロック・コンクリート片を含む) } | 13. 暗黒灰褐色土(やや砂混じり)一〔pit〕                 |
| 5. 暗青灰色砂質土                       | 14. 淡黄灰褐色砂質土(やや軟質・褐色粘質土ブロックを全体に含む・混土)    |
| 6. 暗茶褐色砂質土(ビニール等含む)一宅地造成土        | 15. 暗灰黒褐色粘質土(やや粘性強い・褐色粘質土ブロックを含む)        |
| 7. 淡灰色粘質土(鉄分含む)一〔水田層〕            | 16. 明黄茶褐色砂質土(軟質・粘性あり)                    |
| 8. 暗青灰色粘質土(鉄分含む)一〔水田層〕           | 17. 淡灰茶褐色粘質土(軟質・粘性強い)                    |
| 9. 暗灰色粘質土(鉄分含む)一〔水田層〕            |  |
- } (S-10)

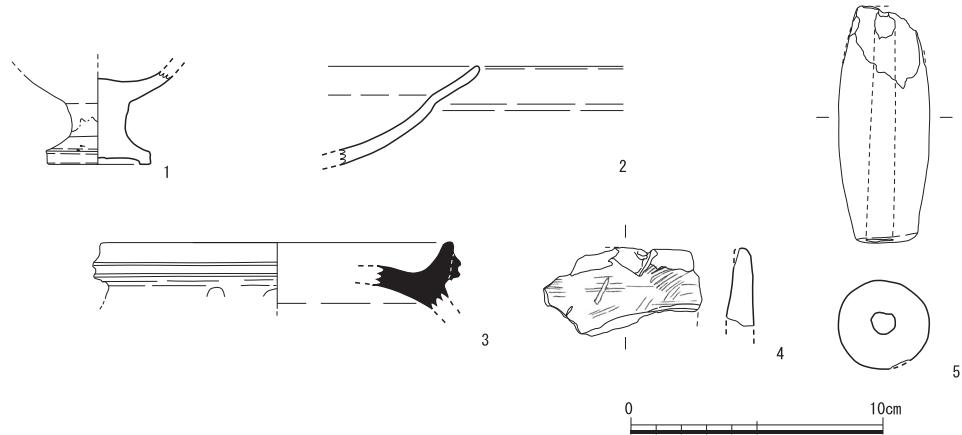
第 114 図 大道 25 次調査区土層断面実測図 (1/80)



第115図 大道25次 遺構切り合い図 (1/200)



第116図 大道25次全体平面図 (1/200)



第117図 25SD001出土遺物実測図 (1/3)

杭跡が残存しており、西側にも同様の杭跡が確認できることから護岸機能を有する近世の水路である可能性が高い。出土遺物から帰属年代は17世紀から18世紀ごろと推測される。

**出土遺物 (第117図)** 1は、肥前磁器の仏飯器で、ロクロ成形で底部は削りだしており、高台内の削りは浅い。高台内は露胎。外面に文様が描かれた痕跡を残すもので、底径は4.1cmを測る。17世紀末～18世紀後半に比定される。

2は、肥前磁器の皿の口縁部。釉薬をかけた後、内面に鉄釉を施している。外面にはロクロ痕が認められる。

3は、須恵器製の円面硯の上部。胎土は白色粒子・赤色粒子を含み、色調は内外面灰色を呈す。高台外面に2条の突帯を巡らせる。高台上方に角状をした穿孔が3ヶ所認められる。底径は約13.4cmを測る。

4は、輝石安山岩製の砥石。両面に擦痕が認められる。最大長6.2cm、最大幅3.6cm、厚さ1.1cm、重さ28.4gを測る。

5は、紡錘状を呈する大形の土錘。石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調はにぶい橙色～明褐灰色を呈し、掛け紐によると考えられる欠けと斜め方向の圧痕が認められる。最大長9.4cm、最大幅3.6cm、孔径1.1cm、重さ101.4gを測る。

#### 性格不明遺構 (SX)

##### 25SX005 (第119図)

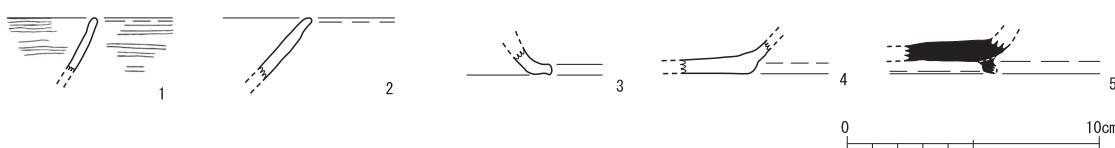
調査区中央に位置し、平面形は北側が張り出したやや歪な隅丸長方形を呈す。南北長約2.10m、東西幅約1.00m、深さ約0.40mを測る。土層観察から掘り返し痕跡が窺え、底面から約0.40mの規模を有すピットが確認される。掘り返し及び平面形の歪みはピットに据えられた柱等の抜き取りによる可能性がある。出土遺物は破片資料のため詳細は不明であるが、概ね8～10世紀に比定できる。

**出土遺物 (第118図)** 1・2は、土師器壺口縁部。1は内外面ミガキa2調整、2は内外面ナデ調整である。

3は、土師器壺蓋。回転ナデ調整で、口縁端部内面に1条の沈線を巡らす。

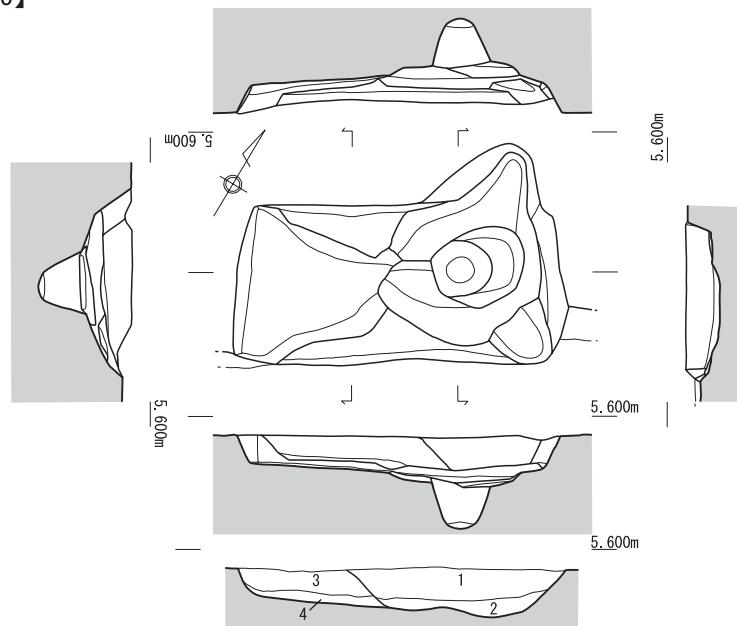
4は、土師器壺底部。底部はヘラ切り後ナデ、内面ナデ調整である。

5は、須恵器の高台付き壺の底部。胎土は石英・白色粒子・赤色粒子を含み、色調は内外面灰色を呈し、内外



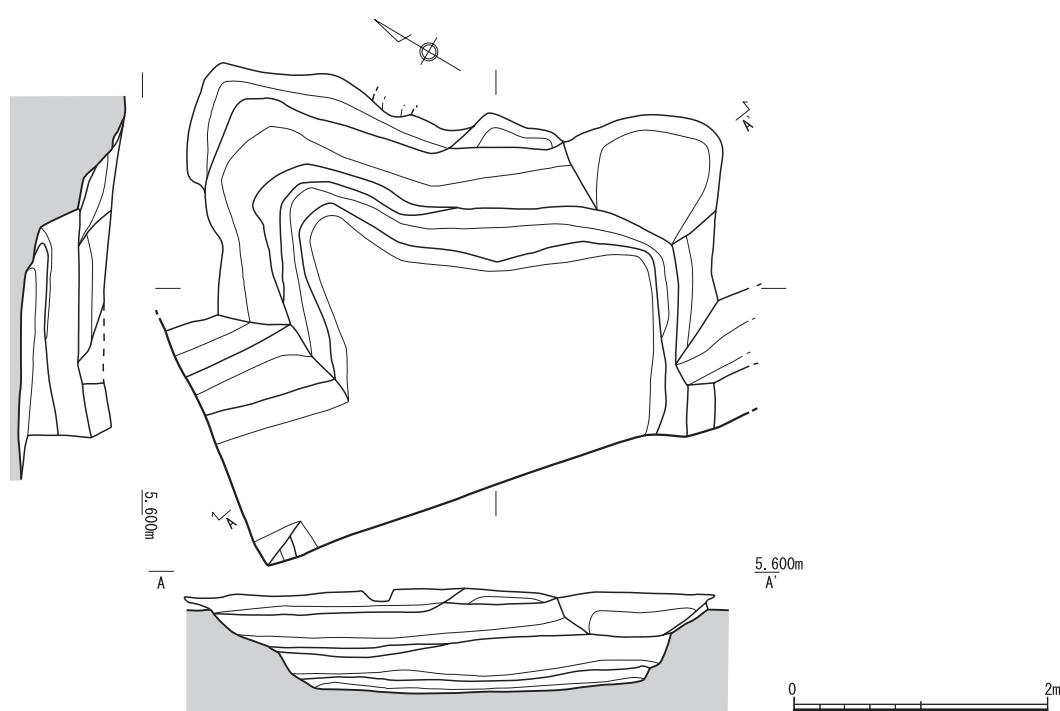
第118図 25SX010出土遺物実測図 (1/3)

【25SX005】



1. 明黒褐色粘質土(大きい淡青灰黄色粘質土ブロック・黄灰色粒子を含む)掘り返し
2. 暗黒褐色粘質土(粘性強い・シルト系)
3. 明黒茶褐色粘質土(淡青灰黄色粘質土・黄灰色粘質土の小ブロックを斑状に含む)
4. 暗黒茶褐色粘質土(やや砂混じり・鉄分含む)

【25SX010】



第119図 25SX005・010 遺構・断面・土層断面実測図 (1/60)

面回転ナデ調整である。

25SX010 (第 119 図)

調査区南東部で確認され、区外へと延びるため全容は不明である。現状では、南北約 2.40 m、東西約 4.00 m、検出面からの深さ約 0.80 m を測り、平面隅丸長方形、断面形は段掘り状を呈す。埋土は粘質→砂質の水性堆積を繰り返していることから、溜井等の水利施設であったと推測される。出土遺物には東播系鉢が認められるため、中世前半段階に機能していたと考えられる。埋土上位には大きな掘り返しを伴う堆積土が確認でき、この埋土内から近世陶磁がみられたが、当該遺構の本来の機能停止時に形成されたもので、南側にあたる第 16 次調査 16SX007 に関連するものと考えられる。

**出土遺物 (第 120 図)** 1 は、土師器坏口縁部で、色調は浅橙色を呈し、内外面ミガキ a2 調整である。

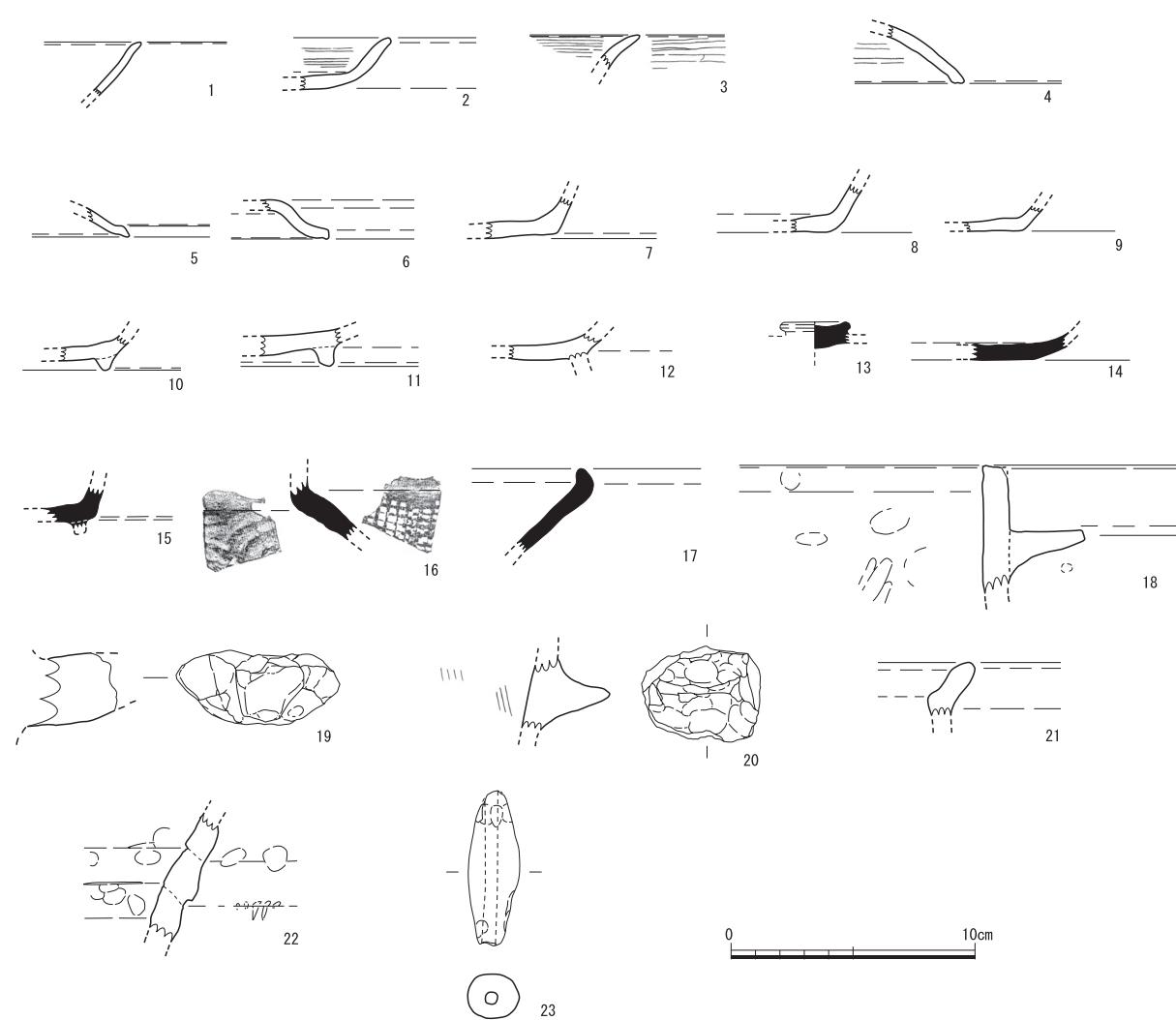
2 は、土師器坏口縁部で、胎土は石英・長石・雲母・赤色粒子を含み、内外面橙色を呈し、内外面ナデ調整を施す。

3 は、土師器坏口縁部。内外面ミガキ a2 調整である。

4 は、土師器坏蓋口縁部。口縁端部になだらかに伸ばし端部は丸くまとめる。端部内面に 1 条の浅い沈線を巡らせる。

5・6 は、土師器坏蓋口縁部。口縁部端部は丸くまとめる。端部内面に 1 条の浅い沈線を巡らせる。

7～9 は、土師器坏底部。



第 120 図 25SD010 出土遺物実測図 (1/3)

- 10～12は、台付き土師器の底部。
- 13は、須恵器蓋のツマミで、低い宝珠形を呈している。
- 14は、須恵器壺の底部で、外面ヘラ切り、内面ナデ調整である。
- 15は、台付き須恵器壺の底部。
- 16は、須恵器甕頸部。色調は内外面とも灰色を呈し、内外面タタキ痕が認められる。
- 17は、東幡系の須恵器鉢口縁部。胎土は、石英・白色粒子を含み、色調は、内外面回転ナデ調整である。
- 18は、土師器甕で把手を有する。胎土は、角閃石・長石・赤色粒子を含み、内面淡黄色、外面にぶい黄橙色を呈し、内外面ナデ調整である。
- 19・20は、土師器甕の把手。
- 21は、土師器甕。企救型式土器と呼称される物であり、8世紀後半から9世紀前半に比定される。
- 22は、製塙土器の胴部片で、粘土の輪積み痕と指頭圧痕が認められる。
- 23は、紡錘状を呈する土錘。石英・長石・角閃石含み、色調は灰褐色を呈し、掛け紐によると考えられる欠けと斜め方向の圧痕が認められる。最大長6.3cm、最大幅2.1cm、孔径0.6cm、重さ21.7gを量る。

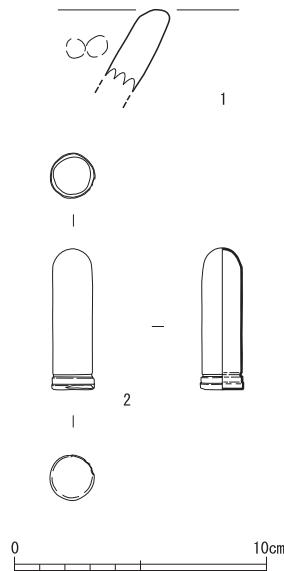
#### 表採（第121図）

- 1は、甕口縁部。内外面ナデ調整である。
- 2は、銅製品の弾で、長さ3.6cm、幅1.7cm、底径1.7cmを測り、近現代のものである。

#### 4. 小結

本調査区では近世を中心とした溝状遺構5基、土坑3基、不明遺構2基を確認した。

溝状遺構はそれぞれの出土遺物から古代に比定される25SD002と、第16次調査区から延長する近世に比定される25SD001に分かれており、不明遺構である25SX005は出土遺物からその帰属する年代を8世紀～10世紀に、25SX010は中世段階に比定されるものと考えられる。本調査において25SX010が確認されたことにより、近世以前にも同様な水利に関する施設が存在することが明らかとなった。



第121図 大道25次表採出土遺物実測図 (1/3)

## 第4節 大道遺跡群第11次・第24次調査

### 概要

第4節においては第11次・第24次調査の説明を行う。今回の報告分の調査地では一番西側に位置しており、比較的安定している微高地上に位置するものである。

特筆すべきは、第24次調査での井戸跡（24SE008）であろう。古墳時代に切り出されたと考えられるクスノキを使ったほぼ完形の臼が出土している。同時に出土した臼の蓋は半円状を呈しており、二つ合わせて臼の蓋として使用していたと想定される。国立歴史民俗博物館が放射性炭素年代測定法で調べた結果、西暦287年頃に伐採したクスノキで製作されていることが確認された。また年輪を調べた結果、底面の裏側に107本の年輪を確認することができ、一番外側の年輪は樹皮に限りなく近い部分と考えられることから、生育が始まってから107年+ $\alpha$ 年後に伐採されたことが確認された。自然科学分析の詳細な報告は、第4章で述べる。

第11次・第24次の調査区を地形的にみると、井戸跡が多数確認されていることから、湧水点が浅く、容易に水を得ることができたと想定される。これまでに確認されている、地形の落ちに沿って形成されている溝状遺構が、当調査地でも検出されており各時代に地形の変化を利用した溝状遺構が確認されることからも、地形的な変化地点であると考えられる。以下、次数ごとに説明する。



第122図 第4節 調査地配置図 (1/500)

## 大道遺跡群第11次調査

### 1. 調査の概要

調査地は大分市金池南1丁目に所在する。区画整理地内の宅地造成に伴い、平成17年8月12日から平成17年10月28日の期間に調査を実施した。調査面積は約246m<sup>2</sup>である。大道遺跡群内の南端部分に位置する。調査の結果、溝状遺構、土坑を確認した。

### 2. 基本土層（第123図）

現地標高は約6.40mを測り、調査区を覆っている約0.20～0.40mの灰色砂質土（1～3層）を除去すると、暗灰茶色土の耕作土層（4・5層）が確認される。この耕作土を除去すると暗灰褐色粘質土（6層）が現れ、遺構の殆どがこの層から検出されており、本調査区ではこの層を遺構検出面と位置付ける。検出標高は約5.80mで、暗灰褐色粘質土を約0.20mほど除去すると基盤層である黄灰色砂質土（8層）が現れる。

### 3. 遺構・遺物

#### 溝状遺構（SD）

##### 11SD010（第124図）

調査区のほぼ中央で検出した東西方向の溝状遺構である。現状の検出長は約13.50m、幅約1.00m、深さ約0.45mを測り、断面形状は逆台形を呈す。遺構の検出標高は約5.80mを測る。現状の調査区内で高低差は確認できなかった。土層観察より堆積土からは流水等の状況は確認できなかった。出土遺物から近世に比定される。

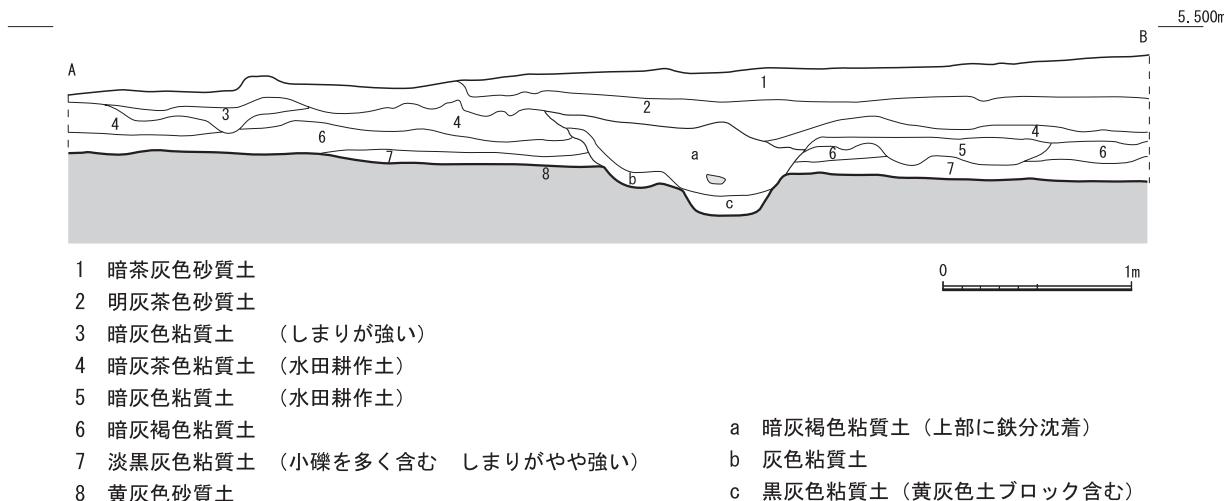
出土遺物（第125図）1は、中国景德鎮窯産の白磁皿。置付部は露胎で、口径約12.5cm、器高2.9cm、底径約7.6cmを測る。

2は、肥前産染付皿で、内面に格子文、外面に唐草文が描かれているもので、口径約12.8cmを測る。時期は18世紀後半。

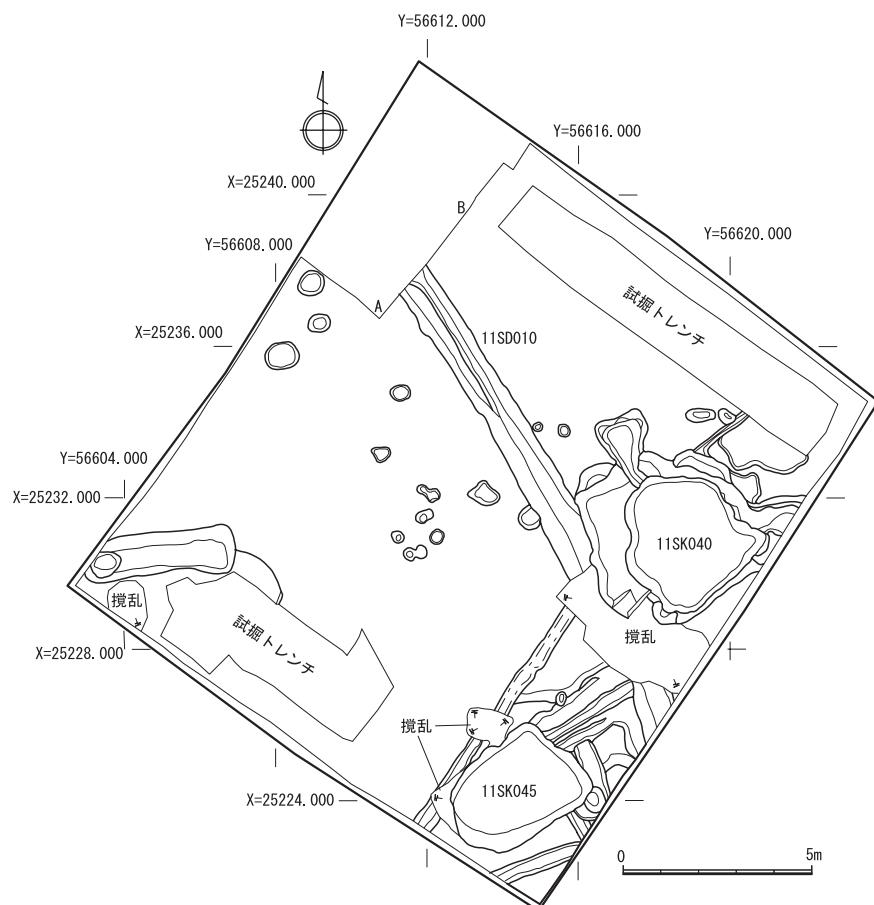
3は、肥前産の染付紅皿。口径約5.9cm、器高2.7cm、底径2.7cmを測る。時期は、18世紀代。

4は、肥前産の染付小壺。外面に圈線を巡らし山水文が描かれている。時期は18世紀代。

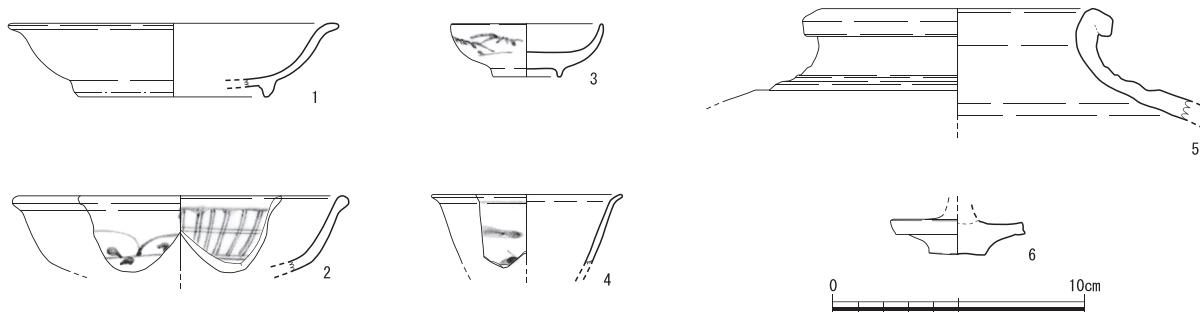
5は外面に鉄釉の施された陶器壺口縁部。福岡産の陶器と推定され、胎土の特徴から高取系の可能性が考えら



第123図 大道11次調査区西壁土層断面実測図（1/40）



第124図 大道11次調査区遺構平面図 (1/200)



第125図 11SD010 出土遺物実測図 (1/3)

れる。時期は18世紀中頃～後半。

6は、外面に鉄釉の施された陶器油さしの蓋と推定されるものである。福岡産の陶器と推定され、胎土の特徴から高取系の可能性が考えられる。蓋には糸引き痕が認められる。時期は18世紀中頃～後半。

## 土坑 (SK)

### 11SK040 (第126図)

調査区の東側で検出した土坑である。検出面での平面形状は、長軸約4.50m、短軸約4.40mを測る楕円形のプランを呈す。遺構の検出標高は、約5.55mを測り、基底部までの深さは約0.64mを測る。堆積土は、大部分を占める黒色粘質土と地山ブロック土と黒色粘土ブロックとの混成土である。このような状況から、比較的短期的、かつ人為的に埋められたと推測される。遺構の性格は廃棄土坑と推定される。出土した土師器片から古代以降に埋められたと言える程度である。

**出土遺物 (第127図)** 1は土師器坏で、箱形をしている。

2は土師器坏口縁部で外面にミガキa 2調整をしている。口径は、約12.6cmを測る。

3は土師器坏底部で、色調はにぶい橙色を呈し、内外面回転ナデ、底部はヘラ切り後手持ちヘラ調整を施している。底径約7.5cmを測る。

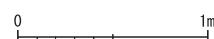
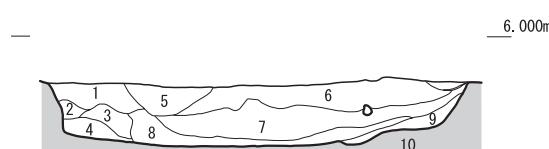
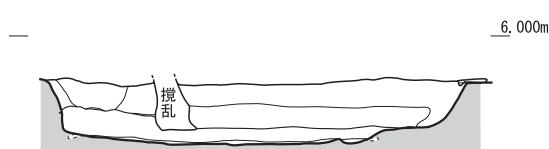
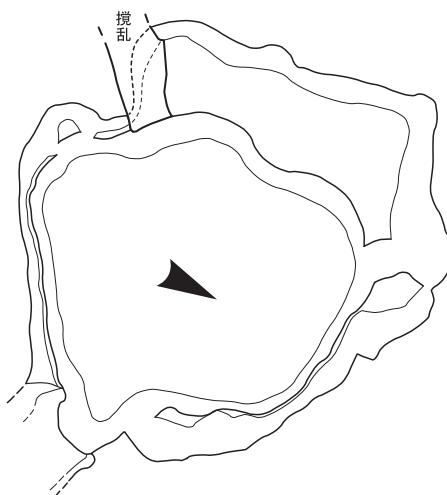
4は台付き土師器坏の底部。底径約6.8cmを測る。

5は土師器坏蓋で、口縁部端部内面に沈線を巡らす器形で口径約14.8cmを測る。

6は台付須恵器坏底部で、高台は踏ん張った角状を呈し、底径は約9.4cmを測る。

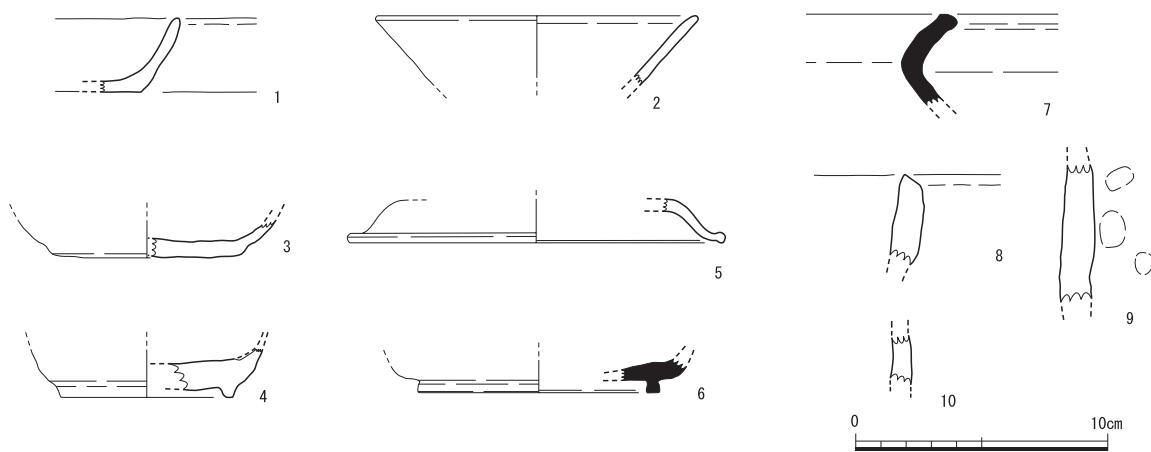
7は須恵器甕口縁部。色調は内外面灰白色を呈していることから焼きの甘い須恵器である。

8～10は砲弾形をした六連島式の製塩土器。型作りで口縁端部はヘラ切り調整である。



1. 淡黒褐色粘質土（地山ブロックを多量に含む。）
2. 1と同じ
3. 明灰色粘質土（地山ブロックを多量に含む。グライ化、しまり弱い）
4. 明灰色粘質土（地山ブロック混入少ない）
5. 暗灰黄色粘質土（下層に砂が堆積、しまり弱い、攪乱）
6. 暗灰色粘質土（褐色・黄色粒子を多く含む。粒子は上層に多い）
7. 暗灰色シルト質土（粒子の混入少ない）
8. 淡黒色砂質土（水が溜まっていた痕跡か？混入ほとんどない 粒子のみ）
9. 明灰黄青色シルト質土（地山ブロックを多く含む）
10. 淡灰茶褐色シルト質土（地山）

第126図 11SK040 平面・断面・土層断面実測図 (1/80)

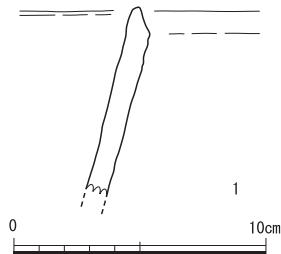


第127図 11SK040 出土遺物実測図 (1/3)

## 11SK045 (第129図)

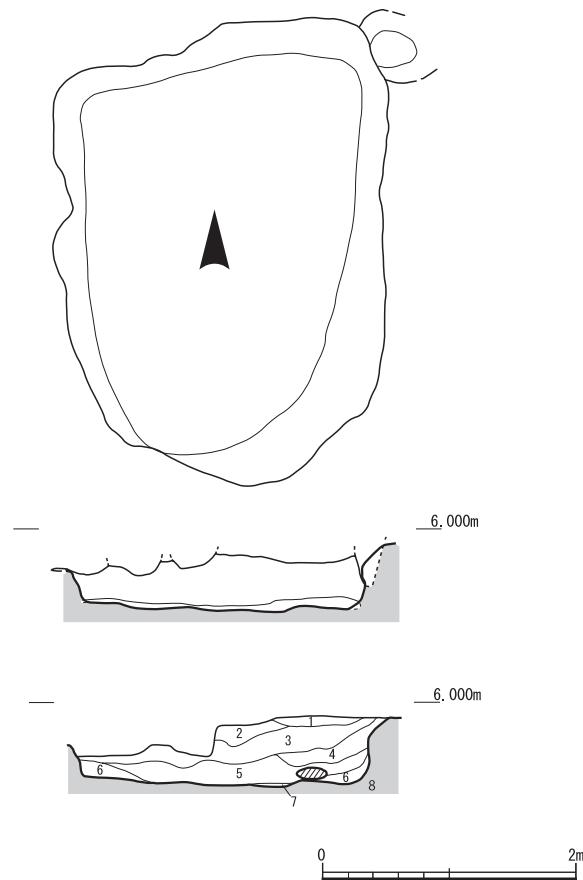
調査区の南側で検出した土坑である。検出面の平面形状は、長軸約3.70m、短軸約2.60mを測る楕円形のプランを呈す。遺構の検出標高は、約5.80mを測り、基底部までの深さは約0.50mを測る。堆積土は、1・2層は黒色粘質土を基本に、それ以下の層には地山ブロック土が多く混入する。このような状況から、11SK040同様に比較的短期的、かつ人為的に埋められたと推測される。遺構の性格は廃棄土坑と推定される。出土した土師器片から古代以降に埋められたと言える程度である。

**出土遺物 (第128図)1**は、砲弾形をした六連島式の製塩土器。型作りで胎土は石英・長石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面布痕、外面指頭圧痕が認められる。口縁端部はヘラ切り調整である。

第128図 11SK045 出土遺物  
実測図 (1/3)

## 表採遺物 (第130・131図)

- 1は、弥生時代早期（下黒野突帯文単純期）の浅鉢胴部。内外面横方向のミガキ調整である。
- 2は弥生土器壺底部。内外面ケズリ後ナデ調整で底径約4.6cmを測る。
- 3・4は土師器小形丸底壺。口縁部がやや内湾ぎみに伸びる器形。
- 5は小形丸底壺で、胎土は、石英・長石・角閃石を含み、色調は内外面橙色を呈し内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約13.4cm、器高8.1cmを測る。
- 6は土師器壺で、色調は内外面橙色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約12.6cmを測る。
- 7は土師器壺で、口縁部に「く」の字状に外反する器形で口径約15.1cmを測る。
- 8は土師器甕で、内面口縁部ハケメ後ナデ・胴部ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約14.8cmを測る。3～8は、古墳時代前期初頭に比定できる。
- 9は土師器壺で、内外面ミガキa2調整を施す。10は台付土師器壺の底部で底径約9.8cmを測る。
- 11は黒色土師器A類碗の底部で、内面ミガキ調整で底径約8.0cmを測る。
- 12は台付き須恵器壺の底部で、底径約10.2cmを測る。13は須恵器円面硯の脚部。透かしが認められる。
- 14は土師器甕で、形状はバケツ形を呈すると考えられる、内外面回転ナデで、外面に指頭圧痕が認められる。外面煤付着が認められる。15は平瓦の一部で、タタキ痕と布目痕が認められる。9～15は古代の遺物で、8世



1. 明黒茶色砂質土 (しまりやや強い 橙色粒子を多量に含む)
2. 暗灰茶色砂質土 (しまりやや強い 橙色粒子を多量に含む)
3. 淡黒灰色粘質土 (橙色粒子を少量含む 黄褐色ブロック  
《地山》を下層に多く含む)
4. 暗黒灰色粘質土 (しまりやや弱い 橙色粒子を極少量含む)
5. 明黄灰色粘質土 (暗黒灰色粘土ブロック《4層》、黄褐色ブロック  
《地山》を多量に含む)
6. 暗灰色砂質土 (暗黒灰色粘土ブロック《4層》、黄褐色ブロック  
《地山》を少量含む)
7. 黄白色粘土 (粒子が細かい)
8. 黄褐色シルト質土 (地山)

第129図 11SK045 平面・断面・土層断面実測図 (1/60)

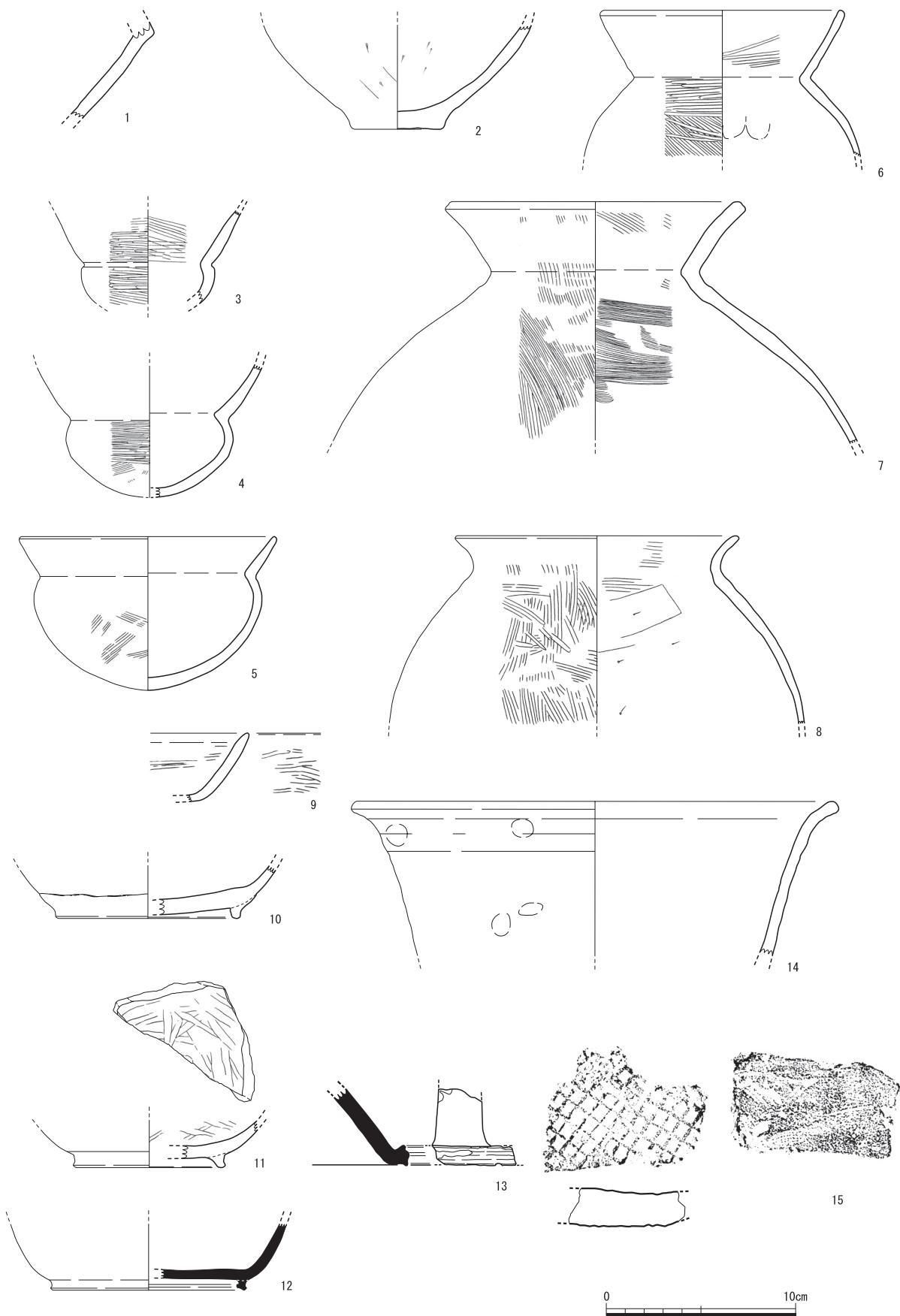
紀中頃～9世紀初頭に比定できる。

16は和泉型系瓦器碗の口縁部。内面ミガキ、外面にミガキが顕著でない点を考えると13世紀前半ごろに比定される。

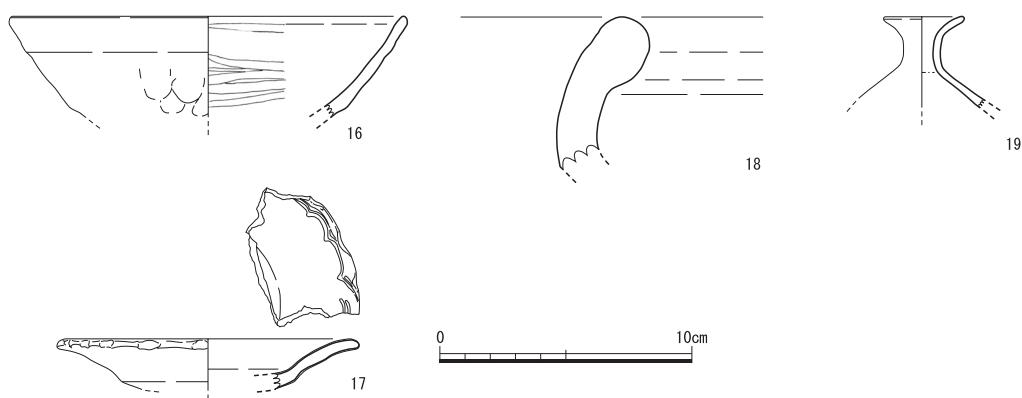
17は中国龍泉窯系の皿口縁部。内面に波状の印刻を施すもので、14世紀代と考えられる。

18は、備前焼大甕の口縁部。時期は16世紀代に比定される。

19は肥前産小壺の口縁部で、鬚付け油（椿油）を入れる物で化粧道具の一種。外面に赤絵が認められる。時期は18世紀代。



第130図 大道11次表土出土遺物実測図① (1/3)



第131図 大道11次表土出土遺物実測図② (1/3)

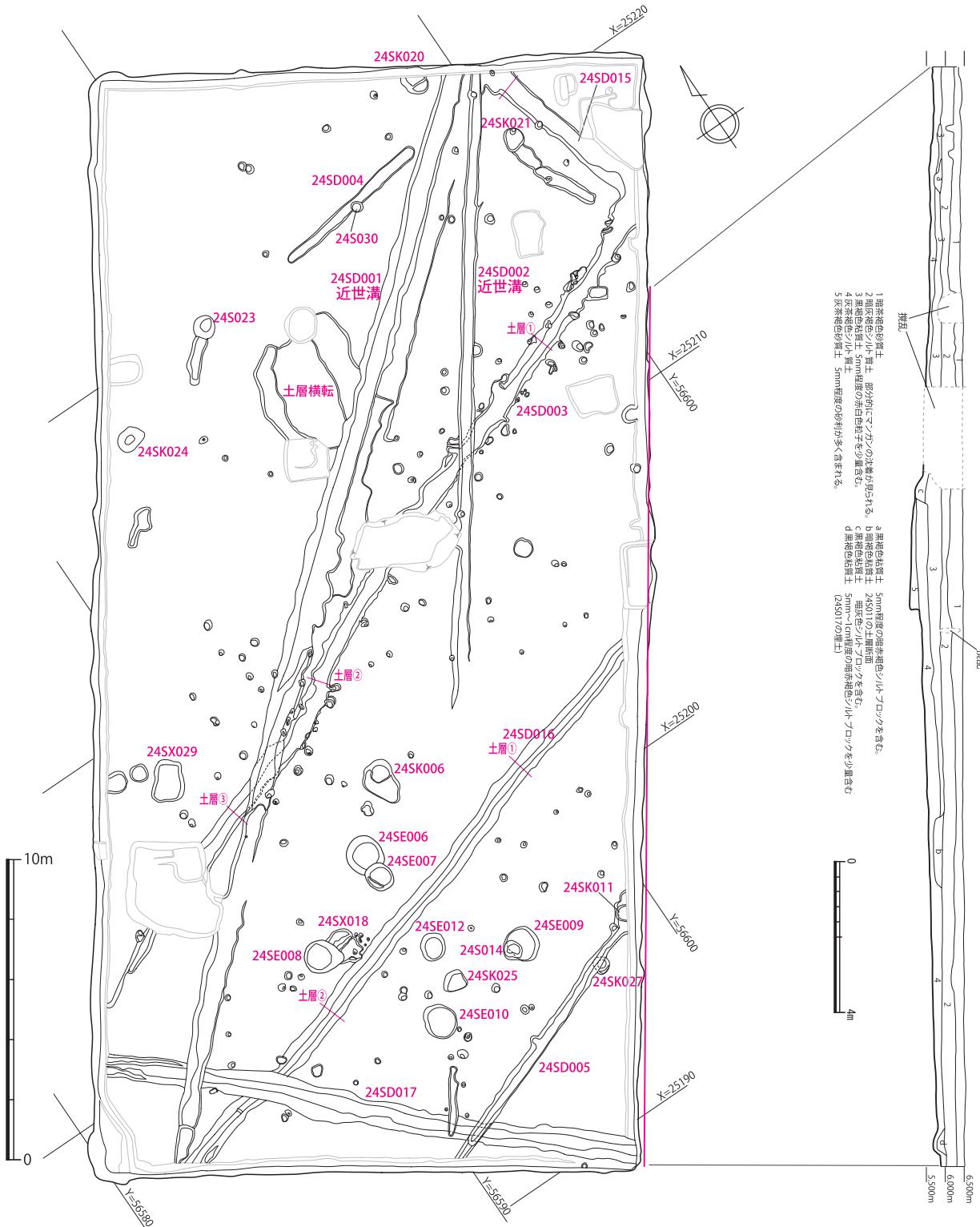
### 小結

第11次調査区は、第9次・第10次の西側に位置しており、これらの調査区が乗る微高地の西端付近に位置すると考えられる。北西方向に向かって地形的に落ちこんでいく状況が観察された。また、出土遺物では、遺構に帰属できないが、包含層中から円面硯（圈足硯）が出土している。今回の調査地点は古代の遺構が検出された第5次調査の南側に位置しており関係が注目される。

## 大道遺跡群第24次調査

### 1. 調査の概要

第24次調査地点は、第11次調査地点の南隣、第16次調査の西隣にあたり、区画街路の施工が予定される



第132図 大道24次調査区遺構平面図 (1/200)

第133図 大道24次調査区東壁土層断面実測図(1/160)

地点であったが、これら隣接地点の調査所見により本調査が必要と判断され、平成19年度に家屋が移転した後に発掘調査を実施することが予定されていた。

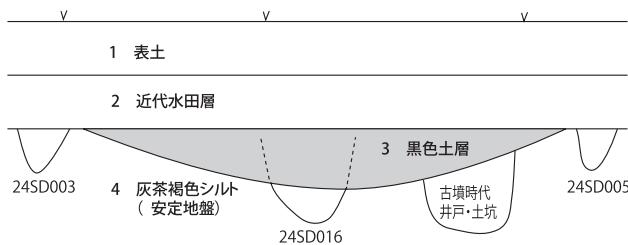
調査は平成20年2月4日に表土剥ぎを開始、人力による以降掘削を2月8日より行い、2月25日頃には遺構の掘削と、個別記録は概ね完了した。ところが、2月25日に古墳時代の井戸跡SE008からほぼ完形の木製臼が出土したため、この取り上げ方法の検討と取り上げ作業実施のため、1週間以上の期間をそれに費やすこととなった。結果、木製臼取り上げ作業実施後、3月8日に空中写真測量を実施、3月11日に埋戻を行って調査を完了した。

調査の結果、古墳時代の井戸跡5基、土坑2基、古代の可能性がある溝2条、時期不明の溝3条等が検出された。なお、24SD001、24SD002は近世～近代にかけての溝、24SK013は同時期の土坑である。この他、風倒木痕と推定される土層の横転が1ヶ所検出された。

## 2. 基本土層（第134図）

第24次調査区では、第2層の水田耕作土直下が基本的な遺構検出面である。第2層は昭和9年頃に行われた耕地整理後の水田耕作土であり、これ以下の土層に水田層が認められないことから、当該耕地整理の際に地形の削平が行われたものと考えられる。調査区の中央部、概ね24SD003と24SD005の間にあたる部分では、安定地盤面が窪んでおり、

そこに黒色～黒褐色粘質土（3層）の堆積が認められた。この土層は基本的に無遺物であることから、原地形の凹面に周囲から黒色土が自然に流入して形成されたものと考えられる。3層の分布している範囲で検出された井戸跡、土坑、溝は3層上面～3層中での検出がほとんど困難であった。井戸跡・土坑のうち、特に多くの遺物が出土したものについては3層中で多くの遺物が出土することが注意され、遺構の存在が強く示唆されたが、遺構プランの確認は非常に困難であったため、安定地盤面まで掘り下げて遺構を検出することとなった。耕地整理での削平を考慮すると、4層上面よりも上に本来の遺構面があったと推定される。



第134図 大道24次調査区土層模式図

## 3. 遺構・遺物

### 井戸跡（SE）

#### 24SE006（第135図）

切り合いをもって検出された遺構で、24SE006→24SE007の順に築造されたものである。

24SE006は長軸が推定で1.30m、短軸1.20mのほぼ円形を呈する遺構であり、検出面からの最大深は1.00mである。標高5.50m前後から下では湧水があり、特に標高5.00m以下では激しいが、壁面の著しい崩落やオーバーハングは認められなかった。埋土は上～中部が暗灰色～黒灰色土、下部がほぼ黒色の粘質土であった。上～中部の埋土は付近の基盤土に由来するとみられるシルトのブロックを含んでいることから、遺構廃絶後意図的に埋め戻された可能性が高いと判断できる。井筒は出土せず、土層にもその痕跡が認められないが、常に湧水のある地層まで深く掘りこまれた遺構であることから、井戸である可能性が高いと思われる。出土遺物から、古墳時代前期の所産であると考えられる。

**出土遺物（第136図）** 1は、土師器小形器台の脚部で、胎土は石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外ナデ後ミガキ調整で、底径約10.4cmを測る。

2・3は、土師器小形丸底壺の口縁部で、2・3ともに内外面ナデ後ミガキ調整。3の口径は約9.2cmを測る。

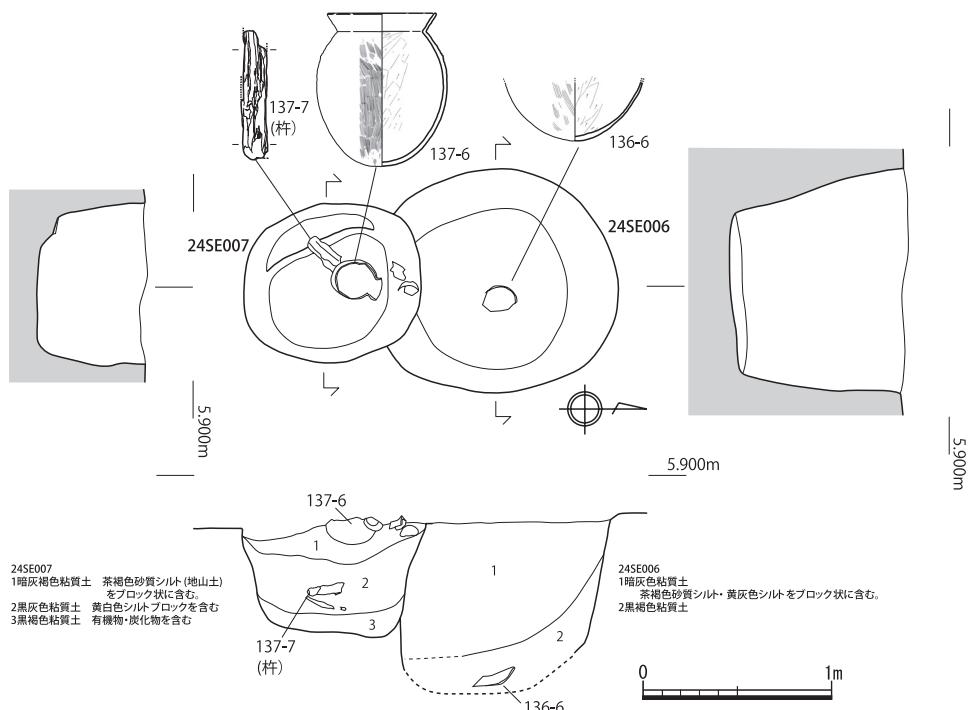
4は、土師器高環脚部で内面ナデ、外面ナデ後横方向のミガキ調整を施している。

5は、土師器高環の脚部で、底径約12.6cmを測る。

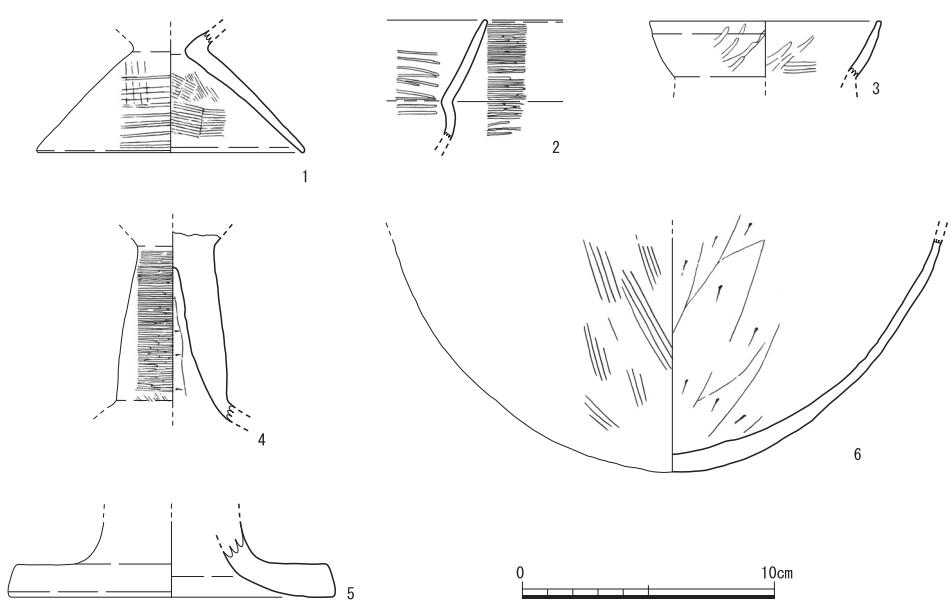
6は、土師器甕の底部で、胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面黒褐色を呈し、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整を施している。

### 24SE007 (第135図)

24SE007は24SE006が廃絶し、埋め戻された後に掘り込まれた遺構である。長軸0.95m、短軸0.85mの円



第135図 24SE006・007 平面・断面・土層断面実測図 (1/40)



第136図 24SE006 出土遺物実測図 (1/3)

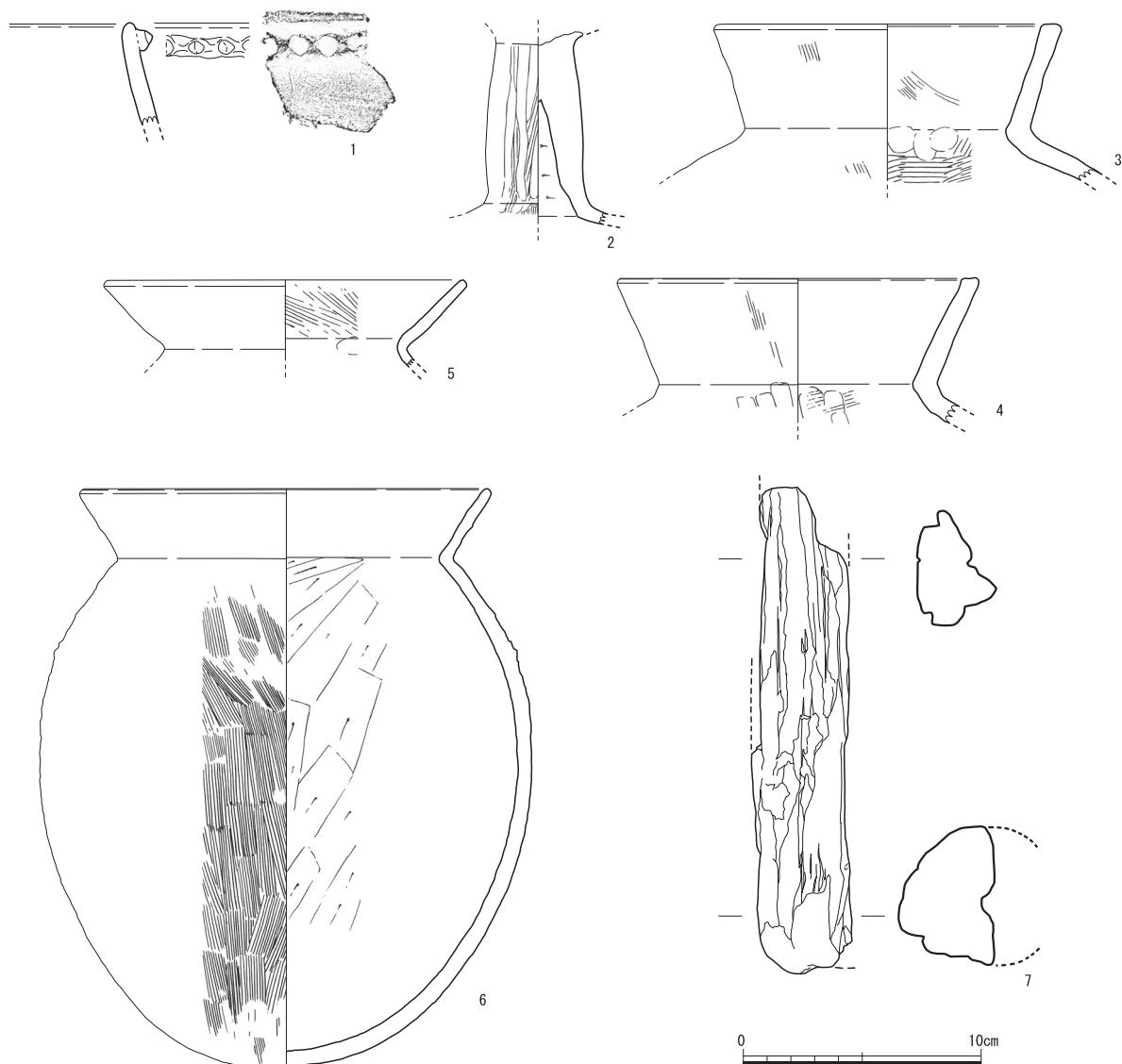
形状で、検出面からの最大深は 0.60m である。下底部にはテラス状の段差が認められる。24SE006 と同じく標高 5.50m 以下には湧水が認められ、下底部に近いほどそれが著しい。滯水していたためか、標高 5.50m 付近の壁面には抉れてオーバーハンプしている部分がある。埋土は埋土は上～中部が基盤土由来とみられるシルトブロックを含む暗灰色～黒灰色土、下部が有機物・炭化物を多く含む黒色の粘質土であり、24SE006 と同様に廃絶後に埋め戻された可能性が考えられる。埋土からは土師器類が出土しているほか、堅杵の先端部破片が出土した。

**出土遺物（第 137 図）** 1 は、弥生早期の突帯甕の口縁部。

2 は、土師器高環脚部で、内面ナデ、外面ハケメ後縦方向のミガキ調整を施している。

3・4 は、土師器壺の口縁部。3 の胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、内面口縁部ナデ、胴部ハケメ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 14.6 cm を測る。4 の胎土は長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 15.2 cm を測る。どちらとも頸部に指頭圧痕が認められる。

5 は、土師器甕口縁部。内面ハケメ、外面ナデ調整で口径約 15.2 cm を測る。



第 137 図 24SE007 出土遺物実測図 (1/3)

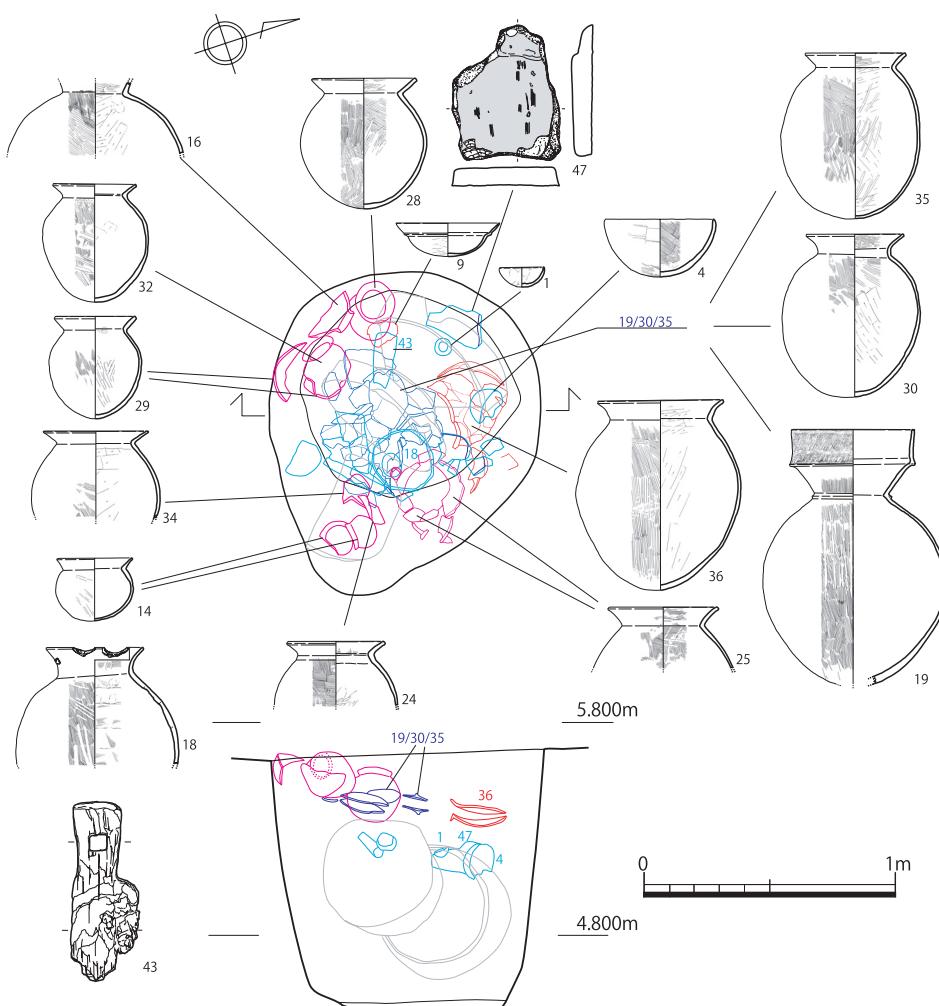
6は、土師器甕で口縁部が「く」の字状に外反し、胎土は長石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面赤色～明赤褐色、外面橙色～黒色を呈し、内面口縁部ナデ、胴部ケズリ、外面口縁部ナデ胴部ハケメ調整で口径約17.3cm、器高24.3cmを測る。

7は、木製品で堅杵の先端部。材質はヤマモモで最大長20.4cm、幅5.8cmを測る。古墳時代に比定される。

#### 24SE008 (第138～140図)

24SE008は調査区南部で検出された遺構で、24SD016に隣接している。基本土層の項で述べたように安定地盤面がやや窪んだところに黒色土（基本土層の第3層）が堆積している場所であるため、黒色土を若干掘り下げた時点で土師器のまとまった出土がみられたことから遺構の存在が窺われたものの、プランの検出には至らず、結局黒色土をほぼ除去するまで掘り下げ、ようやくプランを確定できた。隣接する遺構24SX018とは切り合い関係の確認が平面的にも土層断面でも困難であり、切り合い関係が無い、すなわち同時に存在した一連の遺構である可能性も考えられる。

遺構は長軸1.30m、短軸1.10mの橢円形状を呈し、検出面からの最大深は1.00mを測る。埋土は上層が黒灰色粘質土、下層はほぼ黒色の粘質土である。標高5.50m付近以下では湧水が認められ、底部付近に近づくほど激しい湧水となり、ポンプアップを行わないと1時間で満水になる程であった。しかし、壁面の崩落やオーバー



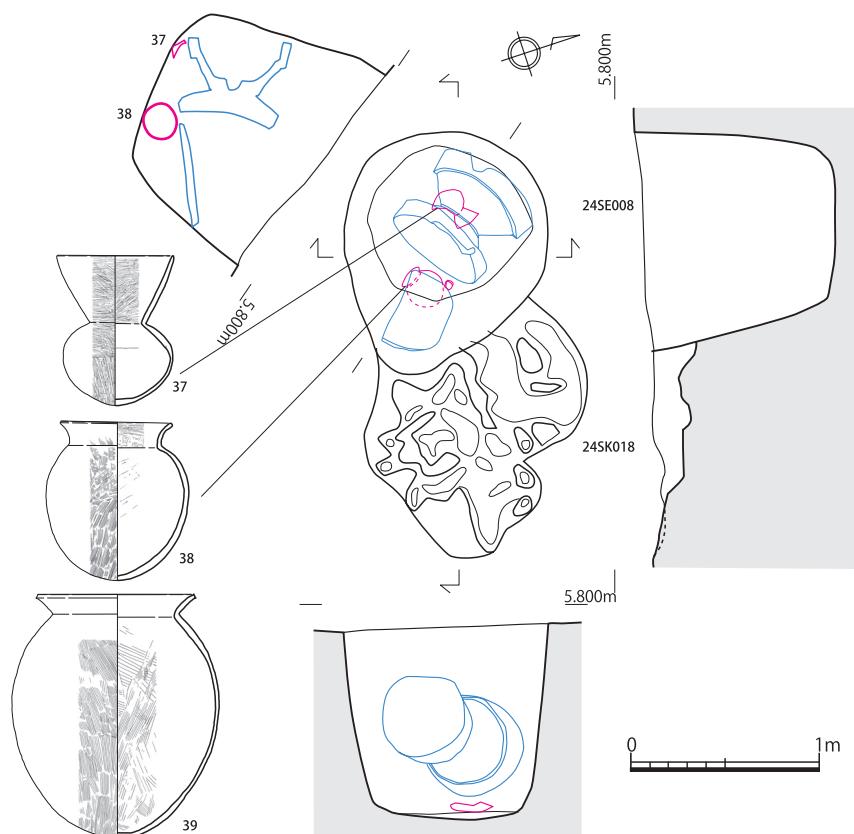
第138図 24SE008上層遺物出土状態図 (1/30)

ハンゲはほとんど認められない。井筒は出土せず、土層断面により井筒の痕跡を確認することも困難であったが、豊富な湧水がある土層まで掘り下げられている遺構であることから、井戸と考えておきたい。遺構の埋没年代については、出土した土師器の年代観により古墳時代前期、実年代では4世紀前半頃に位置づけられる。

出土遺物は遺構上層から完形品を複数含む土師器類が出土しており（第138図）、その数は20個体を超えるまとまった量であった。これら土師器類の出土層位の直下からほぼ完形の木製臼、および臼の蓋の可能性がある半月形の木製品が検出された。臼は遺構の北西側壁面沿いにやや口を下にする形でほぼ横倒しとなっていた。検出面に近い側は口縁部がわずかに欠け、また脚台部の一部は腐朽して脆くなり、表面組織が崩れている部位がみられたが他の部分の保存状態はきわめて良く、ほぼ完形品であった。臼自体については後で詳述するが、長期にわたり使用されたものと推定できる。臼の蓋と推定される半月形の木製品は遺構南東端の遺構プランががやや張り出している部位の下層で出土している。臼よりも下位の遺構下底部からは完形の土師器が2個体出土した。長頸壺（第146図-37）は臼の直下にちょうど下敷きとなる形で押しつぶされた状況で出土している。また小



最下層からの遺物出土状況1（第146図37） 最下層からの遺物出土状況2（第146図38）



第139図 24SE008 最下層遺物出土状態図（1/40）



第140図 24SE008 調査過程及び出土臼整理過程

形の甕（第146図-38）は半月形木製品の直下の床面直上から出土した（第139図）。これらの土師器は出土状況からいずれも意図的に遺構底部に置かれた状況が認められる。さらに出土状況を作図できなかったが、臼及び半月形木製品の下位土層の遺構底部付近からほぼ1個体に復元できる土師器片（第146図-39）がまとまって出土しており、この口縁部には隣接する24SX018と24SE008上層から出土した口縁部破片が接合することが整理段階で確認されている。これらのことから、出土した臼および半月形木製品については遺構底において土師器壺（第141図-17）・甕（第146図-38）の安置や土師器甕の破碎と口縁部破片の隣接遺構への廃棄といった一連の行為の後に24SE008に埋置されたことが推定できる。こうした行為が臼等の「廃棄」に伴う祭祀行為として位置づけられる可能性を考えておきたい。従って、臼よりも上層において多量に出土した土師器類の出土状態についても、臼等の埋置に伴う一連の祭祀行為の結果として意味づけできる可能性も考えられよう。

#### 木製臼の取り上げと保存処理等（第140図）

出土した木製臼については、まず現地での出土状況の写真撮影・図面作成を行った後、保存処理の前提として樹種を確定させる必要性から、（株）古環境研究所に委託し樹種同定のためサンプル採取を実施した。さらに（株）東都文化財保存研究所に委託して発泡ウレタンによる保護を行いながら取り上げ作業を行った。取り上げた臼は、クリーニングを行った後、仮設水槽で仮保存することとした。また、古墳時代前期の年輪年代資料としても貴重であるため、国立歴史民俗博物館により年輪年代測定のための年輪サンプル採取が実施された。保存処理を行う前に現状で実測図を作成する必要があったが、明大工業株式会社に委託し、3Dスキャナを使用して非接触により図面作成を行った。保存処理の方法としては、大分県立歴史博物館山田拓伸氏に指導いただき、方法を検討した結果、真空凍結乾燥法が最も適しているとの判断に達し、山田氏を通じて奈良文化財研究所保存修復科学研究所長高妻洋成氏に依頼することとし、平成21年2月3日に大分市教育委員会と奈良文化財研究所の間で保存処理のための共同研究協定が締結され、奈良文化財研究所に臼を運搬して平成22～25年度の予定で保存処理を実施中である。一方、樹種同定の結果、臼の材質がクスノキであることが判明し、材の性質上、真空凍結乾燥法によつたとしても割れや変形が生じることが予想された。このため現状でのレプリカ作成が必要と判断されたため、平成21年2月から平成21年10月にかけて株式会社京都科学に委託してレプリカの作成を実施している。

**出土遺物（第141図1～17）**1は、小形の土師器碗。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈し、内面指ナデ後指オサエ、外面指ナデ調整で口径7.2cm、器高3.2cmを測る。底部外面に黒斑が認められる。

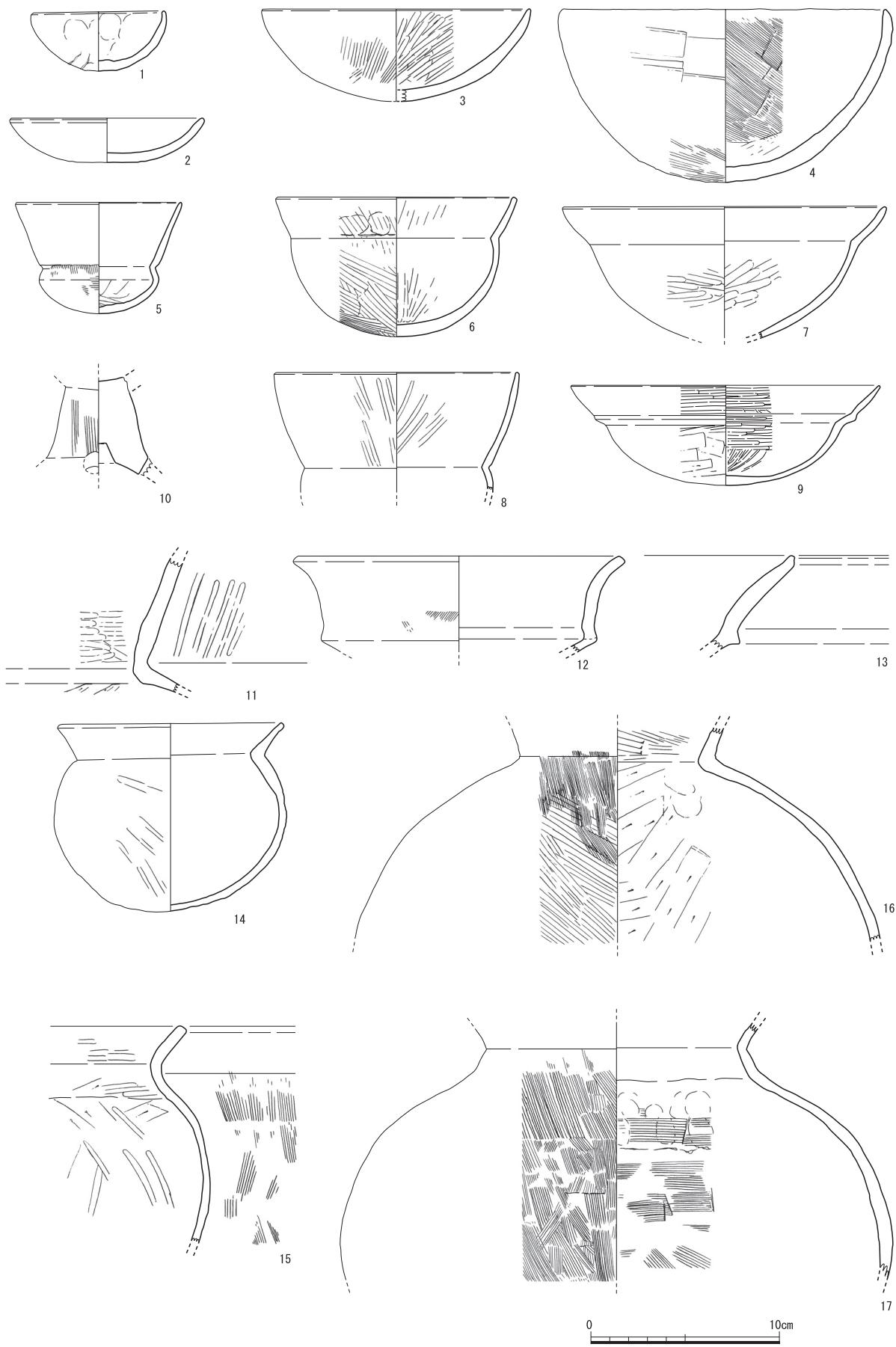
2は、24SX018から出土した平坦な底部を有する土師器碗。24SX018は、24SE008に付随する遺構であり、24SE008出土遺物として扱う事にする。胎土は石英・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい褐色を呈し、内面指ナデ、外面ナデ後に指おさえ調整で口径約10.3cm、器高2.3cmを測る。内外面の一部に黒斑が認められる。

3は、土師器碗で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄褐色、外面暗褐色～にぶい黄褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約14.2cm、器高4.9cmを測る。

4は、土師器碗で、口縁部は内湾気味に立ち上がり端部は指で摘み上げ丸く処理をしている。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色～黒色を呈し、内面ハケメ、ハケメ後ナデ調整で口径17.1cm、器高9.2cmを測る。内面に黒斑が、外面に煤の付着が認められる。

5は、土師器小形丸底壺で、胎土は石英・長石・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面橙色～にぶい橙色を呈し、内面指ナデ、外面ナデ後ミガキ調整で口径12.0cm、器高15.1cmを測る。

6は、小形丸底壺で、胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面にぶい



第141図 24SE008 出土遺物実測図① (1/3)

橙色を呈し、内面指ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口径 17.1 cm、器高 9.2 cm を測る。外面の一部に煤付着が認められる。

7 は、土師器鉢。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内外面指ナデ後ミガキ調整で口径 17.2 cm、器高  $7.2 + \alpha$  cm を測る。

8 は、土師器小形丸底壺内外面ナデ後ミガキ調整。外面に煤付着が認められる。

9 は、山陰系土師器二重口縁鉢で、胎土は石英・長石・赤色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ナデ後丁寧なミガキ、外面底部ケズリ後ミガキ調整で口径約 16.2 cm、器高 5.3 cm を測る。器壁は薄く、丁寧な作りで、胎土も地元産ではなく、いずれかの持込み品といえる唯一の鉢である。調査の結果、福岡市早良区西新所在の西新町遺跡出土遺物に酷似しており、この遺跡もしくは、福岡平野からの持込みの可能性が高い。

10 は、高坏の脚部で、内面は粘土を充填させている。外面は縦方向のハケメ調整である。脚部に 4 ケ所の穿孔が認められる。

11 は、土師器壺頸部。内面横方向のミガキ、外面ヨコナデ後縦方向のミガキが認められる。

12 は、土師器複合口縁壺の口縁部。内外面ナデ調整で、外面に煤付着が認められる。

13 は、畿内第 5 様式系複合口縁壺の口縁部。口縁端部外面に 1 条の沈線を巡らせ、内外面ナデ調整である。

14 は、小形丸底壺。胎土は石英・雲母・白色粒子を含み、色調は内面橙色、外面橙色～にぶい橙色を呈し、内面工具ナデ後ナデ、外面ナデ後ミガキ調整で口径 12.0 cm、器高 15.1 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

15 は、土師器壺で、胎土は石英・長石・白色粒子を含み、色調は、内外面暗褐色～黒色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ後ミガキ風ナデ調整である。

16 は、土師器壺で、胎土は長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は、内面灰黄褐色、外面にぶい黄橙色を呈し、内面口縁部は粗いハケメ、胴部ケズリ後ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で頸部径 16.3 cm を測る。

17 は、土師器壺で、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内外面明黄褐色を呈し、内外面ハケメ調整で、頸部径 13.8 cm である。

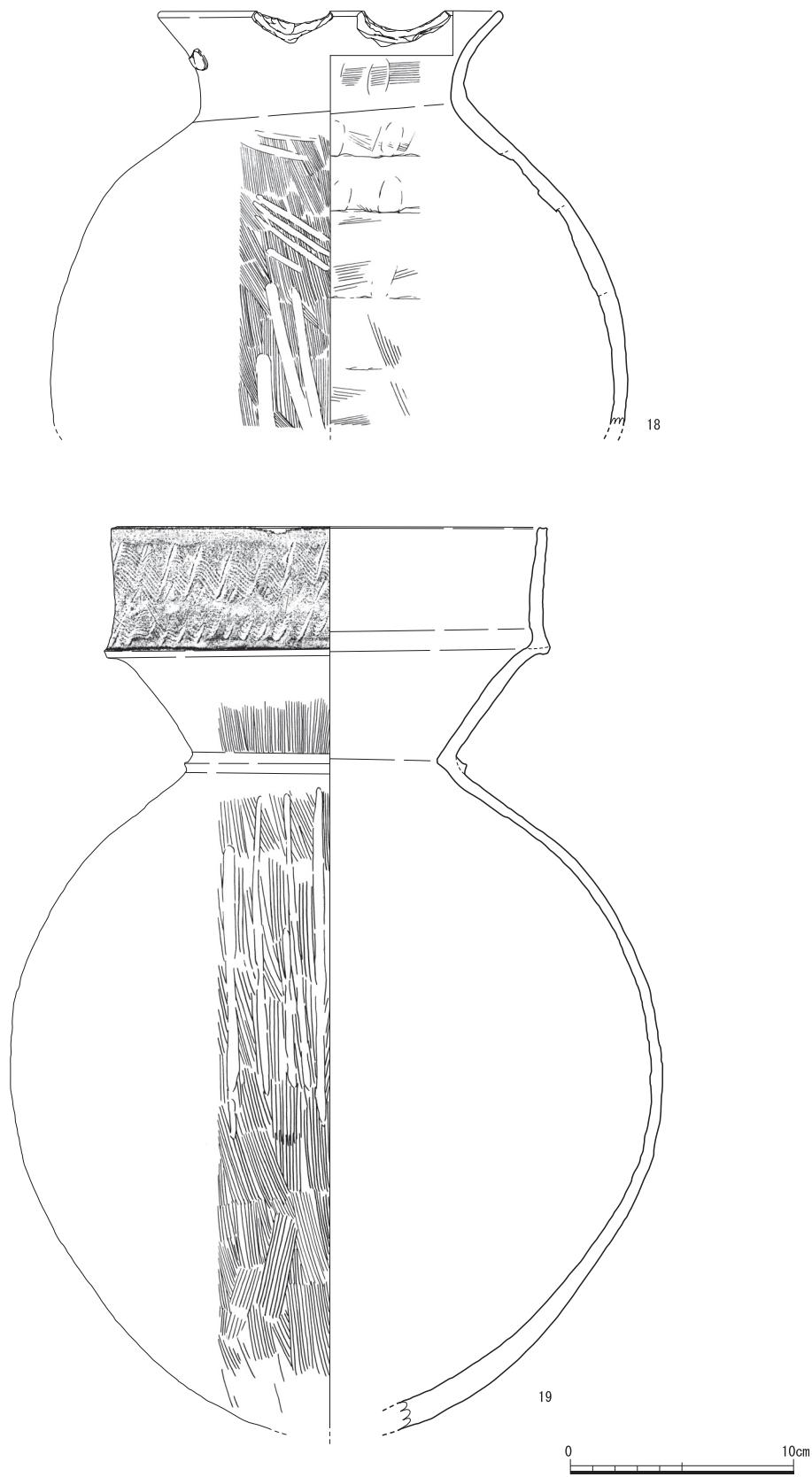
(第 142 図 18・19) 18 は、土師器壺で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は、内外面明赤褐色を呈し、内面口縁部ハケメ、胴部ハケメ後ナデ、外面ハケメ調整である。胴部内面に輪積み痕が多数見られ、処理もずさんである。頸部付近に指頭圧痕が認められる。外面に煤付着が認められ、煤は、炭素 14 年代測定のサンプル 5 として採取した。測定結果として、 $1750 \pm 45$ 、較正年代 AD210—AD195 に 87.3% の確立密度と出ている。

19 は、複合口縁壺で、口縁部外面に波状文を施す安国寺式壺である。口縁部が内傾ではなく上に立ち上がっている。更に胴部も球形化しており、安国寺式壺の新しい様相が見られる。頸部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面赤褐色～黒褐色、外面明赤褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後縦方向のミガキ調整で口径 19.5 cm、器高約  $40.5 + \alpha$  cm、頸部径 10.8 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

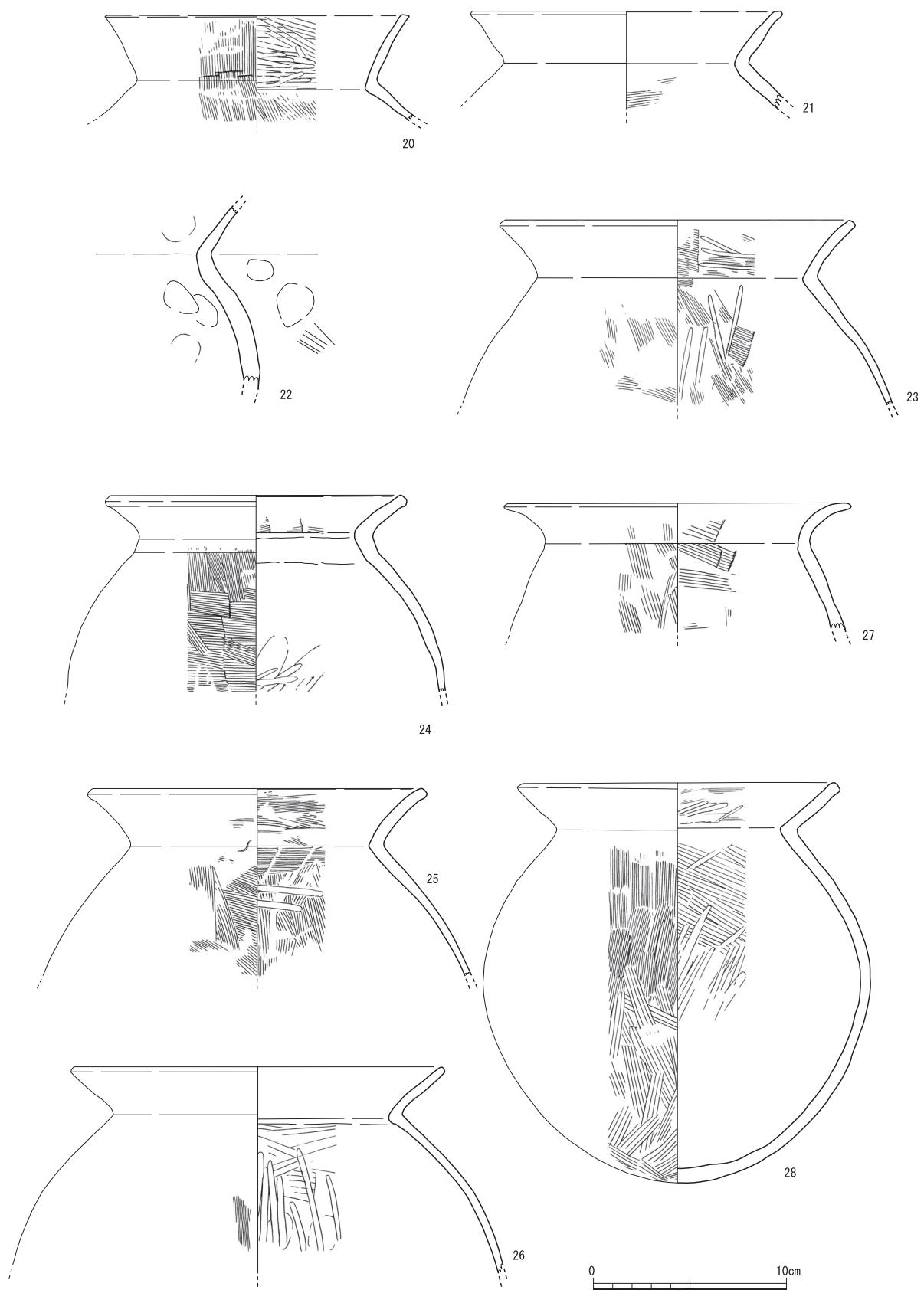
(第 143 図 20～28) 20・21 は、土師器甕口縁部。20 の色調は、内外面赤褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で、口径約 15.4 cm を測る。21 の口縁部は、約 16.2 cm を測る。

22 は、土師器甕の胴部。内面ケズリ後ナデ調整外面ハケメ後ナデであるが雑な作りである。内外面に指頭圧痕、外面に煤付着が認められる。

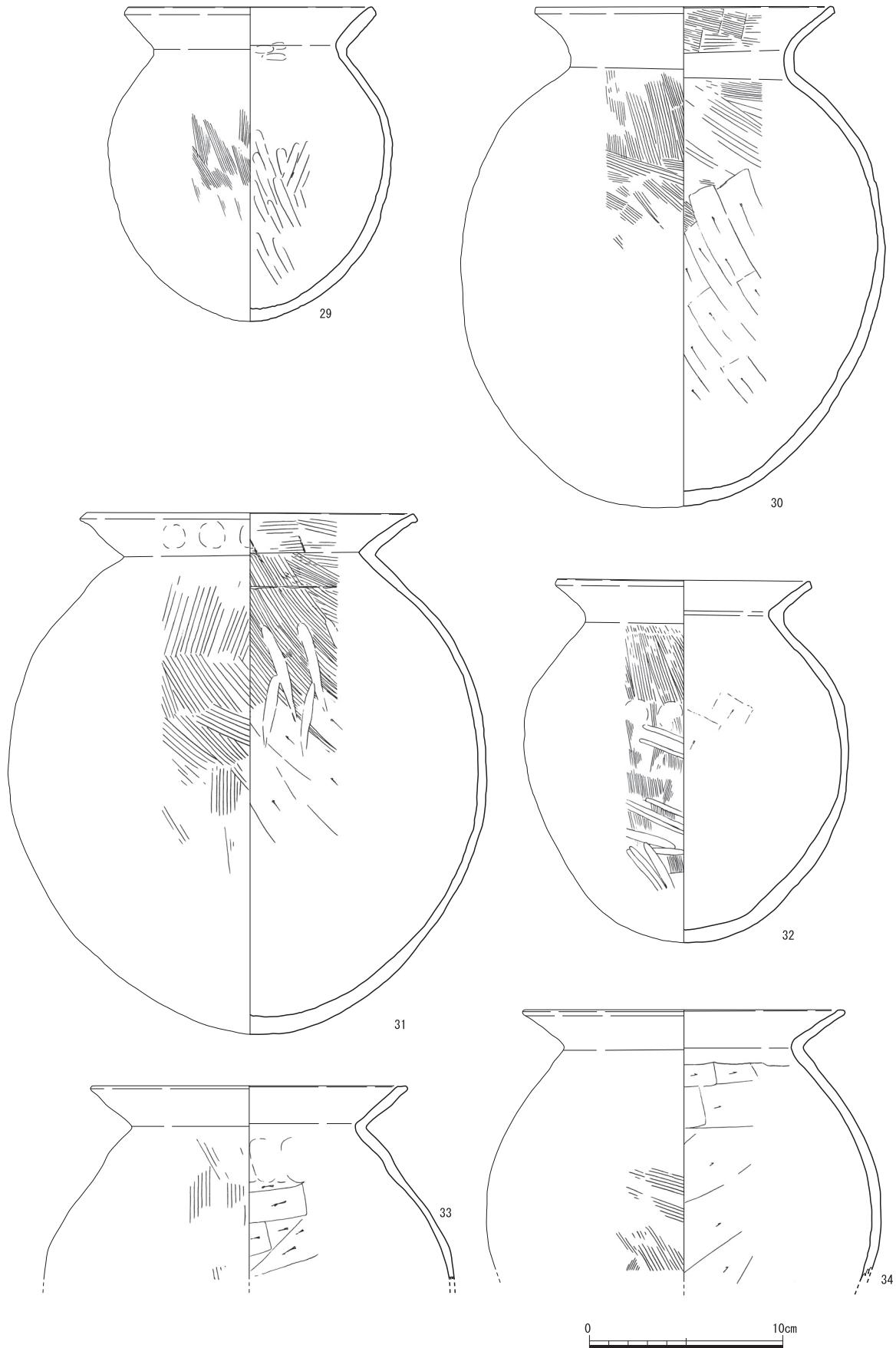
23 は、土師器甕。在地系の製作技法であるが器壁は薄い。胎土は長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は、内面橙色、外面明褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径 18.4 cm を測る。外面に煤付着が認められる。



第142図 24SE008 出土遺物実測図② (1/3)



第143図 24SE008出土遺物実測図③ (1/3)



第144図 24SE008 出土遺物実測図④ (1/3)

24は、土師器甕。胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面赤褐色～暗赤褐色、外面暗赤褐色～黒色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面ハケメ調整で口径15.0cmを測る。頸部内外面に指頭圧痕、外面に煤付着が認められる。

25は、土師器甕。在地系の製作技法で、胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は、内外面にぶい橙色を呈し、内面ハケメ後粗いミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径17.0cmを測る。外面に煤付着が認められる。

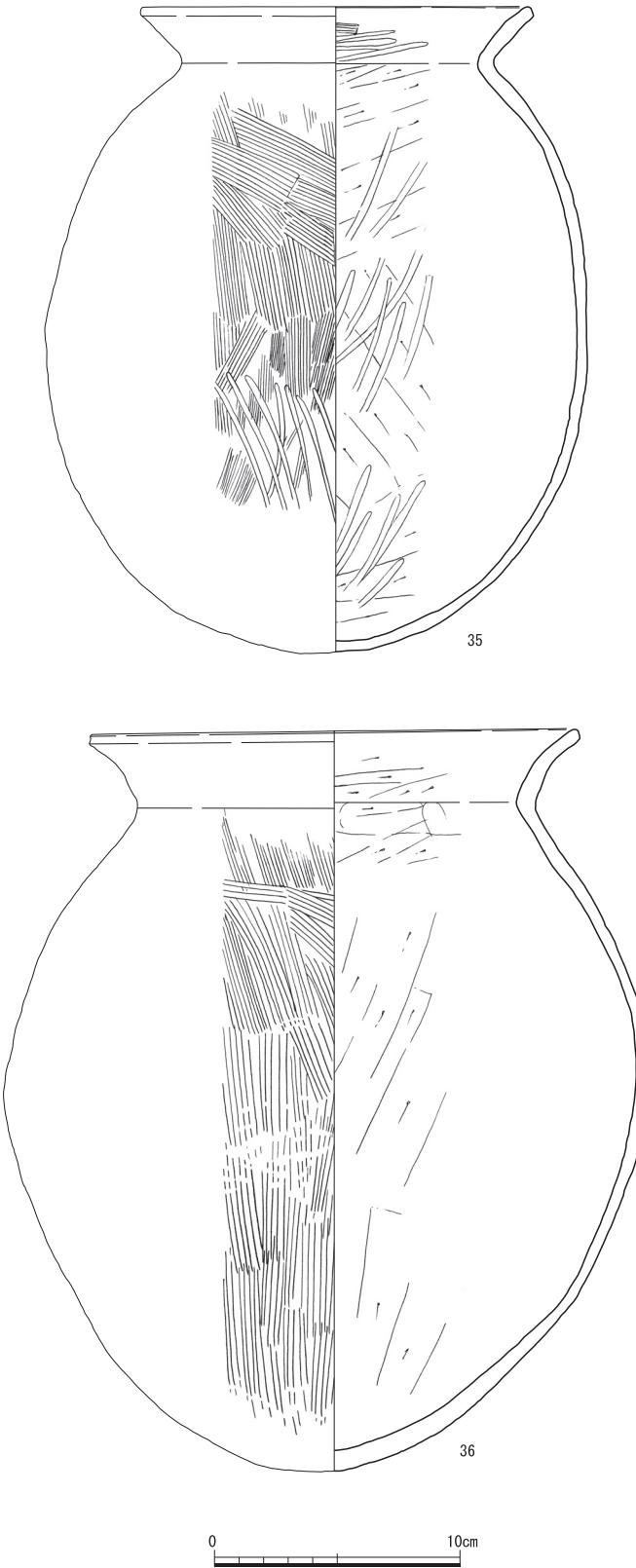
26は、土師器甕。胎土は、石英・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は、内外面明黄褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約19.0cmを測る。外面に煤付着が認められる。

27は、土師器甕。胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面赤褐色、外面暗赤褐色～にぶい褐色を呈し、内外面ハケメ調整で口径18.0cmを測る。

28は、土師器甕の完存品。製作技法は在地系であるが器形は布留系を意識している。胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面橙色～にぶい橙色、外面明褐色を呈し、内面ハケメ後粗いミガキ、外面口縁部横ナデ、胴部ハケメ調整で口径16.1cm、器高20.7cmを測る。外面に煤付着が認められ、煤は、炭素14年代測定のサンプル2として採取した。測定結果として、1800±70、較正年代AD70～AD395に95.4%の確立密度と出ている。

(第144図29～34) 29は、小形の土師器甕。製作技法は在地系で、胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内外面明黄褐色～黒褐色を呈し、内面工具ナデ後ミガキ、外面口縁部横ナデ、胴部ハケメ後ナデ調整で口径約13.0cm、器高16.3cmを測る。外面に煤付着が認められる。

30は、土師器甕。製作技法は、折衷型であり器壁も薄い。胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内外面明褐色～黒褐色を呈し、内面胴部の上部はハケメ、下部はケズリ、



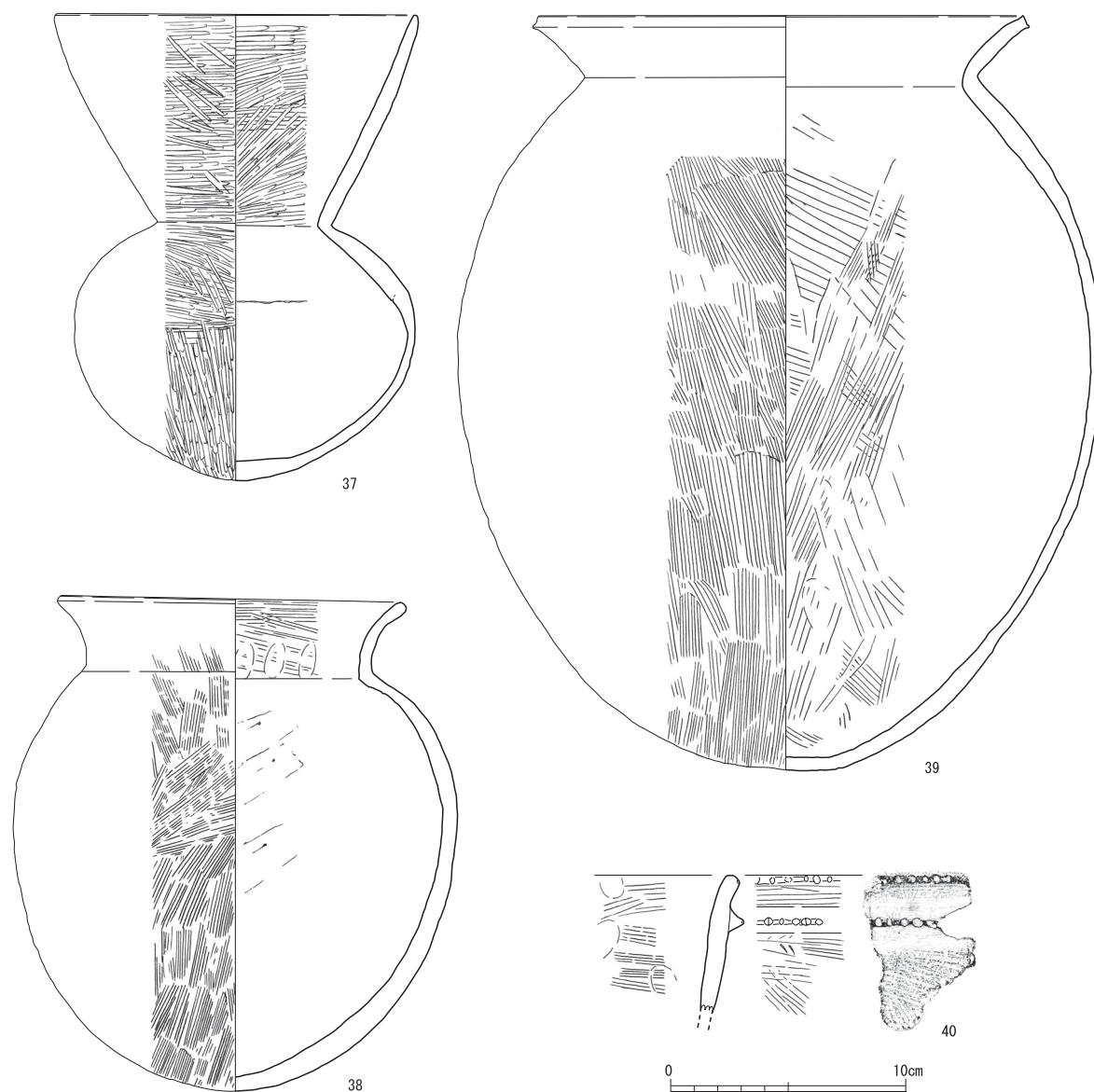
第145図 24SE008 出土遺物実測図⑤ (1/3)

外面口縁部はナデ、胴部はハケメ調整で口径 15.5 cm、器高 25.9 cmを測る。外面に煤付着が認められる。煤は、炭素 14 年代測定のサンプル 3 として採取したが、煤の採取量が少なく測定結果を出す事は出来なかった。

31 は、土師器甕。製作技法は、折衷型であるが、器壁も薄く、器形もかなり布留系の甕を意識している。胎土は、石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面黄橙色～黒色、外面明黄橙色～黒色を呈し、内面胴部の上部はハケメ、下部はケズリ、外面口縁部はナデ、胴部の上部ハケメ、下部ナデ調整で口径 17.5 cm、器高 27.1 cmを測る。口縁部外面に指頭圧痕が、胴部外面に煤付着が認められる。

32 は、土師器甕の完存品。胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内外面明褐色～黒褐色を呈し、内面口縁部ナデ、胴部はケズリ、外面口縁部はナデ、胴部ハケメ調整で口径 13.2 cm、器高 14.9 cmを測る。外面に煤付着が認められる。

33 は、布留系の土師器甕。口縁部はより外反し口縁端部は平坦にまとめ器壁は薄い。胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子を含み、色調は、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 16.4 cmを測る。外面に煤付着が認められる。



第 146 図 24SE008 最下層出土遺物実測図 (1/3)

34 も 33 と同様な布留系の土師器甕。胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面黄褐色～にぶい黄褐色、外面黄橙色～黒色を呈し、内面ケズリ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 16.4 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

(第 145 図 35・36) 35・36 は、布留系の土師器甕であり器壁も薄いが、口縁形態はどちらも在地系に近い。35 の胎土は、石英・長石・雲母・白色粒子を含み、色調は、内面灰黄褐色、外面黄橙色を呈し、内面口縁部ハケメ後ナデ後粗いミガキ、外面口縁部はナデ、胴部ハケメ後ナデ後粗いミガキ調整で口径約 16.0 cm、器高 26.3 cm を測る。外面に煤付着が認められる。36 の、胎土は、長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面黄褐色～黒色、外面褐色～黒色を呈し、内面ケズリ後ナデ、外面口縁部はナデ、胴部は縦方向のハケメ調整で口径約 19.8 cm、器高 30.4 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

(第 146 図 37～40) 37～38 は、井戸の最下層から出土したものである。37 の土師器長頸壺と土師器甕は完存品である。また、39 の土師器甕は、底部破片であったがほぼ復元できたものである。ただし、最下層出土の接合を試みたが口縁頸部から 3.0 cm までで終了した。しかしながら井戸上層と 24SX018 出土の口縁部が接合できた。これらの事から、この甕は口縁部を祭祀使用の為打ち欠かれて、廃棄された可能性も考えられる。

37 は、土師器長頸壺の完存品で、口縁部はやや外反気味に立ちあがり、胴部は球形をなす器形で、胎土は、角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面褐色～黒褐色、外面褐色～黄褐色を呈し、内面口縁部はミガキ、胴部はナデ、外面横方向後縦方向のミガキ調整で口径約 15.4 cm、頸部径 7.5 cm、器高 19.9 cm を測る。ミガキ調整が丁寧に施されており外部からの持込を窺わせる物であるが胎土等を観察すると在地で製作されている事がわかる。

38 は、土師器甕の完存品で内面にケズリが施されているが器形は在地系である。胎土は、石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は、内面黒褐色、外面黒色を呈し、内面口縁部ハケメ、胴部ケズリ、外面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約 14.6 cm、器高 21.1 cm を測る。外面全体に煤付着が認められ、内面にも焦げた痕跡がみられた為、炭素 14 年代測定を行う為、外面の煤と考えられる物をサンプル 1-a、ふきこぼれと考えられる煤をサンプル 1-b として採取した。

測定結果として、

サンプル 1-a は、1740 ± 30、較正年代 AD235—AD390 に 95.4%。

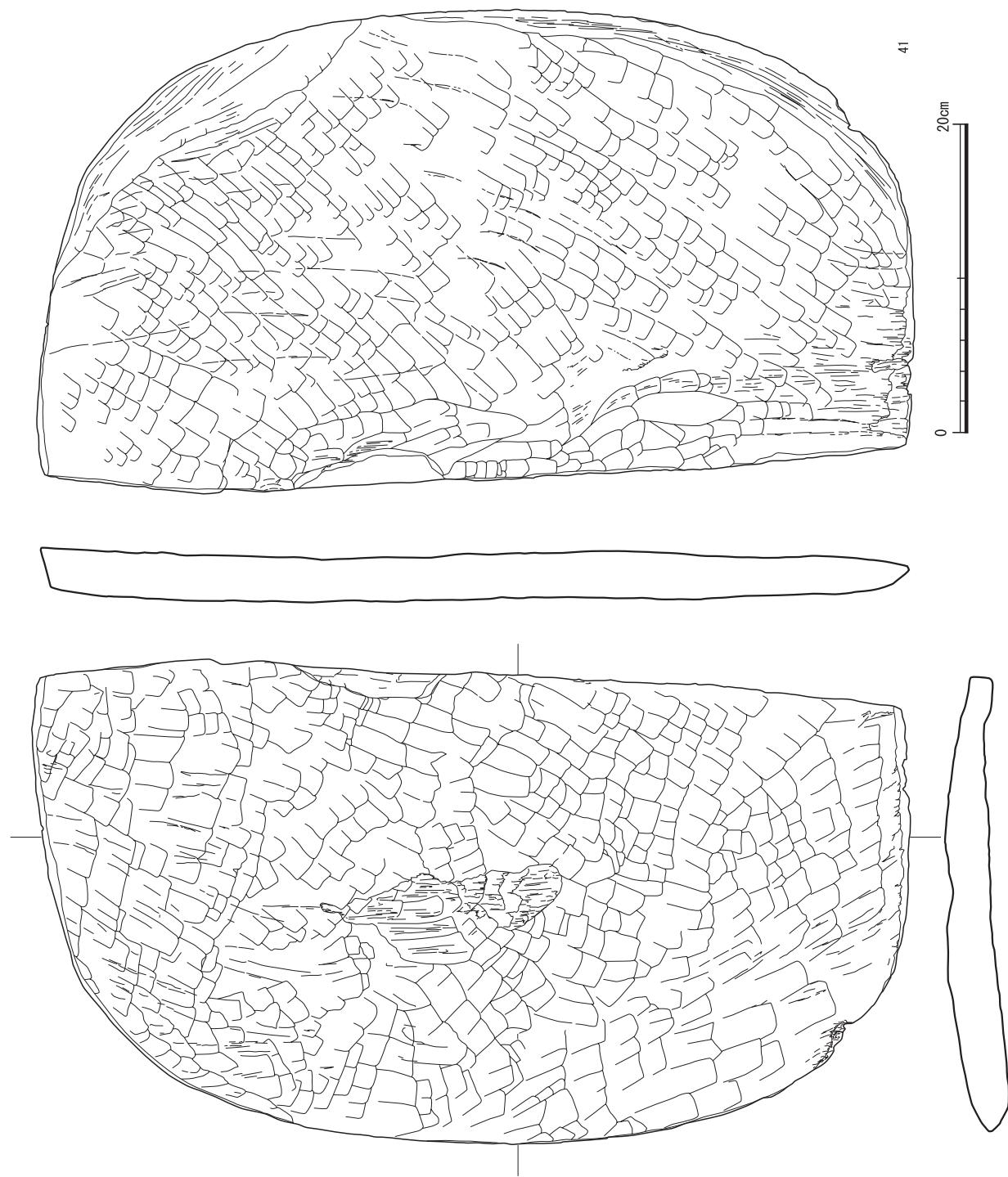
サンプル 1-b は、1750 ± 50、較正年代 AD205—AD400 に 95.4% の確立密度と出ている。

39 は、土師器甕で、口縁部が「く」の字状に外反し、やや球形化した胴部を持つ甕で、胎土は、石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は、内外面明黄褐色～黒褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約 20.5 cm、器高 32.1 cm を測る。外面に黒斑と煤付着が認められる。

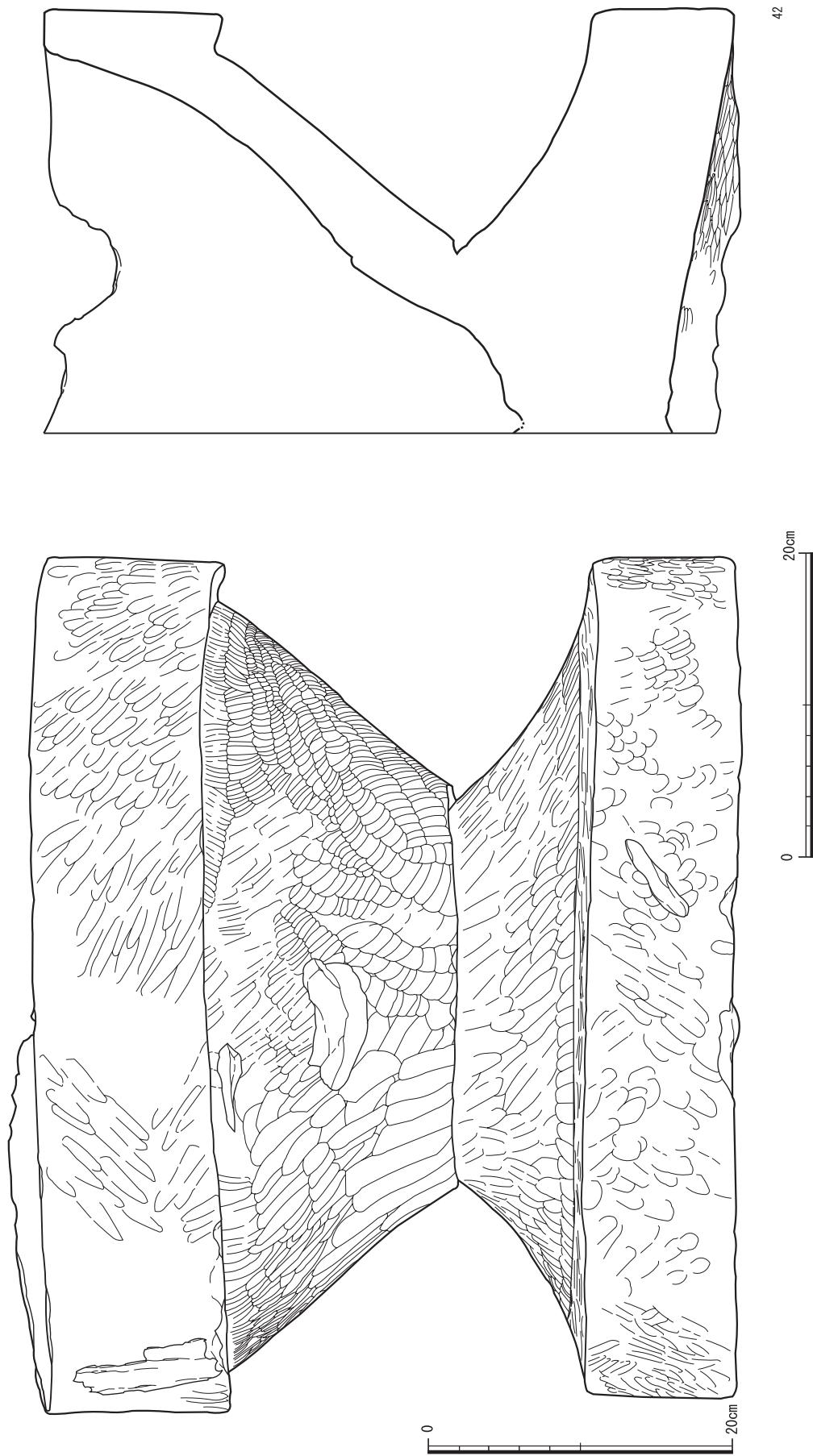
40 は、弥生土器甕の口縁部。突帯甕の口縁部で、口縁部外面に刻み目が見られることから弥生時代前期末と考えられるものである。この遺物は、24SE008 の時期に帰属しない。

(第 147 図) 41 は、臼の蓋と考えられるものである。大分県内の民俗調査例によると臼の蓋は 2 枚 1 組で使用するとの事。41 は、2 枚組みの 1 枚と考えられる。樹種は出土した臼と同様クスノキ製である。最大長 56.4 cm、最大幅 30.4 cm、最大厚 3.2 cm を測るもので、内面は、少し窪ませて、蓋が安置し易いような器形にしている。内外面共にヤリガンナによる加工痕がみられ、かなり丁寧な作りである。

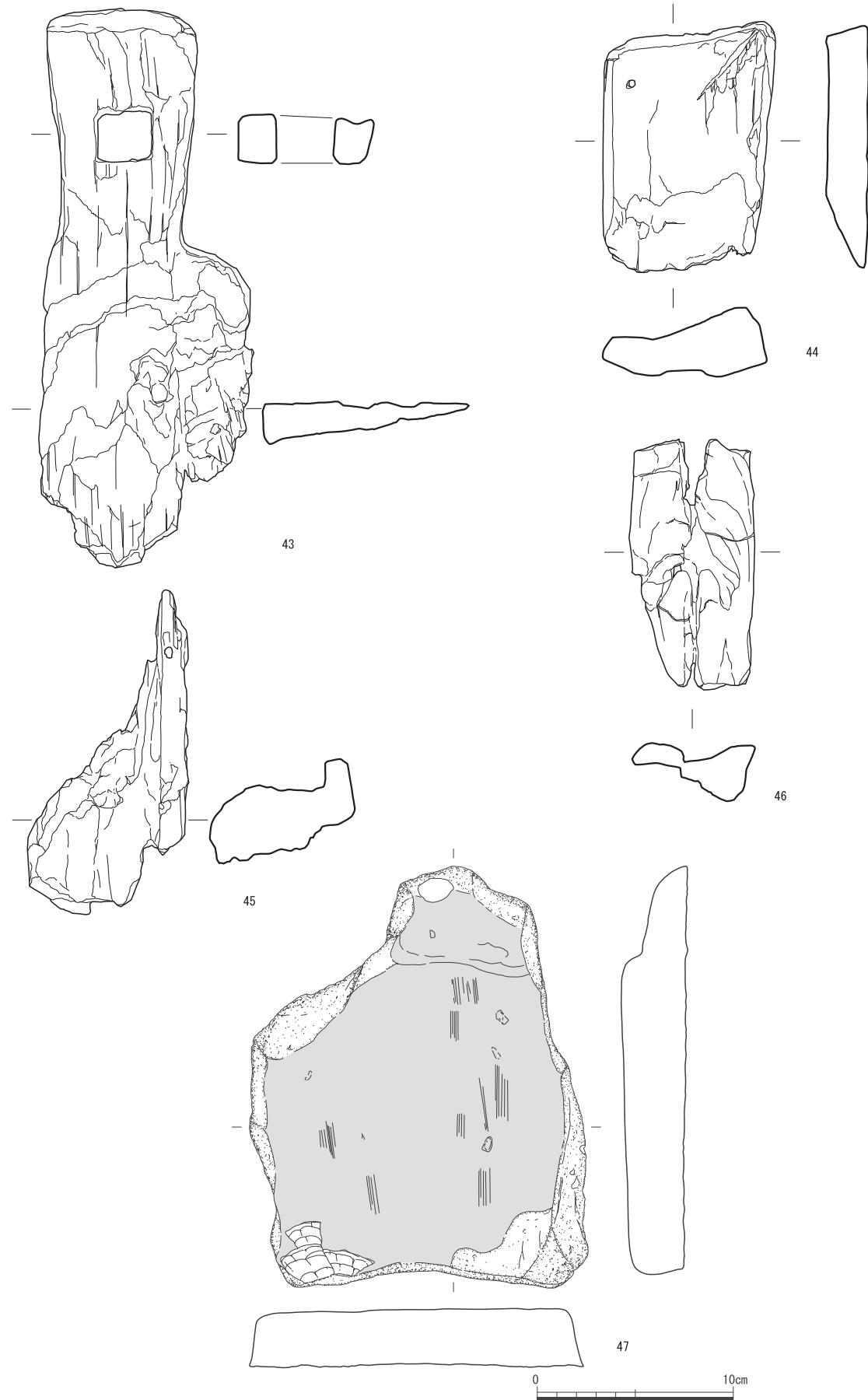
(第 148 図) 42 は、クスノキ製の臼である。外面の一部に樹皮が見られることから、伐採したクスノキを丸太に加工し作られている。臼の大きさは、口径 55.2 cm、器高 45.6 cm、底径 56.4 cm、鉢部深さ 30.4 cm を測るも



第147図 24SE008出土 尻蓋実測図 (1/4)



第148図 24SE008出土 人実測図 (1/4)



第149図 24SE008出土 木器・石器実測図 (1/3)

のでありヤリガンナで丁寧に製作されている。また、底部内面は中心部が 1.2 ~ 1.4 cm 程削られており、臼のすわりが良くなる様に考え作られている。臼の内部はかなり深くまで使用痕が認められる事から、餅搗き用としてではなく、収穫を終えた穀物の処理としての穂から穀粒を分離する「脱穀」、穀殻を取り外す「穀摺り」用として使用された可能性が高い。器形は、弥生時代前期に出土する臼に類似するが、今まで、このような器形の完存品の出土例はない。古墳時代の臼といえば、福岡県原深町遺跡で出土した臼の様にクリ材製で、口径 34.8 cm、底径 31.7 cm、高さ 53.0 cm、深さ 23.3 cm を測るものであるが単純な器形をしており、次第に背が高くなる傾向がみられる。しかしながら 24SE008 出土の臼は器高も低く、製作時のヤリガンナ痕が良く見受けられもので、デザイン性も芸術的である。

使用されたクスノキは、紀元 289 年頃伐採されたもので、樹齢は  $107 + \alpha$  年であることが判明している。現代でも臼は、ケヤキ材やクスノキ材を使用している例がある。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ 25.0 m、径 0.80 m ぐらいであるが、高さ 50.00 m、径 5.00 m に達するものもある。材は堅硬で、耐久性が高く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工等に使用されている。

(第 149 図 43 ~ 47) 43 は、用途不明の木製品で、四角形の穿孔が見られ、上面から下面に、直角に柄を取り付けているものと考えられる。a の部分は本来の形であると考えられる。先端に向かって薄くなっているのが特徴である。最大長 28.5 cm、最大幅 10.7 cm、最大厚 2.6 cm を測る。

樹種は、コナラ属アカガシ亜族で、アカガシ亜族には、アカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 30.0 m、径 1.5 m 以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられることが多い。

44 は、樹種不明の木製品であるが、観察してみるとシイ属ブナ科ツブラジイの可能性が高い。用途は不明であるが、先端を尖らせており楔として使用した可能性が高い。最大長 12.0 cm、最大幅 8.7 cm、最大厚 2.1 cm を測る。

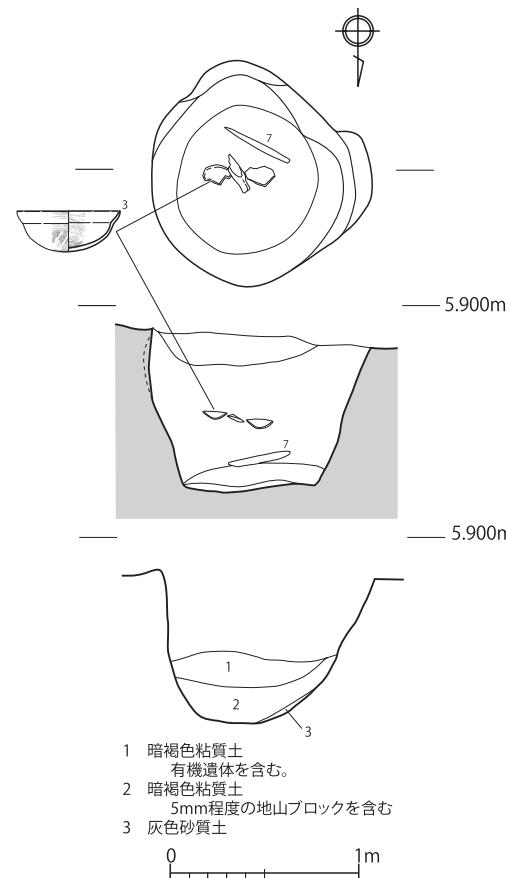
45 は、井戸 p -15 として取り上げた木製品で用途は不明であるが、加工痕(穿孔)がみられることから木製品とした。樹種は、ムクロジである。ムクロジは、本州(茨城県、新潟県以南)、四国、九州、沖縄に分布する落葉高木樹で、高さ 25.00 m、径 1.00 m に達するが、やや軽軟で、脆弱な材で、器具、家具などに用いられるものである。最大長 6.5 cm、最大幅 8.0 cm、最大厚 3.7 cm を測る。

46 は、樹種不明の用途不明の木製品。最大長 12.8 cm、最大幅 6.3 cm、最大厚 2.7 cm を測る。

47 は、安山岩製の石皿。裏面は欠損しているが、表面は、磨石を使いかなり使い込まれている。長さ 21.5 cm、最大幅 17.3 cm、厚さ 3.4 センチを測るもので、重さ 1680 g を量る。

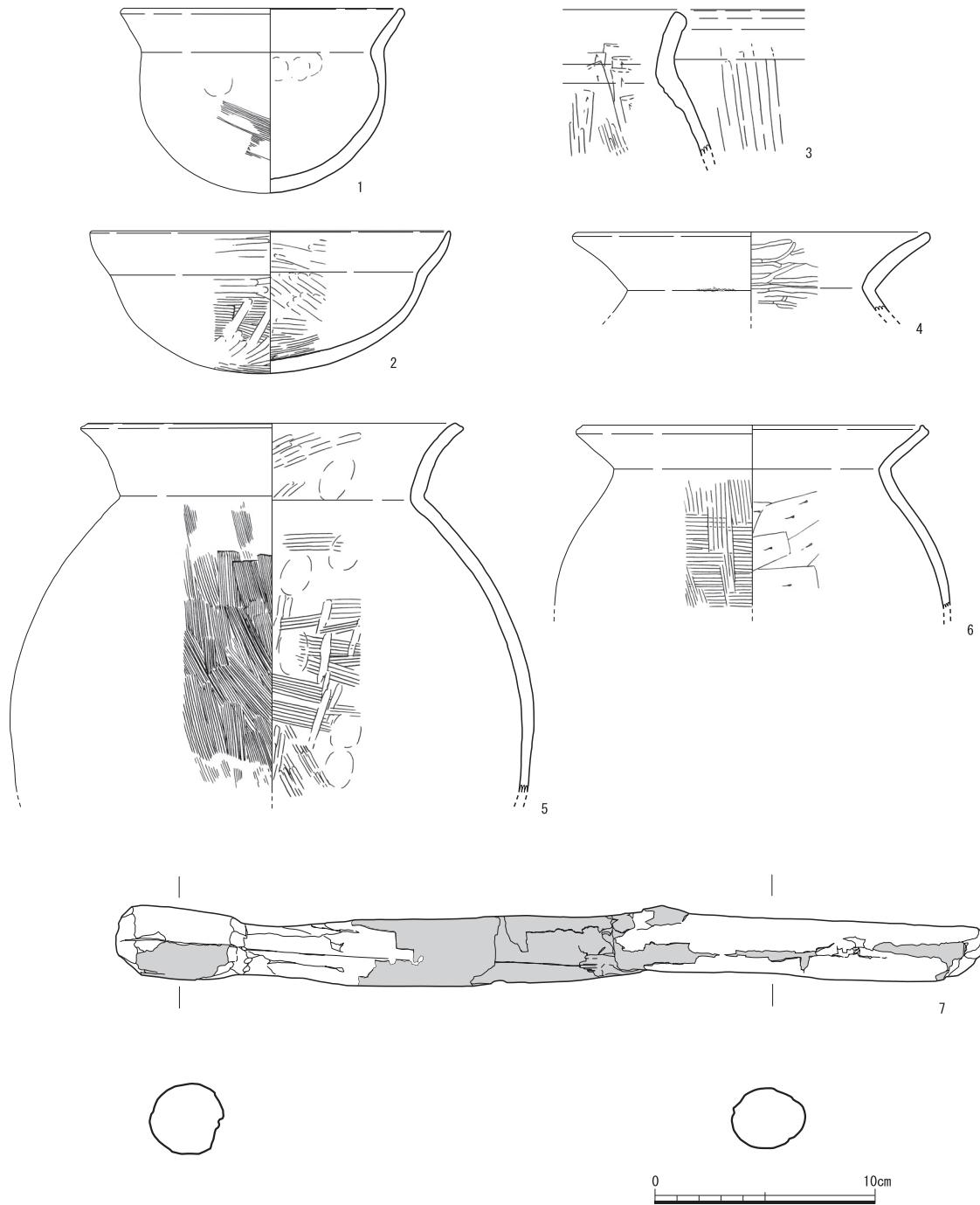
#### 24SE009 (第 150 図)

調査区南部で検出された遺構で、浅いピット (24SP014) に



第 150 図 24SE009 平面・断面・土層断面

実測図 (1/40)



第151図 24SE009出土遺物実測図 (1/3)

切られている。径1.10～1.20mの不整円形状を呈し、検出面からの最大深は0.90m程度である。湧水が認められ、特に下底部では著しい。壁面には滯水によるとみられるオーバーハンギングが認められる。埋土は上部が黒灰色土(作図していない)で、下部は概ね黒褐色の粘質土で構成される。下部の埋土からは加工痕を有するものを含む木片等の有機物も出土した。井筒は検出されず、土層からもその痕跡は認められないが、激しい湧水がある土層まで掘り込まれており、井戸と考えられる。出土した土師器類から、古墳時代前期の遺構と判断される。

**出土遺物(第151図)** 1は、小形丸底壺で、胎土は石英・長石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面にぶい橙色、外面にぶい黄橙色を呈し、内面ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約12.9cm、器高8.4cmを測る。内外面に黒

斑が認められる。

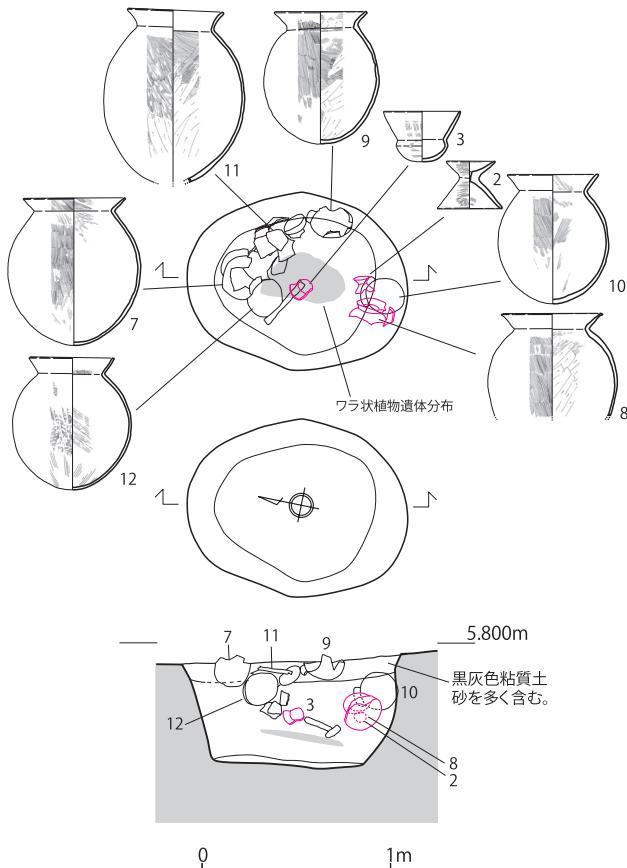
2は、小形丸底鉢で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面明赤褐色、外面にぶい赤褐色～にぶい褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約16.4cm、器高6.5cmを測る。

3は、土師器壺で、胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面明褐色～黒色、外面にぶい黄橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ後ケズリ後ナデ、外面縦方向のハケメ調整で外面に黒斑が認められる。

4・6は、土師器甕口縁部で、4は内面ナデ後ミガキ、外面ナデ調整で口径約16.2cmを測る。6の胎土は石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい黄橙色～にぶい橙色を呈し、内面ケズリ、外面横方向のハケメ後縦方向のハケメ調整で口径約16.0cmを測る。4は在地系、6は布留系を意識して作られている。

5は、土師器甕。口縁部が立ち上がり氣味に外反し端部をまとめる器形で胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面にぶい黄橙色、外面暗褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ調整で口径約17.4cmを測る。外面に煤付着が認められる。

7は、材質は、不明ながら径約3.2cmの杭を削り掘り粉木状に作っている。網掛けの所は樹皮が残っている。遺物は古墳時代前期と考えられる。



24SE010 (第152図)

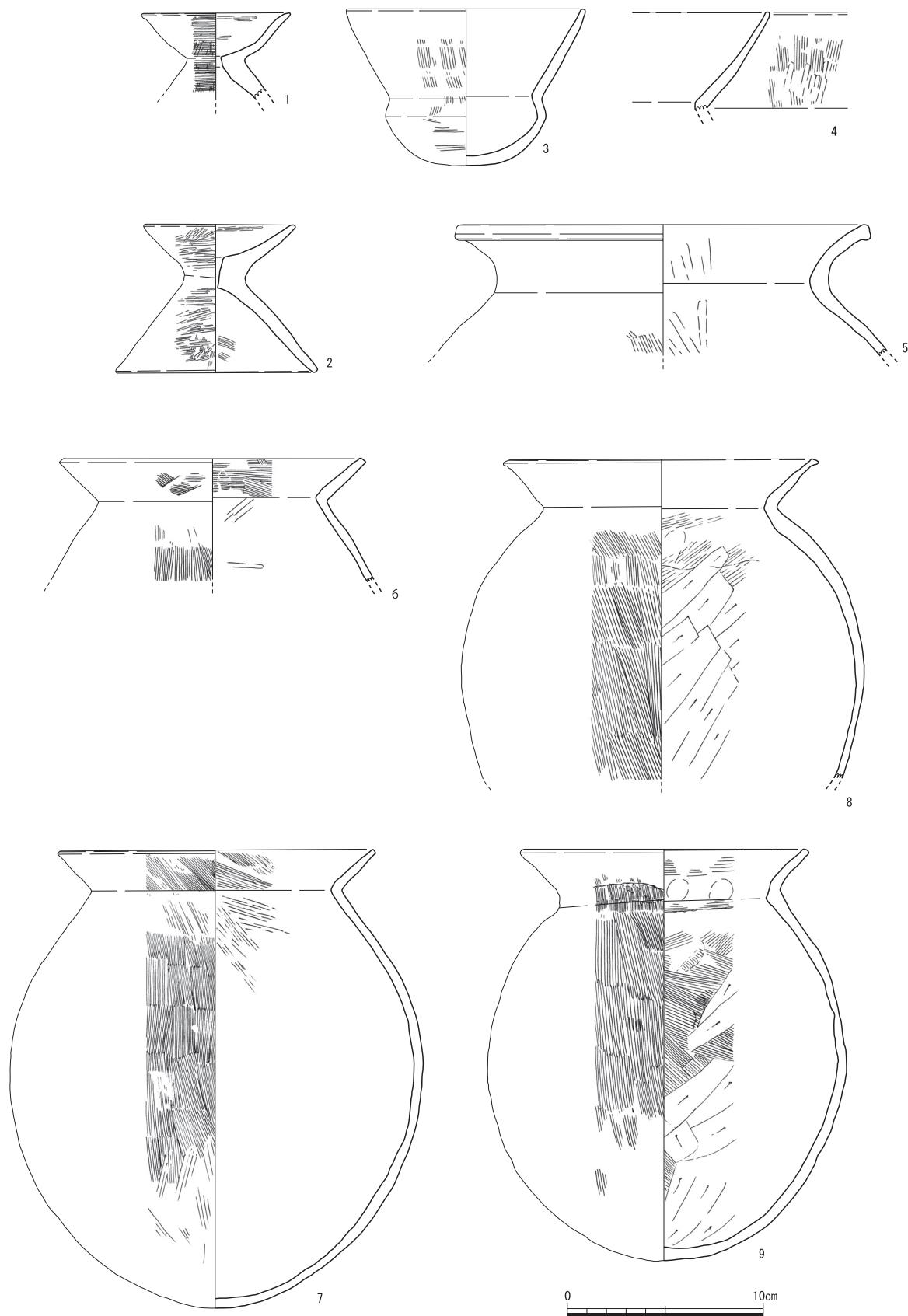
調査区南部で検出された遺構で、周辺の井戸・土 周辺の井戸・土 第152図 24SE010 平面・断面・遺物出土状態図 (1/40)  
坑群の中で比較的標高が高い位置 (標高約5.80m)

にあったものである。長軸約1.20m 短軸約0.90mの橢円形状を呈し、検出面からの最大深は0.60m程度である。標高5.50m前後から下では湧水があり、機能時に滞水していたためか壁面のオーバーハングが認められる。埋土は上部が砂を多く含む黒灰色粘質土であり、下部は黒色の粘質土である。完形のものを含む少なくとも12個体を超える土師器類が出土しており、一括廃棄された可能性が高い。土器群とともに木片等の有機物も出土したが、土器が多量に出土した土層の直下においては藁状の植物遺体が出土した。出土した土師器類から、古墳時代前期の遺構と判断される。

**出土遺物 (第153図)** 1は、土師器小形器台で、環部がやや内湾気味に外反し口縁端部は丸みを帯びる。胎土は長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面暗赤褐色を呈し、内面ナデ後ミガキ、外面横方向のミガキ調整で口径7.6cm、器高4.5+αcmを測る。

2は、土師器小形器台。1に比べ口縁部がなだらかに外反し端部は丸みを帯びる。胎土は長石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、環部内面ナデ後ミガキ、脚部内面ナデ、外面ナデ後ミガキ調整で口径7.8cm、器高7.6cm、底径10.3cmを測る。外面に黒斑が認められる。

3・4は、土師器小形丸底壺で、3の胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色を呈し、内



第153図 24SE010 出土遺物実測図① (1/3)

面ナデ後ミガキ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 12.2 cm、器高 8.0 cm を測る。

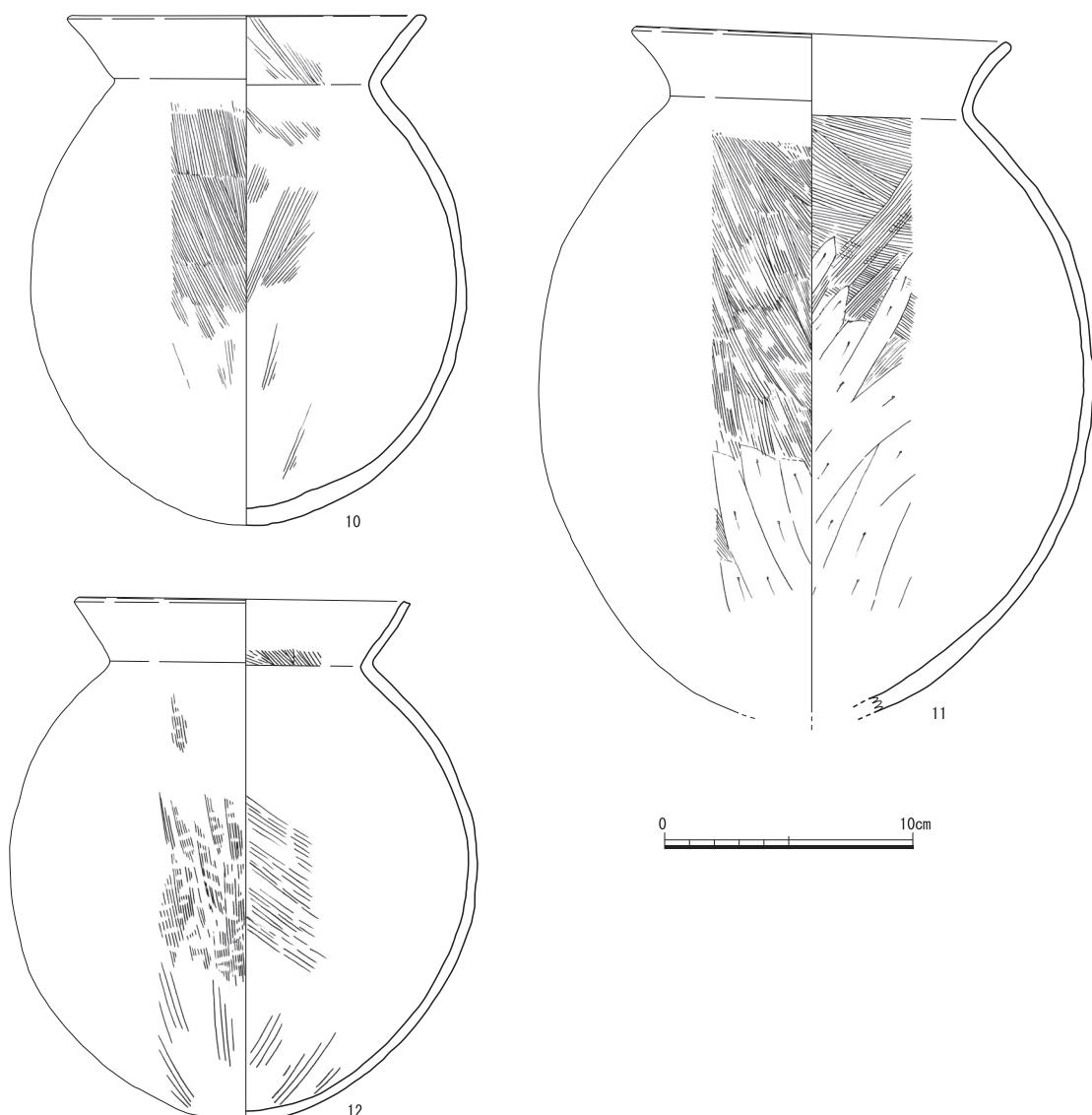
5 は、土師器壺口縁部。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面にぶい褐色、外面黒色～褐色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約 21.2 cm を測る。

6 は、土師器甕で、口縁部が「く」の字状に外反し端部は丸みを帯びる。胎土は角閃石・赤色粒子・白色粒子・砂粒を含み、色調は内外面黒色を呈し、内外面ハケメ後ナデ調整で口径約 15.6 cm を測る。

7 は、土師器甕で 6 と同様な器形で、胎土は石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内面黄褐色、外面明黄褐色を呈し、内面ハケメ後丁寧なナデ、外面ハケメ調整で口径約 14.6 cm、器高 21.0 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

8 は、土師器甕で 6 と同様な器形であるが口縁部端部を摘み上げるように処理している。胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面赤褐色～黒色を呈し、内面ハケメ後ケズリ、外面ハケメ後調整で口径約 16.1 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

9 は、土師器甕。製作技法は、在地系と布留系の折衷型である。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面黄褐色、外面明黄褐色～黒褐色を呈し、内面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ後ケズリ、外面口縁部



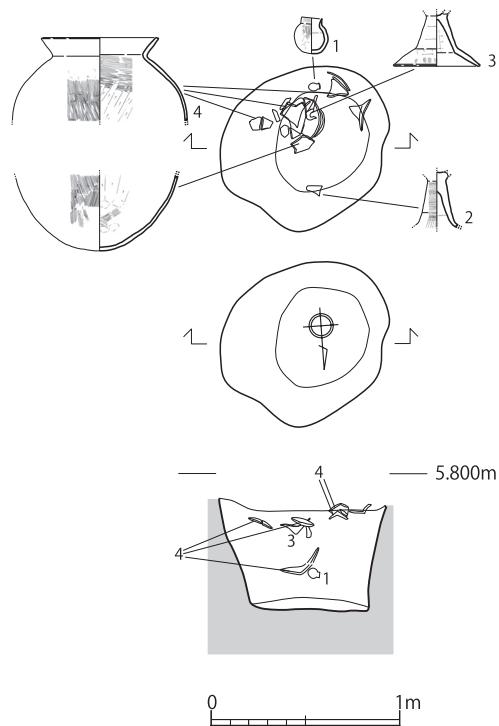
第 154 図 24SE010 出土遺物実測図② (1/3)

ハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約 17.2 cm、器高 23.4 cm を測る。外面全体に煤付着が認められる。

10 は、土師器甕。製作技法は在地系である。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色～黒色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約 14.4 cm、器高 20.6 cm を測る。外面に煤付着が認められる。

11 は、土師器甕。胎土は石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面明赤褐色～明褐色を呈し、内面ハケメ後ケズリ後粗いナデ、外面口縁部横方向のハケメ・胴部ハケメ後ケズリ後工具ナデ調整で口径約 15.3 cm、器高 27.7 +  $\alpha$  cm を測る。外面に煤付着が認められる。

12 は、土師器甕。口縁部はやや内湾氣味に外反し、口縁端部は平坦に仕上げるもので、胎土は長石・角閃石・白色粒子を含み、色調は内面明黄褐色～黄褐色、外面褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ調整で口径約 13.5 cm、器高 21.1 cm を測る。外面全体に煤付着が認められる。



第 155 図 24SE012 平面・断面・遺物出土  
状態図 (1/40)

#### 24SE012 (第 155 図)

調査区南部で検出された遺構で、周辺の井戸・土坑群の中で比

較的標高が低い位置 (標高約 5.65m) にあったものである。長軸約 0.90m、短軸約 0.85m の不整円形状を呈し、検出面からの最大深は約 0.60m 程度である。標高 5.50m 前後から下では激しい湧水があったが、壁面のオーバーハンプはほとんど無い。埋土は概ね黒色の粘質土で構成される。完形のミニチュア土器を含む土師器類が出土したが、ミニチュア以外の土器はいずれも完形に復元できるものでなかった。さらに加工痕を有するものを含む木片等の有機物も出土した。出土遺物から、古墳時代前期の遺構と判断される。

**出土遺物 (第 156 図)** 1 は、ミニチュア土器の壺。胎土は石英・角閃石・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ後ナデ調整で口径約 3.0 cm、器高 5.8 cm を測る。頸部内外面に指頭圧痕が認められる。

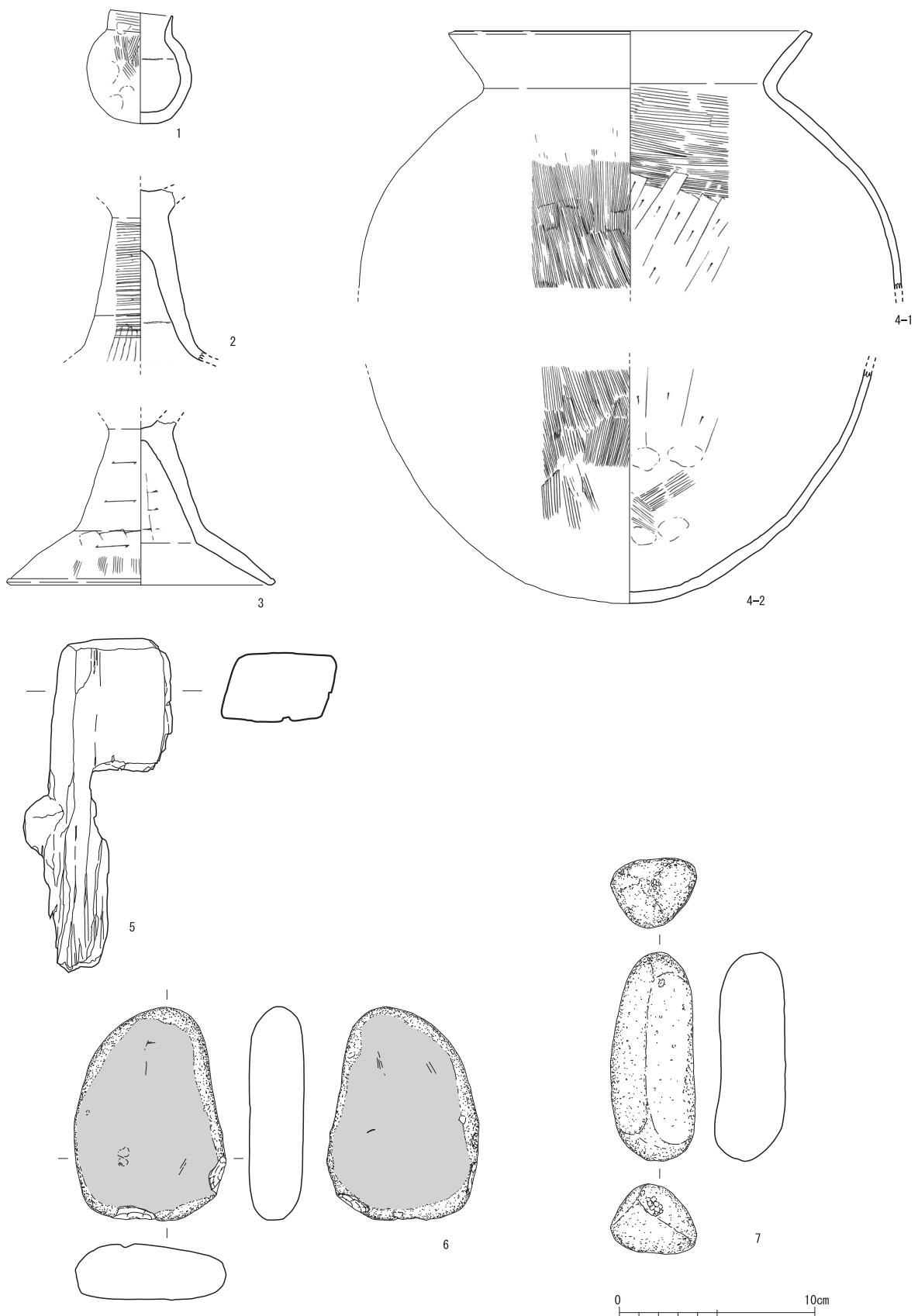
2・3 は、高坏脚部。3 の胎土は石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内外面橙色を呈し、内面横方向のナデ、外面ハケメ後ナデ調整で底径約 13.8 cm を測る。

4 は、土師器甕。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は平坦に仕上げるもので、胎土は石英・雲母・赤色粒子・白色粒子を含み、色調は内面明黄褐色～黄褐色、外面褐色を呈し、内面ハケメ後ナデ、外面ハケメ調整で口径約 18.6 cm、器高 25.2 +  $\alpha$  cm を測る。外面に煤付着が認められる。

5 は、木製品で、樹種は不明であるが、ブナ科コナラ属アカガシ亜属と考えられる。最大長 17.0 cm、最大幅 6.2 cm、厚さ 3.5 cm を測る。器種は不明であるが加工痕が見られる。なんらかの用途に使用されたものと考えられる。

6 は、安山岩製の磨石。長さ 10.9 cm、幅 7.8 cm、厚さ 2.7 cm、重さ約 400g を測る。下部は、敲石として使用されている。

7 は、角閃石安山岩製の敲石で、上面と下面に使用痕が認められる。長さ 10.8 cm、幅 4.3 cm、厚さ 3.5 cm、重さ約 280g を測る。



第156図 24SE012出土遺物実測図 (1/3)

## 溝状遺構 (SD)

## 24SD003 (第 132 図、土層：第 158 図)

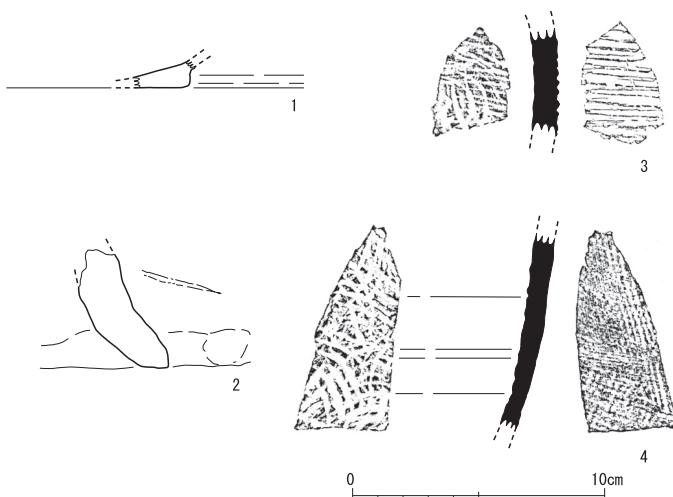
調査区中央を北東から南西に斜行する溝状遺構で、N-68°-E を指向する。幅 0.60 ~ 1.00m、最大深は 0.40m である。埋土上部は暗褐色土、下部は灰褐色粘質土で、水流の痕跡は無く、区画溝と思われる。24SD015 との切り合い関係は明らかにできず、同時に存在した可能性もある。出土遺物は土器小片のみであるため、帰属時期は不明であるが、24SD015 と同時期となる可能性がある。

## 24SD005 (第 158 図)

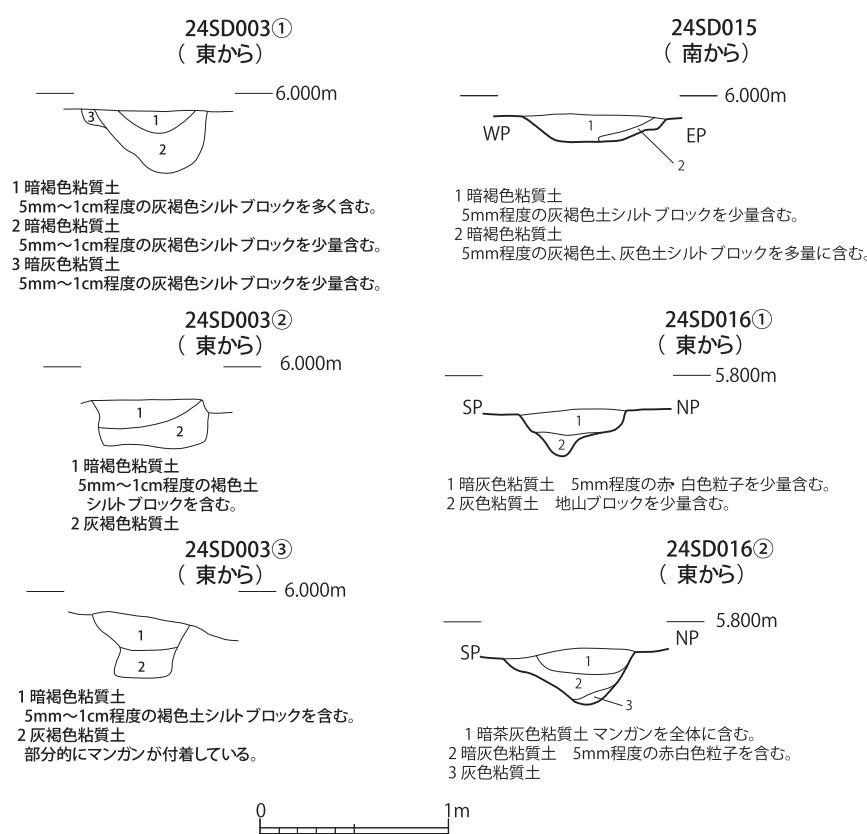
調査区南東端部で検出された溝状遺構で、N-69.4°-E を指向し、24SD003 とほぼ平行する。幅 0.40 ~ 0.50m、最大深 0.20m を測る。24SD017 を切っている。黒灰色砂質土で埋積している。出土遺物は無く、時期は不明である。

## 24SD015 (第 132 図、土層：第 158 図)

調査区北東端で検出された溝状遺構で、N-15.8°-W を指向する。幅 0.70 ~ 0.80m、最大深 0.40m を測る。24SD003 とは同時期に存在した可能性があり、切り合いは不明である。また、指向する方位については、調査区内で交



第 157 図 24SD015 出土遺物実測図 (1/3)



第 158 図 24SD003・015・016 土層断面実測図 (1/40)

差が確認できないが、24SD016 とほぼ直交する。埋土の状況から、水流は窺えず、区画溝と考えられる。出土遺物から、古代に属する可能性がある。

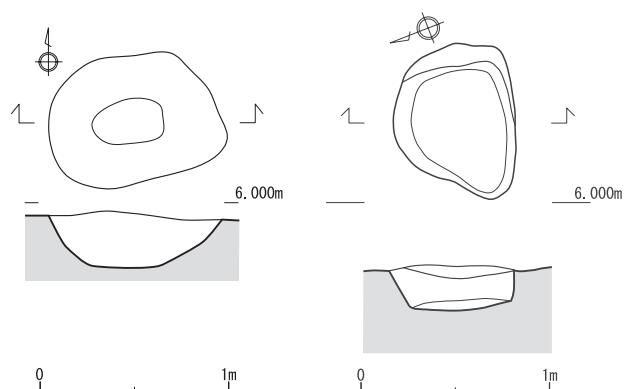
**出土遺物（第 157 図）** 1 は、土師器壺底部。色調はにぶい褐色を呈し、底部ヘラ切り、内面ナデ調整である。2 は、器台の脚部と考えられるもの。胎土は石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子を含み、色調は内外面にぶい橙色を呈し、内面ナデ、外面ナデと指オサエ調整である。3・4 は、須恵器甕の胴部破片。器高  $25.2 + \alpha$  cm を測る。外面に煤付着が認められる。

#### 24SD016（第 132 図、土層：第 158 図）

調査区南東部で検出された溝状遺構で、N-74.2° -E を指向する。幅 0.60 ~ 0.75m、最大深 0.40m である。暗灰色～灰色粘質土で埋積しており、土色としては近世溝にも類似するが、近世溝の埋土とは土質や土の質感が異なり、中世以前に属すると思われる。近世遺物は出土せず、土器小片が出土したのみであり帰属時期は不明である。

#### 24SD017（第 132 図）

調査区南端で検出された溝状遺構で、N-46.5° -W を指向する。24SD005 に切られている。幅 0.65 ~ 1.10m、最大深 0.50m で他の溝状遺構に比べ規模が大きい。埋土は暗灰褐色シルト質土である。他のどの溝とも異なる方位で、むしろ近世溝 24SD001 と直交する角度に近いが、埋土の土質が大きく異なっている。出土遺物は土器小片であり、帰属時期は不明である。



第 159 図 24SK024・025 平面・断面実測図 (1/40)

#### 土坑（SK）

##### 24SK024（第 159 図）

調査区西部で検出された遺構で、長軸約 0.90m、短軸約 0.70m の不整橢円形状を呈し、検出面からの最大深は 0.30m 程度である。埋土は暗褐色シルト質土で粘質土である。遺物は僅少であるが、時期の推定できる土師器片が出土しており、古墳時代前期の可能性が高い。

##### 24SK025（第 159 図）

調査区南部で検出された遺構であるが、周辺で検出された井戸群と異なり、比較的浅い遺構である。長軸約 0.80m、短軸約 0.70m の不整橢円形状を呈し、検出面からの最大深は 0.25m 程度である。黒褐色土を基調とする埋土である。出土遺物は僅少であるが、土師器小片が出土しており、井戸群と同様な古墳時代前期の遺構と推定される。

## 小結

第24次調査で出土した遺構のうち、出土遺物により詳細な年代のわかるものは古墳時代前期の井戸跡と考えられる遺構6基である。これらは、調査区南側の24SD016周辺に集中して検出された。一部の井戸には切り合ひ関係も認められることから、繰り返し掘られた可能性が考えられる。この検出位置は今回の調査区の中で最も標高が低い場所であり、土層断面図で提示したように無遺物の黒色土が厚く堆積していた場所である。おそらく原地形上では浅い谷状となる部分であり、黒色土はこれに周囲から流れ込んで厚くなつたと推定される。古墳時代当時の地表面標高がどの程度であったか判断が難しいが、当時にも緩やかな谷状の地形が保持されていたとすれば、比較的浅い掘り下げで地下水位に達する位置であったため井戸がこの場所に集中していると推論することもできようか。

当該期の住居跡等集落を構成する他の遺構については井戸群の北及び南側と考えられる。このうち南側については、試掘調査でも遺構が発見されておらず、低湿地に移行していくことが確認されている。北側については隣接する第11次調査区においても当該期の遺構が検出されてはいるが、住居跡は検出できていない。おそらくは近世以降の水田化とくに昭和初期の耕地整理において著しい削平を受けたため残っていないものと思われる。

今回、特筆すべきものは、24SE008の存在である。井戸祭祀を行った後に臼や臼の蓋や土器を廃棄している状況がみられたことである。この井戸は古墳時代初頭に比定されるものである。井戸に臼を廃棄する例は珍しく全国的に見て、2例目である。1例目は、佐賀県牛津町所在の生立ヶ里遺跡から検出された井戸-94から出土した臼である。井戸跡は、弥生時代中期前半に比定されるものである。この遺構では、多くの土器片に混じって木製品が出土している。中層付近では、ほぼ完形の臼が倒置された状態で出土している。他に桜皮を巻いた竹製品、また最下層では、杓子が出土している。臼は底まで貫通しており、かなり使い込まれた状況が想定できる。24SE008出土の臼もかなり使用されており、長年使用したことに対する感謝の念をもって廃棄されたものだと考えられる。

# 遺物観察表

遺物観察表は本文に合わせて節ごとに順に掲載している。  
ただし、縄文土器については、調査次順に掲載している。

## 第3章

### 第1節

大道遺跡群第9次調査

大道遺跡群第15次調査

### 第2節

大道遺跡群第10次調査

大道遺跡群第14次調査

大道遺跡群第17次調査

大道遺跡群第18次調査

### 第3節

大道遺跡群第16次調査

大道遺跡群第19次調査

大道遺跡群第22次調査

大道遺跡群第25次調査

### 第4節

大道遺跡群第11次調査

大道遺跡群第24次調査

## 縄文土器

大道遺跡第10次調査

大道遺跡第14次調査

大道遺跡第15次調査



第2表 大道遺跡群第9次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)				備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大胴径/重	
第8図1	9SD001	磁器	碗	精製土	灰白色	灰白色	施釉	施釉	—	2.6+ $\alpha$	(2.5)	—	肥前産
第8図2	9SD001	磁器	皿	精製土	オリーブ黄色	灰白色	施釉	施釉	—	2.4+ $\alpha$	4.5	—	蛇の目釉剥ぎ
第8図3	9SD001	青花	皿	精製土	明緑灰色	灰白色	施釉	施釉	—	1.4+ $\alpha$	(3.4)	—	景德鎮窯、基筒底
第8図4	9SD001	備前焼	大甕	石英・長石・赤色粒子	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ	—	9.5+ $\alpha$	—	—	
第8図5	9SD010	土師器	小形丸底壺	石英・長石・雲母・角閃石	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	(11.4)	6.6+ $\alpha$	—	—	
第8図6	9SD010	土師器	小形丸底壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	橙色	ミガキ・ナデ	指オサエ後ナデ	(12.2)	3.8+ $\alpha$	—	—	
第8図7	9SD010	土師器	小形丸底壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	橙色	ナデ・指オサエ	ケズリ後ナデ後ミガキ	—	10.0+ $\alpha$	—	—	内面輪積み痕
第8図8	9SD010	土師器	長頸壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・指オサエ	ハケメ後ナデ後ミガキ	—	10.6+ $\alpha$	—	12.8	
第8図9	9SD010	土師器	甕	石英・長石・角閃石	橙色	にぶい橙色	ケズリ・ハケメ後ナデ	ハケメ・ハケメ後ナデ	(18.0)	6.8+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(9本/cm)
第8図10	9SD010	土師器	布留系甕	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	明黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ・ケズリ・ナデ	ナデ・ハケメ後ナデ	(13.6)	19.7	—	(18.4)	
第8図11	9SD010 9SP011	土師器	甕	石英・長石・雲母・角閃石	明褐色	にぶい褐色	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ後ナデ	(20.5)	14.6+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(7本/cm)
第9図12	9SD010 9SK008	土師器	複合口縁壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	明黄褐色	明黄褐色	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	(21.9)	11.5+ $\alpha$	—	—	安国寺式土器、波状文ハケメ1cm/8本
第9図13	9SD010	土師器	壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	にぶい橙色	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	(20.0)	6.6+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位 外:(9本/cm) 内:(6本/cm)
第9図14	9SD010	土師器	複合口縁壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ	ナデ・ハケメ	—	6.5+ $\alpha$	—	—	安国寺式土器 ハケメ単位(11本/cm) 貼付突帯
第9図15	9SD010	土師器	複合口縁壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	明黄褐色	にぶい黄橙色	指オサエ後ハケメ	ハケメ	—	13.7+ $\alpha$	—	—	安国寺式土器 ハケメ単位(8本/cm) 貼付突帯
第10図16	9SK006 9SK007 9SP009	土師器	鉢	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	橙色	ハケメ後ミガキ	ハケメ後ナデ	(29.3)	15.1+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(6本/cm) 貼付突帯
第10図17	9SK007	土師器	長頸壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	橙色	ナデ	ハケメ後ミガキ	(13.7)	12.8+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(9本/cm)
第10図18	9SK007 9SP009	土師器	鉢	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・指オサエ	ハケメ後ナデ・ハケメ	(26.4)	6.7+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(9本/cm) 貼付突帯压痕
第10図19	9SK007	土師器	壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	(14.4)	3.8+ $\alpha$	—	—	
第10図20	9SP011 9SK007	土師器	壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	明褐色	明褐色	ハケメ・指オサエ	ナデ・ハケメ	(8.3)	5.4+ $\alpha$	—	—	
第10図21	9SK007	土師器	脚台付鉢	石英・長石・角閃石・赤色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ・ナデ	(16.0)	14.8	9.2	—	ハケメ単位(9本/cm)
第10図22	9SK007	土師器	脚台付鉢	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	明褐色	にぶい黄橙色	ケズリ・ミガキ	ナデ・ケズリ	—	4.1+ $\alpha$	(8.2)	—	
第11図23	9SP009 9SP011	土師器	甕	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ・ケズリ	ハケメ後ナデ	(15.5)	6.5+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(11本/cm)
第11図24	9SP011	土師器	壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	橙色	ハケメ後ミガキ	ハケメ	(18.2)	6.3+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(6本/cm)
第11図25	9SP011	土師器	小形丸底壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	明黄褐色	明黄褐色	ナデ・指オサエ・ナデ	ナデ・ミガキ・ケズリ	—	10.8+ $\alpha$	—	—	
第13図26	9SX005 9SD010	土師器	甕	石英・長石・雲母・角閃石	橙色	橙色	ハケメ後ミガキ・ナデ	ナデ	(16.8)	7.2+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(7本/cm)
第13図27	9SX005 9SD010	土師器	甕	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	ケズリ	ナデ	(15.6)	3.7+ $\alpha$	—	—	
第13図28	9SX005 9SP009	土師器	甕	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	明褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ケズリ	ハケメ後ナデ	(18.4)	73+ $\alpha$	—	—	
第13図29	9SX005 9SD010	土師器	甕	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	橙色	ケズリ後ハケメ後ミガキ	ハケメ後ナデ	(16.8)	22.0+ $\alpha$	—	(21.4)	
第13図30	9SX005 9SK007 9SD010	土師器	鉢	石英・長石・赤色粒子	橙色	にぶい橙色	ハケメ・ハケメ後ナデ・ナデ	ナデ・ハケメ	(44.0)	10.5+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(9本/cm) 貼付突帯压痕

第3表 大道遺跡群第15次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚		
第15図1	15SE003 15SE004	土師器	碗	長石・角閃石・白色粒子・雲母	橙色	橙色	ミガキ後ナデ・ミガキ	ハケメ	(15.6)	6.0+ $\alpha$	-	-	外面一部スス付着 ハケメ単位(6~7本/cm)
第15図2	15SE003	土師器	小形丸底鉢	石英・長石・角閃石・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色~橙色	ハケ後ナデ・ヨコナデ後ミガキ・ナデ	ハケ後ヨコナデ・ハケ後ミガキ・ナデ	14.1	9.3	-	-	内面胴部スス付着
第15図3	15SE003	土師器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ケズリ後ナデ	ハケメ	(15.6)	16.8+ $\alpha$	-	-	外面胴~底部スス付着 ハケメ単位(5本/cm)
第17図4	15SE004	土師器	碗	石英・角閃石・白色粒子	橙色	にぶい橙色	ハケメ後ミガキ	ハケメ後ナデ	(12.2)	4.7+ $\alpha$	-	-	ハケメ単位(6本/cm)
第17図5	15SE004	土師器	碗	長石・角閃石・白色粒子	橙色	にぶい褐色	ハケメ後ミガキ・指オサエ	ナデ後ミガキ	17.4	5.7	-	-	外面黒斑
第17図6	15SE004	土師器	鉢	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	赤褐色~明赤褐色	赤褐色	ハケメ後ナデ	ハケメ	18.5	10.1	-	-	外面底部一部黒変 ハケメ単位(12本/cm)
第17図7	15SE004	土師器	小形丸底壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	ナデ・ミガキ・工具ナデ	ナデ・ハケメ	(13.4)	6.3	-	-	内面2/3に黒斑が認められる
第17図8	15SE004	土師器	合付鉢	石英・長石・角閃石・白色粒子	明赤褐色	にぶい赤褐色	ハケメ・ミガキ・ナデ	ハケメ	18.0	10.5+ $\alpha$	-	-	外面スス・鉄分付着 ハケメ単位(6~7本/cm)
第17図9	15SE004	土師器	小形丸底壺	角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケメ・ケズリ	ハケナデ	13.3	11.3	-	-	ハケメ単位(6本/cm)
第17図10	15SE004	土師器	複合口縁壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ・ハケメ後ナデ	20.0	8.1+ $\alpha$	-	-	内面口縁部1/4スス付着
第17図11	15SE004	土師器	壺	長石・白色粒子	赤褐色	赤褐色	ナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	(22.0)	12.4+ $\alpha$	-	-	外面1/2スス付着 ハケメ単位(5本/cm)
第17図12	15SE004 検出時	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄褐色 明赤褐色	赤褐色	ハケメ後ケズリ	ハケメ後ナデ	(15.0)	22.7	-	-	外面胴~底部スス付着 被熱で調整不明瞭 (内)ハケメ単位(6本/cm) (外)ハケメ単位(7本/cm)
第17図13	15SE004 15SE005	土師器	壺	長石・角閃石・赤色粒子	褐色	黒褐色	ハケメ・ナデ・ケズリ	ハケメ後ヨコナデ	(18.0)	4.8+ $\alpha$	-	-	口縁外面スス付着 (内)ハケメ単位(8本/cm) (外)ハケメ単位(5本/cm)
第18図14	15SE004	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	にぶい橙色	橙色	ハケ・ケズリ	ハケ・ハケ後ヨコナデ	(16.6)	9.4+ $\alpha$	-	-	ハケ目単位(5本/cm)
第18図15	15SE004	土師器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色 黒褐色	赤褐色	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	13.2	17.0	-	-	ハケメ単位(7本/cm)
第18図16	15SE004	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	橙色	明赤褐色	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	18.8	24.1+ $\alpha$	-	-	外面ほぼ全体にスス付着 ハケメ単位 (内)4本/cm (外)7本/cm
第18図17	15SE004	土師器	壺	石英・長石・角閃石・雲母	明赤褐色 赤褐色(底部)	明赤褐色	ハケメ後ナデ・ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ハケメ	(17.1)	24.9	-	-	内面に接合痕 内面部分的に黒変 ハケメ単位 (内)7~8本/cm (外)8~9本/cm
第18図18	15SE003 15SE004	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ハケメ後ナデ・ハケメ	ハケメ後ナデ・ハケメ	(15.0)	26.8	-	-	胴部下半スス付着 ハケメ目単位 (内)6~7本/cm (外)6~8本/10~11本/cm
第18図19	15SE004	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ケズリ後ナデ	ナデ	-	15.6+ $\alpha$	-	-	内外面胴部にスス付着 サンブル17
第20図20	15SE005	土師器	合付鉢	石英・長石・角閃石・白色粒子	暗褐色	明褐色~褐色	ナデ後ミガキ	ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ・指オサエ	(12.4)	7.6+ $\alpha$	-	-	
第20図21	15SE005	土師器	長頸壺	長石・角閃石・雲母・白色粒子	橙色	赤褐色	ケズリ後ナデ	ハケメ	13.5	14.9	-	-	内面頸部~口縁黒変あり 外面被熱で赤変~黒変の部分あり
第20図22	15SE005	土師器	小形壺	長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄橙色	赤褐色	指オサエ・ナデ・ハケメ・ケズリ・工具によるナデ	ハケメ・ナデ	13.6	13.7	-	-	全体にスス付着 ハケメ単位(5本/cm)
第20図23	15SE008 淡黒灰色 砂質土	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	淡黄色	にぶい黄橙色	ナデ	ヨコナデ・ヘラ切り後ナデ	-	1.5	(10.0)	-	
第20図24	15SE008 淡黒灰色 砂質土	土師器	高台付壺	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙色	褐色	回転ナデ	ナデ・ヨコナデ・回転ヘラ切り	-	2.1+ $\alpha$	(7.0)	-	貼付高台?
第20図25	15SE008 淡黒灰色 砂質土	土師器	高台付壺	石英・長石・白色粒子	にぶい黄橙色	明赤褐色	ナデ	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	-	1.3+ $\alpha$	(10.0)	-	貼付高台
第20図26	15SE008 淡黒灰色 砂質土	土師器	高台付壺	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	黄褐色	橙色	ナデ	回転ヘラケズリ 後ミガキナデ・回転ヘラ切り後ナデ	-	2.0+ $\alpha$	(8.0)	-	貼付高台
第20図27	15SE015	弥生土器	下城式壺	長石・雲母・白色粒子	にぶい橙色	にぶい褐色	指オサエ・ナデ	ハケメ後ナデ・線刻(圈線)	-	2.3+ $\alpha$	-	-	刺突文?沈線3条
第20図28	15SE018	土師器	壺	1~3mmの石英・白色粒子	橙色	褐色	ナデ・指オサエ後ナデ	工具によるケズリ・ヨコナデ・ハケメ	(22.4)	5.6+ $\alpha$	-	-	沈線1条 外面に被熱による赤変 ハケメ単位(6本/cm)

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)				備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第21図29	15SE020	土師器	小形丸底壺	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	明褐色	橙色	ハケメ後ナデ・ミガキ	ハケメ後ナデ	10.7	8.1	—	—	内面一部黒変あり
第21図30	15SE020	土師器	高环脚部	石英・長石・角閃石・白色粒子	明褐色	明赤褐色	ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	ケズリ後ミガキ	—	9.1+ $\alpha$	—	—	
第21図31	15SE020	土師器	複合口縁壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	明褐色	明褐色	ヨコナデ・指オサエ	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ・ヨコナデ	(16.6)	5.6+ $\alpha$	—	—	粘土貼付け 内面に接合痕 ハケメ単位(6本/cm)
第21図32	15SE020	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	灰黄色	灰黄色	ナデ・ケズリ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	(14.0)	17.5+ $\alpha$	—	—	内面黒変 外側被熱、スス付着のため調整不明瞭
第21図33	15SE020	土師器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子・橙色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	ヘラによるヨコナデ	ヘラによるヨコナデ	(16.4)	2.5+ $\alpha$	—	—	
第21図34	15SE020	土師器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐色～橙色	明褐色～橙色	ヨコナデ・ハケメ後ミガキ後ナデ	ヨコナデ・ナデ後ミガキ	(16.2)	8.0+ $\alpha$	—	—	
第21図35	15SE020	須恵器	壺	白色粒子	黄灰色	黄灰色	ヨコナデ	強いナデ・ヨコナデ	(14.4)	3.0+ $\alpha$	—	—	
第21図36	15SE020	須恵器	壺	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	灰色	灰色	ヨコナデ・ケズリ	回転ナデ後指オサエ	—	3.0+ $\alpha$	(9.4)	—	
第22図37	15SD012	土師器	碗	長石・角閃石・白色粒子	明赤褐色	灰褐色	回転ナデ後ミガキ	回転ナデ	(11.4)	3.2+ $\alpha$	—	—	
第22図38	15SD013	土師器	碗	長石・角閃石・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	ミガキ(放射状)	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	13.1	4.8	—	—	ハケメ単位(10本/cm)
第22図39	15SD013 15SE020	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	褐色	黒褐色	ハケメ・工具によるナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケメ	(15.0)	9.8+ $\alpha$	—	—	接合痕? 外側スス付着 ハケメ単位(11本/cm)
第22図40	15SD012	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色～明赤褐色	ナデ・回転ナデ	ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	—	1.3+ $\alpha$	(9.6)	—	
第22図41	15SD028	土師器	土錘	石英・長石・角閃石・白色粒子	—	—	—	—	長4.9+ $\alpha$	幅1.7	—	—	重14.7g
第22図42	15SD007	石製品	打製石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	重189.0g
第23図43	15SX036	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	明黄褐色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	(15.0)	3.3	(10.0)	—	
第23図44	15SX036	土師器	壺	石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ・ナデ後ハケメ	回転ナデ・ナデ	—	1.1+ $\alpha$	(9.7)	—	
第23図45	15SX036	土師器	高台付壺	石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子	黄褐色	明黄褐色	ナデ後ミガキ	ヨコナデ・ナデ	—	2.0+ $\alpha$	(8.6)	—	
第23図46	15SX036	土師器	高台付壺	石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	暗褐色	ヨコナデ・回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	—	1.7+ $\alpha$	(8.6)	—	
第23図47	15SX036	土師器	高台付壺	雲母・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ヨコナデ・ナデ	—	1.6+ $\alpha$	(9.8)	—	
第23図48	15SX036	土師器	壺蓋	石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラミガキ	(16.2)	1.8	—	—	
第23図49	15SX036	須恵器	長頸壺	石英・白色粒子	灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	—	
第23図50	15SX036	土師器	企救型壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	灰黄褐色	黒褐色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	(19.6)	5.3+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(4本/cm)
第23図51	15SX036	土師器	土錘	石英・長石・角閃石・白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	—	—	—	—	長6.1	幅1.8	—	—	重16.5g
第23図52	15SX036	弥生土器	壺	石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケメ後ナデナデ・指オサエ後ナデ	—	4.4+ $\alpha$	(4.8)	—	
第23図53	15SX036	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黒褐色	ヨコナデ・刻目	ヨコナデ・刻目	(21.4)	5.0+ $\alpha$	—	—	
第23図54	15SX036	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ・指オサエ	(28.0)	7.1+ $\alpha$	—	—	貼付突蒂
第24図55	15SX037	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・指オサエ後ナデ・ナデ	ナデ	—	3.6+ $\alpha$	—	—	穿孔2ヶ所あり
第24図56	15SX037	土師器	複合口縁壺	石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙色	浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ・指オサエ後ナデ	(9.0)	3.4	—	—	
第24図57	15SX037	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	(11.7)	4.1	(6.8)	—	須器模倣 高台の壹付部分摩滅か
第24図58	15SX037	須恵器	壺	石英・赤色粒子・白色粒子	黑褐色	黑色	回転ナデ	回転ナデ	—	5.4+ $\alpha$	(11.8)	—	
第24図59	15SX037	須恵器	壺	石英・長石・雲母・赤色粒子	灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	3.3+ $\alpha$	(15.8)	—	
第24図60	15SX037	陶器	唐津焼皿	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	透明釉	透明釉・回転ナデ	—	2.3+ $\alpha$	(3.8)	—	
第24図61	15SX037	磁器	白磁皿	—	灰白色	灰白色	透明釉	透明釉	—	1.0+ $\alpha$	(7.5)	—	高台壹付部分露胎
第24図62	表土	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	(14.2)	4.5+ $\alpha$	—	—	口唇部に刺突文あり

第4表 大道遺跡群第10次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	
第28図1	10SD002 10SD026 2層	京都系土師器	壺	石英・長石・赤色粒子	灰色	灰色	回転ナデ	ナデ	-	3.2+ $\alpha$	-	-
第28図2	10SD006 灰褐色土	土師器	大形管状土錐	石英・長石・雲母・角閃石	にぶい橙色	にぶい橙色	-	ナデ	-	6.8+ $\alpha$	-	149.6g
第32図1	10SD010	弥生土器	高壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ後ミガキ	ナデ・ハケメ・ハケメ後ヘラミガキ	(10.7)	5.0+ $\alpha$	-	-
第32図2	10SD010	弥生土器	台付鉢	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	橙色	ナデ後ミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	-	5.1+ $\alpha$	-	-
第32図3	10SD010	弥生土器	高壺	石英・長石・雲母・角閃石	橙色	橙色	ミガキ・ハケメ 後指オサエ	ハケメ後ミガキ・ 指オサエ	-	13.3+ $\alpha$	(14.5)	-
第32図4	10SD010	弥生土器	長頸壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	黄灰色	橙色	シボリ痕・オサエ後板ナデ・ナデ	ケズリ後ナデ・ナデミガキ	-	12.6+ $\alpha$	5.1	13.7
第32図5	10SD010	弥生土器	台付鉢	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	橙色	指オサエ・ハケメ後ナデ	ヘラナデ・ナデ	-	7.3+ $\alpha$	(11.6)	-
第32図6	10SD010	弥生土器	長頸壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	黒褐色	黒褐色	ナデ・指オサエ・ケズリ	ハケメ	(10.4)	13.6+ $\alpha$	-	-
第32図7	10SD010	弥生土器	長頸壺	石英・長石・角閃石	黄橙色	黄橙色	ハケメ・オサエ	ハケメ・ナデ	-	9.6+ $\alpha$	-	-
第32図8	10SD010	弥生土器	壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	橙色	ハケメ	ハケメ・ナデ	-	21.7+ $\alpha$	-	-
第32図9	10SD010	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子	灰黄褐色	褐灰色	ミガキ	ハケメ後ミガキ	-	5.6+ $\alpha$	(7.8)	-
第32図10	10SD010	弥生土器	壺	長石・角閃石・赤色粒子	明黄褐色	明黄褐色	ナデ・ヨコナデ原体痕	ケズリ後ナデ・オサエ・ナデ	-	7.2+ $\alpha$	(6.0)	-
第32図11	10SD010	弥生土器	甕	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ハケメ後ナデ	ナデ・ハケメ後ナデ	(16.2)	5.6+ $\alpha$	-	-
第33図12	10SD010	弥生土器	壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	明赤褐色	黒色	ケスリ・ナデ	ナデ・ハケメ後ナデ	-	3.5+ $\alpha$	-	-
第33図13	10SD010 暗黒褐色土	弥生土器	壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	にぶい橙色	指頭痕・ヘラケズリ?	キザミ目・ハケメ	(19.4)	6.5+ $\alpha$	-	-
第33図14	10SD010	弥生土器	甕	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	(20.0)	4.5+ $\alpha$	-	-
第33図15	10SD036 1層	弥生土器	甕	石英・長石・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	指オサエ・ケズリ	ナデ・ハケメ	(22.6)	4.4+ $\alpha$	-	-
第33図16	10SD010	弥生土器	甕	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケメ	(20.3)	10.2+ $\alpha$	-	(21.3)
第33図17	10SD010	弥生土器	甕	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ・ハケメ後ナデ	ナデ・ハケメ	(22.6)	4.3+ $\alpha$	-	-
第33図18	10SD010	弥生土器	甕	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ヨコナデ・ハケメ	20.3	8.4+ $\alpha$	-	-
第33図19	10SD010	弥生土器	甕	石英・長石・雲母・赤色粒子	灰黄褐色	橙色	指オサエ・ケズリ後ナデ	ハケメ・ナデ	-	10.8+ $\alpha$	5.0	-
第33図20	10SD010 灰褐色土	弥生土器	甕	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ハケメ	-	7.1+ $\alpha$	6.5	-
第33図21	10SD010 10SD036 10SD026 ベルト東	弥生土器	甕	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ケズリ後ナデ・指オサエ	ハケメ後ミガキ・ナデ	-	16.2+ $\alpha$	(6.2)	-
第33図22	10S010	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	-	3.1+ $\alpha$	(6.6)	-
第33図23	10S010 黒褐色土(上層)	弥生土器	甕	石英・長石・雲母・角閃石	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ハケメ	-	9.2+ $\alpha$	(6.0)	-
第35図1	10S026 2層	京都系土師器	壺	石英・長石・赤色粒子	褐灰色	褐灰色	回転ナデ	ナデ	-	2.2+ $\alpha$	-	-
第35図2	10S026	京都系土師器	壺	石英・長石・赤色粒子	褐灰色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ・指オサエ	(12.6)	2.1+ $\alpha$	-	-
第35図3	10S026 備前焼	擂鉢	石英・長石	灰色	灰色	擂目・回転ナデ	回転ナデ	-	4.1+ $\alpha$	-	-	-
第35図4	10SD036	土師器	ミニチュア土器	石英・長石・角閃石・赤色粒子	明褐色	明褐色	指オサエ	指オサエ	2.8	4.3	1.1	-
第35図5	10SD036 水田残り	土師器	碗	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	暗灰黄色	橙色	ナデ後ミガキ	ケズリ後ナデ・ヘラケズリ・ハケメ	12.7	5.5	-	-
第35図6	10SD036 10SD010	土師器	高壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	シボリ痕・ケズリ・ナデ	ミガキ	-	15.6+ $\alpha$	(18.8)	-
第35図7	10SD036	土師器	甕	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	赤褐色	赤褐色	ミガキ	ハケメ後ミガキ・ナデ	-	5.2+ $\alpha$	(5.7)	-
第35図8	10SD036 1層	土師器	壺	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	黄灰色	黄灰色	指オサエ	ナデ	-	2.4+ $\alpha$	(3.5)	-
第36図1	10SK005	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子	灰黄褐色	灰黄褐色	ハケメ・ナデ	ナデ	(8.2)	4.4+ $\alpha$	-	-

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大胴径/重	
第36図2	10SK042	弥生土器	壺	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・ハケメ後ミガキ?	ハケメ後ナデ	(24.8)	9.1+ $\alpha$	—	—	

第5表 大道遺跡群第14次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大胴径/重	
第42図1	14SE005	土師器	坏	長石・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	—	2.8+ $\alpha$	(11.0)	—	底部ヘラ切り
第42図2	14SE005	土師器	坏	長石・角閃石	橙色	黄橙色	ハケメ・ナデ	ナデ	—	2.9+ $\alpha$	(11.0)	—	底部ヘラ切り
第42図3	14SE005 淡黒灰褐色 色砂質土	土師器	坏	長石	褐色	赤褐色～ にぶい褐色	ヨコナデ後ミ ガキ・ナデ	ヨコナデ・ミガキ	(15.2)	3.5+ $\alpha$	—	—	
第42図4	14SE005 淡黒灰褐色 色砂質土	土師器	坏	長石・角閃石・ 白色粒子・赤色 粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ	(14.0)	3.5	(8.0)	—	底部ヘラ切り
第42図5	14SE005	土師器	坏蓋	長石・白色粒子	黄橙色	明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	1.4+ $\alpha$	—	—	
第42図6	14SE005	土師器	製塙土器	白色粒子	明赤褐色	橙色	—	—	—	4.3+ $\alpha$	—	—	
第42図7	14SE005	土師器	企救型壺	白色粒子	灰オリーブ色	灰色	—	—	—	2.5+ $\alpha$	—	—	
第42図8	14SE005	土師器	羽口	石英・長石・ 角閃石	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ	—	—	—	—	—	外調整不明・一部被熱によ り黒変
第42図9	14SE005	須恵器	長頭壺	石英・白色粒子	灰黄色	灰黄色	ナデ	ナデ	—	1.6+ $\alpha$	(12.8)	—	貼付高台 内外面とも損耗著しい
第42図10	14SE005	須恵器	壺胴部	白色粒子	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	7.0+ $\alpha$	—	(22.0)	胴部屈曲部で貼りあわせか
第42図11	14SE005 淡黒灰褐色 色砂質土	須恵器	壺胴部	長石・白色粒子	青灰色	明青灰色	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	—	6.8+ $\alpha$	—	(22.0)	胴部屈曲部で貼りあわせか
第46図1	14SK010	土師器	碗	石英・長石・角 閃石・白色粒子	黑色	にぶい褐色	ミガキ(内黒)	ヨコナデ・ヘラ切 り	—	4.1+ $\alpha$	高台径 (7.8)	—	
第46図2	14SK010	土師器	高台付坏	石英・長石・角 閃石・白色粒子	橙色	橙色	—	ヨコナデ	—	1.7+ $\alpha$	高台径 (9.2)	—	貼付高台 内外面とも摩滅著しい 調整不明
第47図1	14SX006 淡黒褐色 砂質土	土師器	碗	長石・角閃石・ 白色粒子	にぶい褐色	黑色	ヘラナデ・指 オサエ	指オサエ・ナデ ナデ	(12.0)	3.1	—	—	
第47図2	14SX006 堆積層	土師器	器台	石英・長石・角 閃石・雲母	にぶい橙色	橙色	ナデ	ヨコナデ・穿孔	—	6.5+ $\alpha$	(12.2)	—	
第47図3	14SX006 淡黒灰質 粘質土	土師器	高坏	石英・長石・角 閃石・白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	(18.0)	6.2+ $\alpha$	—	—	
第47図4	14SX006	土師器	高坏	石英・長石・角 閃石・白色粒子 2~3mm石粒	にぶい褐色	浅黄橙色	回転ナデ	ナデ	15.0	12.2	12.0	—	坏部内・外面・脚部外面摩 滅?不明瞭
第47図5	14SX006 2cm下	土師器	小形丸底壺	石英・長石・角 閃石・白色粒子	明赤褐色	橙色	ヘラナデ?	ヨコナデかヘラ ナデ?	11.7	8.5	—	—	内外面とも摩滅著しい 調整不明瞭
第47図6	14SX006 淡黒褐色 砂質土	土師器	小形丸底壺	角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	(16.4)	5.8+ $\alpha$	—	—	摩滅著しい 調整不明瞭
第47図7	14SX006 淡黒褐色 砂質土	土師器	台付鉢	石英・角閃石	橙色	橙色	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	(13.0)	6.1+ $\alpha$	—	—	
第47図8	14SX006	土師器	台付鉢	石英・角閃石・ 赤色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケメ後ナデ	ハケメ・ナデ	(16.6)	6.6+ $\alpha$	—	—	
第47図9	14SX006	土師器	台付二重口 縁鉢	長石・角閃石・ 白色粒子	黑色	赤褐色	ナデ	ヨコナデ・ハケ 後ナデ・ハケ・ナ デ	(17.0)	12.2	—	—	内面全体黒変
第47図10	14SX006 淡黒褐色 砂質土	土師器	大形鉢	石英・角閃石・ 白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ	—	5.4+ $\alpha$	—	—	貼付け突帯あり
第47図11	14SX006 淡黒褐色 砂質土	土師器	大形鉢	長石・角閃石・ 白色粒子	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ハケメ・ナデ	ナデ	—	4.9+ $\alpha$	—	—	貼付突帯 ハケメ単位(本/cm)
第47図12	14SX006 淡黒褐色 砂質土	土師器	大形鉢	長石・角閃石・ 白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ・ハ ケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ	—	7.0+ $\alpha$	—	—	貼付突帯 ハケメ単位(8~9本/cm)
第47図13	14SX006 淡黒褐色 砂質土	土師器	複合口縁壺	角閃石・白色粒子	明褐色	にぶい黄橙色	ヨコナデ・ハ ケメ後ヨコナ デ	ヨコナデ・櫛描 波状文	(20.2)	4.9+ $\alpha$	—	—	安国寺式 ハケメ単位(本/cm)
第47図14	14SX006 淡黒褐色 砂質土	土師器	複合口縁壺	長石・角閃石・ 白色粒子	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ヨコナデ・櫛描 波状文・ナデ・ハ ケメ	(15.0)	10.5+ $\alpha$	—	—	安国寺式
第47図15	14SX006 淡黒褐色 砂質土	土師器	壺	石英・長石・角 閃石・白色粒子	赤褐色	赤褐色	ハケメ後ナデ ナデ・ハケメ	ハケメ後ヨコナ デ・ハケメ	(14.0)	6.7+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位 内(4~5本/cm) 外(4~6本/cm)
第47図16	14SX006 淡黒灰質 粘質土	土師器	壺	石英・角閃石	橙色	橙色	ナデ・オサエ ナデ	ヨコナデ・ハ ケメ後オサエ	(17.2)	24.5+ $\alpha$	—	—	赤色餌料あり ハケメ単位(10~11本/cm)
第48図17	14SX006 淡黒褐色 砂質土	土師器	壺蓋	石英・長石・角 閃石	にぶい黄橙色	明赤褐色	ハケメ後ヨコ ナデ	ナデ・ヨコナデ・ ハケメ	(16.8)	5.1+ $\alpha$	—	—	
第48図18	14SX006 堆積層	土師器	坏蓋	長石・角閃石・ 赤色粒子・白色 粒子	橙色	黄橙色	ナデ・ハケナ デ	ナデ・ケズリ	(16.4)	2.2+ $\alpha$	—	—	
第48図19	14SX006 黑灰色粘 質土	土師器	坏蓋	長石・角閃石・ 白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ・ナ デ	ヨコナデ・ナ デ・ヘラ切り	(18.0)	3.2+ $\alpha$	—	—	
第48図20	14SX006 黑灰色粘 質土	土師器	坏	長石・白色粒子	にぶい橙色	浅黄橙色	ヨコナデ・回 転ナデ後ナ デ	ヨコナデ・回 転ヘラ切り	(14.2)	3.5+ $\alpha$	(10.0)	—	
第48図21	14SX006 黑灰色粘 質土	土師器	坏	長石・雲母・ 白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ	(13.0)	3.6+ $\alpha$	—	—	
第48図22	14SX006 堆積層	土師器	坏	長石・角閃石・ 白色粒子	明黄褐色	明黄褐色	オサエ・ナデ	ナデ・オサエ	(13.8)	4.4+ $\alpha$	—	—	

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第48図23	14SX006 堆積層	土師器	高台付坏	長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ	—	4.7+ $\alpha$	高台径(5.4)	—	貼付高台 内面表面デコボコ激しい 被熱か
第48図24	14SX006 堆積層	土師器	高台付坏	長石・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	1.4+ $\alpha$	(8.6)	—	貼付高台
第48図25	14SX006	土師器	高台付坏	石英・長石・角閃石・白色粒子	浅黄橙色～黄橙色	浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ・回転ナデ	—	1.8+ $\alpha$	(10.4)	—	貼付高台 内面摩滅 調整不明瞭 外面被熱か
第48図26	14SX006 黒灰色粘質土	土師器	高台付坏	角閃石・白色粒子	明黄褐色	浅黄橙色	回転ナデ	ナデ・回転ヘラ切り	—	2.1+ $\alpha$	(11.8)	—	貼付高台
第48図27	14SX006	土師器	皿	石英・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	(14.2)	2.0	(12.8)	—	内外面摩滅
第48図28	14SX006 黒灰色粘質土	須恵器	高坏	長石・角閃石・白色粒子	灰白色～灰色	灰白色	ナデ？・ヘラケズリ？	ナデ	—	9.9+ $\alpha$	—	—	外面表面摩滅か
第48図29	14SX006 黒灰色粘質土	須恵器	坏	白色粒子	灰色	暗灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	3.4+ $\alpha$	—	—	
第48図30	14SX006	須恵器	高台付坏	白色粒子	浅黄色	灰白色	ヘラナデ	ヘラナデ	—	2.0+ $\alpha$	高台径(13.0)	—	
第48図31	14SX006 黒褐色粘質土	土師器	瓶	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい橙色	褐色	ヨコナデ	ナデ・・ハケメ後ナデ	—	5.0+ $\alpha$	—	—	豊後大分型 ハケメ単位(8～9本/cm)
第48図32	14SX006	土師器	鉢	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	4.7+ $\alpha$	—	—	
第48図33	14SX006 黒灰色粘質土	土師器	壺	長石・白色粒子・2～4mmの石粒	黒色	褐色	ナデ	ナデ	—	3.3+ $\alpha$	—	—	内外面摩滅著しい
第48図34	14SX006 堆積層	須恵器	壺	白色粒子	灰色	灰色	ヨコナデ・オサエ・ナデ	タタキ後ナデ	—	6.35+ $\alpha$	—	—	
第48図35	14SX006 堆積層	土師器	企救型壺	石英・角閃石・白色粒子・1～2mm石粒	赤褐色	赤褐色	ナデ？	ナデ・ハケメ	—	4.6+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位(6～7本/cm)
第48図36	14SX006 堆積層	土師器	企救型壺	長石・角閃石・白色粒子	黒色	明褐色	ハケメ・ナデ	ナデ・ケズリ	—	4.6+ $\alpha$	—	—	
第48図37	14SX006	土師器	企救型壺	石英・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	—	4.1+ $\alpha$	—	—	内外面摩滅
第48図38	14SX006	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	黒褐色	黒褐色	ヨコナデ	ハケメ	(25.6)	9.6+ $\alpha$	—	—	内外面黒変 外面被熱か 表面に凹凸あり
第49図39	14SX006 堆積層	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	(30.0)	8.2+ $\alpha$	—	—	
第49図40	14SX006	土師器	瓶	石英・長石・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	(31.0)	8.1+ $\alpha$	—	—	豊後大分型 外面に2～3本沈線？
第49図41	14SX006	瓦	軒平瓦	白色粒子	灰白色	灰色	格子タタキ目	布目痕	縦26.7	横25.0	—	厚2.0	
第49図42	14SX006 堆積層	瓦	軒平瓦	長石・角閃石・白色粒子	灰色	灰色	繩目タタキ痕	ナデ	縦14.7	横13.0	—	厚2.0	
第50図43	14SX006 表土	瓦	軒平瓦	長石・角閃石・白色粒子	灰白色	灰白色	繩目タタキ後ナデ	布目痕後ハケメ・指ナデ 模骨痕？	縦11.0	横9.3	—	厚1.6	
第50図44	14SX006	瓦	軒平瓦	角閃石・白色粒子	灰白色	浅黄橙色	繩目タタキ痕	布目痕	縦8.5	横11.5	—	厚2.4	
第50図45	14SX006 淡黒褐色 砂質土	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	灰黄褐色	橙色	ナデ	ハケメ・ヨコナデ	—	7.4+ $\alpha$	(6.5)	—	ハケメ単位(8～9本/cm) 下城式
第50図46	14SX006	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	黒褐色	橙色	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ・オサエ	—	9.2+ $\alpha$	(7.4)	—	ハケメ単位(5～6本/cm)
第50図47	14SX006	土師器	土錐(管状)	長石・角閃石・赤色粒子	灰白色	灰白色	—	掛け紐圧痕	長6.3	幅1.7	—	重24.7	孔径0.5cm
第50図48	14SX006	土師器	土錐	石英・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	—	掛け紐圧痕	長5.2	幅1.2	—	重6.3	孔径0.4cm
第50図49	14SX006	土師器	土錐	石英・長石・角閃石・黑色粒子・白色粒子	褐灰色	褐灰色	—	掛け紐圧痕	長3.9+ $\alpha$	幅1.3	—	重6.3	孔径0.35cm
第50図50	14SX006	土師器	土錐	石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子	にぶい橙色～明褐灰色	にぶい橙色～明褐灰色	—	掛け紐圧痕	長3.3+ $\alpha$	幅1.2	—	重3.3	孔径0.4cm
第50図51	14SX006	石製品	砥石	粘板岩	—	—	擦痕	擦痕	長5.2	幅5.9	厚0.6	重3.3	

第6表 大道遺跡群第17次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大胴径/重
第58図1	17SE010	土師器	坏	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・底部糸切り後ナデ	(13.8)	3.8+ $\alpha$	(6.6)	—
第58図2	17SE010	土師器	高台付坏	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	黑褐色	黑褐色	ヨコナデ・ハケメナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	(15.8)	4.3+ $\alpha$	—	—
第58図3	17SE010	土師器	皿	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	赤褐色	明赤褐色	ナデ・回転ナデ	ナデ・回転ナデ	(16.5)	2.2+ $\alpha$	—	—
第58図4	17SE010	土師器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子	黑色	明赤褐色	ナデ	ナデ	(12.2)	2.8+ $\alpha$	—	—
第58図5	17SE010	土師器	瓶	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	赤褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ヨコナデ・ミガキ・ハケメ	—	8.6+ $\alpha$	—	—
第58図6	17SE010	土師器	瓶	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	褐灰色	ナデ	カキメ調整	—	7.95+ $\alpha$	(17.0)	—
第58図7	17SE010 暗黒灰色 砂質土	土師器	製塩土器	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	—	4.8+ $\alpha$	—	—

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	
第58図8	17SE010	縄文土器	鉢 脊部	石英・角閃石・雲母・白色粒子	暗灰色	浅黄橙色	ミガキ	貝殻条痕	—	4.1+ $\alpha$	—	—
第58図9	17SE010	石製品	鼓石	—	—	—	—	—	長15.5	幅5.7	—	重600
第58図10	17SE010	石製品	石錐	—	—	—	—	—	長10.0	幅6.7	—	重205
第60図1	17SD003 灰褐色粘質土	京都系土師器	壺	赤色粒子・白色粒子	浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ	—	1.5+ $\alpha$	—	—
第60図2	17SD003 灰褐色粘質土	白磁	碗	精良・黒色粒子わずかに混じる	灰白色	灰白色	施釉	施釉	—	2.3+ $\alpha$	—	—
第60図3	17SD009	陶磁器	碗	—	青みがかった透明	黑色	施釉	施釉	—	3.7+ $\alpha$	—	—
第60図4	17SD009 灰褐色粘質土	白磁	皿	精良・黒色粒子	灰白色	灰白色	施釉	施釉	—	1.6+ $\alpha$	(5.6)	— 蛇の目釉剥ぎ
第60図5	17SD009	縄文土器	深鉢 脊部	雲母・赤色粒子・白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	横方向の条痕	ナナメ方向の条痕・沈線文	—	5.9+ $\alpha$	—	—
第62図1	17SK002	中国産陶器	天目碗	白色粒子	黒褐色	黒褐色	施釉	施釉	(13.4)	3.3+ $\alpha$	—	—
第62図2	17SK002 淡墨灰褐色土	土師器	高台付壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	黑色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	—	1.7+ $\alpha$	(6.6)	—
第63図1	17SK007	瓦	丸瓦	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	暗灰色	暗灰色	工具によるケズリ	工具ナデ	—	—	厚2.35	—
第63図2	17SK014 黒褐色粘質土	縄文土器	浅鉢 脊部	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	浅黄橙色	貝殻条痕	貝殻条痕	—	3.7+ $\alpha$	—	—
第63図3	17SK014 黒褐色粘質土	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	灰黄褐色	橙色	ヨコナデ・ナデ・ハケメ後ナデ	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	(22.6)	5.9+ $\alpha$	—	—

第7表 大道遺跡群第18次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	
第66図1	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	蓋	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ	—	—	1.8+ $\alpha$	—	— 外面著しく摩耗
第66図2	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	(12.9)	2.8+ $\alpha$	—	—
第66図3	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	壺	石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	浅黄色	灰黄色	ナデ	ナデ	(11.2)	3.7+ $\alpha$	—	—
第66図4	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	碗	石英・長石・角閃石・白色粒子	黑色	灰黄色	ミガキ	ナデ	(16.2)	3.7+ $\alpha$	—	—
第66図5	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	高台付壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	—	1.2+ $\alpha$	8.0	—
第66図6	18SX001 黒灰褐色砂質土	須恵器	蓋	石英・雲母・赤色粒子	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	(12.4)	1.7+ $\alpha$	—	—
第66図7	18SX001 黒灰褐色砂質土	須恵器	壺	石英・角閃石・白色粒子	灰白色	黄灰色	ヨコナデ	回転ナデ	—	2.7+ $\alpha$	—	—
第66図8	18SX001 黒灰褐色砂質土	須恵器	高台付壺	白色粒子	青灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	1.3+ $\alpha$	7.8	—
第66図9	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	企救型壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・櫛描	—	4.4+ $\alpha$	—	—
第66図10	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	企救型壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ・指頭圧後ナデ	ケズリ・ケズリ後ナデ	—	4.0+ $\alpha$	—	—
第66図11	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	企救型壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	にぶい褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ後ナデ	—	4.6+ $\alpha$	—	—
第66図12	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	鍋	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	黑色	にぶい橙色	—	ヨコナデ・ナデ	—	4.0+ $\alpha$	—	— 内外面スス付着
第66図13	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	黒褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	—	2.5+ $\alpha$	—	—
第66図14	18SX001 黒灰褐色砂質土	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	(15.0)	4.1+ $\alpha$	—	— 全体的に薄く黒変

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第66図15	黒灰褐色 砂質土	土師器	瓶	石英・角閃石・ 雲母・赤色粒子・ 白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	-	6.7+ $\alpha$	-	-	
第66図16	18SX001 黒灰褐色 砂質土	須恵器	壺	石英・白色粒子	灰色	灰色	回転ナデ	ヨコナデ	(27.2)	5.0+ $\alpha$	-	-	

第8表 大道遺跡群第16次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第72図1	16SD001 白磁	碗	精製土	灰白色	灰白色	施釉	施釉・露胎	-	2.6+ $\alpha$	4.6	-	伊万里産	
第72図2	16SD001 鉄製品	蹄鉄	-	-	-	-	-	-	-	-	52.4		
第72図3	16SD002 備前焼	大甕	石英・白色粒子	にぶい赤橙色	暗赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	7.0+ $\alpha$	-	-		
第72図4	16SD002 灰茶褐色 粘質土	瓦質土器	鉢	白色粒子	灰色	灰色	ハケメ	ハケメ後ナデ	-	6.1+ $\alpha$	-	-	ハケメ単位(9~12本/cm)
第72図5	16SD029 1 層 縄文土器	鉢	石英・角閃石・ 白色粒子・雲母	明褐色	明褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	-	-	-	-	
第72図6	16SD029 1 層 縄文土器	鉢	石英・雲母・赤 色粒子・白色粒子	橙色	赤褐色	貝殻条痕文	貝殻条痕文	-	-	-	-	-	
第72図7	16SD029 1 層 縄文土器	鉢	石英・雲母・白 色粒子	黄褐色	明褐色	貝殻条痕文	貝殻条痕文	-	-	-	-	-	
第72図8	16SD031 黒灰褐色 砂質土	京都系土師器	壺	精良 白色粒子	灰色	ナデ	ナデ・工具ナ デ?	-	2.6+ $\alpha$	-	-	-	
第72図9	16SD031 黒灰褐色 砂質土	京都系土師器	壺	石英・長石・白 色粒子	灰白色	ナデ	強いナデ・工具? ナデ	-	2.4+ $\alpha$	-	-	-	
第72図10	16SD030 淡灰茶色 砂質土	京都系土師器	壺	雲母・白色粒子	灰白色	浅黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(8.2)	1.5+ $\alpha$	-	-	
第72図11	16SD030 黒灰褐色 砂質土	京都系土師器	壺	石英・角閃石・ 雲母・赤色粒子	灰黄色	灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	10.7	2.3+ $\alpha$	-	-	
第72図12	16SD030 黒灰褐色 砂質土	京都系土師器	壺	石英・角閃石・ 赤色粒子・白色 粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ・ハ ネアゲ・ナデ	ヨコナデ・指オサ エ	(14.6)	2.1+ $\alpha$	-	-	
第72図13	16SD030 黒灰褐色 砂質土	瓦質土器	鍋 脚部	長石・白色粒子	灰白色	黑色	ナデ	ナデ	-	4.7+ $\alpha$	-	-	防長系瓦質土器
第72図14	16SD030 2~3層 備前焼	擂鉢	石英・雲母・白 色粒子	褐灰色	灰褐色	回転ナデ・ス リ目4本	ヨコナデ	-	4.5+ $\alpha$	-	-	-	
第72図15	16SD030 備前焼	擂鉢	-	暗赤灰色	暗赤灰色	スリ目・ヨコナ デ	ヨコナデ	-	4.6+ $\alpha$	-	-	-	
第72図16	16SD030 黒灰褐色 砂質土	青花	碗	-	透明釉	透明釉	施釉	施釉	-	2.2+ $\alpha$	-	-	蓮子碗
第72図17	16SD030 白磁	皿	精良 ごくわずかに黒 い砂粒	灰白色	灰白色	施釉	施釉	(12.4)	1.9+ $\alpha$	-	-	景德鎮窯	
第72図18	16SD030 青花	皿	胎土色:灰白色	明オリーブ灰 色	明オリーブ灰 色	施釉	施釉・畳付釉か き取り	-	1.5+ $\alpha$	(5.8)	-	漳州窯	
第72図19	16SD030 唐津焼	碗	石英・3mm程の 粒混入	オリーブ灰色 釉	黄褐色	施釉・貯入	施釉・回転ヘラ ケズリ・工具ナデ	-	3.0+ $\alpha$	3.5	-	見込み砂目積み多量	
第72図20	16SD030 2層 備前焼	大甕	石英・赤色粒 子・白色粒子	灰赤色	褐灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	11.2+ $\alpha$	-	-	-	
第72図21	16SD030 備前焼	擂鉢	石英・赤色粒 子・白色粒子	赤灰色	灰赤色	スリ目・ナデ	ナデ	-	10.3+ $\alpha$	-	-	-	
第72図22	16SD030 黒灰褐色 砂質土	土製品	燭台	-	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・穿孔	ナデ後ヨコナデ・ ナデ	-	5.2+ $\alpha$	6.0	-	内部に穿孔あり 穿孔内部に木材残る
第72図23	16SD030 土製品	土錐	石英・角閃石・ 黑色粒子・白色 粒子	-	-	-	-	長4.7+ $\alpha$	幅1.4	-	-	重8.2g	
第76図1	16SK005 灰茶褐色 砂質土	國產陶磁器	皿	灰白色	透明釉	透明釉	施釉	(12.8)	2.9	(7.1)	-	肥前産	
第76図2	16SK015	瓦質土器	擂鉢	石英・白色粒子	灰色	灰色	スリ目	ナデ	-	4.5+ $\alpha$	-	-	
第76図3	16SK005 金属製品	煙管(吸口)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	重2.5g	
第76図4	16SK005 鉄製品	釘	-	-	-	-	-	長4.5	幅1.0	-	-	重2.5g	
第76図5	16SK015 弥生土器	下城式甕	石英・長石・角 閃石・白色粒子	黒色	にぶい黄橙色	ヨコナデ後ミ ガキ	ヨコナデ・ハケメ	-	8.3+ $\alpha$	-	-	刻み目突堤2条 ハケメ単位(7~9本/cm)	
第76図6	16SK022 土師器	高坏	石英・長石・角 閃石・雲母・赤 色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ後 ミガキ	13.8	7.6+ $\alpha$	-	-		
第76図7	16SK022 土師器	甕	石英・雲母・赤 色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ケズリ後ナ デ・ハケメ後ナ デ	ハケメ後ナデ	13.1	20.9	-	-	外面底部にスス付着 ハケメ単位(9本/cm)	

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第76図8	16SK028	土師器	高坏	石英・雲母・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ・ハケメ後ナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ後ミガキ?・ハケメ後ナデ	13.2	12.9	11.4	—	胎土剥落のため調整不明
第76図9	16SK028	土師器	小壺	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	赤褐色	赤褐色	ケズリ後ナデ	ハケメ	11.5	16.9	—	—	外面にスス付着ハケメ単位(8~10本/cm)
第76図10	16SK028	土師器	壺	石英・雲母・白色粒子	明黄褐色	にぶい黄橙色~明黄褐色	ハケメ	ケズリ後ナデ	16.3	25.7	—	—	ハケメ単位(5本/cm)
第76図11	16SK028	土師器	複合口縁壺	石英・雲母・角閃石・赤色粒子・白色粒子	暗赤褐色	暗赤褐色	ハケメ、ケズリ後ナデ	ナデ、ハケメ	(15.0)	18.8+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位内(6本/cm)外(10本/cm)
第77図12	16SK028	土師器	高坏	石英・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ後ミガキ後緩方 向のミガキ	ヨコナデ・ヨコナデ後ミガキ	13.8	5.5+ $\alpha$	—	—	脚部接合部分に黒変あり
第77図13	16SK028	土師器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	赤褐色	赤褐色~橙色	ケズリ	ハケメ	—	13.0+ $\alpha$	—	15.1	
第77図14	16SK028	土師器	壺	石英・雲母・角閃石・白色粒子	赤褐色	淡黄褐色~明赤褐色	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ後ミガキ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	14.8	19.1	—	—	外面胴部~底部にスス付着ハケメ単位(8~9本/cm)
第77図15	16SK035	白磁	花瓶	精製土	—	—	—	—	(4.0)	4.9+ $\alpha$	—	—	
第77図16	16SK035 黒灰褐色 砂質土	国産陶磁器	皿	精良	灰白色	灰白色	ナデ・施釉	ナデ・ヘラ切り後ナデ・施釉	(5.8)	2.1	(2.8)	—	肥前産貼付高台
第77図17	16SK035	国産陶磁器	碗	精良	透明釉	透明釉	施釉	施釉(スタンプ)	—	4.3+ $\alpha$	(4.3)	—	肥前置付露胎
第77図18	16SK035	国産陶磁器	鉢蓋	精良	透明釉	透明釉	ヨコナデ・施釉	施釉	(19.0)	4.3	—	—	口縁端部露胎
第77図19	16S035 黒灰褐色 砂質土	陶器	瓶蓋	精良 にぶい黄橙色	赤褐色釉	—	施釉	丁寧なナデ・露胎	(6.6)	2.2	(5.2)	—	関西系 つまみ部分両端を丸める口縁端部貼付
第77図20	16SK035	瓦	軒平瓦	白色粒子・1~3mm程度の石粒少量混じる	暗灰色	灰色	ナデ	ナデ・強いナデ	—	—	—	—	唐草文
第77図21	16SK035 黒灰褐色 砂質土	陶器	擂鉢底部	石英・赤色粒子・白色粒子	灰褐色	にぶい赤褐色	全面スリ目	ヨコナデ・ナデ	—	5.9+ $\alpha$	(11.8)	—	丹波系
第77図22	16SK045 1層	土師器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	にぶい橙色	ハケメ後ナデ・ナデ・ケズリ	ハケメ	15.3	24.4	—	—	外面スス付着ハケメ単位内(10本/cm)外(8~9本/cm)口縁一部打ち欠き
第80図23	16SK050 1層	土師器	複合口縁壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ後ミガキ・波状文後ミガキ・ヨコナデ後ミガキ・指頭圧後ナデ・ヨコナデ後ミガキ	(19.4)	10.6+ $\alpha$	—	—	
第80図24	16SD030 16SK050 1層	土師器	安国寺式複合口縁壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ・ハケメ後ナデ・ナデ	ハケメ後波状文・ハケメ後ナデ	16.0	19.7+ $\alpha$	—	—	ハケメ単位内(4~6本/cm)外(9本/cm)
第80図25	16SK050 黒褐色粘 砂質土	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐色	明褐色	ナデ・ケズリ	ヨコナデ	(15.0)	15.5+ $\alpha$	—	—	
第80図26	16SK050	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	赤色	赤色	ヨコナデ・ミガキ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	14.5	21.1	—	—	内面底部に黒変 外面底部にスス付着ハケメ単位(5~7本/cm)
第80図27	16SK050 1層	土師器	壺	角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	にぶい褐色	ヨコナデ・ナデ・ハケメ後ミガキ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ後ナデ	15.1	25.0+ $\alpha$	—	—	外面胴部スス付着
第80図28	16SK050	土師器	壺	長石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色~にぶい橙色	橙色~にぶい橙色	ハケメ・ナデ・ケズリ後ミガキ	ヨコナデ・ナデ	(17.0)	22.0+ $\alpha$	—	—	外面スス付着 内面に被熱?黒変 ハケメ単位(9本/cm)
第81図29	16SK050 1層	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	赤褐色	ナデ・指オサエ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	—	30.0+ $\alpha$	—	(22.9)	外面スス付着
第81図30	16SK058 2層	土師器	安国寺式複合口縁壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐色	橙色~明赤褐色	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケメ後ナデ後波状文	(23.0)	10.7+ $\alpha$	—	—	貼付突帶
第81図31	16SK058 2層	土師器	複合口縁壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	ナデ・ヨコナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ	(23.3)	8.4+ $\alpha$	—	—	
第81図32	16SK058	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色~黄橙色	橙色	ヨコナデ・ハケメ後ナデ・ナデ・指オサエ・ナデ・ハケメ・ケズリ後ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	16.5	26.4	—	—	内面に黒変 外面胴部~底部にスス付着ハケメ単位(10~12本/cm)
第81図33	16SK058	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・白色粒子	橙色	橙色	ヨコハケメ後ナデ・オサエ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ	(16.6)	12.1+ $\alpha$	—	—	布留系 外面に部分的にスス付着ハケメ単位(8~10本/cm)
第83図1	16SX007	萩焼	碗	石英 胎土色:淡黄色	にぶい黄色	にぶい黄色	回転ヘラケズリ後施釉	回転ヘラケズリ後施釉	—	3.0+ $\alpha$	(4.8)	—	高台露胎
第83図2	16SX007	唐津焼	皿	石英	オリーブ灰色	灰色	施釉	施釉	—	1.8+ $\alpha$	(3.6)	—	
第83図3	16SX007	唐津焼	碗	石英・白色粒子 胎土色:橙色	灰黃褐色	明赤褐色	施釉	自然釉?回転ヘラケズリ	—	3.5+ $\alpha$	4.4	—	高台露胎
第83図4	16SX007	国産陶磁器	皿	灰白色	明緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	(14.0)	2.4+ $\alpha$	—	—	
第83図5	16SX007	備前焼	壺	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・自然釉	—	5.8+ $\alpha$	—	—	

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚		
第83図6	16SX007	京都系土師器	壺	石英・角閃石・白色粒子	灰白色	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	(10.6)	1.8+α	-	-	
第83図7	16SX007	土師器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	-	2.2+α	-	-	
第83図8	16SX007	国産陶磁器	皿	角閃石・白色粒子 胎土色:明赤褐色	灰褐色	灰褐色	施釉	施釉	(26.0)	3.0+α	-	-	
第83図9	16SX007	備前焼	擂鉢	石英・白色粒子 胎土色:にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヨコナデ・スリ目	ヨコナデ	(27.6)	6.2+α	-	-	
第83図10	16SX007	備前焼	甕	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・自然釉	-	5.8+α	-	-	
第83図11	16SX007	備前焼	擂鉢	白色粒子	暗赤褐色	にぶい赤褐色	スリ目	ヨコナデ後ナデ・ナデ	(33.0)	14.4	(17.0)	-	
第83図12	16SX007	瓦質土器	火鉢	石英・角閃石・白色粒子 胎土色:にぶい黄色	灰色	灰色	ヨコナデ・工具によるケズリ	ナデ・工具ナデ	(29.8)	9.8+α	(27.0)	-	
第84図13	16SX007	瓦	平瓦	石英・白色粒子 胎土色:灰白色	灰色	灰色	繩目後ケズリ	工具ナデ	6.6+α	6.3+α	2.0	-	
第84図14	16SX007	瓦	丸瓦	石英・角閃石・白色粒子	暗灰色	灰色	布目・紐目・ケズリ	ナデ	12.8+α	8.5+α	2.4	-	
第84図15	16SP008	土製品	紡錘車	-	-	-	-	-	-	-	-	重8.3g	
第84図16	16SP056 黒褐色粘質土	弥生土器	浅鉢	石英・長石・角閃石・白色粒子 2mm程度の石粒が少量混じる	明褐色	橙色	ヨコナデ	ミガキ・ナデ	-	5.8+α	-	-	下黒野式

第9表 大道遺跡群第19次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚		
第88図1	19SB005e	土師器	製塙土器	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	明褐色	ナデ・布目痕	ヘラ切り・ナデ	-	2.9+α	-	-	六連島式土器
第88図2	19SB005 C1層	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	浅黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	(14.7)	1.9+α	-	-	
第88図3	19SB005f 裏込め	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	明赤褐色	ケズリ後ナデ	ヨコナデ	-	2.7+α	-	-	
第88図4	19SB005i	土師器	壺	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	-	1.4+α	(10.4)	-	
第91図1	19SD002 1層	弥生土器	甕	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	(16.5)	2.6+α	-	-	
第91図2	19SD002 黒褐色粘質土	弥生土器	甕	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	明赤褐色	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ	(18.2)	3.6+α	-	-	ハケ目単位 内(4本/cm) 外(8本/cm)
第91図3	19SD018 灰褐色粘質土	土師器	製塙土器	石英・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ	-	2.4+α	-	-	内外面とも磨耗著しい
第91図4	19SD020 1・2層	土師器	甕	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	(26.8)	2.7+α	-	-	
第91図5	19SD020 1・2層	土師器	甕	石英・長石・角閃石・白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ヨコナデ・指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ハケ	(25.6)	7.8+α	-	-	沈線1条あり 外面ハケ目単位(5~6本/cm)
第91図6	19SD020 黒褐色 砂質土	土師器	甕	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子 黒色粒子・5mm程度の石粒を含む	褐灰色	にぶい黄橙色	ナデ	ハケ・ナデ・強いヨコナデ	-	11.8+α	6.2	-	ハケ目単位(5~6本/cm)
第91図7	19SD020	石製品	敲石	-	-	-	-	-	長10.7	幅7.2	-	-	重700g
第91図8	19SD020	弥生土器	甕	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	(23.0)	4.2+α	-	-	須玖式土器
第91図9	19SD020	弥生土器	甕	石英・角閃石・雲母・白色粒子	褐灰色	黄灰色	指オサエ	ナデ・指オサエ	-	3.6+α	(5.4)	-	
第91図10	19SD020 黒褐色 灰色土 表土	弥生土器	甕	長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ヨコナデ・ナデ・工具にヨコナデ	ヨコナデ・ハケ	(23.0)	13.0+α	-	-	外面スス付着 ハケ目単位(5~6本/cm)
第92図11	19SD020 黒褐色 灰色土 19SD15 黒褐色 土	弥生土器	甕	長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ハケ・ナデ	(20.2)	9.3+α	-	-	ハケ目単位 内(5~6本/cm) 外(7~8本/cm)
第92図12	19SD020 黒褐色 灰色土	土師器	甕	石英・長石・角閃石・1~4mm 大的砂粒	明褐色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	(14.8)	4.4+α	-	-	
第92図13	19SD020	土師器	壺	石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙色	にぶい赤褐色	ハケ後ナデ 後ミガキ・ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	(13.0)	3.2+α	-	-	
第92図14	19SD020 黒褐色 灰色土	土師器	壺	石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	(14.6)	3.0+α	-	-	

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第92図15	19SD020 黒褐色灰土	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	(14.4)	1.9+ $\alpha$	-	-	
第92図16	19SD020 黒褐色灰土	土師器	壺蓋	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	明赤褐色	ナデ後ミガキ	ヨコナデ・ミガキ・ナデ	(14.0)	2.4+ $\alpha$	-	-	
第92図17	19SD020 黒褐色灰土	土師器	壺蓋	石英・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ	(18.2)	2.7+ $\alpha$	-	-	
第92図18	19SD020 黒灰褐色土	須恵器	壺	角閃石・赤色粒子・白色粒子	灰白色	灰色	ヨコナデ	回転ナデ	(14.6)	1.8+ $\alpha$	-	-	
第92図19	19SD020 黒褐色灰土	須恵器	壺	石英・赤色粒子・白色粒子	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	(11.4)	3.3+ $\alpha$	-	-	
第92図20	19SD020 黒褐色灰土	須恵器	壺蓋	赤色粒子・白色粒子	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	-	1.6+ $\alpha$	-	-	つまみ径2.1cm
第92図21	19SD020 黒褐色灰土	須恵器	壺蓋	白色粒子	灰色	灰色	回転ナデ後ナデ	ナデ・ケズリ	(14.0)	2.1	-	-	
第92図22	19SD020 土師器	手持ち壺		石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ・ケズリ	-	-	-	-	庇貼付 接合面に刻みを入れる
第92図23	19SD020 黒褐色灰土	土師器	製塩土器	石英・長石・橙色粒子・白色粒子	-	-	-	ヘラ切離し後ナデ・指オサエ	-	5.0+ $\alpha$	-	-	六連島式土器
第92図24	19SD020 黒褐色灰土	土師器	製塩土器	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子・白色粒子	-	-	布目	指オサエ	-	5.5+ $\alpha$	-	-	六連島式土器
第92図25	19SD020 黒褐色灰土	土師器	瓶	長石・角閃石・白色粒子	黒褐色	黒褐色	ハケ後ナデ	ヨコナデ・ナデ	8.5+ $\alpha$	-	-	-	豊後大分型 把手貼付 内面被熱による黒変あり
第92図26	19SD020 黒褐色灰土	土師器	瓶	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	橙色	ナデ	ナデ	-	4.3+ $\alpha$	-	-	豊後大分型
第92図27	19SD020 土師器	企救型壺		石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ・ハケ後ナデ	(17.4)	4.1+ $\alpha$	-	-	
第92図28	19SD020 黒褐色灰土	土師器	企救型壺	3mm大の石英を含む・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明橙褐色	橙褐色	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ	(20.0)	6.1+ $\alpha$	-	-	ハケ目単位(7本/cm)
第96図1	19SK001 黒褐色粘質土	土師器	器台脚部	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	赤褐色	赤褐色	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ後ミガキ	-	3.4+ $\alpha$	-	-	脚部
第96図2	19SK001 3層	土師器	小形丸底壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	ケズリ・ハケ後ミガキ	ヨコナデ・ハケ後ミガキ	(13.7)	5.0+ $\alpha$	-	-	ハケ目単位(4本/cm)
第96図3	19SK001 3層	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	(15.2)	5.4+ $\alpha$	-	-	
第96図4	19SK011	土師器	企救型壺	3mm大の石英を多く含む・角閃石・白色粒子	浅黄色	明黄褐色	ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ	-	5.1+ $\alpha$	-	-	
第96図5	19SK011	土師器	製塩土器	石英・赤色粒子・白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	-	2.3+ $\alpha$	-	-	六連島式土器 全体磨耗激しい
第96図6	19SK011	土師器	製塩土器	石英・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤橙色	橙色	ナデ	ナデ	-	3.8+ $\alpha$	-	-	六連島式土器 全体磨耗激しい
第96図7	19SK015 19SK025	土師器	小形丸底壺	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色	橙色	ナデ・ハケ・ケズリ後ナデ・ミガキ	ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケ・ケズリ後ナデ・ミガキ	11.4	8.4	-	-	ハケ目単位 内(9~10本/cm) 外(11~12本/cm)
第96図8	19SK015	土師器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ハケ後ナデ・ハケ	ヨコナデ・ハケ	(16.0)	7.2+ $\alpha$	-	-	
第96図9	19SK015	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ・ハケ後ナデ	ナデ・ハケ後ナデ	(17.6)	2.1+ $\alpha$	-	-	
第96図10	19SK015 黒褐色灰土	弥生土器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	灰白色	浅黄橙色	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ後ナデ	(28.4)	8.9+ $\alpha$	-	-	須玖式土器
第96図11	19SK015 1層	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	灰白色	浅黄橙色	ナデ?	ハケ・ヨコナデ・ナデ?	-	6.6+ $\alpha$	6.4	-	磨耗著しい
第96図12	19SK015 黒褐色灰土	土師器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ・回転ナデ	14.0	4.0	8.5	-	粘土輪積み
第96図13	19SK015 黒褐色灰土	土師器	高台付壺	石英・雲母・白色粒子	明赤褐色	橙色	ヨコナデ・ミガキ	ナデ後ミガキ・ヨコナデ	-	1.4+ $\alpha$	(9.5)	-	
第96図14	19SK015 黒褐色灰土	土師器	企救型壺	石英を多く含む・角閃石・白色粒子	淡黄色	にぶい黄色	ナデ	ナデ・ハケ	-	4.0+ $\alpha$	-	-	磨耗している
第96図15	19SK020 3・4層	弥生土器	高壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ミガキ・オサエ・ナデ・ハケ	ナデ・ミガキ・穿孔5箇所	-	11.7+ $\alpha$	-	-	脚部
第96図16	19SK020 2層	弥生土器	高壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	(胎土)にぶい黄橙色	赤色 赤色顔料	ナデ・部分的に丹塗り	ハケ・ヨコナデ	-	4.7+ $\alpha$	(14.4)	-	赤色顔料あり
第96図17	19SK020	弥生土器	複合口縁壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	灰黄色	浅黄色	ナデ	櫛描波状文・ナデ	-	3.0+ $\alpha$	-	-	外面剥落あり
第96図18	19SK020	弥生土器	複合口縁壺	白色粒子	明黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ	-	3.5+ $\alpha$	-	-	刻目突蒂 浮文貼付

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量				備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第96図19	19SK020 3層	弥生土器	複合口縁壺	石英・長石・赤色粒子・白色粒子	褐色	灰褐色	ナデ	ヨコナデ・ハケ後ナデ	-	6.7+ $\alpha$	-	-	突帯3箇所あり
第96図20	19SK020 1層	弥生土器	壺	石英・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	灰黄褐色	指オサエ	ナデ・ハケ後ナデ	-	5.5+ $\alpha$	-	-	突帯3箇所あり
第97図21	19SK023	弥生土器	壺	長石・角閃石・雲母・白色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ・ケズリ・指オサエ	ナデ	23.6	38.7	5.0	-	口縁部打ち欠き 胴部穿孔
第97図22	19SK023 1層	弥生土器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	明黄褐色	ナデ・ケズリ	ヨコナデ・丁寧なナデ	(14.4)	11.0+ $\alpha$	-	-	
第97図23	19SK025	土師器	高坏	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	赤褐色	橙色	回転ヨコナデ・回転ナデ	回転ナデ・ケズリ・ナデ	14.8	5.3+ $\alpha$	坏部7.4	-	口縁部打ち欠き2箇所あり 内面1/2黒変 外面口縁部一部スス付着
第97図24	19SK025	土師器	高坏	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい赤褐色	赤褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ケズリ・ナデ	14.7	5.3+ $\alpha$	坏部7.5	-	口縁部に打ち欠き5箇所あり
第97図25	19SK025 1層	土師器	高坏	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ヨコナデ	-	2.6+ $\alpha$	(7.2)	-	脚部
第97図26	19SK025 1・2層	土師器	壺	長石・角閃石・雲母・白色粒子	浅黄橙色	橙色	ハケ後ヨコナデ・ケズリ後ナデ	ハケ後ヨコナデ・ハケ	18.2	6.4+ $\alpha$	-	-	ハケ目単位(12~13本/cm)
第97図27	19SK025 1層	土師器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子	明赤褐色	明褐色	ハケ後ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ハケ後ナデ・ハケ	(16.5)	9.9+ $\alpha$	-	-	ハケ目単位(6~7本/cm) 外面スス付着
第97図28	19SK025 5層	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色	黄橙色	ヨコナデ・ハケ後棒状工具オサエ・ナデ	ヨコナデ・ハケ・ハケ後ナデ	14.9	24.9	-	-	ハケ目単位(7~8本/cm) 内外面スス付着
第98図1	表土	土師器	手持ち竈	石英・白色粒子・2~3mmの石粒	橙色	黒褐色	雑なナデ・指オサエ・ナデ	工具によるナデ・ナデ	-	8.2+ $\alpha$	-	-	
第98図2	表土	土師器	製塩土器	石英・長石・黒色粒子・白色粒子	-	-	-	ペラ切離し後ナデ・指オサエ	-	3.5+ $\alpha$	-	-	六連式土器

第10表 大道遺跡群第22次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)				備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第101図1	22SE010	土師器	碗	長石・角閃石・白色粒子	明褐色	明褐色	ナデ	ケズリ後ナデ	9.6	5.0	-	-	外面1/2黒変
第101図2	22SE010	土師器	碗	長石・角閃石・白色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ後ミガキ	ケズリ・ハケメ後ナデ・ミガキ	14.0	4.9+ $\alpha$	-	-	
第101図3	22SE010	土師器	高坏	石英・長石・角閃石・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ・ミガキ・ハケ後ミガキ	ナデ・ミガキ・ハケ	(20.0)	6.2+ $\alpha$	-	-	坏部のみ
第101図4	22SE010	土師器	小形丸底壺	長石・角閃石・雲母・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ	ハケ後ナデ・ハケ・ミガキ	11.6	6.1	-	-	
第101図5	22SE010	土師器	小形丸底壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色	にぶい橙色	ヨコナデ・ミガキ・ナデ	丁寧なヨコナデ	(12.6)	5.5+ $\alpha$	-	-	
第101図6	22SE010	土師器	小形丸底壺	長石・角閃石・白色粒子	明褐色	明褐色	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	(10.2)	10.3	-	-	内面ほぼ黒変
第101図7	22SE010	土師器	小形丸底壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ハケ後ナデ・工具ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ後ナデ	-	8.8	-	-	外面1/2黒変
第101図8	22SE010	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	明赤褐色	にぶい橙色	ハケ後ナデ	ナデ・ミガキ・ハケ後ナデ	-	6.9+ $\alpha$	-	-	
第101図9	22SE010	土師器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	暗赤褐色	黒褐色	ハケ・ハケ後ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ・ハケ・ミガキ・ヨコナデ後ミガキ	(16.2)	6.8+ $\alpha$	-	-	ハケ目単位 内(6~7本/cm) 外(13本/cm)
第102図10 第102図11	22SE010	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	明黄褐色	明赤褐色	強いヨコナデ・ハケ・工具ナデ?ミガキ?	ヨコナデ・ハケ・ナデ・ハケ後ミガキ	22.0	15.6	-	-	貼付突帯? 口縁にスス付着
第102図12	22SE010	弥生土器	壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ・ミガキ・丁寧なナデ	-	5.9+ $\alpha$	(8.8)	-	底部内面充填? 内面黒変
第103図13	22SE010	土師器	壺	長石・角閃石	橙色	黄橙色	ヨコナデ・ハケ・ミガキ	ヨコナデ・ハケ	-	5.7+ $\alpha$	-	-	内外面一部黒変 ハケ目単位 内(6~8本/cm) 外(8~9本)
第103図14	22SE010	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色	黄橙色	ナデ・指オサエ・ハケ後ナデ・ミガキ	ハケ・ナデ	-	8.7+ $\alpha$	-	-	内外面黒変 ハケ目単位 内(9~10本/cm) 外(6~7本/cm)
第103図15	22SE010	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色	黄橙色	横方向のハケナデ	ナデ・ハケ・ヨコナデ	18.6	5.3+ $\alpha$	-	-	ハケ目単位(7~8本/cm)
第103図16	22SE010	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ・工具ナデ・オサエ・ハケ後ナデ・ミガキ	ハケ・ハケ後ナデ・ミガキ	(10.6)	14.7+ $\alpha$	-	-	黒斑2ヶ所
第103図17	22SE010	土師器	製塩土器	石英・赤色粒子・雲母	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	指オサエ	-		-	-	備讃系
第106図1	22SE016	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	明赤褐色	橙色	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	7.2	5.3	-	-	全体1/3黒斑
第106図2	22SE016	土師器	台付丸底壺	角閃石・雲母・白色粒子	暗褐色	にぶい褐色	ハケメ後ナデ	ナデ後ミガキ	11.8	12.0+ $\alpha$	11.4+ $\alpha$	-	

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第106図3	22SE016	土師器	高坏	石英・白色粒子			ハケ・ナデ	ミガキ・ナデ・穿孔4ヶ所	-	7.8+ $\alpha$	(20.0)	-	
第106図4	22SE016	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	工具ナデ・ナデ・オサエ	ナデ	12.0	4.6+ $\alpha$	-	-	
第106図5	22SE016	土師器	安国寺式複合口縁壺	石英・長石・雲母・白色粒子	赤褐色	褐色	ナデ・ハケ・指オサエ	ナデ・ハケ	11.5	9.2+ $\alpha$	-	-	
第107図6	22SE016	土師器	壺	長石・雲母・白色粒子	灰褐色	褐色	ヨコナデ・ハケ・指オサエ	ハケ後ヨコナデ・ヨコナデ・ハケ後ナデ後ミガキ	(19.6)	17.8+ $\alpha$	-	-	ハケ目単位(6~8本/cm)
第107図7	22SE016 下層	土師器	甕	角閃石・赤色粒子	明黄褐色	明赤褐色	ヨコナデ・ハケ	ハケ	(20.4)	7.4+ $\alpha$	-	-	ハケ目単位(4~5本/cm)
第107図8	22SE016	土師器	甕	長石・雲母・赤色粒子	橙色	暗褐色	ヨコナデ・ハケ後ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ後ナデ・ナデ	18.1	20.7+ $\alpha$	-	-	
第107図9	22SE016	土師器	大鉢	石英・長石・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ハケ後ナデ・ミガキ	ヨコナデ・丁寧なナデ・ミガキ	(35.0)	24.2+ $\alpha$	-	-	
第109図1	22SD002	土師器	坏	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ヨコナデ・ミガキ	(10.6)	3.6	(6.4)	-	
第109図2	22SD002	土師器	坏	石英・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	18.4	4.6	8.1	-	
第109図3	22SK001 22SD002 掘返・検出	土師器	塊	長石・角閃石・白色粒子	橙色	黄褐色~橙色	ナデ・指オサエ・ミガキ	ヨコナデ・ハケ	14.0	5.1	-	-	ハケ目単位(5~6本/cm)
第109図4	22SD002	土師器	坏	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ後ミガキ・ナデ後ミガキ	ヨコナデ後ミガキ・工具ナデ	(15.0)	6.1+ $\alpha$	(6.8)	-	
第109図5	22SD002	土師器	坏蓋	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ後ミガキ	ヨコナデ後ミガキ・ケズリ後ミガキ	(15.3)	1.6+ $\alpha$	-	-	口縁端部に黒斑
第109図6	22SD002	土師器	坏蓋	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	(14.8)	1.8+ $\alpha$	-	-	
第109図7	22SD002	土師器	坏	石英・長石・白色粒子	橙色	橙色	ナデ・回転ナデ	ナデ・ハケナデ後回転ナデ	(18.0)	2.4	-	-	
第109図8	22SD002	須恵器	高台付坏	赤色粒子・白色粒子	灰白色	灰白色	ナデ	ヨコナデ	-	1.8+ $\alpha$	(8.4)	-	全体摩耗激しい
第109図9	22SD002	須恵器	壺	精良白色粒子	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	-	3.3+ $\alpha$	-	-	
第109図10	22SD002	須恵器	長頸壺	長石・角閃石・白色粒子	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	-	4.8+ $\alpha$	-	-	
第109図11	22SD002	須恵器	長頸壺	石英・白色粒子	灰白色	灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	9.8+ $\alpha$	-	-	
第109図12	22SD002	土師器	企救型甕	石英・赤色粒子・白色粒子	オリーブ黒色	にぶい橙色	ナデ・ハケ後ナデ	ナデ・ハケ後ナデ	-	6.2+ $\alpha$	-	-	口縁内面に黒変
第109図13	22SD002	土師器	製塩土器	石英・角閃石・白色粒子	橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	-	4.1+ $\alpha$	-	-	
第109図14	22SD002	土師器	製塩土器	石英・角閃石・白色粒子・1mm大の砂粒	にぶい黄橙色	橙色	ナデ	ナデ	-	3.6+ $\alpha$	-	-	
第109図15	22SD002	土師器	製塩土器	白色粒子:1~3mm大の石英を多く含む	橙色	橙色	ナデ	指オサエ	-	3.8+ $\alpha$	-	-	
第109図16	22SD002	土製品	土錘	石英・長石・角閃石・黒色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・ハケメ	長5.3	幅1.5	-	-	重10.9g
第111図1	22SK003	弥生土器	甕	長石・角閃石・雲母・白色粒子	橙色	橙色	ハケメ後ナデ	ハケメ	(22.0)	25.0	(5.4)	-	下城式土器 刻目突帯 ハケ目単位(4~7本/cm)
第111図2	22SK003	弥生土器	甕	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	2.4+ $\alpha$	-	-	
第111図3	22SK003	弥生土器	甕	石英・白色粒子	暗灰黄色	灰黄色	ナデ	ナデ・ハケ後ナデ	-	7.0+ $\alpha$	-	-	下城式土器 刻目突帯 ハケ目単位(6本/cm)
第111図4	22SK003	弥生土器	甕	石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	黒褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ハケメ	-	6.9+ $\alpha$	6.8	-	内面黒斑 ハケ目単位(5本/cm)
第113図1	22SX001	弥生土器	壺	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	黄橙色	ミガキ	ミガキ・ハケメ	-	5.9	(3.4)	-	外面に一部黒斑あり
第113図2	22SX005	土師器	小形丸底壺	長石・角閃石・雲母・白色粒子	橙色	橙色	ハケ・工具ナデ	ハケ後ナデ	(15.0)	6.8	-	-	ハケ目単位(6~8本/cm)
第113図3	22SX005	弥生土器	壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ	-	4.5+ $\alpha$	-	-	
第113図4	22SX005	弥生土器	小壺	石英・赤色粒子・白色粒子	橙色	にぶい黄橙色	指オサエ	ナデ・指オサエ	-	1.9+ $\alpha$	5.2	-	外面に一部黒斑あり

第11表 大道遺跡群第25次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)				備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第117図1	25SX001	国産陶磁器	仏飯器	白色粒子・黒色粒子	灰白色	灰白色	施釉	施釉・露胎	—	3.6+α	4.1	—	肥前産
第117図2	25SX001	国産陶磁器	皿	—	灰色	褐灰色	施釉	施釉	—	3.9+α	—	—	肥前産
第117図3	25SX001	須恵器	円面鏡	白色粒子	灰色	灰色	ナデ	回転ナデ	—	2.7+α	(13.4)	—	透かし孔3個所残存 突帯2条貼付
第117図4	25SX001	石製品	砥石	—	灰色	灰色	—	—	長6.2	幅3.6	厚1.1	—	重28.4
第117図5	25SX001	土製品	土錘	石英・長石・角閃石	灰白色	灰白色	—	ナデ	長9.4	幅3.6	—	—	重101.4g、孔径1.1cm
第118図1	25SX005	土師器	壺	長石	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラミガキ	—	2.15+α	—	—	
第118図2	25SX005	土師器	壺	石英・長石・赤色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ	—	2.5+α	—	—	
第118図3	25SX005	土師器	壺蓋	赤色粒子・石英・長石・角閃石	淡赤橙色	淡赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	1.1+α	—	—	
第118図4	25SX005	土師器	壺	石英・長石赤色粒子・角閃石	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—	1.3+α	—	—	
第118図5	25SX005	須恵器	高台付壺	石英・長石	灰色	灰色	ナデ・ヨコナデ	ナデ	—	1.4+α	—	—	貼付高台
第120図1	25SX010	土師器	壺	石英・長石・赤色粒子・黒色粒子	浅橙色	浅橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	2.2+α	—	—	
第120図2	25SX010	土師器	壺	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子・角閃石	橙色	橙色	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	—	2.15+α	—	—	
第120図3	25SX010	土師器	壺	石英・長石	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラミガキ	—	1.4+α	—	—	
第120図4	25SX010	土師器	壺蓋	長石・石英・黒色粒子	淡橙色	淡橙色	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ	—	2.4+α	—	—	
第120図5	25SX010	土師器	壺蓋	石英・長石・赤色粒子・雲母	淡橙色	淡橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	1.2+α	—	—	
第120図6	25SX010	土師器	壺蓋	長石・石英・角閃石	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	—	1.6+α	—	—	
第120図7	25SX010	土師器	壺	長石・石英	暗黄褐色	暗黄褐色	ナデ・ヨコナデ	ナデ	—	1.7+α	—	—	底部糸切り離し
第120図8	25SX010	土師器	壺	黒色粒子・雲母	淡橙色	淡橙色	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—	2.0+α	—	—	
第120図9	25SX010	土師器	壺	石英・長石・角閃石・雲母	橙色	橙色	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	—	1.05+α	—	—	
第120図10	25SX010	土師器	高台付壺	石英・長石・角閃石	橙色	橙色	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	1.45+α	—	—	貼付高台
第120図11	25SX010	土師器	高台付壺	石英・長石・赤色粒子	橙色	橙色	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ミガキ	—	1.5+α	—	—	貼付高台
第120図12	25SX010	土師器	高台付壺	石英・長石・黒色粒子・赤色粒子	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ・ヨコナデ	—	1.1+α	—	—	高台磨耗
第120図13	25SX010	須恵器	蓋	石英・長石	青灰色	青灰色	ナデ	回転ナデ	—	1.1+α	—	2.9	宝珠形ツマミ
第120図14	25SX010	須恵器	壺	白色粒子・赤色粒子	明褐灰色	明褐灰色	ヨコナデ・ナデのち指オサエ	ヘラ切り	—	1.1+α	—	—	
第120図15	25SX010	須恵器	高台付壺	石英・長石・赤色粒子	明緑灰色	明緑灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	1.65+α	—	—	削り出し高台
第120図16	25SX010	須恵器	甕	石英・長石	灰色	灰色	ヨコナデ・タタキ	タタキ・ヨコナデ	—	2.6+α	—	—	内面当て具痕あり
第120図17	25SX010	東播系須恵器	鉢	石英・長石	灰白色	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	—	3.4+α	—	—	中世
第120図18	25SX010	土師器	甕	角閃石・長石・白色粒子・赤色粒子	淡橙色	にぶい黄橙色	ナデのち指オサエ	ヨコナデ	—	4.3+α	—	—	内面被熱、突帯貼付
第120図19	25SX010	土師器	甕把手	石英・角閃石・褐色粒子・黒色粒子・白色粒子	灰白色	浅黄橙色		ナデのち指オサエ	—	3.0+α	—	—	
第120図20	25SX010	土師器	甕把手	石英・赤色粒子・黒色粒子	橙色	橙色	ナデ	指オサエ	—	3.1+α	—	—	
第120図21	25SX010	土師器	企救型甕	石英・長石	暗赤褐色	にぶい橙色	ナデ	ヨコナデ	—	2.2+α	—	—	
第120図22	25XS010	土師器	製塩土器	角閃石・長石	橙色	褐灰色	爪状オサエ痕・ナデのち指オサエ	ナデのち指オサエ	—	5.4+α	—	—	
第120図23	25XS010	土師器	土錘	石英・長石・角閃石	暗赤褐色	暗赤褐色	—	指オサエ	長6.3	幅2.1	—	—	重21.7g
第121図1	暗茶土	土師器	甕	石英・白色粒子	淡赤橙色	橙色	ナデのち指オサエ	ナデ・ヨコナデ	—	3.1+α	—	—	
第121図2	暗茶土	銅製品	弾(薬莢)	—	—	暗褐色	—	—	長3.6	幅1.7	1.7	1.7	重16.5g

第12表 大道遺跡群第11次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	
第125図1	11SD010	白磁	皿	精製土	灰白色	灰白色	施釉	施釉 疊付露胎	(12.5)	2.9	(7.6)	-
第125図2	11SD010	陶磁器	皿	精製土	明緑灰色	灰白色	施釉	施釉	(12.8)	3.0+ $\alpha$	-	-
第125図3	11SD010	陶磁器	紅皿	精製土	灰白色	灰白色	施釉	施釉	(5.9)	2.1	2.7	-
第125図4	11SD010	陶磁器	小坏	精製土	灰白色	灰白色	施釉	施釉	(7.6)	2.8+ $\alpha$	-	-
第125図5	11SD010	陶器	壺	石英・長石・赤色粒子	黄灰色	黒褐色	回転ナデ・施釉	施釉	(12.2)	3.7+ $\alpha$	-	-
第125図6	11SD010	陶器	油差蓋	石英・長石・雲母	黒色	にぶい黄橙色	施釉	回転糸切り・ナデ	-	1.6+ $\alpha$	-	-
第127図1	11SK040	土師器	坏	長石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	-	2.9	-	-
第127図2	11SK040	土師器	坏	石英・長石・雲母	にぶい橙色	にぶい橙色	ミガキ、ナデ	ナデ	(12.6)	2.8+ $\alpha$	-	-
第127図3	11SK040	土師器	坏	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ 切り後手持ちヘラナデ	-	1.5+ $\alpha$	(7.5)	-
第127図4	11SK040	土師器	高台付坏	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	1.9+ $\alpha$	(6.8)	-
第127図5	11SK040	土師器	坏蓋	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	(14.8)	1.7+ $\alpha$	-	-
第127図6	11SK040	須恵器	高台付坏	石英・長石	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	-	1.3+ $\alpha$	(9.4)	-
第127図7	11SK040	須恵器	甕	石英・長石	灰白色	灰白色	ヨコナデ・当 て具痕	ヨコナデ・タタキ	-	3.6+ $\alpha$	-	-
第127図8	11SK040	土師器	製塩土器	石英・長石・赤色粒子	灰色	灰色	布目痕	ヘラ切り・ナデ	-	3.6+ $\alpha$	-	-
第127図9	11SK040	土師器	製塩土器	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	指ナデ・指頭 痕	ヘラ切り・ナデ・ 指頭痕	-	5.5+ $\alpha$	-	-
第127図10	11SK040	土師器	製塩土器	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	指ナデ	ヘラ切り・ナデ	-	1.9+ $\alpha$	-	-
第128図1	11SK045	土師器	製塩土器	石英・長石・赤色粒子	橙色	橙色	布目痕	指頭痕	-	7.6+ $\alpha$	-	-
第130図1	表土	弥生土器	浅鉢	石英・長石・雲母	にぶい黄橙色	黒色	ミガキ	ミガキ	-	6.2+ $\alpha$	-	-
第130図2	表土	弥生土器	壺	石英・長石・角 閃石・赤色粒子	橙色	橙色	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	-	5.5+ $\alpha$	(4.6)	-
第130図3	表土	土師器	小形丸底壺	石英・長石・雲母・角 閃石・赤色粒子	にぶい褐色	にぶい橙色	ハケ・ナデ	ハケ・ミガキ	-	5.0+ $\alpha$	-	-
第130図4	表土	土師器	小形丸底壺	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ナデ後ミガキ	ナデ・ハケ後ミガキ	-	7.0+ $\alpha$	-	-
第130図5	表土	土師器	小形丸底壺	石英・長石・角 閃石	橙色	橙色	ナデ後ミガキ	ハケメ後ナデ	(13.4)	8.1	-	-
第130図6	表土	土師器	壺	石英・長石・雲母	橙色	橙色	ナデ後ミガキ	ハケメ後ナデ	(12.6)	7.7+ $\alpha$	-	-
第130図7	表土	土師器	壺	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙色	明赤褐色	ナデ・ハケ・ ハケ後オサ 工	ナデ・ハケ・ハケ 後ナデ	(15.1)	12.7+ $\alpha$	-	-
第130図8	表土	土師器	甕	石英・長石・雲母・角 閃石・赤色粒子	明赤褐色	明赤褐色	ハケ後ミガキ・ ケズリ	ハケ後ナデ・ハ ケ後ミガキ	(14.8)	9.9+ $\alpha$	-	-
第130図9	表土	土師器	坏	石英・長石・雲母・角 閃石・赤色粒子	にぶい褐色	にぶい橙色	ミガキ	ミガキ	-	3.6+ $\alpha$	-	-
第130図10	表土	土師器	高台付坏	石英・長石・角 閃石・赤色粒子	浅黄色	にぶい黄橙色	-	ケズリ?・ナデ	-	2.8+ $\alpha$	(9.8)	-
第130図11	表土	黒色土器	碗	石英・長石・角 閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	黒色	ヘラミガキ	回転ナデ・回転 ヘラケズリ	-	2.5+ $\alpha$	(8.0)	-
第130図12	表土	須恵器	高台付坏	長石	灰白色	灰白色	ナデ・回転ナ デ	回転ナデ	-	3.5+ $\alpha$	(10.2)	-
第130図13	表土	須恵器	円面覗	石英・長石・黒 色粒子	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	-	4.0+ $\alpha$	-	-
第130図14	表土	土師器	甕	石英・長石・角 閃石・赤色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	(25.2)	8.2+ $\alpha$	-	-
第130図15	表土	瓦	平瓦	石英・長石・角 閃石・白色粒子・ 赤色粒子・黒色粒子	にぶい橙色	浅黄橙色	布目痕	タタキ痕	長 8.5+ $\alpha$	幅 6.0+ $\alpha$	1.7	-
第131図16	表土	瓦質土器	瓦器碗	石英・長石	灰色	灰色	ミガキ	回転ナデ	(15.6)	4.0+ $\alpha$	-	-
第131図17	表土	青磁	皿	精製土	灰白色	オリーブ灰色	施釉	施釉	(12.0)	2.0+ $\alpha$	-	-
第131図18	表土	備前焼	大甕	石英・長石・雲 母・赤色粒子	灰褐色	灰白色	ナデ	ナデ	-	6.1+ $\alpha$	-	-
第131図19	表土	陶磁器	小壺	精製土	灰白色	明緑灰色	回転ナデ・施 釉	施釉	3.1	3.6+ $\alpha$	-	-

第13表 大道遺跡群第24次調査 出土遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚		
第136図1	24SK006 3層	土師器	小形器台	石英・長石・雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐色～褐色	黄褐色～暗褐色	ハケメ・ナデ	ミガキ	—	5.0+ $\alpha$	(10.4)	—	ハケ単位不明瞭
第136図2	24SK006 4層	土師器	小形丸底壺	長石・雲母・白色粒子	黒褐色～にぶい黄褐色	褐色～黒褐色	ナデ・ミガキ	ミガキ・ケズリ後ミガキ	—	4.8+ $\alpha$	—	—	
第136図3	24SK006 1層	土師器	小形丸底壺	石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙～明褐色	黄褐色～灰黄褐色	ナデ・ナデ後ミガキ	ハデ後ミガキ	(9.2)	2.3+ $\alpha$	—	—	
第136図4	24SK006 1層	土師器	高坏	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	(5.1)	7.4+ $\alpha$	—	—	
第136図5	24SK006 1層	土師器	高坏	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ	—	3.0+ $\alpha$	(12.6)	—	脚部一部黒斑
第136図6	24SK006	土師器	壺	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	黒褐色	黒褐色	ケズリ	タテ～ナナメ方向のハケメ・ナデ	—	9.3+ $\alpha$	—	—	内面黒斑
第137図1	24SE007 2層	弥生土器	壺	石英・赤色粒子・白色粒子	浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ・刻目突帯	—	4.0+ $\alpha$	—	—	
第137図2	24SE007 1層	土師器	高坏	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗いヨコナデ	ハケメ後ミガキ	(6.0)	8.1+ $\alpha$	—	—	
第137図3	24SE007 1層	土師器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	暗赤褐色～赤褐色	黒褐色～赤褐色	ハケメ・指頭圧痕・ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ・ナデ	(14.6)	6.4+ $\alpha$	—	—	口縁部一部のみハケ不明瞭
第137図4	24SE007	土師器	壺	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	褐色	明褐色～褐色	ヨコナデ・ハケメ・工具才サエ・ナデ	ヨコナデ・工具才サエ・ナデ	(15.2)	6.1+ $\alpha$	—	—	内面サビ付着
第137図5	24SE007 2層	土師器	壺	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	暗褐色～黒色	褐色～黒色	ナデ・指頭圧痕・ハケメ後ナデ	ナデ	(15.2)	3.4+ $\alpha$	—	—	
第137図6	24SE007 1層	土師器	壺	長石・白色粒子	赤色～明赤褐色	橙色～黒色	ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	(17.3)	24.3	—	—	外面煤・サビ付着 内面サビ多量に付着
第137図7	24SE007 2層	木製品	堅杵	—	—	—	—	—	長20.4	幅4.0	—	—	
第141図1	24SE008	土師器	碗	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄橙	にぶい黄橙	指頭圧痕・指頭圧痕後ナデ	指頭圧痕	7.2	3.2	—	—	底部黒斑有り
第141図2	24SK018 検出時	土師器	碗	石英・角閃石・雲母・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ後指オサエ	10.3	2.3+ $\alpha$	—	—	1/3破損
第141図3	24SE008	土師器	碗	長石・角閃石・白色粒子	褐色～にぶい黄褐色	暗褐色～にぶい黄褐色	オサエ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ・ナナメ方向のハケメ	(14.3)	4.9	—	—	底部赤変
第141図4	24SE008	土師器	碗	石英・長石・角閃石・白色粒子	明褐色～黒色	明褐色～黒色	ナデ・ナナメ方向のハケメ	ナデ・ハケメ	17.1	9.2	—	—	外面煤付着 内面一部黒変
第141図5	24SE008 上層	土師器	小形丸底壺	石英・長石・白色粒子	橙色	橙色～にぶい橙色	ヨコハケナデ・ナデ・工具才サエ・ナデ後ナデ	工具ヨコナデ・丁寧なナデ・ミガキ	12.0	15.1	—	—	外面煤付着 内面サビ付着
第141図6	24SE008	土師器	小形丸底壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子	橙色	にぶい橙色	ハケメ後丁寧なナデ・工具才サエ	タテハケメ後ナデ・ハケメ	12.8	7.4	—	—	口縁部内側黒斑有り
第141図7	24SE008 上層 検出時	土師器	鉢	石英・長石・角閃石・赤色粒子	橙色	橙色	ミガキ	ミガキ	(17.2)	7.2+ $\alpha$	—	—	外面黒斑
第141図8	24SE008 上層	土師器	小形丸底壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子	橙色	黒褐色	ヨコナデ後ミガキ	ヨコナデ後ミガキ	(13.0)	6.4+ $\alpha$	—	—	外面煤付着
第141図9	24SE008	土師器	山陰系二重口縁鉢	石英・長石・角閃石・赤色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ後ミガキ・ミガキ	ヨコナデ後ミガキ・ケズリ後ミガキ	(16.4)	5.3	—	—	
第141図10	24SE008	土師器	高坏	角閃石・白色粒子	黒褐色～黄灰色	黄灰色	ナデ	ナデ・タテハケメ後ナデ・穿孔	—	5.2+ $\alpha$	—	—	4ヶ所穿孔有り
第141図11	24SE008 上層	土師器	壺	石英・赤色粒子	橙色	にぶい橙色	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	—	6.5+ $\alpha$	—	—	黒斑有り
第141図12	24SE008 上層	土師器	複合口縁壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子	橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ	(17.6)	5.1+ $\alpha$	—	—	外面煤付着
第141図13	24SE008 上層	土師器	複合口縁壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ヨコナデ	—	2.8+ $\alpha$	—	—	内面黒斑
第141図14	24SE008 上層	土師器	小形丸底壺	石英・長石・白色粒子	橙色	橙色～にぶい橙色	ヨコハケナデ・ナデ・工具才サエ	工具ヨコナデ・丁寧なナデ・ミガキ	12.0	15.1	—	—	外面煤付着 内面サビ付着
第141図15	24SE008	土師器	壺	石英・雲母・白色粒子	暗褐色～黒色	暗褐色～黒色	ヨコナデ・ミガキ・ナデ	ケズリ後ナデ・ミガキ	—	(11.5)	—	—	外面煤・サビ付着 内面サビ付着
第141図16	24SE008	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	灰黄褐色	にぶい黄橙色～明褐色	ハケメ・ナデ・ケズリ	ナデ・ハケメ・粗いハケメ後細かいハケメ	—	11.4+ $\alpha$	—	—	
第141図17	24SE008・S	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	明黄褐色	明黄褐色	ナデ・押え後横方向のハケメ	ナデ・斜め方向のハケメ	—	13.7+ $\alpha$	—	—	
第142図18	24SE008	土師器	壺	長石・白色粒子	明赤褐色	赤褐色	ヨコハケナデ・指頭圧痕・ナデ・工具才サエ・ハケメ	タテハケメ後ナデ・ハケメ・粗いミガキ	15.4	18.6+ $\alpha$	—	—	外面煤付着 貼付浮文1つ ※OIOM-5

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第142図19	24SE008上層	土師器	複合口縁壺	石英・長石・白色粒子	赤褐色～黒褐色	明赤褐色	ヨコナデ・ナデ	櫛描波状文・ナデ・ハケメ・ミガキ	19.5	40.5+ $\alpha$	—	—	安国寺式土器 外面煤付着 内面黒斑
第143図20	24SE008上層検出 24SK006 <sup>1</sup> 層・3層	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	赤褐色	赤褐色	ハケメ後ナデ・ミガキ・ハケメ・ナデ	ハケメ後ナデ	(15.2)	5.6+ $\alpha$	—	—	
第143図21	24SK018	土師器	壺	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	明褐色	ハケメ後横方向ナデ	横方向ナデ	(16.2)	5.1+ $\alpha$	—	—	口縁端部沈線状
第143図22	24SE008	土師器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	粗い工具ナデ	—	9.5+ $\alpha$	—	—	外面煤付着
第143図23	24SE008 <sup>S</sup>	土師器	壺	長石・角閃石・赤色粒子	橙色	明褐色	横方向ハケメ	ナデ・横方向ナデ・斜め方向のハケメ	(18.4)	9.5+ $\alpha$	—	—	口縁部2/3のみ 外面全体スス付着
第143図24	24SE008	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	明赤褐色～暗赤褐色	暗赤褐色～黒色	ケズリ後ナデ・ミガキ	ヨコナデ・ハケメ	(15.0)	10.3+ $\alpha$	—	—	外面煤付着
第143図25	24SE008	土師器	壺	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙色	にぶい橙色	ハケメ・ハケメ後ミガキ・ハケメ後粗いミガキ	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ	(17.0)	9.7+ $\alpha$	—	—	外面煤付着
第143図26	24SE008上層	土師器	壺	石英・角閃石・雲母・白色粒子	明黄褐色～暗褐色	明黄褐色～灰黄褐色	ヨコナデ・指頭圧痕・ハケメ	ヨコナデ	(19.0)	10.4+ $\alpha$	—	—	内外面煤・サビ付着
第143図27	24SE008	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	赤褐色	赤褐色～にぶい褐色	ハケメ後ナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ後ナデ・ハケメ・ナデ	(18.0)	6.7+ $\alpha$	—	—	
第143図28	24SE008	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色～にぶい橙色	明褐色	ハケメ後粗いミガキ	ヨコナデ・ハケメ	16.1	20.7	—	—	※OIOM-2 内外面煤・サビ付着
第144図29	24SE008	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	明黄褐色～黒褐色	明黄褐色～黒褐色	ハケナデ・工具ナデ・ミガキ	ヨコナデ・タテハケナデ・ナデ	(13.0)	16.3	—	—	外面煤付着
第144図30	24SE008	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	明褐色～黒褐色	明褐色～黒褐色	ヨコハケメ後ナデ・粗い工具ナデ	ヨコナデ・ハケメ	(15.5)	25.9	—	—	外面煤付着 内外面サビ付着 ※OIOM-4
第144図31	24SE008上層	土師器	壺	角閃石・白色粒子	黄橙色～黒色	明黄橙色～黒色	ハケメ・ナデ・ケズリ	ナデ・オサエ・ハケメ	17.5	27.1	—	—	布留系壺 内外面煤付着
第144図32	24SE008	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	赤褐色～黒褐色	赤褐色～橙色・黒褐色	工具ナデ・ナデ・オサエ	ハケメ後ナデ・粗いミガキ	13.2	14.9	—	—	外面煤付着 内面サビ付着
第144図33	24S08	土師器	壺	石英・長石・角閃石・赤色粒子	橙色	にぶい橙色	ヨコナデ・指頭圧痕後ナデ・ハラケズリ	ヨコナデ・ハケメ後ヨコナデ・ハケメ	(16.4)	10.0+ $\alpha$	—	—	布留系壺 外面煤付着 内面サビ付着
第144図34	24SE008	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	黄褐色～にぶい黄橙色	黄橙～黒色	ナデ・ケズリ	ナデ	(20.6)	13.6+ $\alpha$	—	—	布留系壺 外面煤付着
第145図35	24SE008上層	土師器	壺	石英・長石・白色粒子	灰黄褐色	黄橙色	ケズリ後粗いミガキ・ハケメ後ナデ・粗いミガキ	ハケメ後ナデ・粗いミガキ	16.0	26.3	—	—	布留系壺 外面煤付着
第145図36	24SE008上層	土師器	壺	長石・角閃石・白色粒子	黄褐色～黒色	褐色～黒色	ケズリ後ナデ	ナデ・ハケメ	15.0	30.4	—	—	布留系壺 外面煤付着
第146図37	24SE008最下層	土師器	長頸壺	角閃石・白色粒子	褐色～黒褐色	褐色～黄褐色 にぶい黄褐色	ハケメ後丁寧なミガキ・ナデ	ハケメ後丁寧なミガキ	15.4	19.9	—	—	
第146図38	24SE008	土師器	壺	長石・白色粒子	黒褐色	黑色	ハケメ後ナデ・ミガキ・ケズリ後ナデ	ナナメ・ハケメ・ヨコナデ・タテハケメ	14.6	21.1	—	—	内外面共に煤多量に付着 ※OIOM-1
第146図39	24SE008最下層検出 24S018 <sup>1</sup> 層	土師器	壺	長石・赤色粒子・白色粒子	黒褐色	明黄褐色～黒褐色	ナデ・ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	(20.5)	32.1	—	—	外面黒斑
第146図40	24SE008	弥生土器	臼蓋	石英・雲母・白色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ・突帯	—	5.9+ $\alpha$	—	—	
第147図41	24SE008	木製品	臼蓋	クスノキ	—	—	ヤリガンナによる加工痕多數	ヤリガンナによる加工痕多數	長56.4	幅30.4	厚3.2	—	
第148図42	24SE008	木製品	臼臼	クスノキ	—	—	ヤリガンナによる加工痕多數	ヤリガンナによる加工痕多數	55.2	45.6	56.4	—	
第149図43	24SE008	木製品	種別不明	—	—	—	—	—	長28.5	幅10.7	—	—	鍼か
第149図44	24SE008	木製品	楔	—	—	—	—	—	長12.0	幅8.7	—	—	2箇所穿孔有り
第149図45	24SE008	木製品	種別不明	—	—	—	—	—	長6.5	幅8.0	厚3.7	—	穿孔らしき穴有り
第149図46	24SE008	木製品	種別不明	—	—	—	—	—	長12.8	幅6.3	—	—	
第149図47	24SE008	石製品	石皿	—	—	—	—	—	長21.5	幅17.3	厚3.4	—	裏面欠損、重1680g
第151図1	24SE009	土師器	小形丸底壺	石英・長石・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙色	にぶい黄橙色	丁寧なナデ	ヨコナデ・ハケメ	(12.9)	8.4	—	—	内外共黒斑有り
第151図2	24SE009	土師器	小形丸底壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	明赤褐色	にぶい赤褐色 にぶい褐色	ハケメ後ミガキ	丁寧なミガキ	(16.4)	6.5	—	—	内外底部黒斑有り
第151図3	24SE009 5cm下げ	土師器	壺	石英・赤色粒子・白色粒子	明褐色 ～褐色～黒色	にぶい黄橙色	ヨコナデ・ケズリ後ナデ・ミガキ	ナデ・ヨコナデ・工具ナデ	—	6.3+ $\alpha$	—	—	

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	
第151図4	24SE009	土師器	甕	石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	明褐色	明褐色	ナデ・ナデ後ミガキ	ハケメ後ナデ	(16.2)	3.7+ $\alpha$	-	-
第151図5	24SE009 暗褐色土	土師器	甕	長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄橙色	暗褐色	ヨコナデ・ミガキ・オサエナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	(17.4)	16.8+ $\alpha$	-	-
第151図6	24SE009	土師器	甕	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色 ～にぶい橙色	にぶい黄橙色 ～にぶい橙色	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケメ	(16.0)	8.3+ $\alpha$	-	-
第151図7	24SE009	木製品	種別不明	-	-	-	-	-	長39.6	幅3.2	-	-
第153図1	24SE010	土師器	小形器台	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナデ・ミガキ・ナデ・穿孔	密なヨミガキ	7.6	4.5+ $\alpha$	-	-
第153図2	24SE010 2層	土師器	小形器台	白色粒子	黒褐色 ～褐色	赤褐色～暗赤褐色	ナデ・ミガキ・ハケメ後ナデ	ナデ・ミガキ・ハケメ後ナデ・ミガキ	7.8	7.6	10.3	-
第153図3	24SE010 2層	土師器	小形丸底壺	長石・角閃石・白色粒子	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ・ナデ	ハケメ後ヨコナデ・ナデ	(12.2)	8.0+ $\alpha$	-	-
第153図4	24SE010	土師器	小形丸底壺	長石・角閃石・白色粒子	橙色～明赤褐色	橙色～明赤褐色	ヨコナデ	ハケメ後ナデ・ナデ・ミガキ	-	5.1+ $\alpha$	-	-
第153図5	24SE010 1層	土師器	壺	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい褐色	黒色～褐色	ナデ・工具ナデ	ナデ	(21.2)	6.7+ $\alpha$	-	-
第153図6	24SE010 最下層	土師器	甕	角閃石・赤色粒子・白色粒子・砂粒	黒色	黒色	ハケメ・ナデ・ハケメ後ナデ	ナデ・ハケメ	(15.6)	6.2+ $\alpha$	-	-
第153図7	24SE010 1層 24SE010	土師器	甕	長石・角閃石・白色粒子	褐色	明褐色～明黄褐色	ハケメ後ナデ	ハケメ・ナデ	(17.2)	23.4	-	-
第153図8	24SE010 2層	土師器	甕	長石・角閃石・白色粒子	黒褐色～黒色	赤褐色～明褐色	ハケメ後ケズリ	ヨコナデ・ハケメ	16.1	16.4+ $\alpha$	-	-
第153図9	24SE010 1層 24SE010	土師器	甕	長石・角閃石・白色粒子	黄褐色	明黄褐色～黒褐色	ハケメ後ケズリ	ハケメ	14.6	21.0	-	-
第154図10	24SE010 2層	土師器	甕	石英・長石・角閃石・白色粒子	橙色～黒色	明褐色～褐色	ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	14.4	20.6	-	-
第154図11	24SE010 2層 最下層	土師器	甕	角閃石・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色～明褐色	明赤褐色～明褐色	ハケメ後ケズリ後粗いナデ	ハケメ後ケズリ後工具ナデ	(15.3)	27.7+ $\alpha$	-	-
第154図12	24SE010 2層	土師器	甕	長石・角閃石・白色粒子	明黄褐色～黄褐色	褐色	ヨコナデ・オサエ・ハケメ・ナデ	ナデ・ハケメ後ナデ	13.5	21.1	-	-
第156図1	24SE012	土師器	ミニチュア壺	石英・角閃石・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ・指頭圧痕・ハケメ	3.0	5.8	-	-
第156図2	24SE012	土師器	高坏	石英・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ナデ・ミガキ	-	8.7+ $\alpha$	-	-
第156図3	24SE012	土師器	高坏	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・ハケメ・工具痕	-	8.3+ $\alpha$	(13.8)	-
第156図4-1	24SE012	土師器	甕	石英・赤色粒子・白色粒子	橙色	暗黄褐色～赤褐色	ハケメ後ケズリ	ヨコナデ・ハケメ	(18.6)	13.2	-	-
第156図4-2	24SE012 下層	土師器	甕	長石・角閃石・白色粒子	赤褐色～黒褐色	赤褐色～黒褐色	ケズリ・ナデ・粗いオサエ	ハケメ後ナデ・ミガキ・ナデ	-	12.0+ $\alpha$	-	-
第156図5	24SE012	木製品	種別不明	-	-	-	-	-	長17.0	幅6.2	-	-
第156図6	24SEE012	石製品	磨石	-	-	-	-	-	長10.9	幅7.8	厚2.7	-
第156図7	24SE012	石製品	敲石	-	-	-	-	-	長10.8	幅2.6	厚3.3	-
第157図1	24SD015	土師器	坏	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	-	1.8+ $\alpha$	-	-
第157図2	24SD015	土師器	器台	石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ・指オサエ	-	3.7+ $\alpha$	-	-
第157図3	24SD015	須恵器	甕	赤色粒子・白色粒子	灰色	灰色	当て具痕	平行タタキ	-	4.3+ $\alpha$	-	-
第157図4	24SD015	須恵器	甕	石英・白色粒子	灰色	灰色	当て具痕	平行タタキ	-	7.8+ $\alpha$	-	-

第14表 大道遺跡群第10次調査 繩文土器遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	
第37図1	包含層	縩文土器	深鉢口縁部	角閃石・白色粒子・橙色粒子	暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ヨコナデ	-	3.3+ $\alpha$	-	-
第37図2	10SD010	縩文土器	深鉢口縁部	長石・角閃石・雲母・白色粒子・赤色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・指オサエ	ナデ・爪状圧痕	-	4.7+ $\alpha$	-	-
第37図3	10SD010	縩文土器	浅鉢口縁部	石英・白色粒子	にぶい褐色	灰褐色	工具ナデ後刻目	ナデ後条痕	-	3.9+ $\alpha$	-	-
第37図4	包含層	縩文土器	深鉢口縁部	長石・白色粒子	橙色	橙色	刻目後ナデ	刻目	-	5.2+ $\alpha$	-	-

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第37図5	10SD010	縄文土器	鉢 口縁部	角閃石・長石・石英・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	条痕後ナデ	ナデ	-	4.4+ $\alpha$	-	-	内面条痕
第37図6	10SD036	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・長石・石英・白色粒子	灰白色	浅黄橙色	ナデ	ナデ・布目痕	-	4.5+ $\alpha$	-	-	口縁部に棒状工具による沈線2条
第37図7	10SD010	縄文土器	浅鉢 口縁部	長石・角閃石・白色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	指頭痕・ナデ	ナデ・条線文	-	2.2+ $\alpha$	-	-	
第37図8	10SD010	縄文土器	深鉢 口縁部	長石・黒色粒子・橙色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	褐灰色	工具ナデ・指オサエ	工具ナデ・指オサエ	-	4.8+ $\alpha$	-	-	口縁部折り曲げ
第37図9	10SD026	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・橙色粒子・白色粒子	灰白色	灰白色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	4.5+ $\alpha$	-	-	
第37図10	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子	灰白色	灰白色	条痕後ナデ	ヨコナデ	-	4.2+ $\alpha$	-	-	突帯貼付、外面沈線
第37図11	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・長石・赤色粒子・橙色粒子・白色粒子	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	2.5+ $\alpha$	-	-	口縁上方に圧痕
第37図12	黒褐土1層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	1.9+ $\alpha$	-	-	口縁部折り曲げ
第37図13	10SD010	縄文土器	鉢 口縁部	角閃石・長石・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	指オサエ後ナデ	工具条痕・ナデ	-	3.9+ $\alpha$	-	-	外面に工具による条痕・渦巻文あり
第37図14	包含層	縄文土器	鉢 口縁部	角閃石・長石・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	工具ナデ	工具ナデ	-	4.2+ $\alpha$	-	-	穿孔1ヶ確認
第37図15	10SD036 10SD010 側溝	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・白色粒子	にぶい褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	-	2.3+ $\alpha$	-	-	後期深鉢 口縁部
第37図16	10SD010	縄文土器	浅鉢 口縁部	角閃石・長石	灰黄色	灰黄色	工具ナデ・爪状圧痕	ヨコナデ	-	2.3+ $\alpha$	-	-	口縁内面に爪状圧痕
第37図17	10SD036	縄文土器	深鉢 脊部	角閃石・赤色粒子・橙色粒子	灰白色	灰白色	条痕後ナデ	ナデ・押点文・条痕後ミガキ	-	5.8+ $\alpha$	-	-	外面沈線2条
第37図18	10SD036 暗灰シルト	縄文土器	深鉢 脊部	角閃石・長石・赤色粒子	灰白色	灰白色	指オサエ後ナデ	ナデ・押点文	-	6.0+ $\alpha$	-	-	小池原上層式土器 外面に沈線・棒状工具による 加工痕あり
第37図19	10SD010 暗黒褐土	縄文土器	深鉢 脊部	角閃石・長石・橙色粒子・白色粒子	灰黄色	黄灰色	工具ナデ・ナデ	ヨコナデ	-	6.1+ $\alpha$	-	-	内外面に条痕あり
第37図20	10SD010	縄文土器	深鉢 脊部	角閃石・長石・橙色粒子	にぶい黄橙色	灰白色	ナデ	ナデ	-	3.5+ $\alpha$	-	-	内外面に条痕あり
第38図21	10SD036 2層	縄文土器	鉢 破片	角閃石・長石・橙色粒子・白色粒子	灰白色	浅橙色	ナデ	ナデ・押点文	-	5.0+ $\alpha$	-	-	外面に沈線2条・押点文あり
第38図22	10SD010	縄文土器	深鉢 脊部	黒色粒子・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ後指オサエ	工具ナデ	-	5.2+ $\alpha$	-	-	内面に爪状圧痕
第38図23	包含層	縄文土器	深鉢 脊部	石英・赤色粒子・白色粒子	灰褐色	褐灰色	ナデ後指オサエ	工具ナデ	-	6.4+ $\alpha$	-	-	外面に条痕あり
第38図24	10SD010	縄文土器	深鉢 脊部	角閃石・長石・橙色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	-	10.5+ $\alpha$	-	-	
第38図25	10SD010	縄文土器	深鉢 脊部	角閃石・長石・白色粒子	明褐灰色	明褐灰色	ナデ	ナデ	-	8.3+ $\alpha$	-	-	内外面に条痕あり
第38図26	10SP042	縄文土器	深鉢 破片	角閃石・赤色粒子・橙色粒子・白色粒子	灰褐色	にぶい橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	6.0+ $\alpha$	-	-	
第38図27	10SD036 最上層	縄文土器	鉢 脊部	角閃石・白色粒子	にぶい橙色	灰褐色	ナデ	ヨコナデ・条痕	-	2.7+ $\alpha$	-	-	
第38図28	包含層	縄文土器	浅鉢 口縁部	角閃石・橙色粒子・白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	-	2.5+ $\alpha$	-	-	口縁部貼付・外面に条線文あり
第38図29	10SD010	縄文土器	浅鉢 口縁部	角閃石・長石・石英・白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ハケメ後ナデ	-	4.65+ $\alpha$	-	-	外面に黒斑
第38図30	10SD010 灰褐土	縄文土器	鉢 口縁部	金雲母・角閃石・白色粒子	灰色	灰色	ミガキ	ナデ・ミガキ	-	4.1+ $\alpha$	-	-	研磨土器
第38図31	10SD010	縄文土器	深鉢 底部	角閃石・長石・橙色粒子・白色粒子	にぶい橙色	橙色	ナデ	ミガキ・指オサエ後ナデ	-	2.1+ $\alpha$	(8.0)	-	反転復元・底部ミガキ・網代痕

第15表 大道遺跡群第14次調査 縄文土器遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	最大径/重	
第51図1	14SX006	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・白色粒子	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ・磨消縄文	-	3.7+ $\alpha$	-	-	沈線2条あり
第51図2	14SX006 淡黒褐色 砂質土	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・角閃石・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい橙色	ナデ	磨消縄文・ナデ	-	4.8+ $\alpha$	-	-	北久根式土器 沈線1条あり
第51図3	14SX006 淡黒褐色 砂質土	縄文土器	深鉢 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・磨消縄文	-	3.2+ $\alpha$	-	-	沈線2条あり
第51図4	14SX006	縄文土器	深鉢 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	黒褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	磨消縄文・ナデ	-	3.5+ $\alpha$	-	-	沈線1条あり
第51図5	14SX006 黒灰色粘質土 堆積土	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	磨消縄文・ナデ	-	5.8+ $\alpha$	-	-	沈線1条あり

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚		
第51図6	表土	縄文土器	深鉢 口縁部	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・磨消縄文	-	2.7+ $\alpha$	-	-	内面沈線1条 外面沈線2条
第51図7	14SX006	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ミガキ	ミガキ	-	3.1+ $\alpha$	-	-	
第51図8	14SX006 淡黒褐色 砂質土	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	-	4.6+ $\alpha$	-	-	沈線1条あり
第51図9	14SX006	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・貝殻条痕	ナデ	-	5.0+ $\alpha$	-	-	
第51図10	14SX006 淡黒褐色 砂質土	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子	黄褐色	にぶい黄褐色	指才サエ後ナデ・ナデ	条痕	-	3.8+ $\alpha$	-	-	
第51図11	14SX006 淡黒褐色 砂	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	灰黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・条痕	-	4.5+ $\alpha$	-	-	
第51図12	14SX006 淡黒褐色 砂質土	縄文土器	深鉢 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	条痕後ナデ・ナデ	-	6.0+ $\alpha$	-	-	全体的に摩滅
第51図13	14SX006	縄文土器	深鉢 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	条痕	ヨコナデ	-	4.6+ $\alpha$	-	-	
第51図14	14SX006	縄文土器	深鉢 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	明黄褐色	条痕	条痕	-	7.2+ $\alpha$	-	-	
第52図15	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	条痕	条痕	-	3.3+ $\alpha$	-	-	
第52図16	14SX006	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	条痕後ナデ	-	10.6+ $\alpha$	-	-	
第52図17	14SX006	縄文土器	浅鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・白色粒子	黒褐色	にぶい黄褐色	刻目・条痕	刻目・条痕	-	4.3+ $\alpha$	-	-	
第52図18	14SK010	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	浅黄色	不明	不明	-	5.7+ $\alpha$	-	-	磨耗が激しい
第52図19	14SX006 淡黒褐色 砂	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	-	3.7+ $\alpha$	-	-	
第52図20	14SX006	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・白色粒子	浅黄橙色	にぶい黄橙色	条痕後ナデ	条痕か?	-	2.8+ $\alpha$	-	-	
第52図21	14SX006 淡黒褐色 砂質土	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ナデ・条痕後ナデ	-	3.7+ $\alpha$	-	-	
第52図22	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ヨコナデ	丁寧なナデ	-	3.5+ $\alpha$	-	-	
第52図23	14SX006	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	-	3.9+ $\alpha$	-	-	
第52図24	表土	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ヨコナデ	条痕	-	4.5+ $\alpha$	-	-	
第52図25	14SX006 包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	-	10.3+ $\alpha$	-	-	外面スス付着
第52図26	14SX006 淡黒褐色 砂	縄文土器	鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	-	3.4+ $\alpha$	-	-	沈線3条?
第52図27	包含層	縄文土器	鉢 口縁部	角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	-	2.1+ $\alpha$	-	-	沈線2条あり
第52図28	14SX006	縄文土器	鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・白色粒子	黄灰色	浅黄色	ミガキ	ミガキ	-	4.0+ $\alpha$	-	-	
第52図29	14SX006	縄文土器	鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・白色粒子	黒褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	-	4.8+ $\alpha$	-	-	沈線1条あり
第53図30	14SX006	縄文土器	不明 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	条痕	-	4.7+ $\alpha$	-	-	
第53図31	14SX006 淡黒灰色 粘質土	縄文土器	不明 脊部	石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	条痕	-	4.0+ $\alpha$	-	-	一部合成
第53図32	14SX006	縄文土器	不明 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	にぶい黄褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	5.2+ $\alpha$	-	-	
第53図33	14SX006	縄文土器	不明 脊部	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	-	4.6+ $\alpha$	-	-	接合痕
第53図34	14SX006	縄文土器	不明 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	灰褐色	明褐色	ミガキ	条痕	-	5.7+ $\alpha$	-	-	
第53図35	14SX006 淡黒灰色 粘質土	縄文土器	不明 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	5.2+ $\alpha$	-	-	
第53図36	14SX006 淡黒褐色 砂	縄文土器	不明 脊部	石英・長石・角閃石・雲母・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	6.4+ $\alpha$	-	-	
第53図37	14SX006 堆積層	縄文土器	不明 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	明黄褐色	にぶい黄橙色	条痕	条痕	-	6.9+ $\alpha$	-	-	
第53図38	14SE005	縄文土器	鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	条痕後ナデ	縦目圧痕・条痕後ナデ	-	4.1+ $\alpha$	-	-	

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚	
第53図39	14SE005	縄文土器	深鉢 脊部	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄橙色	灰黄褐色	条痕後ナデ	条痕	-	4.4+ $\alpha$	-	-
第53図40	14SE005	縄文土器	深鉢 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ミガキ	条痕後ナデ	-	4.1+ $\alpha$	-	-
第53図41	14SE005	縄文土器	深鉢 脊部	石英・長石・角閃石・白色粒子	灰褐色	橙色	ナデ	ヘラケズリ	-	5.0+ $\alpha$	-	-
第53図42	14SE005	縄文土器	深鉢 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	6.0+ $\alpha$	-	-
第54図43	14SX006	縄文土器	深鉢 脊部	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	黒色	赤褐色	ナデ	条痕後ヘラケズリ	-	7.7+ $\alpha$	-	-
第54図44	14SX006	縄文土器	深鉢 脊部	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色～橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	8.2+ $\alpha$	-	-
第54図45	14SX006	縄文土器	深鉢 底部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	-	4.1+ $\alpha$	(4.6)	-
第54図46	14SX006	縄文土器	深鉢 底部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	暗灰黄色	明黄褐色	ナデ	ナデ後ミガキ?	-	2.6+ $\alpha$	(7.6)	-
第54図47	14SX006	縄文土器	深鉢 底部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	浅黄色～灰褐色	橙色	条痕後ナデ ナデ	条痕 ナデ	-	2.9+ $\alpha$	(7.2)	-
第54図48	表土	縄文土器	深鉢 底部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	明褐色	明赤褐色	ナデ	指頭圧 ナデ	-	4.6+ $\alpha$	(8.6)	-
第54図49	14S006	縄文土器	深鉢 底部	石英・長石・角閃石・白色粒子	にぶい黄橙色	橙色	ナデ	指頭圧後ナデ ナデ	-	4.8+ $\alpha$	(9.6)	-
第54図50	14SK007 黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢 底部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	浅黄色～橙色	ナデ	ナデ	-	4.0+ $\alpha$	-	-
第54図51	14SX006	縄文土器	深鉢 底部	石英・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	明黄褐色	ナデ	ナデ	-	2.5+ $\alpha$	(12.2)	-
第54図52	14SX006	縄文土器	深鉢 底部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	-	2.8+ $\alpha$	-	-
第54図53	トレンチ	縄文土器	深鉢 底部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色～明黄褐色	橙色	工具ナデ ナデ	ナデ	-	4.9+ $\alpha$	(15.2)	-
第55図54	14SX006	弥生土器 (早期)	浅鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	3.1+ $\alpha$	-	-
第55図55	14SE005	弥生土器 (早期)	浅鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	灰黄色	にぶい黄橙色	工具ナデ後ミ ガキ	ナデミガキ	-	3.7+ $\alpha$	-	-
第55図56	包含層	弥生土器 (早期)	深鉢 口縁部	長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	3.2+ $\alpha$	-	-
第55図57	14SX006	弥生土器 (早期)	浅鉢 脊部	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ミガキ	ミガキ	-	3.1+ $\alpha$	-	-
第55図58	14SX006	弥生土器 (早期)	浅鉢 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	灰黄褐色	黒褐色	ミガキ	ミガキ	-	3.5+ $\alpha$	-	-
第55図59	14SK010	弥生土器 (早期)	壺 頭部	石英・長石・角閃石・白色粒子	明黄褐色	灰黄色	ナデ	ナデ	-	5.2+ $\alpha$	-	-
第55図60	14SX006	弥生土器 (早期)	浅鉢 脊部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ミガキ ナデ	ミガキ	-	3.3+ $\alpha$	-	-
第55図61	14SX006 淡黒褐色砂	弥生土器 (早期)	深鉢 底部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	接合痕	ナデ	-	1.7+ $\alpha$	-	-
第55図62	14SK010 黒褐色粘質土	弥生土器 (早期)	深鉢 底部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	-	2.4+ $\alpha$	-	-
第55図63	トレンチ	不明	浅鉢 底部	石英・長石・角閃石・白色粒子	褐色	明黄褐色	ナデ?	ナデ?	-	2.1+ $\alpha$	-	-
第55図64	14SX006 淡黒褐色砂質土	弥生土器 (早期)	浅鉢 底部	石英・長石・角閃石・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	-	1.8+ $\alpha$	-	-
第55図65	14SX006	弥生土器 (早期)	浅鉢 底部	石英・赤色粒子・白色粒子	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色～橙色	ナデ	ナデ 指頭圧後ナデ	-	2.1+ $\alpha$	5.2	-

第16表 大道遺跡群第15次調査 繩文土器遺物観察表

図版番号	遺構名	器種		胎土	色調		器面調整		法量(cm)			備考	
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径/長	器高/幅	底径/厚		
第25図1	15SK001 黒灰色砂質土	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・長石・白色粒子	黒褐色	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	-	4.2+ $\alpha$	-	-	里木式土器 口唇部に穿孔4ヶ所
第25図2	15SX037	縄文土器	深鉢 口縁部	雲母・角閃石・石英・長石・白色粒子	にぶい赤褐色	橙色	ヨコナデ	ナデ後ミガキ・刻目	-	2.3+ $\alpha$	-	-	津雲上層式土器 口唇部線刻あり
第25図3	包含層	縄文土器	浅鉢 口縁部	角閃石・石英・長石・白色粒子	橙色	暗赤灰色	指オサエ後ナデ	爪状の刻目	-	2.6+ $\alpha$	-	-	船元式土器 外面に爪状文様あり
第25図4	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・長石・白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	-	7.2+ $\alpha$	-	-	
第25図5	15SD012	縄文土器	深鉢 口縁部	石英・長石・角閃石・黒色粒子・赤色粒子・白色粒子	浅黄橙色	にぶい黄橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	7.0+ $\alpha$	-	-	内面磨耗著しい
第25図6	検出時	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・長石・白色粒子	赤褐色	赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	4.8+ $\alpha$	-	-	
第25図7	包含層	縄文土器	深鉢 口縁部	角閃石・石英・長石・白色粒子	にぶい橙色	にぶい橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	4.8+ $\alpha$	-	-	
第25図8	15SD012	縄文土器	浅鉢 口縁部	石英・長石・白色粒子	にぶい橙色	橙色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	4.5+ $\alpha$	-	-	外面斜め方向に線刻(4条)
第25図9	15SD008 淡黒灰色砂質土	縄文土器	鉢	角閃石・石英・長石・橙色粒子・白色粒子	褐灰色	にぶい褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	-	2.7+ $\alpha$	-	-	
第25図10	検出時	縄文土器	深鉢 体部	角閃石・石英・長石・黒色粒子・橙色粒子・白色粒子	灰白色	明褐灰色	条痕後ナデ	ナデ	-	7.7+ $\alpha$	-	-	外面条痕
第25図11	15SK001	縄文土器	深鉢 底部	角閃石・石英・長石・橙色粒子・白色粒子	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	高台貼り付け後ナデ	-	3.5+ $\alpha$	-	-	高台貼付
第25図12	15SK001 黒灰色砂質土	縄文土器	深鉢 底部	角閃石・石英・長石・赤色粒子・白色粒子	褐灰色	灰黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	-	5.3+ $\alpha$	-	-	小池原上層式 深鉢の底部
第25図13	15SK001	石製品	石斧	凝灰岩	-	-	-	-	8.7 (最大長)	9.2 (最大幅)	-	-	重150g

# 第4章 自然科学分析

## 第1節 大分市大道遺跡群第15次調査出土土器の年代学的調査

歴博年代研究グループ

藤尾慎一郎・坂本稔

### I 調査の概要

2007年3月27日、大分市教育委員会駅南事務所において、大分市大道遺跡群第15次調査において出土した古墳前期初頭（布留1、1～2式併行段階）の土器の付着炭化物を採取し、前処理後、AMS-炭素14年代測定をおこなった。その結果、計3点の炭素14年代値を得た。本稿では得られた測定結果について報告する。

調査の結果、布留系土器や在地の土器は炭素14年代値で1800、1880、1940（いずれも±30年）であった。

IIは、土器の考古学的な特徴について記す（藤尾）。IIIは前処理について記す（坂本）。IVで測定結果の報告と考察をおこなった（藤尾・坂本）。

なお、測定試料の調製は、歴博年代研究グループの坂本稔がおこなった。

### II 測定した土器

#### 1 土器の概要

土器は15SE004土坑から出土し、布留系甕、在地系甕、甕の底部破片に付着した炭化物を測定した。

#### 2 試料の採取状況

土器（図1）の考古学的な特徴は第3章第1節に詳細な報告があるので参考してもらうとして、年代測定に必要な点について記述しておく。

①（第17図12）は布留系甕で布留1式に比定されている。底部外面や胴部最大径の外面から炭化物（OIFJ-101）を採取した。

②（第18図18）は在地系甕で布留1～2式に比定されている。胴部外面から大量の炭化物（OIFJ-102）を採取した。

③（第18図19）は甕の底部破片で布留1～2式に比定されている。外面から大量の炭化物（OIFJ-103）を採取した。

### III 試料前処理

各試料は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室で測定試料への調製を行った。まず、年代測定試料に対する一般的な処理法である酸・アルカリ・酸処理（AAA処理）を施した。乾燥、秤量を行い、元素分析計を接続した真空装置を用いて、試料中の炭素を二酸化炭素として抽出し精製した。精製された二酸化炭素は装置内で水素と混合し、還元反応によりグラファイト炭素に転換した<sup>1</sup>。同様の操作で、炭素14を含まないブランク試料（添川理化学炭素：No. 75795A）2点、炭素14の標準試料（米国標準技術局シウ酸：SRM 4990C、通称NIST OxII）5点のグラファイト炭素を調製した。グラファイト炭素はAMS（Accelerator Mass Spectrometry：加速器質量分析法）測定に供するため、専用のホルダに充填した。AMS測定は、（株）加速器質量分析研究所に依頼した。

なお、AAA処理済試料の一部を分取し、昭光通商（株）に炭素・窒素分析を依頼した。

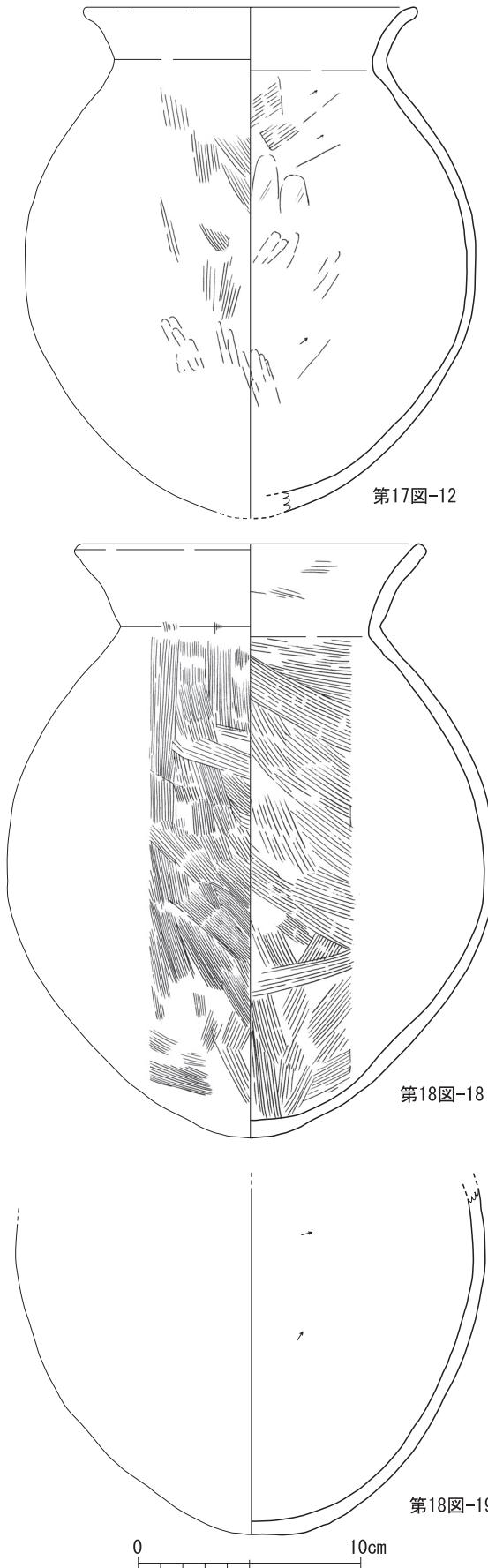


図1 大道遺跡群第15次調査  
出土測定した土器実測図 (1/3)

#### IV 測定結果

##### 1. 炭素14年代と較正年代

測定試料一覧と結果を表1に示す。OIFJ-103 (re) は上記IIIで二酸化炭素の精製をやり直したことを示し、試料自体はOIFJ-103と同一である。測定機関番号にあるIAAAは(株)加速器分析研究所のAMS装置で測定されたことをあらわす。炭素14年代( $^{14}\text{C}$ BP: Before Present)は、同位体分別を補正し、 $^{14}\text{C}$ の半減期を5,568年と仮定して計算された経過年数を、西暦1950年からさかのぼった値である。報告値は下一桁を丸めることが慣習的に行われている。

較正曲線IntCal04<sup>2</sup>に基づき、較正プログラムRHC<sup>3</sup>を適用して導いた各試料の較正年代の確率密度分布を図2に示す。較正年代は確率密度が $2\sigma$ (95.4%)になるよう年代幅が調整されている。中央値はその両側で確率密度が等しい年代を意味し、最尤値は最も高い確率を示す年代を意味する。いずれも統計学上の値であり、試料を代表する年代とは限らない。

##### 2. 炭素・窒素分析

炭素・窒素分析の結果を表2に示す。OIFJ-103は試料量が十分でなく $\delta^{13}\text{C}$ 値のみの測定である。いずれの試料も $\delta^{13}\text{C}$ 値が-26‰を上回ることはなく、また炭素・窒素比も20を超えるため、海洋動物の影響は認められないと考えられる。 $\delta^{15}\text{N}$ 値は土器外面に付着する炭化物として一般的な値である。

##### 3. 考察

IntCal04に基づいて較正した年代(表1)で、OIFJ-103は明らかに古い値がでている。炭素・窒素分析の結果からは海洋リザーバー効果の影響は認められず、理由は不明である。

OIFJ-101とOIFJ-102に相当する炭素14年代では、IntCal04と日本産樹木による較正年代が異なってくる可能性がある(図3)。101の場合、IntCal04では中心値が3世紀の前半に来るが、日本産樹木によれば3世紀中頃と4世紀前半に来る。布留I式の場合は、日本産樹木による較正値に整合性がある。102の場合、IntCal04では中心値が紀元100年頃に来るが、日本産樹木による場合、2世紀前半から3世紀前半までの広い範囲に来る。どちらで

表1 土器付着炭化物の年代測定結果

試料名	詳細	種類	測定機関番号	炭素14年代( $^{14}\text{C}$ BP)	較正年代(cal)	確率密度(%)
OIFJ-101	布留系甕・底部外面・布留系甕	スス	IAAA-71923	1800±30	AD130-AD260	82.9
					AD280-AD325	12.6
OIFJ-102	在地系甕・胴部外面	スス	IAAA-71924	1880±30	AD65-AD225	95.4
OIFJ-103(re)	底部外面	スス	IAAA-71925	1940±30	BC20-BC15 AD1-AD130	0.7 94.7

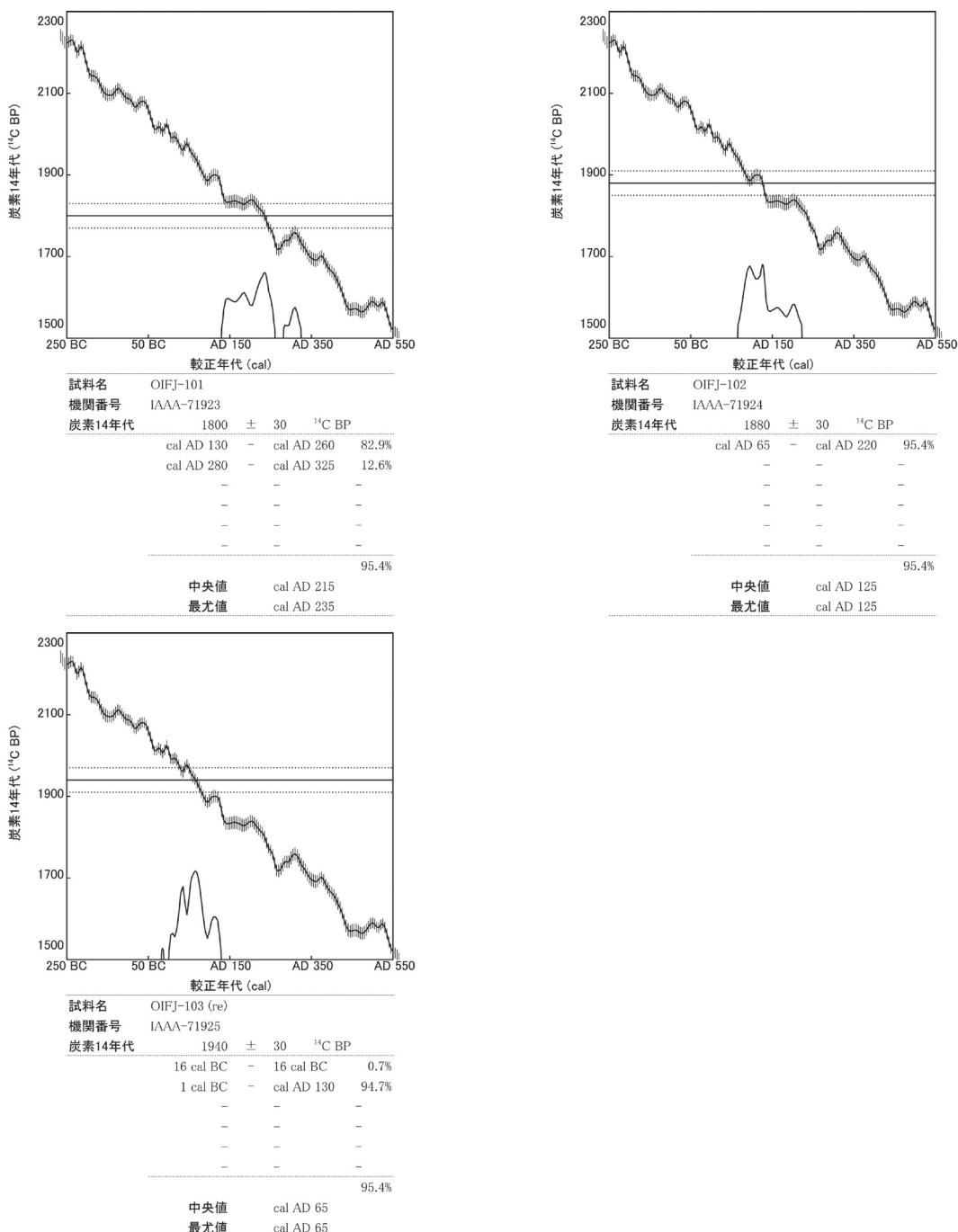


図2 確率密度分布図

表2 土器付着炭化物の炭素・窒素分析結果

試料名	詳細	種類	$\delta^{13}\text{C}$ 値	$\delta^{15}\text{N}$ 値	窒素濃度	炭素濃度	炭素・窒素比
OIFJ-101	布留系甕 底部外面 布留系甕	スス	-28.0‰	12.1‰	1.95%	51.3%	26.3
OIFJ-102	在地系甕 胴部外面	スス	-26.2‰	11.8‰	2.84%	65.6%	23.1
OIFJ-103	底部外面	スス	-26.0‰				

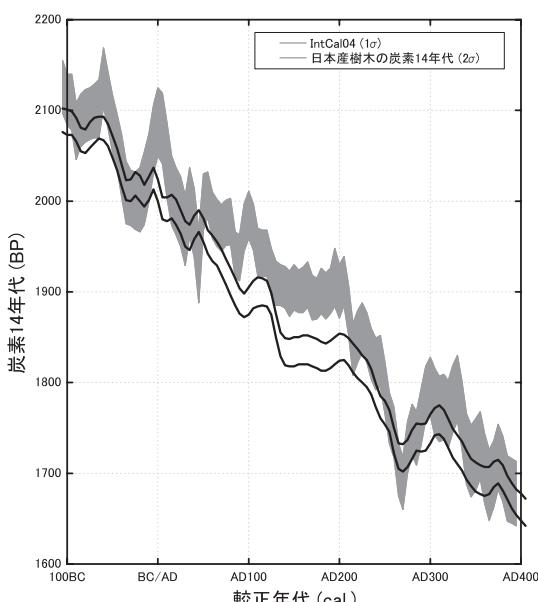


図3 IntCal04 と Jcal の較正曲線

第4章  
自然科学研究

較正しても布留1～2式の較正年代としては100年ぐらい古い値である。ただし、海洋リザーバー効果の影響は受けていないと思われる。

### 謝辞

グラファイトの充填に南部逸江氏の助力を賜った。記して感謝する。国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室は、科学研究費補助金（学術創成）「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」の実施に伴って整備されたもので、今回の試料調製においてはその資源の一部が利用された。

### 文献

- 1 M. Sakamoto et al. (in press). Design and Performance Tests of an Efficient Sample Preparation System for AMS- $^{14}\text{C}$  Dating. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B*.
- 2 P. J. Reimer et al. (2004). IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26Cal Kyr BP. *Radiocarbon* 46: 1029-1058.
- 3 今村峯雄 (2007). 炭素14年代較正ソフトRHC3.2について. 国立歴史民俗博物館研究報告 137: 79-88.

## 第2節 大分市大道遺跡群第24次調査出土臼と土器の年代学的調査

歴博年代研究グループ

藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔

### I 調査の概要

2008年4月23日、大分市教育委員会駅南調査事務所において、大分市大道遺跡群第24次調査で出土した古墳前期初頭（布留1式併行段階）の臼（クスノキ）から木材試料を10年おきに11点採取し、前処理後、炭素14年代測定をおこなった。一部については重複して測定し、それぞれ炭素14年代値を得た。本稿では、臼から得られた測定結果とその解析結果について報告し、その実年代について考察する。あわせて同年3月27日に臼に伴って出土した布留I式に併行すると地元で考えられている在地系甕に付着したススなどの炭化物の年代測定結果も記す。

調査の結果、この臼は西暦290年ころ臼に加工されたと推定される。第一回目の測定を基に得られた予備結果では270年ころと推定したが〔藤尾・今村2008〕、第二回目の結果と併せて判断すると、第一回目のデータには全体的な傾向と大きく外れる測定値が含まれており、これを除外して総合的に判断すると西暦290年ころとなる。臼の年輪は107年輪だったので、180年前後に生まれたクスノキが107年後に伐採されたことになる。そして10～20年ほど使用されたあと紀元3世紀末～4世紀初頭頃になって井戸に投げ込まれたというシナリオとなる。

以下、IIでは、1で土器、2で臼のサンプル採取について記す（藤尾）。IIIでは試料の採取について（今村・坂本）、またIVで試料採取と前処理（今村・坂本）、Vで得られた炭素14年代値をもとにした測定結果と解析結果を報告し（今村）、VIで考察をおこなった（藤尾・今村・坂本）。

なお、試料調製は、歴博年代研究グループの今村峯雄と坂本稔がおこなった。

### II 測定した土器付着炭化物と臼

#### 1 概要

臼は布留1式土器に併行する在地の土器とともに井戸に投げ込まれた状態で見つかった。布留1式は考古学的に西暦300年を前後する土器と考えられているが約100年の存続幅を持つので、その間のいつ頃投げ込まれたのかを知ることは考古学的に難しい。そこで投げ込まれていた土器（図1 180頁）の外面に付着したススを4点採取してAMS-炭素14年代測定を行った（表1）。土器の型式学的特徴は本文を、サンプリング箇所や試料名は表1を参照していただきたい。図2は確率密度分布図である。

測定した土器はすべて布留1式に併行するが、一括投棄された土器のすべてが布留1式土器の範囲内と担当者から聞いている。

#### 2 臼の特徴

臼の考古学的な特徴は本文第3章第3節に詳細な報告があるので、詳細については参照していただきたい。ここでは年代測定と関連した事項について記述する。臼の底面（写真3・4）と内面（写真2）に107本の年輪を認めることができる。また上端には外皮が遺っているため（写真1），伐採年代を知ることができる。大道遺跡群の臼は丸太状のクスから作られ、底面の裏側に107本の年輪を確認することができ、一番外側の年輪は樹皮に限りなく近い部分と考えられることから、生育が始まってからほぼ107年後に伐採されたとみることが出来る。

一般に、スギやヒノキなどは、年輪数が100以上あれば年輪幅のパターンを調べることで、かなり高い確率で年代を知ることができる。年輪年代法と呼ばれる方法である。しかし残念ながら広葉樹であるクスは年輪幅の

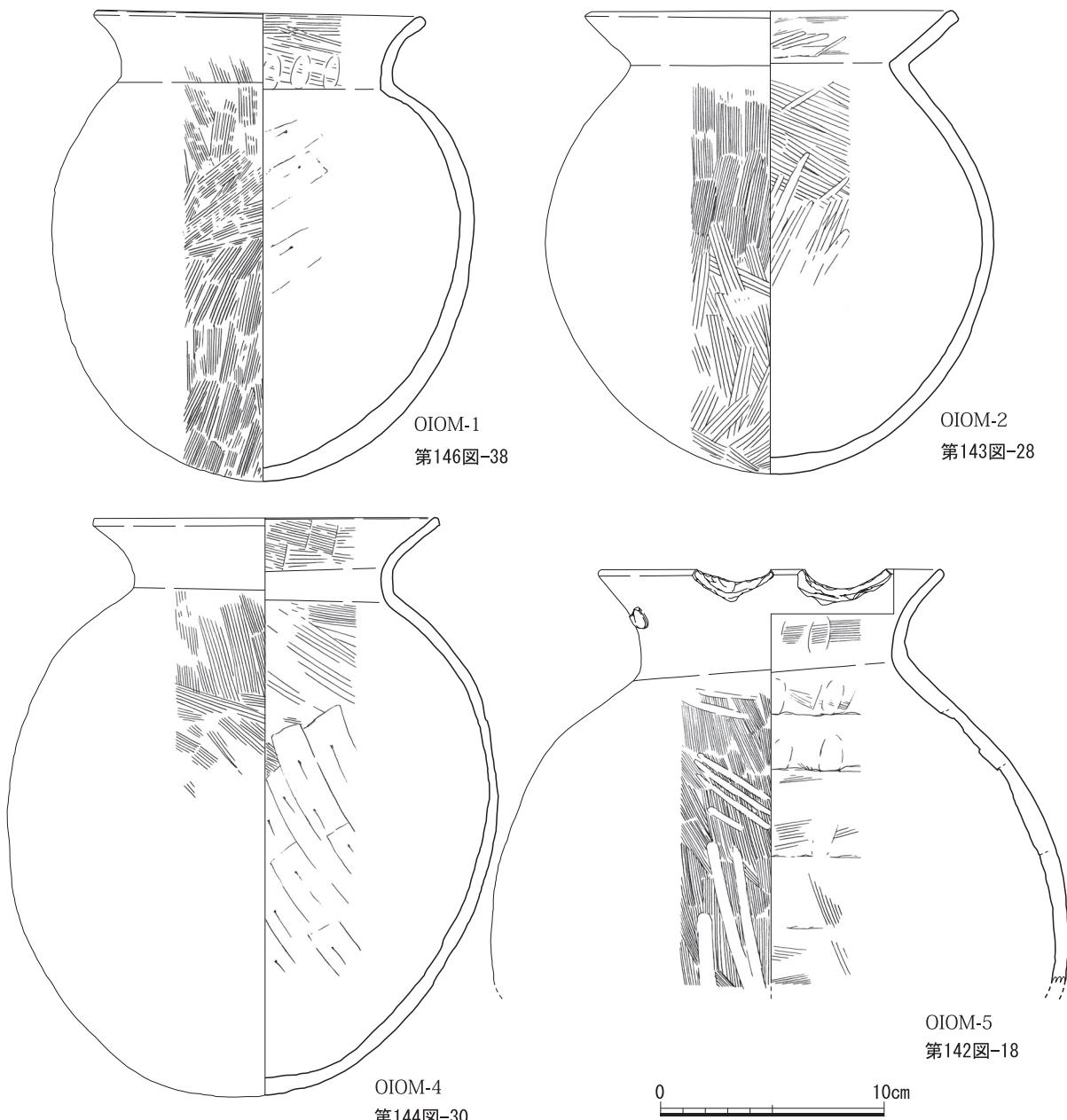


図1 大道遺跡群第24次調査 SE008 出土測定した土器実測図 (1/3)

変化が樹木によって個性があるため、共通のパターンを認識することが難しくて年輪年代を測定することはできない。このような場合、炭素14 ウィグルマッチ法と呼ばれる方法が有効である。

### III 試料の採取

2008年4月23日、大分市教育委員会駅南調査事務所において、大分市大道遺跡群第24次調査で出土した古墳前期初頭（布留1式併行段階）の臼（クスノキ）から木材試料を10年おきに11点採取した（写真4参照）。試料採取は、臼の保存処理に先立って行ったもので、大分市教育委員会職員の立ち会いの下、107本ある年輪を芯から5年輪目から始めて、10年輪ごとに11のサンプルを採取した（表2参照）。試料採取は、化学器具として用いられる径5mmの中空のコルク・ボーラー（鉄製）を用いて今村が行った。具体的には臼の底部の該当

表1 白に伴った甕の年代測定結果

試料名	詳細	種類	測定機関番号	炭素14年代( <sup>14</sup> C BP)	較正年代(cal)	確率密度(%)	$\delta^{13}\text{C}$ 値(‰)
OIOM-1 a (re)	在地系甕・胴部外面・布留I式	スス	MTC-12209	1740±30	AD235-AD390	95.4	-26.9
OIOM-1 b	在地系甕・口縁部外面・布留I式	吹きこぼれ?	MTC-11511	1750±50	AD135-AD200 AD205-AD400	10.5 84.9	-27.2
OIOM-2	在地系甕・胴部外面・布留I式	スス	MTC-11512	1800±70	AD70-AD395	95.4	未測定
OIOM-4	甕・胴部上位外面布留I式	スス	MTC-11513	1860±60	AD20-AD260 AD280-AD325	90.7 4.7	-27.0
OIOM-5	壺・胴部中位外面布留I式	スス	MTC-11514	1750±45	AD140-AD160 AD165-AD195 AD210-AD195	2.9 4.7 87.4	-26.1

する年輪にコルク・ボーラーを1cmほど押し込み、引き抜いて中に入り込んだ試料を回収した。

#### IV 試料採取と前処理

白の年輪試料は水洗後乾燥し、標準的なAAA処理によって行った。すなわち、1N 塩酸で約80℃で1時間ずつ2回洗浄したのち、1N苛性ソーダ溶液で約80℃で1時間ずつ計3回洗浄し、溶液中の着色がほとんどなくなつたことを確認した。さらに、1N 塩酸で中和しさらに純水で洗浄して洗浄液が中性であることを確認した。

土器から得られたススの処理は、上記の作業を機械的に行う全自動AAA処理装置(Sakamoto et al, in press)を用いて行った。

これらの前処理は国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室で行った。白試料については今村が、土器付着炭化物については坂本が処理を行った。

白試料のうちパレオ・ラボにAMS測定依頼した試料については、AMS測定のための炭素抽出、グラファイト化も含め依頼した。東京大学大学院工学系研究科でAMS測定を行った試料については、炭素抽出、グラファイト化を国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室で坂本が行い、AMS測定試料として調製した。

土器付着炭化物は、AAA処理済みの試料を昭光通商(株)に炭素同位体分析を依頼した。その結果は表1の $\delta^{13}\text{C}$ 値に示した。

#### V 炭素14測定結果とウイグルマッチングによる白の年代解析

##### 1 炭素14年代

測定は、2008年度と2009年度の二回に分けて行った。第一回目は、第5年輪から20年輪ごとに6試料を(株)パレオ・ラボに測定を依頼した。このうち表面に近いOIOM-C1 105 1点については、東京大学大学院工学研究科のAMS測定施設(測定機関記号MTC-)においても測定を行った。第二回目は、残りの5試料と、第一回目で測定した試料のうち第65と第85年輪の2試料、計7試料を測定した。

また、土器付着試料4点については、東京大学大学院工学研究科のAMS測定施設で測定した。うち1点については重複して測定を行った。東京大学大学院工学研究科のAMS測定施設での測定は坂本が行った。

試料と測定結果を表1、図2に示す。

重複して測定した試料の結果のうち、特に、第85年輪試料については第1回目が第2回目より大きく、統計

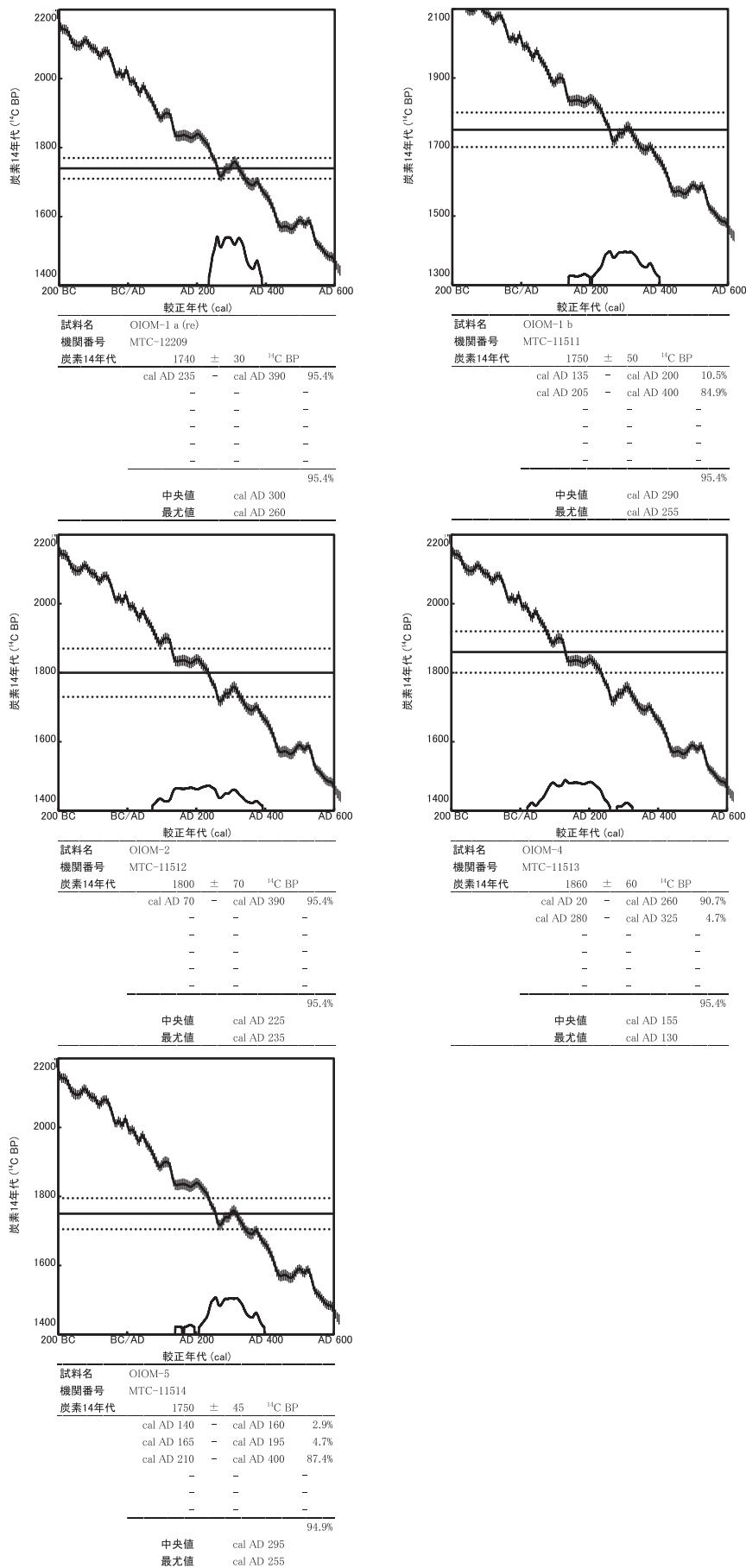


図2 土器付着炭化物の確率密度分布図



写真1 外皮が残っているのが見える



写真2 棒で打った痕跡が見える



写真3 芯から外側までのサンプリング位置



写真4 サンプリングした年輪（拡大）

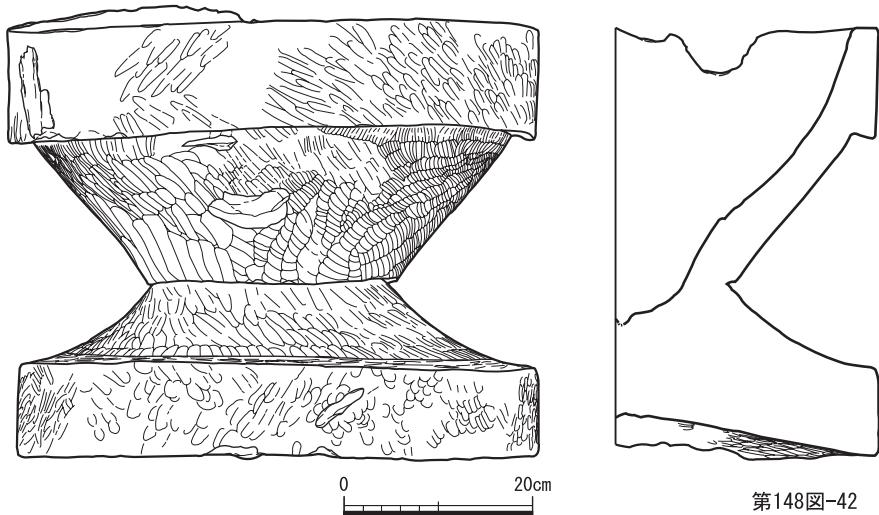


図3 24SE008 出土臼実測図 (1/8)

誤差を大きく超えて差が見られた。

測定誤差は、AMS測定における統計誤差（1標準偏差）であり、試料の汚染など、埋没時の試料の変化や取り扱いに伴う汚染の評価は含まれていない。経験的に、統計誤差を超えてこれらの汚染が観測されたケースはほとんどないが、歴博においてはデータの信頼性を担保するため重複した試料の測定などを行って評価することにしている。

上記の重複測定のうち第85年輪試料のケースでは、同じ前処理済み試料から時期を分けて採取したものであり、その原因は不明である。

ほかの2つのケースでは、第5年輪では30炭素年、第65年輪では54炭素年、差が見られたが、これらは測定誤差の許容範囲である。

## 2 ウイグルマッチングによる臼の年代解析

1回目と2回目の測定結果をまとめてウイグルマッチング解析を行った結果を図4・5に示す。解析はRHC3.2w（今村、2007）を用い、解析の基礎データとなる暦年較正曲線には、日本産樹木による紀元前240年～紀元395年のデータを用いた。具体的には、尾崎らが測定した長野産ヒノキおよび箱根スギのデータ（尾崎ほか、2009）に一部今村による測定も加え評価したものを用い400AD以降についてはIntCal04を用いた。図では、便宜的に”JCAL”と表記した。

図4での解析では、較正年代として、最外層の年代として281～294 cal ADが得られる。しかしながらこの解析では、図で示されるように、測定値の暦年較正曲線との一致は必ずしもよくはなく、 $\chi^2$ 二乗解析から解析はクライテリアを満たさないと判定された。第1回目の測定値は、何らかの原因で測定が安定していなかった可能性がある。

そこで、パレオ・ラボの第1回目の測定を除いた測定値を用いて、解析を行った（図5）。較正曲線は図1と同じである。

その結果は、図4で得られた結果とほぼ同じく、282～291 cal ADと得られた。このケースでは較正曲線と測定値の一致はよく、 $\chi^2$ 二乗検定を満たす結果となった。

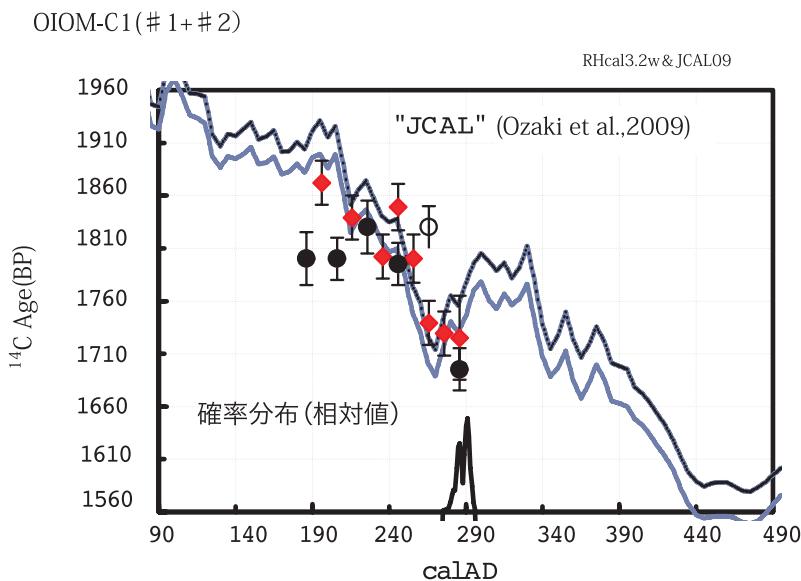


図4 大分大道遺跡群第24次調査で出土した臼の、炭素14ウイグルマッチングによる解析結果。この解析では第1回目の測定と第2回目の測定を合わせて解析した。ただし第85年輪の第1回目測定値（図の白抜き○）は除外した。この解析では、暦年較正曲線との一致が乱れており、 $\chi^2$ 二乗解析検定を満たしていない。

### 3 在地土器付着ススなどの年代解析結果

表1に炭素14測定値とともに、IntCal04による較正年代が示してある。 $\delta^{13}\text{C}$ 値は標準的な $\text{C}_3$ 植物の数値を示しており、較正年代に対して海洋性の影響を考慮する必要はない。図5の較正曲線と比較して明らかなように、得られた年代値は3世紀終末から4世紀前半の年代と整合的である。178頁の図3で見るよう日本産樹木 $^{14}\text{C}$ は1、2世紀で古い値を示すが、3、4世紀では若干古い傾向を示す程度であるので結果にあまり影響はない。なお測定値の誤差が大きいことや、較正曲線がこの領域で屈曲しながらもほぼなだらかに年代をこれ以上絞り込むことは困難である。

### VI 考察

発掘されたクスノキ製の臼の年輪試料と臼が廃棄された時期と見られる在地土器付着のススを炭素14年代測定によって分析した。較正年代の解析には国際的なデータベースであるIntCal04と、臼の年輪試料に加え、日本産樹木に基づくデータを用いて解析した。

その結果、臼が加工された年代、すなわちクスノキの伐採年代は、臼の年輪を用いるウイグルマッチ法で解析した結果、282～291 cal ADと得られた。すなわち西暦287±5年ごろであると推定された。

2008年の予備結果の報告では、今回の報告のうち第一回目の測定を基に得た結果を用いて臼に用いられたクスノキの伐採年を269年ごろと推定したが、第二回目の結果も併せた結果から、その判断を若干修正する必要がでてきた。すなわち、第一回目のデータには全体的な傾向と大きく外れる測定値が含まれることが判明したので、総合的に判断するとこれを除外するのがよいと判断された。その結果、上記に示した西暦287年頃が、クスが伐採された年代であると結論された。

土器付着炭化物から得られた廃棄年代と絡ませると、臼の一生を次のように表現することができる。臼の材料となったクスの原木は、西暦180年前後に誕生し、107歳ちょっとで伐採され、臼に加工された。そして10

表2 白試料の年代測定結果

試料採取年輪位置 (中心=1) .	測定機関番号	炭素14測定値 ( $^{14}\text{C}$ BP)	測定誤差 ( $1\sigma$ )
105	PLD-10994	1695±20	
105	MTC-10990	1725±40	
95	PLD-13134	1729±21	
85	PLD-10989	1830±20	
85	PLD-13133	1739±21	
75	PLD-13132	1800±23	
65	PLD-10988	1795±20	
65	PLD-13131	1849±22	
55	PLD-13130	1802±21	
45	PLD-10987	1830±25	
35	PLD-13129	1839±21	
25	PLD-10986	1800±20	
15	PLD-13128	1872±21	
5	PLD-10985	1800±25	

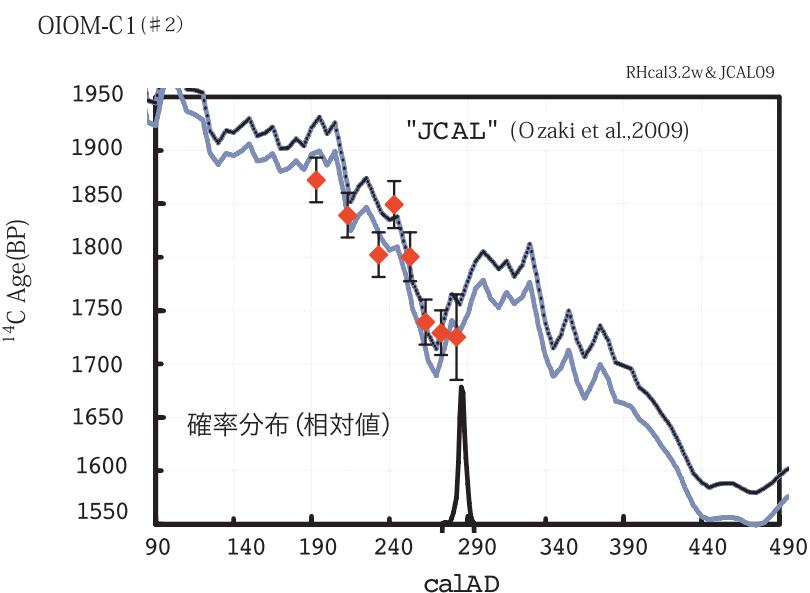


図5 大分大道遺跡第24次調査で出土した白の、炭素14 ウイグルマッチングによる解析結果。この解析では第1回目のMALT-AMSでの測定と第2回目のパレオ・ラボ測定を合わせて解析した。この解析では、暦年較正曲線との一致はよく、 $\chi^2$ 二乗検定を満たしている。

～20年ぐらい使用されたあと、西暦4世紀初頭頃に井戸に投げ込まれて一生を終えたというストーリーとなる。

学校の学習における年表にこれらの情報を位置づけてみるならば、この白は、卑弥呼と同じ時代にクスとして生育したことになる。そして、卑弥呼が死んだあと約40年経った頃に伐採されて白として加工された。

これまでの考古学的な調査では、ともに廃棄されていた土器の型式から4世紀前半に投げ込まれたことは推定できた。また縦枠で撞かれた部分がかなりくぼんでいて摩滅していることから、長年にわたって使い込まれていることも想像できた。さらに年輪を数えることによってクスの木が生育を始めてから107年と少しあってから伐採されたこともわかる。

しかし臼を観察するだけでは西暦何年にこの木が生まれ、何年に伐採され臼として作られたのか、何年ぐらい使われたのかを知ることもできない。

今回の調査のように、土器に付着したススや臼の底の年輪部分について、炭素14年代法という自然科学的な方法を用いることによって、年代を明らかにする手がかりが得られる。年代が明らかになると同時に、大道遺跡群の臼は卑弥呼の時代と重なることになる。年代研究は、私たちに新たな古代史情報をもたらしてくれたのである。

## VII おわりに

本調査で試料採取および関連情報の提供でお世話になった大分市教育委員会、ならびに、AMS炭素14測定で便宜を図っていただいた東京大学松崎浩之氏に深謝します。

## 参考文献

- M. Sakamoto et al. (in press). Design and Performance Tests of an Efficient Sample Preparation System for AMS-<sup>14</sup>C Dating. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B*.
- P. J. Reimer et al. (2004). IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0 – 26 Cal Kyr BP. *Radiocarbon* 46: 1029-1058.
- 今村峯雄 (2007). 「炭素14年代較正ソフトRHC3.2について」.『国立歴史民俗博物館研究報告』137: 79-88.
- 藤尾慎一郎・今村峯雄 (2008). 「臼の一生—卑弥呼と同時代に生きたクスがたどった人生—」『学術創成研究ニュースレター』11:2-3
- 尾崎大真ほか (2009). 「③樹木年輪の炭素14年代測定」(データ集)『弥生農耕の起源と東アジア』研究成果報告書(西本豊弘編)、国立歴史民俗博物館:508-524.